

シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレの「都市の構築」における
都市形態論とその思想的背景

早川小百合

シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレの「都市の構築」における
都市形態論とその思想的背景

京都大学大学院工学研究科提出博士論文

早川小百合

2022年6月

凡例

- ・ 引用文は原則として「……」、あるいは字数下げゴシック体によって示す。
- ・ 引用文のうち邦訳は筆者による。
- ・ 引用文の斜体は原文のとおりである。
- ・ 引用文のうち原文を付記する場合、邦訳の直後に（……）と示す。
- ・ 引用文中の省略箇所は（…中略…）と示す。
- ・ シュノールが編集した「都市の構築」の草稿からの引用箇所は略記号 CV と頁数を示す（Schnoor, Cristopher: *La Construction des villes. Le Corbusiers ertes städtebauliches Traktat von 1910/11*, Zurich, gta Verlag, 2008.）。
- ・ シュノール編「都市の構築」の草稿では、取り消し線やジャンヌレによる省略表記等も原文ママで記載されている（Schnoor, 2008, *op. cit.*）。本研究でこれらを引用する際、取り消し線部分の語は削除している。また、波括弧内の語は波括弧を外して記載している。省略表記は正しい表記に改めており、たとえば省略表記“m̄”を“mm”に改めて引用している。各省略表記の凡例は Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 232 を参照のこと。また引用時には、この凡例を参照しながら省略表記“1”を“un”または“une”に改めており、これに伴ってその他の数字の表記も改めている。たとえば“60”を“soixante”という具合に改めて引用しており、エムリー編の草稿では後者の表記が採用されている（Émery, Marc-Albert ed.: *La construction des ville: genèse et devenir d'un ouvrage écrit de 1910 à 1915 et laissé inachevé par Charles Edouard Jeanneret-Gris dit Le Corbusier*, l'Age d'homme, Lausanne, 1992）。このように引用の際には適宜エムリー編「都市の構築」も参考にしていく。シュノールの凡例にはないが、本研究で引用する際に、“ns”は“nous”と改めて引用している。また “[leer]”は “[]”と改めて引用している。またシュノールによる英語版の草稿（Schnoor, Cristopher: *Le Corbusier's Practical Aesthetic of the City The treatise 'La Construction des villes' of 1910/11*, Abingdon, Oxon; New York, Routledge, 2020.）も参考にした。
- ・ 筆者によって挿入された原文にない文章は（引用者注：……）によって示す。
- ・ Schnoor, 2008, *op. cit.*から引用する図版については、図版キャプションに同書における掲載頁を略記号 CV とともに示した後、括弧内に元出典を記す。とくにル・コルビュジェ財団所蔵のものにかんしては、アーカイヴの番号の後ろに FLC と記す。

目次

目次

序章.....	1
0-1 研究の背景	
0-1-1 ル・コルビュジエ確立以前のジャンヌレ時代	
0-1-2 前近代の都市像	
0-2 「都市の構築」の既往研究	
0-2-1 各既往研究の成果と意義	
0-2-2 「都市の構築」の執筆経緯	
0-2-3 『広場の造形』の影響	
0-2-4 「都市の構築」の草稿の構成	
0-3 研究の目的	
0-4 論文の構成と研究方法	
第一章 草稿におけるパーティ.....	23
1-1 パーティの語義と草稿の主題	
1-2 小結	
第二章 街区のパーティ.....	31
2-1 検討対象	
2-1-1 第一部第二章第二節「街区」の概要	
2-1-2 「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の概要	
2-2 パーティの抽出と類型化	
2-3 パーティの評価軸	
視覚的観点の評価軸	
実用的観点の評価軸	
2-4 パーティの評価軸の相互関係	
庭の眺望の美しさ	
ファサードが道に面すること	
眺望の多様性	
直角の必要性	
2-5 小結	
第三章 道のパーティ.....	51
3-1 検討対象	
3-1-1 第一部第二章第三節「道」の概要	
3-1-2 「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の概要	

3-1-3	第一部第二章第二節「街区」の概要	
3-2	パルティの抽出と類型化	
3-3	パルティの評価軸	
	視覚的・身体的観点の評価軸	
	実用的観点の評価軸	
3-4	パルティの評価軸の相互関係	
	視覚的閉鎖性	
	身体的な大きさ	
	眺望の多様性	
	直角の必要性	
3-5	小結	
第四章 広場のパルティ.....		79
4-1	検討対象	
4-1-1	第一部第二章第四節「広場」の概要	
4-1-2	「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の概要	
4-2	パルティの抽出と類型化	
4-3	パルティの評価軸	
	視覚的・身体的観点の評価軸	
	実用的観点の評価軸	
4-4	パルティの評価軸の相互関係	
	視覚的閉鎖性	
	身体的な大きさ	
	建物やモニュメントの強調	
	視認の正確性	
	眺望の多様性	
	〈感情(感覚)の高揚〉	
	〈調和〉	
	〈場所の精神〉	
	〈雰囲気〉	
4-5	小結	
第五章 ジャンヌレの究極目標.....		119
5-1	各都市構成要素のパルティ論の総括	
5-2	都市全体のデザイン論	
5-3	草稿執筆の意図	
5-3-1	愛郷心	

5-3-2	教育	
5-4	愛郷心の観念の背景	
5-4-1	社会運動	
		ド・モントナックと芸術教育運動
		シュルツェ＝ナウムブルクと郷土保護運動
補論	ドイツにおける芸術にかんする社会運動	
		ドイツ経済発展下の芸術家の動き
		芸術教育運動
		郷土保護運動
補論	感情移入と身体的な空間把握	
		美的直観の理論展開
		感情移入論の発展
		「空間」という語彙の発展と困いの空間
補論	視覚による空間把握と感情	
5-4-2	ナショナリズムの展開	
5-5	小結	
結章.....		167
6-1	各章で得られた知見	
6-2	研究の結論と意義	
		「パルティ」の語義の解明ならびに草稿の主題の指摘
		草稿の都市形態論（パルティ論）の体系的な把握
		草稿の究極目標「愛郷心」の指摘および都市形態論とのつながりの解明
		「愛郷心」の観念の歴史的な位置づけと地域主義者としてのジャンヌレのより明確な全体像の提示
6-3	考察	
		前近代の都市論の潮流の再評価
		草稿における複数の対立軸とル・コルビュジエ時代への展開
		草稿とラ・ショー＝ド＝フォンをめぐる経緯と「愛郷心」の観念
6-4	今後の展望	
		本論文で検討対象外とした関連資料の分析
		モダニズム草創期における建築と社会・自然思想の調査
		「愛郷心」の概念のさらなる相対化
あとがき.....		178
付録.....		181
参考文献リスト		

既発表論文リスト

付表

街区のパーティー一覧

道のパーティー一覧

広場のパーティー一覧

序章

序章

0-1 研究の背景

0-1-1 ル・コルビュジェ確立以前のジャンヌレ時代

シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ (Charles-Édouard Jeanneret, 1887-1965) は、後に名乗り始めたル・コルビュジェ (Le Corbusier) のペンネームで広く知られ¹、今日において最重要モダニストのひとりとして評価されている。ル・コルビュジェは近代建築の父と称されるにふさわしく、建築設計においても都市計画においても、「近代建築の五原則」を体現したサヴォア邸 (1931) や「300万人のための現代都市」(1922) といった当代においてひじょうに革新的な計画をいくつも発表した。その影響力は今日においても衰えず、建築作品から著作に至るまで、それらを対象とした研究は枚挙にいとまがない。

ル・コルビュジェのセンセーショナルな近代的構想は分野を超えて賛否を巻き起こしてきた。都市計画については、合理主義、機械主義に則って大胆に描かれた、当時にとってはまったく新しい開放的な世界が肯定的に評価される一方で、人工幾何学、反自然といった言葉によっても語られ、非人間的で貧しいものとして機能主義批判的のようになってきた²。レイナー・バンナム (Reyner Banham) はル・コルビュジェをはじめとするモダニストによって推し進められた機能主義について、その高潔さを認めながらも「象徴的には非常に貧しいものである」と批判し³、芦原義信はル・コルビュジェらが描いた近代の都市像を「人間性や安心感のようなものが不在」として批判的に捉えた⁴。他分野ではたとえば経済学者の宇沢弘文が「輝く都市」をはじめとした近代都市計画が「都市はなによりも人間が生活してゆく場であることを無視してきた」と批判し、その都市で実際に生活する人々こそ真の犠牲者であると嘆いた⁵。20世紀前半に脚光を浴びたル・コルビュジェの提案をはじめとする幾何学的で近代的な都市像は、やがて疑問を呈され、ポストモダニズムを主張する人々によって糾弾されるようになっていった。実際、「300万人のための現代都市」(1922)、「ヴォワザン計画」(1925)、「輝く都市」(1930) といったル・コルビュジェの都市計画を見ても、直角や直線によって秩序立てられた形態が顕著であり、モダニズムを体現する計画となっている。著作においても、『ユルバニスム』(1925) では曲線の道が「人間の道」と区別された「ろばの道」

¹ 本研究では、ジャンヌレが「ル・コルビュジェ」というペンネームを用い始めた1920年を境に、以降をル・コルビュジェと表記しそれより前についてはジャンヌレと表記する。ジャンヌレは1920年にアメデ・オザンファン (Amédée Ozenfant, 1886-1966) とともに創刊した『レスプリ・ヌーヴォー』誌で、オザンファンとの混合人物として「ル・コルビュジェ＝ソニエ」と署名していたが、1922年のサロン・ドートンヌにて、「ソニエ」ことオザンファンを取って、たんに「ル・コルビュジェ」と名乗ったことでその名が定着した (玉置啓二: ル・コルビュジェの『都市の建設』とラ・ショー＝ドゥ＝フォンの都市構造, 都市計画論文集, 第38巻, 第3号, pp. 901-906, 2003. 10, リュカン, ジャック監修: ル・コルビュジェ事典, 加藤邦男監訳, 中央公論美術出版, 2007, pp. 395-397)。

² ル・コルビュジェの都市計画についてはたとえば次の文献が詳しい。エヴァンソン, ノーマ: ル・コルビュジェの構想: 都市デザインと機械の表徴, 酒井孝博訳, 井上書院, 1984。

³ バンナム, レイナー: 第一機械時代の理論とデザイン, 石原達二, 増成隆士訳, 鹿島出版会, 1976, p. 470。

⁴ 芦原義信: 街並みの美学, 岩波書店, 2001, pp. 198-199。ジェイン・ジェイコブズ (Jane Jacobs) はル・コルビュジェの都市計画を、田園都市の構想の延長線にあるとみなした。田園都市を支持する人々によるル・コルビュジェの機械主義や非人間的空間の批判すら、「他の人々からばかばかしいほど派閥主義じみて見えた」のだと一蹴した (ジェイコブズ, ジェイン: アメリカ大都市の生と死, 山形浩生訳, 鹿島出版会, 2010, p. 39.)。

⁵ 宇沢弘文: 近代経済学の転換, 岩波書店, 1994, pp. 58-59。

として退けられている⁶。

しかし、直線や直角がル・コルビュジェによって好んで用いられた一方、ル・コルビュジェと名乗る前のジャンヌレ時代に記した“*La construction des villes* (都市の構築)”という草稿では、幾何学が批判的に捉えられていることが明らかになっている⁷。1910年から執筆が開始されたこの草稿は、ジャンヌレによる都市計画にかんする最初の研究であった。草稿では、曲線の道が賞賛され、オーストリアの建築家・都市計画家カミロ・ジッテ (Camillo Sitte, 1843-1903) の理論が引用されている。草稿におけるこうした思想は、直線と直角を多用したル・コルビュジェの好みとは大きく異なるように思われる。

また、ジャンヌレは自然や郷土へ強い関心を寄せ、ル・コルビュジェの計画を支配する合理主義や機械主義とは異なる価値観を持っていた。こうした自然へのまなざしは、ラ・ショー＝ド＝フォン＝ド＝フォンの自然の中で育まれたのであろう。ジャンヌレの父親とラ・ショー＝ド＝フォン美術学校でのジャンヌレの師シャルル・レプラトニエ (Charles L'Eplattenier, 1874-1946) は、ともに自然に対して大きな関心を持つ人物であった。レプラトニエはジュラ様式の創出を目指し、1905年以降にはこの地方特有のアール・ヌーヴォーの一様式である樅の木様式 (style sapin) の創出を主導した⁸。ジャンヌレはラ・ショー＝ド＝フォン美術学校において、レプラトニエから自然と芸術の関係を教えられていた。レプラトニエは生徒たちをジュラの山々へと連れ出し、出会うものすべてを描くように仕向けた⁹。レプラトニエは次のように語ったという。「ただ自然のみが人間に靈感を与えるのだ。自然のみが真だ。そして自然のみが人間の仕事の最後の支えである。しかし現代の風景画家の単に外観だけをかくやり方は決して真似してはいけない。自然をめぐる因果を学べ、そして形を探り、生命の進展を究めよ。そこから自然を総合して、装飾 (ornaments) を創造せよ」¹⁰。ジャンヌレが1905年ごろに描いた樅の木の装飾練習には、枝と枝の結節点のつくりや、雪の重みでしな垂れた枝葉が詳細に描かれており、ジャンヌレが自然とその形態を丁寧に観察していたことがわかる (Fig. 0.1.1)¹¹。ル・コルビュジェは『今日の装飾芸術』の章《告白》の中で、師のことを「完全なる自然人」と評し、植物や動物の生態を調べることでその仕組みを理解していたことを回顧している¹² (Fig. 0.1.2)。そして自身のことを「郷土芸術家」であったと述べる¹³。

⁶ ル・コルビュジェ: ユルバニスム, 樋口清訳, 鹿島出版会, 1967.

⁷ たとえば次の文献を参照。Brooks, H. Allen: Jeanneret and Sitte. Le Corbusier's Earliest Ideas on Urban Design, in Searng, Helen ed.: *In Search of Modern Architecture: A tribute to Henri-Russel Hitchcock*, MIT Press, pp. 278-297, 1982.

⁸ 豊島亮, 羽深久夫: スイス連邦ヌーシャテル州ラ・ショー＝ド＝フォンにおける20世紀初頭のアール・ヌーヴォーの作品—「ART NOUVEAU 2005～2006」における写真資料を中心に—, 札幌市立大学研究論文集, 札幌市立大学, pp. 31-42, 2015.

⁹ フォン・モース, スタニスラウス: ル・コルビュジェの生涯: 建築とその神話, 住野天平訳, 彰国社, 1981, pp.23-24. (英訳: von Moos, Stanislaus: *Le Corbusier, elements of a synthesis*, MIT Press, 1979., 原著: von Moos, Stanislaus: *Le Corbusier: Elemente einer Synthese*, Verlag Huber, 1968) この頃のジャンヌレについては次の文献も参照。プティ, ジャン: ル・コルビュジェ: みずから語る生涯, 田路貴浩, 松本裕訳, 中央公論美術出版, 2021 (原著: Petit, Jean: *Le Corbusier lui-même*, Genève: Edition Rousseau, 1970.)

¹⁰ ル・コルビュジェ: 今日の装飾芸術, 前川国男訳, 鹿島出版会, 1966, p.219. (原著: Le Corbusier: *L'Art décoratif d'aujourd'hui*, Paris, G. Crès, « L'Esprit nouveau », 1925.)

¹¹ レプラトニエの教育の背景にはアール・ヌーヴォー—ユグtent・シュティール—がある。レプラトニエの目的は、ナンシー美術学校のようなアール・ヌーヴォーの国際的な中心をラ・ショー＝ド＝フォンに実現することだった。レプラトニエや弟子たちは、アール・ヌーヴォーの精神でジュラの地方様式を模索していた。レプラトニエは単なる外観ではなく自然の本質を様式化した形態で表現することを教え、ジャンヌレは樅の木を繰り返し描き単なる三角形にまで還元することもしばしばあったという。フォン・モース, 前掲書, pp.24-25, 27.

¹² ル・コルビュジェ, 1966, 前掲書, pp.218-219.

¹³ 上掲書, p. 220.

画家になるつもりでいたジャンヌレは、レプラトニエに「お前は建築をやれ」と諭されると、17歳で住宅第一作目のファレ邸（1905-1906）を設計することになる（Fig. 0.1.3）¹⁴。そのファサードにはジュラの樅の木を思わせる図形で装飾され¹⁵、上述のレプラトニエの樅の木様式に則ったデザインであった。この仕事を仕上げると、1907年、ジャンヌレはその謝礼金を手にイタリア旅行に発ち、そのままダペスト、ウィーンを訪れ、1908年にははじめてパリを訪れる。ウィーンでは、ラ・ショー＝ド＝フォンに建てるためのシュトツァー邸（1908）（Fig. 0.1.4）とジャクメ邸（1908）（Fig. 0.1.5）という農家風の意匠を持つ案を練る¹⁶。都市計画では、クレテの田園都市の計画（1914）で、ヘレラウの田園都市を彷彿とさせる曲線によるピクチャレスクなレイアウトを計画している¹⁷。このように1910年前後のジャンヌレは郷土に根差したデザインに強く惹かれていたようである。1910年から始まる“La construction des villes（都市の構築）”の草稿の執筆は、こういった地元での郷土建築家としてのキャリアを歩む青年が、都市へと飛び出し自己を形成していく中での出来事であった。

以上で見てきたような自然や郷土に対する濃やかなまなざしを持つジャンヌレの姿は、バンハムが「典型人間」と表すような¹⁸、合理主義者、技術者としての自らを演出するモダニストとしてのル・コルビュジエ像と大きく異なる。ここに、わたしたちが知っているモダニスト、ル・コルビュジエとしての都市理論の確立以前の、ジャンヌレの都市デザイン思想とは如何なるものかという疑問が生じる。

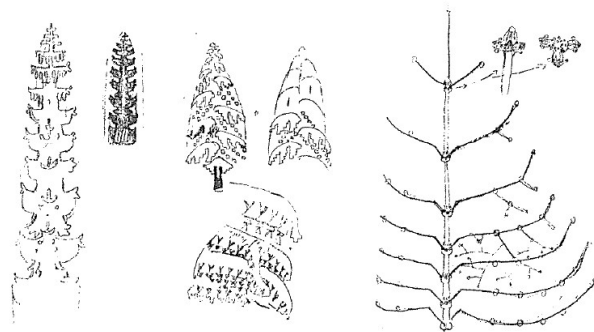


Fig. 0.1.1 Decorative studies of Jura firs by Jeanneret, ca. 1905

(von Moos, *Le Corbusier, elements of a synthesis*, p. 24., from *Le Corbusier: Creation is a patient search*)

¹⁴ フォン・モース, 住野訳, 前掲書, p. 27.

¹⁵ フォン・モース, 住野訳, 前掲書, pp. 28-29. ファレ邸については次の文献も詳しい。Brooks, H. Allen: *Le Corbusier's Formative Years: Charles-Edouard Jeanneret at La Chaux-de-Fonds*, University of Chicago Press, 1997. とくに pp. 71-85.

¹⁶ リュカン監修, 加藤監訳, 前掲書, p. 272. またモースはシュトツァー邸とジャクメ邸について「スイスのロマン主義的ナショナリズムの全くの影響下にある」と表現している（フォン・モース, 住野訳, 前掲書, p. 33）。なおヴェルナー・エスヒリンは、ファレ邸（1906-1907）やジャクメ邸（1908）などに見られる地方主義は、1910～1911年で乗り越えられてフェアヴル＝ジャコ邸（1912）などに見られる「ペーレンス風新＝古典主義」に達したと見なしている（エヒスリン, ヴェルナー: ドイツ: 影響、交流、そして絶交, 所収: リュカン監修, 加藤監訳, 前掲書, pp. 22-30.）。

¹⁷ クレテの田園都市の計画については Brooks, 1982, *op. cit.* も参照。

¹⁸ バンハム, 石原, 増成訳, 前掲書, p. 359. 定型としての人間, “homme-type”のこと。

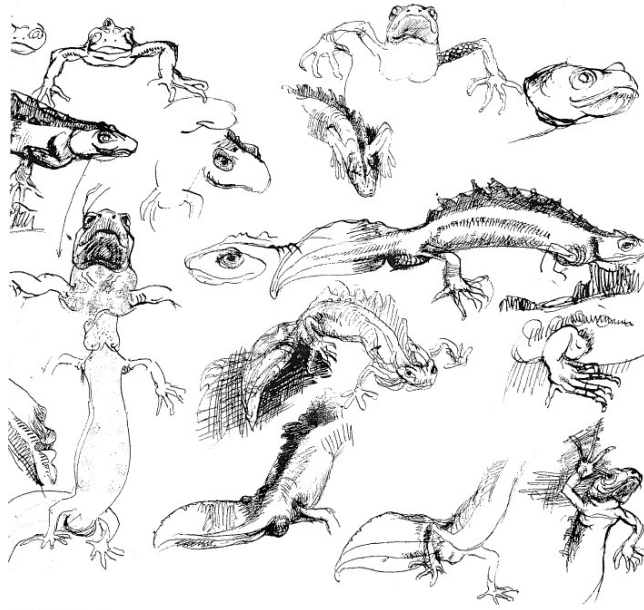


Fig. 0.1.2 Sketch of animals in La Chaux-de-Fonds (Petit, *Le Corbusier Lui-Même*, p. 26.)

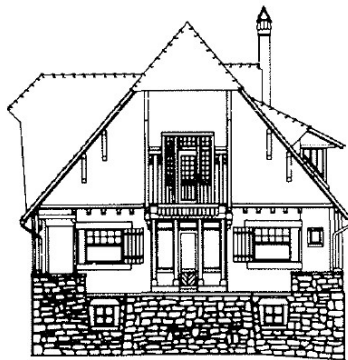


Fig. 0.1.3 Villa Fallet in La Chaux-de-Fonds (Petit, *Le Corbusier Lui-Même*, p. 29.)

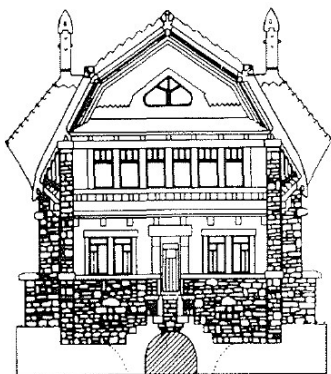


Fig. 0.1.4 Villa Stotzer in La Chaux-de-Fonds
(Petit, *Le Corbusier Lui-Même*, p. 31.)



Fig. 0.1.5 Villa Jaquemet in La Chaux-de-Fonds
(Petit, *Le Corbusier Lui-Même*, p. 31.)

若い時分から自然とふれあってきたル・コルビュジエは、自然と都市に関する思想を多く示してきた。たとえば、著作『輝ける都市』の中では、都市計画の素材として太陽、天空、樹木、鋼鉄、セメントを挙げているし¹⁹、1922年のサロン・ドートンヌに出展された「現代都市」では都市の中に広大な公園が計画されている。これらは公衆衛生の改善が目指された機能主義の文脈からすると、健康と衛生をもたらすための反人工物としての緑としてみなされてきたといえる。

しかし、ラ・ショー＝ド＝フォンでの自然に囲まれた生活と自然への敬愛や、ジャンヌレ時代の都市のピクチャレスク信仰を考慮すると、ル・コルビュジエの都市計画を機能主義という観点のみから批判したり、その中の自然を反人工物や公衆衛生の象徴として扱ったりすることは、必ずしも適当でないと考えられる。一見、ジャンヌレの思想はル・コルビュジエのそれとは正反対に思われるが、ジャンヌレの思想を明らかにし、通底する動機や変化した思考を考慮してこそ、ル・コルビュジエの都市理論、とくに都市と自然の関係の思想に、新たな視座がもたらされるであろう。レプラトニエとジャンヌレは、都市計画において、自然環境の研究を通して人間社会への還元を見出そうとしていたし、ジャンヌレにとって自然との共存生活は至極豊かなものであった。その際に獲得した知識や思考は、ル・コルビュジエの都市理論の確立に少なからず寄与しているはずなのである。

0-1-2 前近代の都市像

「ユルバニスム」や「都市計画」といった言葉が定式化されたのは19世紀後半のことであるとされている²⁰。これは西語の“urbanización”、仏語の“urbanisme”、英語の“town-planning”、独語の“Städtebau”にあたる。「ウルバニサシオン (urbanización)」という言葉はスペインの土木技師イルデフォンソ・セルダ (Ildefonso Cerdá, 1815-1876) が生み出したのは1867年であるのに対して²¹、仏語の“urbanisme”が使われ始めたのは1910年からであるとされている²²。この言葉の意味の変遷を調査した玉置啓二によると、この言葉が使われ始めた時点では「都市計画」というよりも「都市的な現象」を指す意味合いで用いられていたようである²³。その後第一次世界大戦の戦災復興にかんする議論の中で「都市計画」という意味合いが生じ、パリで都市再建博覧会が開催された1916年を契機にそれが専門家に浸透すると、それを機に徐々に一般へ普及していったという²⁴。つまり1910年の“La construction des villes (都市の構築)”の執筆開始時点では“urbanisme”という仏語が「都市計画」の意として定着していなかった。この表題は、直訳する

¹⁹ ル・コルビュジエ：輝ける都市，白石哲雄監訳，河出書房新社，2016。

²⁰ ショエ，フランソワーズ：近代都市：19世紀のプランニング，彦坂裕訳，井上書院，1983，p. 7. 1867年にイルデフォンソ・セルダがウルバニサシオン (urbanización) という言葉を作り出した。これは「手をつけていない」「処女」といった意味の新しい活動領域を示すことを意図していた。

²¹ なお、セルダにかんする日本語の論文には次のものがある。阿部大輔：イルデフォンソ・セルダの著書「都市計画の一般理論」に至る計画概念についての試論，日本都市計画学会，都市計画論文集，No. 45-3，2010，pp. 211-216. 阿部によれば、セルダは住宅の集まりの単位である「ウルブス (urbs)」を基礎にして、「都市化する」という動詞の名詞形をあてて「ウルバニサシオン (urbanización)」という単語を生み出したようである。

²² 玉置はフランスの近代都市計画にかんする概説書ではしばしば「ユルバニスム」という言葉が1910年から使われ始めたという趣旨の説明がされていることを指摘している。玉置，前掲論文。

²³ 玉置，前掲論文。

²⁴ 玉置，前掲論文。そのため、『ユルバニスム』への書名の改変は仏語の変化が大きな要因であり、探求の連続性がただちに否定されるものではない、と玉置は指摘している。

と「都市の構築」といった意であるが、玉置がジッテの用いた独語“Städtebau”からの仏訳を指摘しているように²⁵、「都市計画」に近いニュアンスを意図して設けられたものであったようである。ただしこういった各国の言葉の定義が過渡期にあったことを考慮すると、この時期における“urbanisme”の語義は厳密には“Städtebau”の語義と完全に一致するものではなく、また先に挙げた西語の“urbanización”や英語の“town-planning”ともややニュアンスを異にしていたと推察される。

草稿がジャンヌレ自身によって出版されることはなかったが、この表題はジャンヌレ自身によって題されたようで、ル・コルビュジエが草稿を“l'Etude sur la ville de La Chaux-de-Fonds（ラ・ショー＝ド＝フォンの都市の研究）”、“l'Etude sur l'urbanisation（都市化の研究）”、“La Construction des villes（都市の構築）”といったさまざまな呼び名で呼んできたことが指摘されている²⁶。以下、本研究ではこうした研究者によって発見されてきた草稿部分を指して「都市の構築」と表記する。

18世紀後半、英国では紡績機の発明や蒸気機関車の輸送での使用開始などといった諸般の発展と医療技術や栄養状態の向上による死亡率の急激な低下が合わさり、都市人口の集中が生じた。こういった現象は英国で発生したのち世界に広がっていった。爆発的人口増加を吸収した環境はスラムに転落し、日光や通風が不十分で衛生施設の貧弱な過密開発地が急増した²⁷。19世紀以来、こうした劣悪な都市環境は西欧の諸都市に広がったが、ほとんどの地方自治体はこのように新たに生じた都市問題に対応できる行政組織も技術も持ち合わせていなかった²⁸。

このような19世紀後半から20世紀初頭の近代、都市像が大きく変化した初期の都市の捉え方に有用なものとして、フランスの建築理論家フランソワーズ・ショエ（Françoise Choay）による分類がある²⁹。

ショエは19世紀を通した都市の変革を「批評のプランニング（critical planning）」³⁰と称してして大きく三段階に分けて考えている³¹。「整序化（regularization）」、「プレ・ユルバニスム（pre-urbanism）」、「ユ

²⁵ 玉置、前掲論文。ジッテの『広場の造形』の原題は“Der Städtebau nach seinen Künstlerischen Grundsätzen”である。玉置はまたジッテの遺志を継いでテオドル・ゲッケ（Theodor Goecke, 1850-1919）が1904年に創刊したベルリンの都市計画専門誌“Der Städtebau: Monatsschrift für die Künstlerische Ausgestaltung der Städte nach Ihren Wirtschaftlichen, Gesundheitlichen und Sozialen Grundsätzen（都市計画、経済学的衛生学的社会学的原理に基づく都市の芸術的発展のための雑誌）”の“Städtebau”からの直訳であるとも指摘している。

²⁶ エムリーはジャン・プティ（Jean Petit）を引きながら述べている（Émery, Marc-Albert ed.: *La construction des villes: genèse et devenir d'un ouvrage écrit de 1910 à 1915 et laissé inachevé par Charles Edouard Jeanneret-Gris dit Le Corbusier*, l'Age d'homme, Lausanne, 1992, p. 17.）。

²⁷ 18世紀後半からの都市化の流れは次の文献を参照。フランプトン、ケネス：現代建築史，中村敏男訳，青土社，2003。とくに pp. 39-52.

²⁸ エヴァンソン，酒井訳，前掲書，p. 8.

²⁹ ショエ，彦坂訳，前掲書。

³⁰ Choay, Françoise, tr. by Hugo, Marguerite and Collins, George R.: *The modern city: planning in the 19th century*, G. Braziller, 1969, p. 10.

³¹ 「批評のプランニング」という呼称は、無秩序な都市が、もともとの文脈から離れて分析され論を展開されるという意味で「万物の中心となる規範が初めてたち切れ」、「批評的な考察」に委ねられているという点を表したものである（ショエ，彦坂訳，前掲書，p. 10.）。産業革命までは、都市システムは政治権力や経済や宗教といったあらゆる社会システムと関連付けられていた。その諸要素は居住者やプランナーが実践する規範や規則群の文脈の中で共時的に関連付けられていたのであり、都市という複合体は「一つの記号のシステム」であったとショエは捉えている（上掲書，p. 7.）。しかしながら、産業革命によって空前の都市化が推し進められ、空間の組織化が大きく変化した。鉄道や電信といった、それまでのものに比べて抽象的なコミュニケーション手段の開発や、都市社会への田舎からの異質な移住者の侵入といった過程によって、都市居住者は都市現象を自分とは無縁のものとして考え始めるようになった。さらには19世紀の社会学の理論科学化といった知の構造変革も手伝って、都市を調査の対象として扱う姿勢が確立し、もともとの文脈から

ルバニズム (urbanism)」の3つである³²。そして「プレ・ユルバニズム」と「ユルバニズム」についてはそれぞれ「急進派」と「文化派」に細分して捉えている。以下、ショエが分類する都市変革の各段階について概観する。

「整序化」は、上述したような、産業革命後 19 世紀以来の劣悪な都市環境に対して行われた。オースマンによるパリ改造がその最初の事例である。ただしこうした「整序化」が進む一方で、1850 年代には都市から田舎への脱出の動きが生じ始めていた。ショエはこれを「疑似都市」と呼んでいる。いわゆる田園郊外、労働者コロニーのことである。

「整序化」の過程で見られる都市の無秩序は、「都市の潜在的な秩序を抽出する作業の中で検証された」が、その秩序自体は問題として扱われてこなかった³³。この隠れた秩序について突き詰めて議論するときに「ユルバニズム」という用語が用いられたのであり、その意味ではユルバニズムは 19 世紀末まで実践されず、理論上のプランニング形態が先行して存在していたのであった。これが、ショエが「プレ・ユルバニズム」として位置づける試みである。これは、社会を根底から再構築しようとする政治・社会思想家によってもたらされたユートピアであった。このうち「急進派」のプレ・ユルバニズムとは進歩的社会の見地からの提案であり、シャルル・フーリエ (Charles Fourier, 1772-1837) の「ファランステール」などがあたる。「急進派」では効率化や標準化といったことが目指され、ゾーニングの原型ともいべき空間の機能的な分類がなされた。これらは開放的で機能的な都市であった。一方「文化派」のプレ・ユルバニズムはノスタルジックな外見を持つ、文化的コミュニティの見地からの提案であり、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1818-1900) やウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) によるものが代表的な事例である。この有限性のある閉鎖的な都市では多様性や不規則性が特徴的である。

「ユルバニズム」は「プレ・ユルバニズム」で提案された思想の流れに則りながら、「急進派」は理論的に深化し、「文化派」は精緻な構造を与えられて具現された。「急進派」のユルバニズムにはアルトゥーロ・ソリア・イ・マータ (Arturo Soria y Mata, 1844-1920) の「線状都市 (La ciudad lineal)」やトニー・ガルニエ (Tony Garnier, 1869-1948) の「工業都市 (cité industrielle)」があり、ショエはル・コルビュジエが両者から影響を受けていることを示唆している³⁴。一方、「文化派」のユルバニズムにはジッテの理論が代表的であり、リンクの計画が最初の実践例であった。また、エベネザー・ハワード (Ebenezer Howard, 1850-1928) の構想した「田園都市」(1898) は、「都市の中の田園」という物理的な公衆衛生やゾーニングを推奨する点で「急進派」的な側面を持ちつつも、その空間の有限性や多様性により「文化派」特別な型として位置づけられている。このように、ショエの分類に則るとル・コルビュジエ時代の構想は「急進派」「ユルバニズム」の延長として捉えることができ³⁵、ジャンヌレの都市論はそれとは対照的な、多様で有限性のある都市を提案する「文化派」の思想の系譜として理解できる。

こうしてショエが段階的に示したように、19 世紀後半から 20 世紀初頭の前近代には都市の形態の秩序自体について研究するようになっていく動きが見られた。

離れて都市の分析が行われるようになったのである (上掲書, pp. 7-10.)。

³² Choay, *op. cit.*, p. 10

³³ ショエ, 彦坂訳, 前掲書, p. 79.

³⁴ 上掲書, p. 85.

³⁵ 上掲書, pp. 85, 133.

アンソニー・サトクリフ (Anthony Sutcliffe) によれば、都市にかんする博覧会や国際会議が盛んになっていったのはこの頃であったようである³⁶。19世紀前半に都市の問題が国際的な機関で扱われるようになり³⁷、20世紀になると国際的なコンタクトがさらに活発化し始めた³⁸。こうした背景の中、都市にかんする国を超えた議論はますますさかんになっていったのである³⁹。

以上でみてきたとおり、ジャンヌレが草稿を著した1910年頃は、都市の構築方法について、方法の秩序自体の研究や国を超えた議論がさかんになっていく重要な時期であった。世界的な流れとして都市像が模索されていた都市像の大転換期に、ジャンヌレはその趨勢をどのように見ていたのだろうか。近代的な都市像が生まれる直前、いまや近代都市の典型として連想される「300万人のための現代都市」をル・コルビュジェが構想する前に、モダニストとして確立する前の青年ジャンヌレが最初の都市の研究として記していたことを明らかにすることの重要性がここにある。

0-2 「都市の構築」の既往研究

0-2-1 各既往研究の成果と意義

そもそも、「都市の構築」はどのような草稿であったのだろうか。「都市の構築」は、師であるレプラトニエのすすめによって執筆されたものの未刊行に終わった未定稿である⁵⁸。ジャンヌレは1910年から執筆のための研究を始めたが、レプラトニエとの決裂を経て「都市の構築」の計画は未完に終わる。後に、草稿は『レスプリ・ヌーヴォー』誌に少しずつ掲載され、1925年に『ユルバニスム』として出版された。そのため、ジャンヌレによって「都市の構築」が出版されることはなかった。晩年のジャンヌレは、この草稿を紛失してしまったと思い込んでいた⁵⁹。この草稿はジャンヌレの故郷ラ・ショー＝ド＝フォンの都市計画への批判であると同時に、そういった醜い都市を再構築する方法を示した形態論である。草稿では、街区⁶⁰、道、広場といった都市の要素毎に節が設けられ、一方では類型を示し他方では事例も交えながら、都市形態論が展開されている。

「都市の構築」にかんする既往研究には、まず長年にわたりカナダ、トロント大学で教授を務めたアレクサン・ブルックス (H. Allen Brooks) によるものが挙げられる。ブルックスによる“Le Corbusier’s Formative Years (ル・コルビュジェの形成期)” (1997) はジャンヌレ時代の研究の嚆矢と言えよう⁶¹。とくに「都

³⁶ Sutcliffe, Anthony: *Towards the Planned City: Germany, Britain, the United States and France 1780-1914*, St Martin's Press, 1981, pp. 164-167.

³⁷ 1830年代前半のコレラの流行は都市の不衛生という問題を顕在化させ、健康や衛生にかんして国際会議で扱われるようになった (Sutcliffe, *op. cit.*, pp. 164-165.)。また国際博覧会も国際的な会合を促進した。1851年にロンドン万国博覧会が開かれ、1855年にはパリが続いた (Sutcliffe, *op. cit.*, p. 165.)。

³⁸ たとえば1900年から1913年の間には少なくとも2,271の国際会議が開かれた。その前14年にはその数はわずか853であったことから、大幅に増加している。Sutcliffe, *op. cit.*, p. 166.

³⁹ Sutcliffe, *op. cit.*, p. 167.

⁵⁸ 草稿執筆前後のジャンヌレについては以下を参考にした。Brooks, 1982, *op. cit.*, フォン・モース, 住野訳, 前掲書, エムリー, 2007, 前掲論文。

⁵⁹ Brooks, *op. cit.*, 1982

⁶⁰ 本研究で「街区」と訳出する語は、ジャンヌレの草稿ではシェザル (chésal、複数形は chésaux) と記されている。これは、スイス・ロマン地方の町における、通りに面した間口が狭く奥行きが深い町割り区画のことである。

⁶¹ Brooks, 1997, *op. cit.* ブルックスはル・コルビュジェアーカイヴの編集にも携わった。またフランク・ロイド・ライ

市の構築」については、所在の分からなかった草稿を発見し 1982 年の論考 “Jeanneret and Sitte. Le Corbusier’s Earliest Ideas on Urban Design (ジャンヌレとジッテ。ル・コルビュジェの最初の都市デザイン アイディア)”⁶²でその内容を概説している。

その他の代表的な研究には、その後のマルク＝アルベール・エムリー (Marc E. Albert Emery) による “Premières réflexions : le manuscrit inédit de «La Construction des villes» (初期の考察: 『都市の構築』の未発表の草稿)”⁶³や自身の論考と「都市の構築」の草稿を収録した “La construction des villes: genèse et devenir d’un ouvrage écrit de 1910 à 1915 et laissé inachevé par Charles Edouard Jeanneret-Gris dit Le Corbusier (都市の構築: シャルル・エドゥアール・ジャンヌレ＝グリすなわちル・コルビュジェが 1910 年から 1915 年にかけて執筆し、未完に終わった作品の起源と変遷)”⁶⁴がある。エムリーは草稿の成立過程をさらに詳細に分析し、テキストと図版の整理を進めた。このように、両者の研究は草稿の発見と執筆経緯の解明におおいに貢献した。

また、玉置啓二はラ・ショード＝フォンの都市構造との関係から、『ユルバニズム』へと結実する「都市の構築」をめぐる経緯を調査した⁶⁵。

近年では⁶⁶、2002 年に「都市の構築」にかんする研究によってベルリン工科大学で博士号を取得し、現在ニュージーランド、オークランドのユニテック・インスティテュート・オブ・テクノロジーで准教授を務めるクリストファー・シュノール (Christopher Schnoor) の研究に注目される。シュノールはブルックスによって発見されていなかったさらに新たな草稿を発見し、2008 年に “La Construction des villes (都市の構築)”⁶⁷に収録して独語の論考を著した後、いくらかの修正を加えて英訳し、2020 年に “Le Corbusier’s Practical Aesthetic of the City (ル・コルビュジェの実用的都市美学)”出版した⁶⁸。シュノールは執筆経緯をさらに詳細に整理したり、ジャンヌレが参照した文献からの図版やテキストの模倣を多数指摘したりした上で、それらがどのように草稿に反映されているかを綿密に分析した。またとくに 2008 年の論考においては多くの書き込みが残る草稿の状態を紙面上に忠実に再現した。エムリー (1992) は草稿の単語表記などを適宜改め翻刻していたのに対し、シュノールは草稿に記された取り消し線や省略表記などの書き込みを含め活字化を試みたのである。

ほかの近年の注目すべき研究としては、現在ポルトガル、コインブラ大学で教鞭をとるアルマンド・ラバサ (Armando Rabaça) による 2014 年の同大学の博士論文がある。ラバサはル・コルビュジェの建築的プロムナードのルーツを若きジャンヌレ時代に探る研究の一環として、草稿の中の道、広場および庭につ

トにかんする研究でも知られる。

⁶² Brooks, 1982, *op.cit.*

⁶³ エムリー, マルク＝アルベール: 初期の考察: 『都市の構築』の未発表の草稿, 所収: リュカン監修, 加藤監訳, 前掲書, pp.544-549. 原著: Émery, Marc-Albert: Urbanism : Premières réflexions : le manuscrit inédit de «La Construction des villes», in Lucan, Jacques ed.: *Le Corbusier, une encyclopédie*, Editions du Centre Pompidou, 1987., pp. 432-435.

⁶⁴ Émery, *op. cit.*, 1992.

⁶⁵ 玉置, 前掲論文.

⁶⁶ 同時期の研究には、ル・コルビュジェの伝記『ル・コルビュジェの生涯』で知られるモースらが 2002 年に編集したジャンヌレ時代にかんする論考集も興味深い (Von Moos, Stanislaus *et al.*, ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier: applied arts, architecture, painting, photography, 1907-1922*, Yale University Press, 2002.)。

⁶⁷ Schnoor, Christopher: *La Construction des villes. Le Corbusiers ertes städtebauliches Traktat von 1910/11*, Zurich, gta Verlag, 2008.

⁶⁸ Schnoor, Christopher: *Le Corbusier’s Practical Aesthetic of the City The treatise ‘La Construction des villes’ of 1910/11*, Abingdon, Oxon; New York, Routledge, 2020.

いての記述に着目しジャンヌレの参照源も示しながら分析することで、ジャンヌレの思想における古典主義とドイツ美学の融合を指摘した⁶⁹。

0-2-2 「都市の構築」の執筆経緯

上述したとおり、草稿の執筆経緯については、草稿を発見したブルックスやそれを翻刻したエムリーによって明らかにされ、近年さらに新たな草稿を発見したシュノールはより詳細な経緯をまとめている。以下こういった既往研究⁷⁰を参照しながら、「都市の構築」の成立過程を確認する。

上述したファレ邸を仕上げると、謝礼金を手にしたジャンヌレは、1907年に3か月間のイタリア旅行を行う。この旅行でピサ、フィレンツェ、シエナ、ラヴェンナ、パドヴァ、フェラーラ、ヴェローナを訪れた後、ブダペスト、ついでウィーンに向かってそこで冬を過ごす。1908年3月にはパリに到着し、この年にオーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954) のもとで働くこととなった⁷¹。1909年秋にはラ・ショー＝ド＝フォンに帰郷する。「都市の構築」の執筆をレプラトニエから提案されたのはこのときであった。

そして1910年4月10日にドイツに発ち、カールスルーエ、シュトゥットガルト、ウルムを訪れた後、ミュンヘンに落ち着き10月17日までの6か月間留まることとなった⁷²。この年の4月にはミュンヘンで執筆を開始し、4月16日には草稿をレプラトニエに送っている。つまりジャンヌレは草稿執筆を開始する前にパリやミュンヘンといった都市をすでに実際に訪れ体験していたことになる。4月後半から6月初旬には暫定の目次が構成されていた⁷³。1910年6月、ジャンヌレはラ・ショー＝ド＝フォン美術学校からドイツの芸術品、工業、商業の関係を研究する派遣員として任命され⁷⁴、政府の支援を受けドイツ中をくまなく回る。ミュンヘン、フランクフルト、デュッセルドルフ、ドレスデン、シュトゥットガルト、ハーゲン、ハーナウ、ワイマール、イエナ、ベルリン、ハンブルクなどを訪れ、ハインリヒ・テッセノウに呼び寄せられてヘレラウも訪問している。なお6月に初めてベルリンを訪れた際には、ドイツ都市計画博覧会とドイツ工作連盟の会議に参加しており、このベルリン滞在にひじょうに満足したことを両親に宛てて書いている⁷⁵。シュノールによれば、5月中旬にレプラトニエに宛てた手紙で研究が完了し草稿があと15日で準

⁶⁹ Rabaça, Armando: Ordering Code and Mediating Machine: Le Corbusier and the Roots of the Architectural Promenade, University of Coimbra, Ph. D. thesis, 2014. 7.

⁷⁰ Brooks, 1982, *op. cit.*, Schnoor, 2020, *op. cit.*, エムリー, 2007, 前掲論文, プティ, 田路, 松本訳, 前掲書, フォン・モース, 住野訳, 前掲書。

⁷¹ この頃のペレは鉄筋コンクリート造の建物を建設し始めたところであり、ジャンヌレはここで鉄筋コンクリートについて学ぶことになった。ペレは1903年にはフランクリン街のアパートを建設している (プティ, 田路, 松本訳, 前掲書, p. 50)。

⁷² ジャンヌレはミュンヘンでテオドール・フィッシャー (Theodor Fischer, 1862-1938) に会う。フィッシャーはジャンヌレに建築家や装飾家を紹介した。そうしてジャンヌレはベルリンにてペーター・ペーレンスのもとで5か月間働くことになる (フォン・モース, 住野訳, 前掲書, p. 38, プティ, 田路, 松本訳, 前掲書, p. 75.)。ジャンヌレは4月16日土曜日にフィッシャーのスタジオを訪れ、17日日曜日に自宅に招かれている (Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 23-24)。

⁷³ Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 32.

⁷⁴ これが後述する“Etude sur le mouvement d'art décoratif en Allemagne (ドイツにおける装飾芸術運動に関する研究)”のことである。

⁷⁵ Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 39. ジャンヌレは1910年6月29日に両親に宛てて書いた手紙で博覧会がいかに自分にとって重要なものであったかを記していた。なお、博覧会について、ジャンヌレはウィリアム・リッターのライフパートナーであったヤンコ・カドラ (Janko Cádra, 1882-1927) から情報を得ていたようである。ジャンヌレは博覧会にて、ドイツの都市計画家ヘルマン・ヤンセン (Hermann Jansen, 1869-945) のデザインに熱狂していた (Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 34)。

備ができることを報告していたようであるが⁷⁶、ブルックスは、5月19日に草稿を書き始めたこと、6月2日に作業がほぼ終わったことを報告していたとしている⁷⁷。ベルリンへ発つ前日の6月7日に同氏に宛てた手紙では数日前にテキストを書き終わったと明記している。ただしベルリンから戻った直後の6月27日には師とともに草稿を完成させるつもりであることを記しており、完成は先延ばしにされラ・ショー＝ド＝フォンとともに作業を行うつもりであることが暗に示されている。しかしながらこの2日後には両親に宛てた手紙の中で、執筆にはひじょうに長い時間を要したが、やっとすべての準備が整ったことを記している⁷⁸。

7月21日には草稿執筆作業を中断して、オクターヴ・マッセイ (Octave Matthey, 1888-1969) とともに、ツークシュピッツェなどを訪れながら帰省する。7月末にはラ・ショー＝ド＝フォンへ到着し、夏の間は、ラ・ショー＝ド＝フォンにて母親と清書作業を協働する。9月6日には、友人で著述家のウィリアム・リッター (William Ritter, 1867-1955) に宛てた手紙に、「都市の構築」の研究を終わらせるよう頭にたたき込んだことなどを書いている⁷⁹。9月末には⁸⁰、ミュンヘンへの帰途につく⁸¹。10月1日ミュンヘンより友人アウグスト・クリプシュタイン (August Klipstein, 1885-1951) に宛てた手紙には⁸²、庭と共同墓地に関する資料を見つけるが、橋にかんしては見つからないと書いている⁸³。10月17日にはミュンヘンからベルリンへ向けて発ち、18日に到着すると、21日から25日にはヘレラウにいる兄アルベールを訪れる⁸⁴。ベルリンでは王立図書館で研究を続け、すでに書いた章のいくつかを削り、新たに加えた節を完成させる⁸⁵。とりわけ、墓地と田園都市に関連する内容もメモしていたようである。

⁷⁶ Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 39, note 84.

⁷⁷ Brooks, *op. cit.*, 1982. ブルックスによれば、ジャンヌレは6月7日に図版を集めたがスケッチするかトレースするか決めていないこと、6月29日に作業完了のためさらに15日を要することを手紙に書いていたようである。

⁷⁸ シュノーはこうしたレブラトニエに宛てた手紙と両親に宛てた手紙の内容が矛盾していると指摘し、それは、ラ・ショー＝ド＝フォンで行われるスイスの自治体のカンファレンス、スイス都市連盟代表者会議 (L'Assemblée générale des délégués de l'Union des villes suisses) に間に合わせるようレブラトニエとの間で取り決めていたことがジャンヌレにとってプレッシャーになっていたためであると推察している (Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 40.)。カンファレンスの日程は1910年9月24日から25日であったが、結局草稿は間に合わず、レブラトニエが自分で講演を行ったようである (Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 40)。また、この頃の草稿の目次構成については以下を参照。Schnoor, *op. cit.*, 2020, pp. 41-42)。研究はこのカンファレンスのために設定されたのであって、これこそが完全なる締め切りであった (Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 40)。

⁷⁹ ジャンヌレがリッターに出会ったのは1910年5月末のミュンヘンであった。ジャンヌレはリッターの連絡先について4月16日のレブラトニエに宛てた手紙で尋ねていた。Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 33.

⁸⁰ ジャンヌレがラ・ショー＝ド＝フォンに向けて発ってから、9月24日と25日の上述のカンファレンスにジャンヌレが参加したり、そこでテキストを発表したりすることについてそれ以上の示唆はなかった。ジャンヌレはカンファレンスが始まる前にミュンヘンへの帰路についた (Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 47.)。

⁸¹ エムリーは、ジャンヌレがミュンヘンで「都市の構築」に取りかかる理由は不明としながらも、レブラトニエが助言した可能性にも言及しつつ、ミュンヘンで書いた記事や両親への手紙を根拠に、「都市の構築」の草稿の起源はミュンヘンにあると指摘している。Émery, 1992, *op.cit.*

⁸² クリップシュタインとジャンヌレは1909年にミュンヘンで出会った。クリプシュタインは、ジャンヌレとともに東方への旅に出ている。

⁸³ すでに研究された要素である街区、道、広場、囲い壁に、橋、木、庭と公園、墓地、田園都市の5つの要素を加えるよう、レブラトニエから勧められている。このうち墓地と田園都市はすでに導入されていたが、他の場所へ加えるようにとのことであった。Émery, 1992, *op.cit.*

⁸⁴ Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 52, Brooks, *op. cit.*, 1982.

⁸⁵ この編集で小冊子の主旨が大きく変更されることはなかったようである。また、「ゾンネンシュタット」を提案したファウスト (Bernhard Christoph Faust) 博士の思想にかんする資料は、この図書館での作業で見つけたようである。ラ・ショー＝ド＝フォンの都市計画は、ゾンネンシュタットと同じ理論に従っている (Émery, 1992, *op.cit.*, 玉置, 前掲論文)。

11月、ペーター・ベーレンス (Peter Behrens, 1868-1940) のもとで働き始める頃には、草稿執筆をやめていたようであるとエムリーは推察しているが⁸⁶、シュノールは、中断されていた草稿のための作業が1911年1月には再開され、ベーレンス事務所での仕事の合間を縫って取り組まれていたと示している⁸⁷。いずれにせよ、草稿にかけられる時間は多くはなかったようである。1911年の元旦の両親に宛てた手紙では、兄アルベールとともにドレスデンで過ごし、年末にはヘレラウのハインリヒ・テッセノウ (Heinrich Tessenow, 1876-1950) のもとを訪れたことを記している。11月頃に草稿執筆作業がやめられていたとみなしていたエムリーに対して、シュノールは、1911年3月、ベーレンスとの仕事とともに草稿のための作業が終了したとみなしている。

ジャンヌレは1911年5月に東方への旅へ発つと、都市デザインについて論じるための資料の収集も継続はするが、草稿にかんしてはこの頃にはもう取り組まれなくなっていた。同年11月に旅から帰郷すると、1910年に準備していた“*Etude sur le mouvement d'art décoratif en Allemagne* (ドイツにおける装飾芸術運動に関する研究)”⁸⁸を仕上げた⁸⁹。そして半年後には、レプラトニエとの決裂を経て「都市の構築」の計画は未完に終わる。つまり、草稿が執筆されたのは1910年春から1911年3月頃にかけての1年弱であり、草稿はこの後およそ4年間放置されることとなる。

1914年夏には第一次世界大戦が勃発する。ジャンヌレは、戦後復興の住宅需要に向け、子供時代からの友人であるマックス・デュボワ (Max Dubois, 1884-1989) とともにドミノ計画にも取り組み、「都市の構築」の研究も再開した。

1915年6月15日、デュ・ボワに宛てた手紙には、戦争で多くの都市が破壊されたために、「都市の構築」を出版する時が来たと書く。この直後に草稿を再び読んだ際には、その多くについて冗長さを感じたようで、「命題」に「おそらく必要ない、1915年6月23日」と書きつけている。同月には草稿に若干の再編集がなされ、「緒言」が書かれる。6月30日にはオーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954) に宛てた手紙に、出版社を探すためにまもなくパリへ向かうこと、草稿が改善されたことなどを書いている。6月までに草稿はほぼ書き上がっていたが、図版を補足するために、1915年の7、8、9月はパリで過ごし、国立図書館で研究をする⁹⁰。この頃にはジャンヌレは17世紀から18世紀頃のフランスの建築理論に熱中していた⁹¹。

やがて1917年にはジャンヌレはパリに出ていき定住を決心することになった。1918年6月17日には、兄アルベールに向けた手紙で、「都市の構築」の出版社を見つけたことを報告する。しかし、翌月からルネ

⁸⁶ エムリー、2007、前掲論文。

⁸⁷ Schnoor, *op. cit.*, 2020, pp. 55-56.

⁸⁸ Kries M., ed.: *Le Corbusier, A Study of the Decorative Art Movement in Germany*, Vitra Design Museum, Weil am Rhein, 2008.

⁸⁹ ジャンヌレは“*Etude sur le mouvement d'art décoratif en Allemagne* (ドイツにおける装飾芸術運動に関する研究)”の中で、「都市の構築」のために書いた田園都市にかんする考察を清書する一方、墓地の問題については示さない (Émery, 1992, *op. cit.*)。また、このドイツにおける装飾芸術運動に関する研究のおかげで、ジャンヌレは都市の構築についての調査を非公式に継続できたようである (エムリー、2007、前掲論文)。

⁹⁰ パリでの研究では、ド・ロルム (Philibert de l'Orme, 1510/15-1570) やロジエ (Marc-Antoine Laugier, 1713-1769) などの16~18世紀の人物のことや、ローマ、アッシリア、イスラームなどのさまざまな文明や文化を記録したようである。図書館での作業については下記文献も詳しい。リュカン監修、加藤監訳、前掲書, pp. 76-80.

⁹¹ Schnoor, *op. cit.*, 2020, pp. 3 など。

サンス・デ・シテの活動に参画すると「都市の構築」に言及することは一切なくなる⁹²。後に、草稿の内容は練り直されて『レスプリ・ヌーヴォー』誌に少しずつ掲載され、1925年に『ユルバニスム』として出版された⁹³。

0-2-3 『広場の造形』の影響

なお「都市の構築」執筆の際には多くの文献が参照されているが、とりわけ影響が大きかったことで知られるのはカミロ・ジッテの『広場の造形』⁹⁴である。先に見たとおり、これはショエの分類でいう「文化派」の「ユルバニスム」にあたる。後のル・コルビュジエによる機能的で開放的な都市計画は「急進派」の「ユルバニスム」の系譜に位置づけられるが、「都市の構築」でジャンヌレがおおいに参照していたのは不規則性と有限性が特徴的な「文化派」の系譜であった。

ブルックスによれば、ジャンヌレは、参照しようとした『広場の造形』の独語の原著が絶版になってしまったため、レプラトニエに複写を依頼するもかなわず、仏語版⁹⁵を参照することにしたようである⁹⁶。ただしシュノールは、ジャンヌレは独語の原著の存在を知っていたというブルックスの考えについて確証はないと指摘しており、1910年4月16/18日にレプラトニエに宛てた手紙でジッテの文献の詳細について師に教を乞うていることを根拠に、ジャンヌレが『広場の造形』の独語の原題を知らなかったのではないかと推察している⁹⁷。そして、レプラトニエに宛てた手紙の内容から、ジャンヌレが独語の原著に取り組み始めたのは4月後半であったと推測している⁹⁸。

一方仏語版については、シュノールは、ジャンヌレが1910年夏にラ・ショー＝ド＝フォン帰郷した際によく参考できたかと推察している。仏語版は、ジャンヌレの同郷人であるカミーユ・マルタン (Camille Martin, 1877-1928) によって翻訳され、「道」という章が付け加えられている。『広場の造形』の英訳者であるジョージ・コリンズ (George Collins) とクリスティアーネ・クレスマン・コリンズ (Christiane Crasemann Collins) は、この章もジッテによって書かれたものであるとジャンヌレが思い込んでいたと指摘しているが、これに対してシュノールはジャンヌレが独語の原著と仏語版の相違を知っていたと反論している⁹⁹。またシュノールは、仏語版に付け加えられた「道」の章について、これをジャンヌレが参照し

⁹² 玉置はこの原因を、ルネサンス・デ・シテの活動を通し、ジャンヌレがジッテ的な「都市の構築」の限界とアメリカの直線的な都市の可能性を学んだためだと考察している。玉置, 前掲論文。

⁹³ 『ユルバニスム』ではジッテが痛烈に批判され曲線の道が退けられている。同書は『レスプリ・ヌーヴォー』誌上の一連の論考がもとになっているが、玉置は、ジッテを批判し直線の道を肯定する最初の論考(1922年6月発行)の掲載が、1921年12月発行のレスプリ・ヌーヴォー誌第13号に予告されていることから、ジャンヌレのジッテ批判が遅くとも1921年に確立されていたことを指摘している。玉置, 前掲論文。

⁹⁴ Sitte, Camillo: *Der Städtebau nach seinen Künstlerischen Grundsätzen*, Wien, 1889. [Reprint der 4. Auflage von 1909] [First edition, Wien, 1889] ジッテ, カミロ: 広場の造形, 大石敏雄訳, 鹿島出版会, 1972。

⁹⁵ Sitte, Camillo. Martin, Camille, tr.: *L'art de bâtir les villes*, Paris, 1918 [First edition, Paris, 1902]

⁹⁶ ジャンヌレは母国語の仏語をうまく書くことができず、その辛さをレプラトニエに宛てた手紙に告白している (Brooks, 1982, *op. cit.*). 『広場の造形』において当初独語を好んだことから、ジャンヌレは仏語を書くことだけではなく読むことにも抵抗があった可能性がある。

⁹⁷ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 26.

⁹⁸ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 28.

⁹⁹ コリンズらによる英訳は次のとおり。Collins, R. George & Collins, C. Christiane: *Camillo Sitte and the Birth of Modern City Planning*, London, Phaidon Press, 1965. Collins, R. George & Collins, C. Christiane: *Camillo Sitte: the Birth of Modern City Planning*, New York, Rizzoli, 1986. シュノールは1986年版を引きながら論証している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 26, note 39.

ていたと考えるコリンズらと対照的に¹⁰⁰、事例が引用されていないことやページ数のメモなどを根拠にしてジャンヌレが「道」の章を参照していないと示している。

0-2-4 「都市の構築」の草稿の構成

ブルックスは 1910 年夏時点の目次を推察し再構成した (Table 0.2.1)¹⁰¹。その後のエムリーも、目次構成の変遷を推察した上で¹⁰²、ジャンヌレが 1915 年時点で不要と判断した部分と残すよう判断した部分に草稿を分類し、目次を再構成して収録している (Table 0.2.2)。ただしシュノールは、エムリーがジャンヌレの意図を汲んで 1915 年時点の目次を再構成したとはいえ、エムリーがしたように草稿を分類し切ることとはできないし、そういった分類時の判断について明記されていないと指摘しており、エムリーが再構成した目次に懐疑的である¹⁰³。そこで本研究ではシュノールの収録した目次構成に則って分析を進める。

シュノールは 1910 年時点の目次を再構成し¹⁰⁴、適宜資料やエスキースを加えて Table 0.2.3 のように収録している。シュノールが扱う草稿は、A4 のルーズリーフ、13 のノートブック (cahiers)¹⁰⁵、そして図版からなる。ルーズリーフの複写はラ・ショー＝ド＝フォン市の図書館に所蔵されており、図版のうちいくつかは同図書館に、またいくつかはル・コルビュジェ財団に所蔵されている¹⁰⁶。およその文章量の参考として、同表にはシュノール編 “La Construction des villes (都市の構築)” (2008) でのページ番号も併記した¹⁰⁷。また、本研究の検討対象とする部分を網掛けで示し、本研究のどの章で扱っているのかを示す章番号も付記した。

草稿の構成については、エムリーが指摘するように、ジャンヌレは都市の建設者が使用するためのいろはとして都市の構成要素を取り上げている¹⁰⁸。同表に示すおよそのページの量からも、第一部第二章「都市を構成する要素」が草稿の中心部分であることは明らかである。また、「批判すべき適用:ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分は、ジャンヌレが「都市を構成する要素」で展開する都市形態論のケーススタディで

¹⁰⁰ Schnoor, 2020, *op. cit.* p. 27, note 41.

¹⁰¹ Brooks, 1982, *op.cit.*

¹⁰² Émery, 1992, *op. cit.*, pp. 21-29.

¹⁰³ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 7, note 20.

¹⁰⁴ Schnoor, 2008, *op. cit.*, Schnoor, 2020, *op. cit.* シュノールはジャンヌレが構想した最終的な目次構成を整理している (*Ibid.*, pp. 18-19.)。

¹⁰⁵ ノートブックのいくつかはジャンヌレの “Carnets de voyages (旅の手帖)” に類似しているが、3つのノートブックは「全体的考慮」などの章のテキストを含んでいる。Le Corbusier, Giuliano Gresleri ed.: *Les Voyages d'Allemagne. Carnet*, Paris/Milan: Fondation Le Corbusier/Electa, 1994 [English edition 2002]. Le Corbusier, Giuliano Gresleri ed.: *Voyages d'Orient. Carnets*, Paris/Milan: Fondation Le Corbusier/Electa, 1987 [English edition 2002]. Schnoor, 2020, *op. cit.*, p.16 を参照。

¹⁰⁶ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 17. 図版はスケッチ、ポストカード、および写真からなる。スケッチについては、パリのル・コルビュジェ財団に 70 枚以上のシートからなるスケッチが所蔵され、ほかのスケッチはルーズリーフやノートブックの中に見られる。これらのほとんどのものについて、シュノールは草稿のどの部分で使われていたのかを特定している。ポストカードと写真についてはラ・ショー＝ド＝フォン市の図書館に所蔵されているが、これらについてはジャンヌレが草稿のどの部分で使おうと意図していたのかほとんど特定できなかったようである。ジャンヌレが撮影した写真は多量のものが見失われている。

¹⁰⁷ Schnoor, 2008, *op. cit.* シュノールは草稿にナンバリングを行っているが、ページによって文章量が大きく異なるので、ここでは見出し毎のおよその量を示すためにシュノール編の同書のページ番号を併記した。ナンバリングにかんしては Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 17 も参照。

¹⁰⁸ エムリー, 2007, 前掲論文。

あると捉えられる¹⁰⁹。

Table 0.2.1 Reconstruction of table of contents proposed by Brooks

Titre 見出し
Thèse 命題
Partie I, Chap. I Considérations générales 第一部 第一章 全体的考慮
§1. Destination de cette étude 第一節 この研究の目的
§2. Principes généraux 第二節 一般的考察
Partie I, Chap. II Des éléments constitutifs de la ville 第一部 第二章 都市を構成する要素
§1. Introduction (relabeled “Avant-Propos”) Avant 第一節 事前導入（「序文」と題し直される）
§2. Des chésaux 第二節 街区
§3. Des rues 第三節 道
§4. Des places 第四節 広場
§5. Des murs de cloture 第五節 囲い壁
Partie I, Chap. III Des moyens possibles 第一部 第三章 可能な手段
Des moyens possibles 可能な手段
Matériel pour «Des moyens possibles» «可能な手段」の資料
Partie II Application critique: La Chaux-de-Fonds
第二部 批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン
(various drafts and notes) (さまざまな下書きとメモ)
(Avertissement) (緒言)

¹⁰⁹ 「都市の構築」が後に再構成された『ユルバニスム』におけるパリと「都市の構築」におけるラ・ショー＝ド＝フォンについて、ブルックスはジッテがウィーンについて論じていたことも想起しながら、ともに特定の都市の分析として設けられているという構成の類似を指摘している。Brooks, 1982, *op.cit.*, pp. 295-296.

Table 0.2.2 Table of contents in *La Construction des Villes* (Emery ed.)

Years 年		Heading 見出し
①Esquisse de 1910 1910年の構想メモ		Thèse 命題
		La Ville 都市
		La Chaux-de-Fonds ラ・ショー＝ド＝フォン
②Textes de 1910 1910年の 草稿	Abandonnés en 1915 1915年に 破棄された部分	Thèse 命題
		Application critique: La Chaux-de-Fond 批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン
		Cité-jardins 田園都市
		Cimetières 墓地
	Conservés en 1915 1915年に 残された部分	1. Considérations générales 第一章 全体的考慮
		§1. Destination de cette étude 第一節 この研究の目的
		§2. Principes généraux 第二節 一般的考察
		2. Des éléments constitutifs de la ville 第二章 都市を構成する要素
		§1. Introduction 第一節 導入
		§2. Des chésaux 第二節 街区
		§3. Des rues 第三節 道
		§4. Des places 第四節 広場
		§5. Des murs de clôture 第五節 囲い壁
		3. Des moyens possibles 第三章 可能な手段
③Résumé de 1915 1915年の構想メモ		Avertissement 緒言
		Destination de cette étude この研究の目的
		Principes généraux de la construction des villes 都市の構築の一般的原则
		Le mode d'argumentation: le passé, le présent, l'avenir 論証の形式：過去、現在、未来
		Etude des différents facteurs 異なる要因の研究
		Esprit du présent ouvrage 現在の作品の精神
		Etat actuel de la question 問題の現在の状態
		Une erreur fondamentale 根本的な間違い
		Les éléments constitutifs de la ville 都市を構成する要素
		Avant-propos 序文
		Les chésaux 街区
		Les rues 道
		La place 広場
		Les murs de clôture 囲い壁
		Des ponts à l'éclairage des rues 道という観点の橋
		De l'arbre aux cité-jardins 田園都市の木
		Des moyens utiles 有用な手段
Conclusion 結論		

Table 0.2.3 Table of contents in *La Construction des Villes* (Schnoor ed.)

Titre 見出し	Page ページ番号	N° de chapitre de cette thèse 本研究の 章番号
Thèse 命題	—	—
Thèse 命題	235	1, 5
<i>La Ville!</i> Partie ou version préliminaire de la «Thèse» 都市!«命題»の一部または初期バージョン	241	1, 5
Esquisses pour la «Thèse» «命題»のためのエスキース	243	—
Partie I, Chap. I Considérations générales 第一部 第一章 全体的考慮	—	—
§1. Destination de cette étude 第一節 この研究の目的	247	1, 5
§2. Principes généraux 第二節 一般的考察	249	1, 5
§3. Etat actuel de la question 第三節 問題の現状	251	1, 5
§4. Erreur fondamentale d'aujourd'hui 第四節 根本的な今日の間違い	257	1, 5
Esquisses pour les «Considérations générales» «全体的考慮»のためのエスキース	259	—
Partie I, Chap. II Des éléments constitutifs de la ville 第一部 第二章 都市を構成する要素	—	—
§1. Introduction 第一節 導入	265	1, 5
§2. Des chésaux 第二節 街区	270	1, 2, 3, 5
Esquisses: transition vers des «Zweifamilienhäuser für Großstädte» エスキース: 大都市の二戸建住宅への移行	278	—
«Zweifamilienhäuser für Großstädte» 大都市の二戸建住宅	281	—
§3. Des rues 第三節 道	290	1, 3, 5
§4. Des places, I 第四節 広場 I	330	1, 4, 5
§4. Des places, II 第四節 広場 II	362	1, 4, 5
Matériel pour «Des places» «広場»の資料	390	—
§5. Des murs de clôture 第五節 囲い壁	395	1, 5
§6. Matériel pour «Des Ponts» 第六節 «橋»の資料	397	—
§7. Matériel pour «Des Arbres» 第七節 «木»の資料	399	—
§8. Matériel pour «Des Jardins et des Parcs» 第八節 «庭と公園»の資料	400	—
§9. Matériel pour «Des Cimetières» 第九節 «墓地»の資料	425	—
§10. Matériel pour «Cités jardins» 第十節 «田園都市»の資料	447	—
Partie I, Chap. III Des moyens possibles 第一部 第三章 可能な手段	—	—
Des moyens possibles 可能な手段	461	1, 5
Matériel pour «Des moyens possibles» «可能な手段»の資料	485	—
Partie II Application critique: La Chaux-de-Fonds	—	—
第二部 批判すべき適用: ラ・ショー=ド=フォン	—	—
Application critique: La Chaux-de-Fonds 批判すべき適用: ラ・ショー=ド=フォン	491	1, 2, 3, 4, 5
Annexe: Matériel pour Application critique, II 付録: 批判すべき適用の資料 II	514	—
Matériaux: Cahiers 資料: ノート	—	—
Cahier C.2 – <i>Ville II Ponts</i> ノートブック C. 2 – 都市 II 橋	529	—
Cahier C.3 – <i>Ville III</i> ノートブック C. 3 – 都市 III	538	—
Cahier C.11 – <i>Ville J</i> ノートブック C. 11 – 都市 J	559	—
Cahier C.12 – <i>Roland Fréart</i> ノートブック C. 12 – ローランド・フレアール	562	—
Cahier C.13 – <i>Laugier</i> ノートブック C. 13 – ロジエ	566	—
Inventaire 目録	—	—
Table des matières, aperçus 目次、概要	595	—
Aperçu des tableaux de matières pour «Des Places» «広場»のための概要目次	597	—
Illustrations 図版	606	—
Notes bibliographiques 参考文献のメモ	608	—
Pages de titre des Cahiers ノートブックのタイトルページ	610	—
Annexe 付録	—	—
—	615	—

0-3 研究の目的

本研究の目的は、「都市の構築」におけるジャンヌレの都市形態論とその思想的背景を明らかにすることである。草稿の論理は完全に構造化されているわけではないが、ジャンヌレは形態論を展開する際の根拠の論理化を試みている。つまり本研究は、草稿の形態論の整理、および形態論と形態を評価する思想の絡み合い方の解明を試みるものである。本研究の目的は以下のように分解できる。

1 草稿における「パルティ」の語義と草稿の主題の解明

草稿における「パルティ」という語の意味を明らかにし、この「パルティ」が本草稿の主題であったことを示す。前節まで見てきたとおり、既往研究は草稿の内容やその主題をおもな論題としているわけではなく、草稿の主題が「パルティ」であることは見落とされてきた。そこで本研究はまず草稿における「パルティ」の語義を明らかにし、草稿の主題がこの「パルティ」であることを実証する。

2 各都市構成要素の形態論およびその形態論を評価する論理の体系的な把握

既往研究によって、草稿全体の概要や執筆経緯、とりわけ近年では草稿の各部分における影響源も明らかになりつつあるが、冗長で体系的には記されていない「都市の構築」の草稿それ自体の内容にかんする議論はかならずしも十分ではない。草稿には尻切れとんぼにおわる文章や図版が欠けている箇所が存在し、一読して内容を理解するのは困難であるし、様々な都市の事例が五月雨式に挿入されており体系的には記述されていない。このように決して明快には記されていないその形態論について包括的に整理した研究はない。そこで本研究では、草稿内のすべての事例を取り上げ、都市形態のパルティのタイポロジーを析出し包括的な理解を試みる。草稿の史料批判を行ったエムリーおよびシュノールの成果に基づいて、本研究では草稿で論じられている内容、さらに草稿で取り上げられる事例を含めた網羅的な検討によって草稿の内容を精査し、その結果明らかとなったジャンヌレの都市構成要素の評価軸とその相互関係を考察する。また既往研究による内容の概説においては、その実態はまだ詳細に捉えられていないものの、ジャンヌレが曲線を賞賛する一方で直線を肯定する場合もあるといった、相反するような思想の揺らぎが指摘されている¹¹⁰。このときのジャンヌレは独語圏の建築家らを複数参照しており¹¹¹、そうした思想のゆらぎの全体像についてはその参照源まで遡ったうえで形態論との関係から理解を試みる余地がある。

3 草稿の執筆意図とジャンヌレの究極目標の解明

既往研究では草稿の内容自体が十分に扱われてこなかったが、本研究で草稿の形態論を体系的に把握した上で執筆意図とジャンヌレの究極目標を明らかにすることで、草稿の全体像が明らかになるだろう。またそれによって、ジャンヌレの視点から見た当時さかんに議論されていた都市像の捉え方が明らかになるだろう。

¹¹⁰ たとえば *Ibid.* など。

¹¹¹ Brooks, 1982, *op.cit.*, Rabaça, *op. cit.*

「都市の構築」の内容を精査し明らかにすることは、モダニストル・コルビュジエへの思想の変容を迎える第一歩でもある。レプラトニエが勧めるアール・ヌーヴォーの影響下にあったジャンヌレからモダニストとしてのル・コルビュジエへの変容過程は少しずつ明らかにされつつあるが¹¹²、上述したとおり、草稿自体の内容は十分に明らかになっておらず、ジャンヌレ時代の都市にかんする思想がどのようなものであったのかは十分に知られていない。一見、アール・ヌーヴォーに影響されたジャンヌレの好みはル・コルビュジエのそれとは正反対に思われるが、ジャンヌレの思想を明らかにし通底する動機や変化した思考を考慮してこそ、ル・コルビュジエの都市論をより適切に評価できるはずである。それはひいてはル・コルビュジエという人物全体を評価し直すことにつながる。そのためにはまず、ジャンヌレ時代の都市論を明らかにすることが必要である。

草稿執筆を始めたときのジャンヌレは弱冠 23 歳であった。先鋭的な都市計画を発表したル・コルビュジエ時代に比べて、ジャンヌレ時代には都市についての明確なスタンスがなく、いろいろな都市計画家の理論を取り入れ組み合わせ「都市の構築」の草稿を記していた¹¹³。その意味では「都市の構築」を当時さかんに議論されていた都市論のトレンドを映し出す鏡として捉えることもできる。とはいえ、草稿にはジャンヌレの意図がまったく介在していないわけではなく、議論の取捨選択や抽象化、独特の詩的な言い回しが見られる。「都市の構築」はジャンヌレの目を通して見た前近代の都市論の潮流であり、後のル・コルビュジエによるひとつの時代の捉え方が表れていると言える。この頃のジャンヌレの思想を明らかにすることで、ジャンヌレが参照していた同時代の建築家や都市計画家のより相対的で重層的な評価も可能になるだろう。

そしてまた、世紀転換期、前近代の都市論の隆盛期は上述のとおり都市像の大変革をもたらしたが、現代の社会も、都市構造について急速な変化を予測し始めていると言える。今日、限りない拡大や成長を求める資本主義は地球資源の有限性とともな臨界点を迎え始めているし、高度な情報化は大都市一極集中を経た次の段階としてその情報技術とネットワークを活用した地域分散化を推し進め、さらにはポスト情報化としてたんなる情報の集積やアルゴリズムを超えた「生命」や「生活」といったものに科学的探究が向かっている傾向が指摘されている¹¹⁴。今日、のちモダニストへと転換したル・コルビュジエが記した「都市の構築」の内容を明らかにすることで、客観的な通史の中の一通過点として捉えるだけでは見えてこなかった、ジャンヌレの視点から見た前近代の都市像の捉え方が見えてくるはずである。

¹¹² たとえばブルックスは、1912 年頃の住宅やインテリアでの傾向も考慮しながら、1915 年までに幾何学がジャンヌレの中で都市計画の思想において支配的になっていたと指摘している。(Brooks, 1982, *op.cit.*)。

¹¹³ フィリップ・デュボワ (philippe duboy は草稿について、とくにパトリック・ゲデス (Patrick Geddes) とマルセル・ポエト (Marcel Poëte) との類似性を指摘し、「都市の構築」が独創的でないことを示した (リュカン監修、加藤監訳、前掲書, pp. 76-80.)。草稿についてはジャンヌレ自身、「十中八、九無駄なもの」と明言していたようである (上掲書, p. 79)。

¹¹⁴ 広井良典: 人口減少社会のデザイン, 東洋経済新報社, 2019, pp. 139-142, 166。また広井は、17 世紀前後の資本主義勃興期以降、生産と消費構造における基軸コンセプトの変遷を「物質」(国際貿易の拡大や 17 世紀ヨーロッパでの科学革命)、「エネルギー」(18 世紀後半の産業革命と 19 世紀の急速な工業化)、「情報」(IT やインターネットに限らない、ブランドによる購買意欲の促進等を含めた広義の内容)、「生命/時間」(生活の限りない効率化や加速化からむしろ現在の充足 (コンサマトリー) な方向やローカルな方向への転換) と捉えた上で、これらが科学における基本コンセプトの変遷と対応していることを指摘する。

0-4 論文の構成と研究方法

本研究では上記のシュノール編「都市の構築」の草稿を扱う。草稿から引用する部分の表記は凡例に示したとおりである。草稿のうち検討対象とする範囲は、資料やエスキース、そして目録や付録など、本文に含まれなかったものを除いた部分、すなわち「命題」、「都市!《命題》の一部または初期バージョン」、第一部第一章「全体的考慮」の第一節から第四節まで、第一部第二章「都市を構成する要素」の第一節から第五節まで、第一部第三章「可能な手段」、および第二部「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分（Table 0.3.1 網掛け部分）とする。同表のうち、シュノールが「資料」や「エスキース」として収録する部分は、ジャンヌレが最終的に本文の構成に含むことはなかったようである。これらの部分にはジャンヌレ自身による文章というよりも参照源からの引用等が多く見られ、ジャンヌレ自身の言葉によってその意図が反映されている部分は比較的少ないと判断できることから、本研究の検討対象には含めないこととした¹¹⁵。同表には草稿のどの部分を本研究のどの章で検討するのかが示すため、各部分の行の右端に、本研究でその部分を扱っている章の番号も付記した。

草稿には「パルティ (parti)」という語が度々用いられている。第一章では、草稿全体を対象にこの語の用法を調査し、この「パルティ」という語の意味を明らかにし、パルティという語はおもに街区、道、広場の3つの要素について論じる際に用いられて都市構成要素の型を指していることを示す。そしてこの「パルティ」が本草稿の主題であったことを示す。

続く3つの章ではパルティに着目して各都市構成要素の形態論を整理する。第二章では街区、第三章では道、第四章では広場を扱う。ここでは既往研究を参照しながら草稿を精査し、ジャンヌレが示した類型

¹¹⁵ たとえば、全体的に参照資料の抜粋やメモからなる第一部第二章「都市を構成する要素」の第六節から第十節については、ジャンヌレは最終的にテキスト本文とするための手を加えることはなかった (Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 19, 70.)。シュノールはこれらの部分を「資料」として収録している (Table 0.3.1)。またたとえばシュノールが「街区」の節とともに収録する「大都市の二戸建住宅」の部分 (同表) については、ジャンヌレが雑誌「Der Städtebau」の記事「Zweifamilienhäuser für Großstädte (大都市の二戸建住宅)」をほぼ完全に仏訳した部分であり、ジャンヌレがこの部分を「街区」の節に含めることは最終的になかった。Robert René Kuczynski and Walter Lehwéß: Zweifamilienhäuser für Großstädte, in *Der Städtebau*, 7, 1910, no. 6, pp. 67-72. シュノールによるこの部分の詳細な分析は Schnoor, 2008, *op. cit.*, p. 79 ff. を参照。なお、なぜこの部分が草稿に含まれず省略されることになったのかは明らかではないが、シュノールはこの部分について、ジャンヌレはたんに仏訳しただけではなく自身の草稿に組み込もうとたしかに意図していたと推察している。Schnoor, 2008, *op. cit.*, p. 79 f. シュノールはその推察の根拠として、ジャンヌレが「エスキース：大都市の二戸建住宅への移行」の中の二箇所において、「街区」の部分と当該記事とを結び付けようと試みていることを指摘している。一箇所目は優れた長方形街区の提案として当該記事を紹介している部分、二箇所目は新しい街区開発の解決策として閉じたペリメーターブロックについて記述している部分である。このように、「エスキース：大都市の二戸建住宅への移行」および「大都市の二戸建住宅」の部分については最終的な「街区」の節には含められなかったことや、テキストの大部分がジャンヌレの自身による記述というよりもむしろ雑誌記事の仏訳であることから、ジャンヌレ自身の言葉によってその意図が反映されている部分は比較的少ないと判断できる。したがってこれら「エスキース：大都市の二戸建住宅への移行」および「大都市の二戸建住宅」の部分は本研究の検討対象から除外する。「広場」にかんしても同様に「広場」の節をなすテキスト本文（「広場 I」および「広場 II」、すなわち同表網掛け部分）のみを調査対象とする。シュノールが「《広場》の資料」として収録する草稿の大部分は、ジャンヌレによって取り消し線が引かれていたようであり、記述内容は広場の節と重複するものも多いため、検討対象外とする。また同様に「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分についても、シュノールが付録として収録している「付録：批判すべき適用の資料 II」の部分は参照源からの引用が多く占めることから検討対象外とし、同表中網掛け部分で示す「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」のみを対象とする。とくに Table 0.3.1 「資料：ノート」の部分は、ジャンヌレの参照した様々な文献からの翻訳・引用が多く見られ、箇条書き等の体裁も混ざっており、およそ草稿そのものというよりも文字通り草稿のための「資料」であったことが窺える。

だけでなく事例も含めて収集・整理することで、パルティのタイポロジーを析出する。草稿には、「パルティ」という語を用いていないものの明らかにパルティすなわち都市形態の型が論じられている箇所も散見される。しかしながら、様々な都市の事例が五月雨式に挿入されておりそれらは体系的には記述されていない。そこで、本研究の操作として、すべての事例を調査しパルティが記述されている箇所を取り出して、それを形態によって整理し直すことで、ジャンヌレの論じるパルティを体系的に理解する。さらに、各タイポロジーに下された評価からジャンヌレの評価軸を導出する。その後、評価軸の相互関係やその思想的背景を探る。

第五章では前章までで明らかにした街区、道、広場の要素のパルティ論とその思想的背景のまとめを行った後、ジャンヌレの都市全体のデザイン論を確認する。その後、こうした都市形態論の執筆意図、つまり草稿全体の都市論では何を実現しようとしていたのかを把握する。さらにそうした執筆意図について、同時代の社会運動などとの関係を確認し、ジャンヌレがどういった背景のもとにそれを構想したのかを位置づける。そしてジャンヌレが草稿を通して究極目標としていた理念を明らかにし、草稿の全体像を明らかにする。

そして最後に本研究の結論とともにその意義と今後の展望を示す。

第一章 草稿におけるパーティ

第一章 草稿におけるパーティ

第一章では草稿に頻出する「パーティ」という語について、ジャンヌレがどのような意味として用いたのかを調査し、この「パーティ」が草稿の主題であることを実証する。

1-1 パルティの語義と草稿の主題

パルティ (parti) とは、フランスのエコール・デ・ボザール¹で用いられた用語である。単語自体は 14 世紀から用いられているが、建築にかんして用いられるようになったのは 19 世紀末とされている²。ボザールでは、設計方針を決定する際の基本構想、基本レイアウトを指していた³。このように、パルティは建築設計の際に用いられたものであり、当時の都市デザインにおいて用いられたかどうかは明らかになっていない⁴。

Table 0.3.1 に示したシュノール編「都市の構築」の草稿のうち、序において本研究の検討対象として示した網掛け部分（「資料」や「エスキース」などを除いた部分）について、「パーティ」という語が用いられている箇所を抽出し Table 1.1.1 に示す。ただし建築や都市などにかんする「型」としての用法ではなく、政治的な「党派」としての意で用いられている箇所は除外した⁵。総数は 18 箇所であった。同表には「パ

¹ 1671 年に創設された建築アカデミーは 1793 年に廃止され、1795 年には建築も含まれる学士院が組織された。1816 年末には絵画・彫刻・建築の三分野を包括したエコール・デ・ボザールの創設が決定され、1819 年より実際の教育が始まる。ボザールの教育は 1968 年まで続いた。三宅理一編：エコール・デ・ボザール—その歴史と思想、所収：SD 編集部編：ボザール：その栄光と歴史、鹿島出版会、pp.49-105, 1982。

² 吉田鋼市：“parti”の意味について：クロケ、ガデ、グロモールの使用例による一考察、日本建築学会大会学術講演梗概集、1989。および同論文注 1 を参照。吉田は下記文献を引いている。Zanten, David Van: Architectural Composition at the Ecole des Beaux-Arts from Charles Percier to Charles Garnier, In Drexler, A. ed.: *The Architecture of the Ecole des Beaux Arts*, London, 1977, pp. 112-115.

³ ボザールの設計法においては、平面を構成する際にパルティが第一に決定され、大まかに決められた部分の連関がコンポジション (composition) によって調節されていた。片木薫ほか 3 名：アメリカン・ボザール理論書における平面構成態体系：アメリカン・ボザール研究 2、日本建築学会大会学術講演梗概集、計画系、第 59 巻、pp.2811-2812, 1984. 7. なお、“Grand Larousse de la langue française (グランラルースフランス語辞典)”では、“parti”という語は“Part revenant à quelqu’un (誰かの取り分)”や“Groupe ou groupement de personnes (人々のグループまたは集団)”といった語義とともに“Détermination personnelle (個人の決断)”という意味が次に示すように定義されている。“1. *Littér.* Résolution que l’on prend ou que l’on peut prendre en vue d’apporter une solution à un problème ou à une difficulté (文学、問題や困難を解決するために、人が取る、または取ることができる解決策) ... 2. *Parti pris*, résolution, position arrêtée une fois pour toutes (*Parti pris*, 一度できっぱりと決められる解決、ポジション) ... 3. *Parti pris*, dans une œuvre d’art, un ouvrage d’architecture, exécution qui manifeste une intention délibérée quant à la manière de traiter un accessoire du sujet (*Parti pris*, 芸術作品や建築において、対象の付属物の扱い方について確固たる意図を示す実行。) ... 4. *Class. Moyen terme*, position intermédiaire (古典、中期、中位)”。つまり建築においては“parti pris”で設計意図を示すような表現を指すようである (sous la direction de Guilbert, Louis, Lagane, René, et Niobey, Georges: *Grand Larousse de la langue française*, Larousse, 1971., pp. 4008-4009)。この定義はボザールの用法と対応していると言える。

⁴ 現代においては、都市のパルティに着目した研究にはたとえばカリスカン (Olgu Çalışkan) の研究がある。カリスカンはタイポロジカル・レイヤーとモルフォロジカル・レイヤーの二軸を設け、都市の構成を分析している。タイポロジカル・レイヤーでは、パルティ、構成 (constitution)、形状 (configuration)、コンポジション (composition) の 4 つの階層に都市を分けている。Çalışkan, Olgu: Pattern Formation in Planned Urban Peripheries: A Typo-Morphological Approach for Design, pp.40-63, in Brand, N., Van den Burg, L., Çalışkan, O., Tan, E. R., Wang, C. Y., and Zhou, J.: *Urbanism: Phd Research 2008-2012*, Ios Press, 2009.

⁵ 次に示す 1 箇所においては“parti”という語は“le public (一般の人)”に対する「党派」といった意で用いられているようである。“La conception du respect des œuvres anciennes est mal définie et oubliée dans le public qui ne sait comment se prononcer. Les **partis** outranciers ont des préceptes théoriques ayant les uns et les autres leur valeur. Qui donc pourra dire d’une voix sûre la solution idéale? (古代の作品を尊重するという構想は、定義が悪く、どのように決定を下したらよいかわかっていない一般の人々には忘れ去られている。無法の**パルティ**は理論的教訓を有してお

ルティ」という語を含む文の引用とその和訳を記し、当該語を太字で示した。また、記述箇所の話題および記述頁を併記した。ただし引用文中の中略 (...) は筆者による。同表より、N° 2, 11, および 12 を除き、パルティという語は都市構成要素の話題において用いられ、それらの型を指して用いられていることがわかる。たとえば、道や街区といった都市構成要素について、N° 1 の「三角形のマッスというパルティ」[CV-271]、N° 14 の「まっすぐな街路のパルティ」[CV-501]といった具合に、各都市構成要素の具体的な形態の描写とともにパルティという語が用いられている (N° 1, 3, 4, 6~10, 13~18)。なおこのうち N° 18 は具体的な形態は読み取りづらいが、この引用部分は N° 17 のあとに段落を改めて記された部分であり、それまでのジャンヌレの主張を考慮すると N° 17 と同様に「市松模様」のように整然と切りそろえられた長方形の形態の街区を指して批判を展開していると推察できる。N° 5 は具体的な形が読み取り辛いですが、これは第三節「道」(Table 0.3.1) 中の「道をならすこと」という項における斜面の造成にかんする文脈での記述であり、Table 1.1.1 N° 5 に示す引用後、この文脈は N° 6 の内容へと続いている。N° 5 および 6 は、N° 3, 7, 8, 13, 14 のような平面の道の型ではなく、断面についての道の型であることがわかる。このように、各部分の話題はおおむね都市構成要素についてであるが、例外的に、同表 N° 11 では広場にある大聖堂のファサードの垂直性について述べられており、建築の型としての用法も見受けられる。こういった「型」としての用法は、しばしばパルティを目的語とする動詞に「(図形や線を) 引く」を意味する仏語“tirer”が用いられていることから確認できる (N° 5, 7, 17)。ただし“tirer”とともに用いられる箇所の中でも N° 2 および 12 の 2 箇所にかんしては、「パルティ」を「型」ではなく「利益」といった意として読み取ることも可能でありシュノールは後者の意として英訳している⁶。この 2 箇所にかんしては Table 1.1.1 において後者の意で訳出し、「型」としての用法での邦訳は括弧内に併記した。以上から、同表に示した 18 箇所のうち、N° 2, 11, 12 を除いた 15 箇所で、「パルティ」という語が都市構成要素の形態について記述する際に用いられていると言える。

これらを考え合わせると、「都市の構築」でのパルティの語義は都市構成要素の型であると言える⁷。つ

り、どちらにも価値がある。では、誰が理想的な解決策を確かな声で言えるのだろうか?)”(強調は引用者による, Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 478)

⁶ “tirer parti de”には「利益を得る」といった意味もある。そのためシュノールによる英訳では、N° 2 に示す引用部分を“The Viennese architect Mr. Siegfried Sitte proposes in the journal *Städtebau* a whole series of locations for school buildings, in which he makes good use of the elongated rectangular block.” (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 277)、N° 12 を“the 13th century architect in Pisa would create, for example in the Cathedral square, a 15-metre-high enclosure around the huge lawn where the famous cathedral, baptistery and leaning tower stand; a uniform, brutal wall, shot through with crenellations; then, closer, a more elaborate cemetery wall from which he would derive marvellous benefit. The brutal wall provided shelter from outlaws outside;” (*Ibid.*, p. 359) と訳出している。対して“tirer”を「(図形や線を) 引く」という意で理解できる箇所については、シュノールはたとえば N° 17 を“It is here, drawing on the very ill which created this unfortunate chequerboard, that use could have been made of façade projections, as discussed.” (*Ibid.*, p. 432)、N° 5 を“However, there would be a way to draw marvellous benefit from this same site. The cost of terracing would, it is true, be greater. For the owners this would amount to several thousand francs.” (*Ibid.*, p. 305)、N° 7 を“The geometer can make a most brilliant play of this state of affairs by bending his streets as shown in Fig. XXVIII [31, 32]. In diagrams *a* and *b*, due to a slight widening of the street at the peak of the slope, the views will be closed off by a building which blocks the street at its end point;” (*Ibid.*, p. 310) と英訳しており、“tirer”を“draw”や“make”に訳している。

⁷ なお本研究の検討対象外の部分については、第一部第二章第九節「墓地」の資料 (Table 0.3.1) の一か所において「パルティ」という語が見られる。その記述は次のとおりである。“Partout où un conflit s’élève entre deux principes esthétiques, on ne cherche pas à le poursuivre, et apparaissent les compétents qui disent: aucun **parti** n’a entièrement raison. Chacun pense quelque chose de juste; la vérité git au milieu. (2つの審美的原則 (引用者注: 建築的庭園と風景式庭園) の間で衝突が起こっている至る所で、人々はそれを続けようとはしていないし、権力のある人物がこのように言っているようである: どの**パルティ**も全く理由を持ち合わせていない。それぞれが正しいことを考える; 正しさは真ん中に存する。)” [CV-440] この記述は一見主題が理解しづらいが、「墓地」の資料」の部分では曲線で

まりジャンヌレは、もとは建築について語られていたパーティを都市デザインに適用しているのである。とくに、街区は5箇所(N° 1、15、16、17、18)、道は7箇所(N° 3、5、6、7、8、13、14)、広場は3箇所(N° 4、9、10)で述べられている。序で確認したとおり、草稿の中心部分をなすのは第一部第二章「都市を構成する要素」であった。つまり、草稿第二章の表題「都市を構成する要素」とその第二～四節の表題「街区」、「道」、「広場」(Table 0.3.1)にも表れているように、ジャンヌレは「都市の構築」の主題として、街区、道、広場を中心にパーティを論じていると言える。草稿の主題はこうした都市構成要素ごとに展開されるパーティ論なのである。

そこで本研究第二章以降では、これら街区、道、広場の都市構成要素を対象に草稿のパーティ論を分析する。なお「囲い壁」の節は、シュノールも指摘するようにそれ以前の「街区」、「道」、「広場」といった節に比べて規模が小さいこと、そしてその記述はジャンヌレが参照していたドイツの風景画家、建築家パウル・シュルツェ＝ナウムブルクの主著“Kulturarbeiten (文化作品)”におおいに依っていること⁸、また、Table 1.1.1からもわかるように、囲い壁は街区、道、広場に比べて“parti”という語が用いられている箇所が少ないことも考慮し、囲い壁のパーティの整理は行わない。ただし「囲い壁」の節の内容は、草稿の参照源からの影響を含めて考察する本研究の第五章で扱う。

構成された「風景式庭園 (jardin paysager)」[CV-440]と幾何学的な形をした「建築的庭園 (jardin architectonique)」[CV-440]が対置され論じられていることを考慮すると、ここでの用法も「庭園」という都市構成要素の型であると判断できる。ただしこれらの記述が含まれる「墓地」の資料のほとんどの部分は、ジャンヌレが独自に記した文章というよりも、さまざまな独語の文献をジャンヌレが仏訳したものであったようであり (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 162 ff.)、序で示したとおり、本研究の検討対象からは除外している。

⁸ Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 139-142.

Table 1.1.1 Descriptions of *parti* in “La Construction des Villes”

N° 番号	Citation 引用	Sujet 話題	Page 頁
1	Le parti d'un massif triangulaire, Fig. , se condamne de lui-même: les poutres a' et b' sont impossibles à aménager et l'espace entre l'angle intérieur a" ou b" et celui extérieur a' ou b' ne recevra aucune lumière directe. 図の三角形のマスという パルティ はそれ自体が非難される: 三角形の先 a' と b' は整備することが不可能であり、内側の角 a", b" と外側の角 a', b' の間の空間は直射日光が全く当たらない。	Chésal 街区	271
2	L'architecte viennois, M: Siegfried Sitte a proposé dans le journal « Städtebau » toute une série d'emplacements pour bâtiments d'école, où il tire parti du chésal en rectangle allongé. ウィーン建築家 M.ジークフリート・ジッテは、雑誌《都市計画》に一連の学校建築用地を提案し、その中で、細長い長方形の街区をうまく使っている(細長い長方形の街区という パルティ を引いている)。	Chésal 街区	275
3	l'administration d'aujourd'hui ne pense pas ainsi et c'est précisément ce système-là qu'elle pratique, créant ainsi des rues parfois trop étroites pour leur trafic intense et d'autres nombreuses, toujours trop larges, trop ouvertes, rues mornes et solitaires où l'on regrette la place vilipendée. Le premier corollaire d'un tel parti c'est — obligation fatale du dessin au té et à l'équerre — le tracé rectiligne des rues, leurs intersections en croix, les chésaux de forme irréprochablement carrée ou rectangulaire. 今日の行政はこのように考えていないし、行政が実行するのはまさにこういったシステムである。このように、激しい交通やいつも大きすぎたり開放的すぎたりするその他の多くのものにとって時折狭すぎる道や、非難された広場を後悔することになるような陰鬱で寂しい道を生み出しながら。こういった パルティ の最初の結果は—T字型定規や直角定規によるデッサンという宿命的な義務—道のまっすぐな図面や、十字の交差点や、申し分なく正方形や長方形の形をした街区である。	Rue 道	291
4	à la place des tristes cours le parti très architectonique de quatre murs se refermant, permet de très jolis aspects : 寂しい中庭の広場では、4つの壁という非常に建築術的な パルティ が再び閉じているので、とてもきれいな眺めがもたらされている :	Place 広場	314
5	Il y aurait pourtant moyen de tirer un parti merveilleux de ce même terrain. Les frais de terrassement seraient plus grands, il est vrai. Il s'agirait, pour les propriétaires, de quelque mille francs. (引用者注: 斜面の造成についての文脈で) しかし、まさにこの土地からすばらしい パルティ を引く方法がある。土運びの費用は本来よりもかかる。所有者にとっては数千フランが問題となる。	Terrassement 道の造成	316
6	il dit le monumental aspect du grand mur de droite couronné de pavillons et de végétation; il accuse les partis variés que l'architecte pourrait tirer des porches des maisons inférieures, à gauche; (引用者注: 斜面の造成についての文脈で) それ(引用者注: 図式 b (Le schema b)) は、別棟と植物で飾られたまっすぐで大きな壁によるモニュメンタルな眺めを示している; 図の左にあるような低い位置にある家のポーチから、建築家が引き出すことの出来るさまざまな パルティ を強調しているのである ;	Terrassement 道の造成	317
7	Le geometre peut tirer le parti le plus brillant de cet état de choses en tordant ses rues à la manière de la <i>fig. XXVIII</i> . Sur les schémas a et b, grâce à un faible élargissement de la rue au point culminant de la pente, les images seront closes par un bâtiment barrant la rue au point terminus; 幾何学者はこの道を図 <i>XXVIII</i> の方法でねじ曲げることで、この状態からもっとも素晴らしい パルティ を引くことができる。図式 a と b では、斜面の最高点で道をわずかに拡幅しているおかげで、その眺めは建物が道を終点で妨げることによって閉じられるだろう ;	Rue 道	320
8	Les fig. c et d montrent un autre parti : celui de deux rues en fourche. 図 c と d はほかの パルティ を示している : そこで 2 本の道に分岐するというものである。	Rue 道	321
9	Lorsque la place offrait la forme d'une figure géométrique parfaite, — carré [sic], cercle, ovale —, il arrivait souvent aux rues de s'ouvrir au milieu des façades suivant quatre axes principaux. On ne manque jamais de faire ainsi aujourd'hui, mais en oubliant toutefois, que les anciens bâtisseurs fermaient toujours brutalement ces rues, à quelque cent mètres de leur embouchure dans la place, au moyen d'un palais, d'une église, d'un édifice noble quelconque. (...) Ce parti fut même poussé si loin sous Louis XIV et ses successeurs, qu'il sera bientôt l'objet	Place 広場	344

	d'une étude spéciale. 広場が完璧な幾何学的図形—正方形、円、楕円—を示しているとき、道はしばしば主要な 4 本の軸に続くファサードの真ん中で開くことがあった。今日では人々は必ずこのようにするが、昔の建造者が、広場の道の入り口から数百メートルのところで宮殿や、教会や、ほかの威厳のある建物を建てることで、いつも道を乱暴に閉じていたことを忘れていた。(…) この パルティ は、遙か昔のルイ 14 世とその後継者のもとで推し進められた。これはまもなく特別な研究対象になるだろう。		
10	En se réduisant à un large passage voûté pratiqué à même le massif des maisons, les embouchures de rues, comme c'est le cas en plusieurs endroits de la place du Pallio à Sienna, pourront être dissimulées et rendre le coup d'œil majestueux (...) La Cour du Louvre à Paris, l'oeuvre sereine de Pierre Lescaut, de Mercier et de Perrault, doit son caractère de calme imposant à l'application quatre fois répétée de ce parti . <i>Fig.</i> 建物のマッサに直接作られた大きなアーチ型のパサージュに帰着して、シエナにあるパリオ広場のいくつもの場所での事例のように、道の入り口は隠されおごそかな眺めをもたらすかもしれない(…) パリにあるルーブル宮は、ビエール・レスコ、メルシエ、ペローによる平穏な作品であり、大きな穏やかさという性格は、4 度繰り返されたこの パルティ を適用したおかげである。図...に示すように。	Place 広場	346
11	Ce n'est pas par une pure fantaisie que ce mode d'impressionner a été généralement adopté au moyen-âge. Le système des villes fortifiées, ceintes de murs et de fossés avait eu pour conséquence de rendre le terrain « intra-muros » infiniment précieux. On entendait exprimer puissamment l'élan de foi commune, et comme on ne le pouvait, bridé par la rareté du sol, à la façon des égyptiens et étaler des temples sur des milliers de mètres en des plaines désertes, on bâtit en hauteur; et ce parti , imposé par les circonstances mêmes, peu à peu devint la source de l'éclosion prestigieuse de la ligne verticale. 感動させるこの様式が一般的に中世のときに取り入れられたということは、純粋な空想力によるものではない。壁と堀によって取り囲まれている、要塞化した都市のシステムは、《市内の》土地を無限に貴重なものにするという結果をもたらした。人々は、共通の信仰衝動を力強く表現したがっていた。地面の希少性によって抑えられて表現することができなかったのも、そして、エジプト人のように砂漠の平野に数千メートルにわたって寺を広げていくことができなかったのも、人々は高く建てるのである;そしてこの パルティ は、まさにこの状況によって強いられることで、徐々に、垂直線の素晴らしい誕生の源となった。	Cathédrale 大聖堂	351
12	l'architecte du XIII siècle à Pise, par exemple sur la Place du Dôme, créait tout autour de la vaste pelouse où se dressent, prestigieux, le Dôme, le Baptistère, et la Tour penchée, une clôture haute de près de 15 mètres; un mur uni, brutal, découpé de créneaux; puis, plus près, un mur de cimetière plus recherché dont il allait tirer un parti merveilleuse. Le mur brutal, c'était un abri contre les bandits du dehors; たとえば、ピサの 13 世紀の建築家は、ドゥオモ広場で、名高いドームである洗礼堂や斜塔が建っている広い芝生の全周囲に、約 15 メートル高さの囲いを作っていた; 一様で、暴力的で、のこぎり壁によって細かく切られた壁;そして、より近くにある、すばらしい利益を得ようと(すばらしい パルティ を引こうと)さらに研究された墓地の壁。暴力的な壁、これは、外からの悪党に対する保護物であった;	Murs de cloture 囲い壁	394
13	la place du 1 ^{er} Mars, auquel [sic] est bordée au plus mal par les édifices que le parti des rues toutes parallèles obligent à surgir, tous isolés les uns des autres, autour de la place. マルスブルミエール広場は、すべての平行な街路の パルティ が立ち現れさせる建築物、すなわち広場の近くにある、他のものから孤立したすべてのものによって、最も悪く囲われている。	Rue 道	501
14	car les cinq illustrations précédentes suffisent à faire valoir à quel malheureux emploi des moyens plastiques aboutit le parti des rues droites. というのも、先の 5 つの図は、まっすぐな街路の パルティ が到達する造形的手段の悪い使い方を主張するのに十分だからである。	Rue 道	501
15	Ici le parti inflexible du damier nous offre les perspectives dans ce qu'elles sont de plus recoupé. ここで、市松模様という厳しい パルティ が、何度も切り刻まれた場所において眺望を示す。	Chésal 街区	504
16	Mais l'adoption incompréhensible du parti en damier sur un sol aussi rebelle a tout tué et a créé au contraire laideur sur laideur. しかし、適さない土地の上に市松模様という不可解な パルティ を選択したことが、すべてを台無しにし、反対に、醜さの上に醜さを作り出した。	Chésal 街区	507
17	C'est ici que tirant parti du mal même que créait ce malheureux damier on eût pu employer les procédés de façades à décrochement dont il a été parlé.	Chésal	507

	まさに無価値な市松模様が作り出していた害悪の パルティ を引いて、すでに説明された引っ込んでいる部分のファサードの方法を人々が用いることができたのは、ここにおいてである。	街区	
18	Le chésal type adopté par les géomètres Chauv-d. Fonnières est celui dont les inconvénients ont été dits à la page +. —Ce parti avait été adopté il y a quelque soixante ans alors que la place n'était point rare, et que les maisons n'étaient bâties qu'isolées les unes des autres. ショー＝ド＝フォンの幾何学者によって取り入れられた街区のタイプは、+ページでその難点が述べられた。—この パルティ は60数年前、その場所が希少でないときに、そして他の家から孤立した家しか建てられなかったときに取り入れられた。	Chésal 街区	507

1-2 小結

本章では、草稿に頻出する「パルティ (**parti**)」という語についてジャンヌレがどのような意味で用いたのかを調査し、この「パルティ」が草稿の主題であることを示した。「都市の構築」でのパルティの語義は都市構成要素の型であり、ジャンヌレは、もとは建築について語られていたパルティを都市デザインに適用していることを指摘した。そしてジャンヌレは街区、道、広場を中心にパルティを論じており、草稿の主題はこうした都市構成要素ごとに展開されるパルティ論であることを指摘した。

第二章 街区のパーティ

第二章 街区のパーティ

第一章から、ジャンヌレはパーティという語によって都市の要素の型を指し、とりわけ街区、道、広場について論じていることがわかった。そこで第二章、第三章、および第四章ではそれぞれこの3つの都市構成要素のパーティに着目して都市形態論を整理する。

第二章では、ジャンヌレがパーティを論じるおもな3つの都市構成要素のうち「街区」を扱う。

最初に検討対象を示した後、それら検討対象でどのようなことが論じられているのかその概要を確認する(2-1)。ジャンヌレによるこうした構成は必ずしも形態論的に系統立てられたものではないので、本研究の操作として、草稿で論じられているすべての事例を調査して街区のパーティを抽出し、それらを形態によって分類し直しタイポロジーを析出する(2-2)。その後、各タイポロジー形態に対するジャンヌレのコメントにもとづき、それらの評価軸を導出する(2-3)。そして、導出された評価軸相互の関係を考察する(2-4)。

2-1 検討対象

街区についての記述は「街区」の節が中心ではあるが、「批判すべき適用:ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分で挿話的に述べられている箇所もある。本章ではこの2つの部分を検討対象とする。

なお、「街区」の節ではパサージュについても論じられているが、別途「道」の節の中に「パサージュ」の項が設けられていることから、本研究ではパサージュを街区ではなく道に分類し、次章での検討対象とする。

2-1-1 第一部第二章第二節「街区」の概要

序で示したとおり草稿は冗長で理解し辛いので、まず草稿に書かれている内容を整理する。

以下に「街区」の節の内容を順に示す。草稿に見出しは設けられていないが、ここでは便宜上見出しを設けて内容を整理する。

(1) 理想的な街区

街区の形態の好ましさは、その形態が道に与える影響によって評価するべきであるという前提が示される。ジャンヌレは、できるだけ多くのファサードが道から見える形態が望ましいとしている。そのような形態では、道の「表面 (la surface)」[CV-271]を有効に使うことができ、商業資源と居住の楽しさを併せ持つからである。

(2) 街区の形の検討

最初に、街区の角度が検討された後、街区の平面形状が検討される。ここで検討される形状は、家一軒分の厚みを持つ長方形、三角形、六角形、前庭付きの長方形、中庭付きの細長い長方形、およびその一部

の辺が曲線となった中庭付きの細長い長方形の派生形である。その後、細長い長方形の形状の街区の実例が示される。この実例は中庭を有しており、そのような中庭により街区に通路が作られるとして、パサージュを有する街区に話題が移る。なお、シュノールも指摘するように、ここでジャンヌレが肯定的に捉えるのは基本的に長方形とその派生形のみである¹。

(3) ジークフリート・ジッテの学校建築用地

パサージュの話題が短く挿入された後は、カミロ・ジッテの息子で建築家のジークフリート・ジッテ (Siegfried Sitte, 1876-1945) による学校の提案が他の事例よりも詳細に紹介される。

(4) 敷地分割

中庭と街区の関係はさらに展開され、1つの敷地を分割する際の庭への影響が論じられる。

(5) 街区と道の関係

節の末尾には、有用性と美が生まれるのは道と街区が適切に一致するときであり、各々を尊重すべきことが結論付けられている。これは草稿の次節「道」を予告しているように窺われる。

2-1-2 「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の概要

ジャンヌレはこの部分で、地形を考慮せずに直線で構成されたラ・ショー＝ド＝フォンの都市計画と、それをもたらした行政を厳しく断罪している。こうした批判は、ラ・ショー＝ド＝フォンの都市デザインを具体的に検討して導かれている。

ラ・ショー＝ド＝フォンはジュラ山脈の麓に位置するジャンヌレの故郷である。この「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分の内容は、地形を考慮せずに作られた直線の都市計画と、それをもたらした行政への痛烈な批判にまとめられる。草稿ではまずラ・ショー＝ド＝フォンの歴史を遡り、まっすぐな道が計画された経緯が示される。この計画は1794年の火事で被災した後に新たに計画されたものであった。ジャンヌレはラ・ショー＝ド＝フォンの計画を退屈さと醜さをもたらすと批判し、その害悪を実証するため、公園、広場、街区、道、建物、労働者地区などについて事例研究を行っている。検討後には、その害悪を都市の構築における自由さ、無秩序状態によるものと結論づけるが、最後の文は未完に終わっている。ジャンヌレが1910年春にラ・ショー＝ド＝フォンの写真を撮影しているが、この「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分でジャンヌレが使用を意図していた図版は十分に特定されておらず、シュノールはラ・ショー＝ド＝フォン市の図書館のコレクションから同じ1910年頃のものを受録している²。本論文ではシュノールが収録したこれらの写真や、ジャンヌレがラ・ショー＝ド＝フォンの地図上のどの位置を示していたのかを推察したエムリーの分析³や参考にしながら、1908年のラ・ショー＝ド＝フォ

¹ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 76

² Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 17.

³ Émery, 1992, *op. cit.* エムリーはジャンヌレの図版が地図上のどの箇所を示したものであったのか推察し、1908年のラ・ショー＝ド＝フォンの地図に示したものを収録している。

ンの地図 (Fig. 2.1.1) ⁴を精査しジャンヌレの意図を確認する。以下に街区の検討部分のみを示す。

「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の中で、ジャンヌレは街区における建物の配置方法を分類し、それぞれ批判している⁵。分類は、重要な建物が街区の幾何学的中心に配置されている場合、建物が街区の端に配置されている場合、建物が隣接する2つの家の間に窮屈に配置されている場合の3つである。ジャンヌレの書きぶりからして各場合で紹介される事例は草稿執筆時に未完成のものを含むようであり、図から確認できない事例が多い⁶。街区については、これら3つの配置方法のほかに、斜面の道を批判する際にも言及されている。斜面の道とは、東西方向の長手 (Fig. 2.2.1 横方向) に直行する道である。

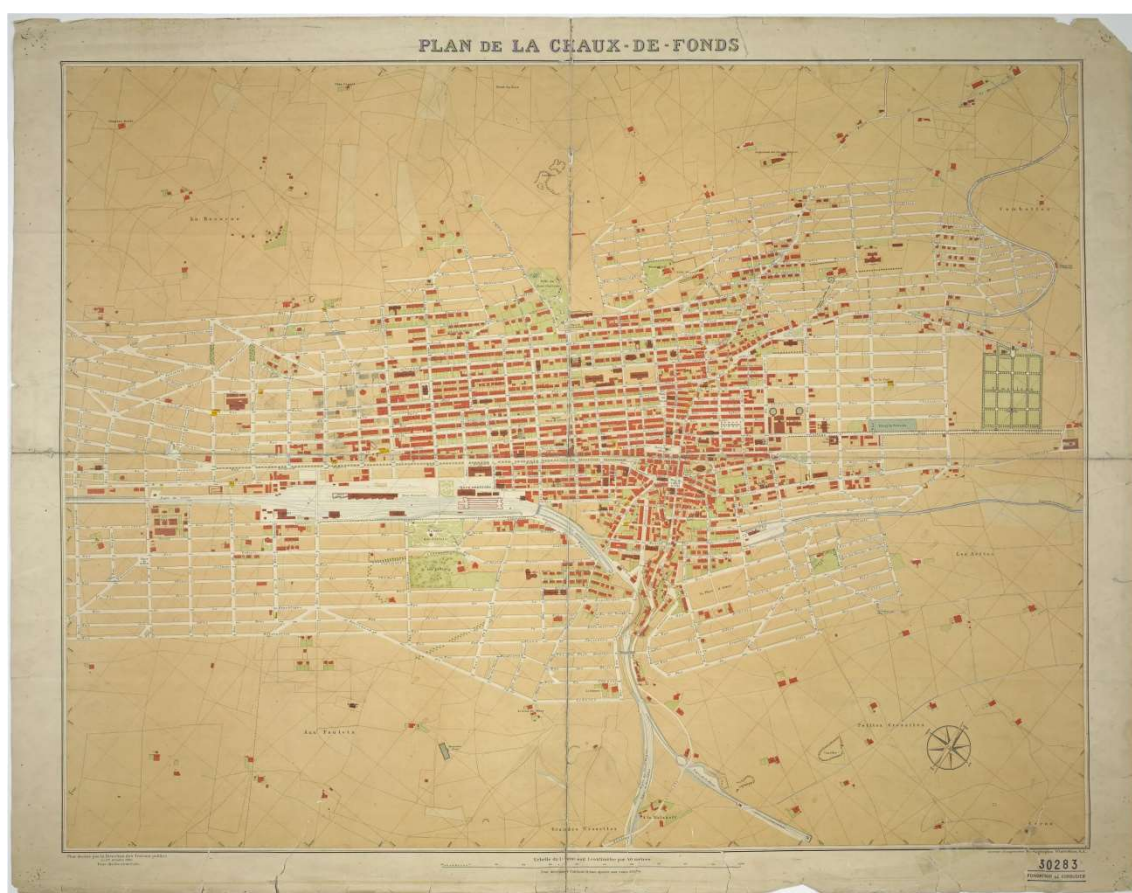


Fig. 2.1.1 Town map of La Chaux-de-Fonds, 1908
(La Chaux-de-Fonds: *Plan de La Chaux-de-Fonds.*)

⁴ La Chaux-de-Fonds: *Plan de La Chaux-de-Fonds / plan dressé par la Direction des Travaux publics.*, Winterthur : Kartographia S.A., 1908. この地図はル・コルビュジエ財団にも所蔵されているようで (FLC 30283)、シュノールも収録している。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 495, Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 423.

⁵ この部分について、シュノールはジャンヌレが広場における公共建築の配置を分類し示していると捉えているが、以降本論文で示すとおり 1908 年の地図を確認してみると、広場というよりも街区内における建物配置を論じていると理解できる。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 194.











⁶ 1910 年までにラ・ショー＝ド＝フォン市の拡張工事は完了していなかった。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 193

2-2 パルティの抽出と類型化

「都市の構築」の草稿では、以上で概観したように街区が論じられてきた。そこで、「パルティ」という語を用いず型を説明する箇所も含め、街区のパルティの記述箇所を取り出した。総数は 20 箇所であった。その後、取り出した街区のパルティを整理・分類した。

整理・分類した類型を Table 2.2.1 に示す。同表の 10 個のパルティのうち、2 個の類型 (III②③) は筆者が作成したものであり、おもに「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の事例に基づいている。その他の類型 (I①②③④、II①②③、III①) は、エムリーが収録した図版に基づいている⁷。建物と街区の関係に着目すると、これらはさらに、中庭型 (同表 I)、連続型 (同表 II)、独立型 (同表 III) に分類できる。中庭型は建物が街区の周縁部に配置され、中央部に中庭を有する。連続型は建物が直線状に配置されている。一方、独立型は街区内に建物が独立して配されている。

Table 2.2.1 Parti of city blocks

I Type of courtyard			
①Triangle	② Rectangle	③Derivative of Rectangle	④Hexagon
			
II Type of grouping			III Type of isolation
①Rectangle with a single row of buildings	②Rectangle with a single row of buildings with front yard	③With yard between the houses	①Rectangle with multiple buildings
			
			②Rectangle with a building in the center
			
			③Rectangle with a building on the end
			

⁷ Émery, 1992, *op. cit.*, p. 202. エムリーは、ジャンヌレのスケッチではなく、おそらくエムリー自身が清書したと思われる図版を掲載している。ジャンヌレの文章をもとに図化したのであろう。

I 中庭型

中庭型のバルティは、その平面形状によって〈三角形〉(Table 2.2.1 中 I①、以下アルファベットと番号のみ示す)、〈長方形〉(I②) やその〈長方形の派生形〉(I③)、そして〈六角形〉(I④) に細分できる。このうち〈三角形〉は隅に日光が当たらないことが否定的に捉えられている。また〈三角形〉は道に面するファサードが醜いと述べられている。直角部分については、街区内部が整備しやすく、外部には美しい眺めがもたらされるうえに、隣接するマッス (massifs) にも同じ効果がもたらされ最も好ましい交差点となるとしておおいに讃えられているのに対し、鋭角は平凡な印象を与え「醜い建築的な眺め (aspect architectural hideux)」[CV-271]を生むとして否定的に捉えられている。鈍角は鋭角よりは利点があるものの、鈍角に向かい合う角は鋭角となってしまうとして批判されている。こうした角度についての文脈を考慮すると、〈三角形〉のファサードの醜さへの批判は三角形の角の眺望を指した批判とも考えられる。

〈長方形〉および〈長方形の派生形〉は街区の角の直角も賞賛されている。〈長方形〉については、ジャンヌレは比率の良い細長い長方形として Fig. 2.2.1 を用いて説明している。とくに、側面の直線や平行や屈折が道の線を引くときにのみ問題となるのに対し、直角の角は「第一の必要性 (première nécessité)」[CV-274]によるものであると指摘している。また、広い中庭が風や埃から守られている状態を肯定している。さらに、交通から分離されて守られているので子供が遊ぶことができることや、戸数を最も多くできることが肯定されている。こうした〈長方形〉の利点を保ちつつ道の曲線に合わせて変形したものが〈長方形の派生形〉である。シュノールによれば、ジャンヌレは Fig. 2.2.2 に示されるドイツの建築家カール・ヘンリチ (Karl Henrici, 1842-1927) の著作“Beiträge zur praktischen Ästhetik im Städtebau” (以下『都市計画における実用的な美学への貢献』)の中のを想定していたようである⁸。また、これら〈長方形〉および〈長方形の派生形〉では庭のおかげで道からの交通騒音や埃の悪影響を受けにくいことが肯定されている。〈長方形〉の実例としては Fig. 2.2.3 の中世のベルンの都市拡張が紹介されているが、同図を見ると〈長方形〉というよりもむしろ〈長方形の派生形〉の実例にも思われる⁹。ここではとくに資本家の家が大きな庭を取り囲んでいることが指摘されており、中庭の存在が読み取れる。またジャンヌレは、雑誌“Der Städtebau (都市計画)”¹⁰に掲載されたジークフリート・ジッテによる学校用地の提案についても触れている。これは〈長方形〉および〈長方形の派生形〉の実例として挙げられているようである。シュノールが指摘するように、ジャンヌレは同誌の図を模写している (Fig. 2.2.4)¹¹。ジークフリートは、学校建築の4面すべてのファサードが車道に面する配置を有害と判断し、その解決策としてこの事例を提案したという。ジャンヌレは部屋の配置について、学校の事務室、玄関、階段が道に面しているのに対し、教室が太陽光を受けるよう中庭に面し、廊下、クローク、便所は残りの空間に配されている様子を記して

⁸ Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 76-77. Henrici, Karl: *Beiträge zur praktischen Ästhetik im Städtebau, Eine Sammlung von Vorträgen und Aufsätzen*, Munich: Callwey, 1904.

⁹ シュノールによれば、同図はスイスの銅版画家マテウス・メーリアン (Matthäus Merian, 1593-1650) による次の書籍から模写したものであったようである。Merian, Matthäus: *Topographia Helvetiae, Rhaetiae et Valesiae. Das ist Beschreibung und eygentliche Abbildung der vornehmsten Staette und Plätze in der Hochlöblichen Eydenossenschaft Graubündten Wallis und etlicher zugewandten Orthen...*, Frankfurt am Main: Merian, 1654; repr., Kassel/Basel: Bärenreiter, 1960, p. 24

¹⁰ ジャンヌレはたんに“Städtebau”と記しているが、正確には次の注に示す通り“Der Städtebau”誌のことであったようである。

¹¹ Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 277. シュノールはジークフリートによる図版 (Sitte, Siegfried: *Das Schulhaus im Stadtplane*, in *Der Städtebau*, 3, 1906, H. 10, Abb. 1-12) との類似を指摘している。

いる。ここではほかに、道の騒音などから小学生が守られること、小学生が隣の土地の木陰を利用できること、ファサードが簡素であり費用が安いことが肯定されている。

このように日当たりの良さや戸数の多さが肯定される〈長方形〉および〈長方形の派生形〉と同様に、〈六角形〉も庭が部屋のゆとりや明かり取りに役立つと肯定されている。また、道に面するファサードの「表面 (surface)」[CV-271]が十分な大きさを賞賛されている。一方で〈六角形〉では各辺の道が同一であり単調であることで「もっとも陰鬱な眺め (Le plus morne aspect)」[CV-272]を生むことは批判されている。ただし、実用的で美しい例外として、街区の外側に道を通すのではなく、内側に道を通す方法が用いられているというイギリスの例が挙げられている。また、アメリカのある都市では、多数の六角形を用いた計画が構想されていたことにも言及されている。

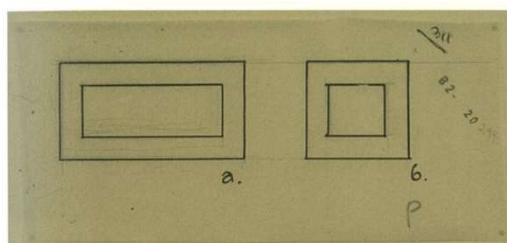


Fig. 2.2.1 Perimeter blocks drawn by Jeanneret [CV-273] (B2-20-299FLC)

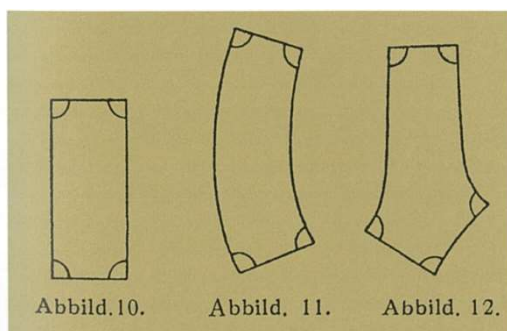
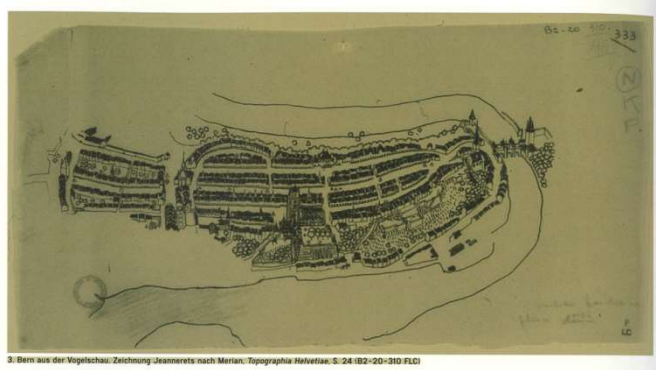
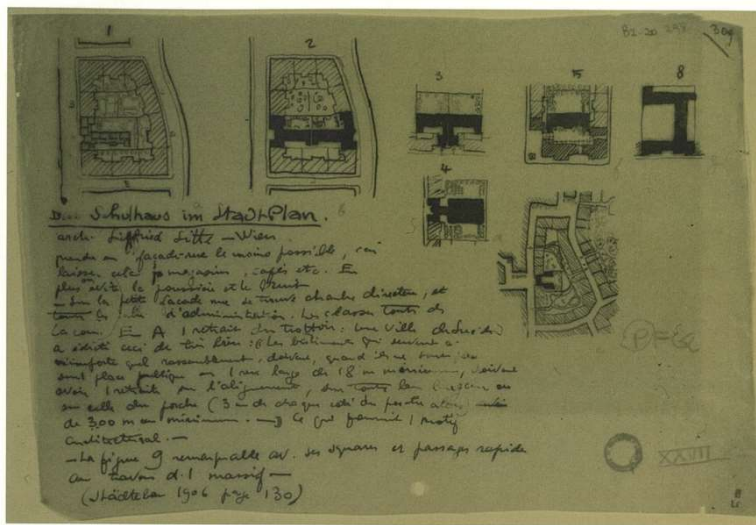


Fig. 2.2.2 Variations of a rectangular city block drawn by Henrici
[CV-273] (Henrici, *Beiträge*, S. 70, Abb. 10-12)



3. Bern aus der Vogelschau; Zeichnung Jeannerets nach Merian; Topographia Helvetica; S. 24 (B2-20-310 FLC)

Fig. 2.2.3 Berne, bird's eye view drawn by Jeanneret [CV-274] (B2-20-310FLC)



4. Skizzen Jeannerets nach Siegfried Sitte (B2-20-298 FLC)

Fig. 2.2.4 Tracings drawn by Jeanneret following Siegfried Sitte, *Das Schulhaus im Stadtplane* [CV-276] (B2-20-298 FLC)

II 連続型

連続型のパーティは、建物と庭の位置関係によって〈建物一列配置の長方形〉(II①)、〈前庭付きの建物一列配置の長方形〉(II②)、〈庭両側に建物の長方形〉(II③)に細分できる。

ジャンヌレは〈建物一列配置の長方形〉について、道路に面する面が大きいため、道の騒音や埃の影響を大きく受け、居住に適さないとして批判している。ただしこれは、先に見たとおり「街区」の節の冒頭で多くのファサードが道に面する形態を賞賛していたこととは矛盾している。

〈前庭付きの建物一列配置の長方形〉では「中庭や庭の後ろにある家のマスを削る (*retrancher le massif des maisons derrière une cour ou un jardin*)」[CV-272]ことによって「道からファサードを遠ざける (*éloignant ainsi une des façades de la rue*)」[CV-272]ことができる。このパーティはエムリーの図版も参考にすると Table 2.2.1 II②のように建物ファサードが道からセットバックした形態であると考えられる。ジャンヌレはこのパーティにおいても居住用の街区ではファサードを道から遠ざけようとしているようであるが¹²、おそらくここにおいても前面道路の騒音や粉塵を回避できると想定されているであろうこうしたセットバックの利点よりも、「しばしば繰り返されるこの線が生む単調さやそれがもたらす道の醜さ (*la monotonie qu'engendre ce trace souvent répété, et de la laideur des rues qu'il provoque.*)」[CV-272]といった欠点のほうが大きいとして批判的に捉えられている。〈前庭付きの建物一列配置の長方形〉の形態はラ・ショー＝ド＝フォン¹³の斜面の道にかんする文脈の中でも登場する。街区は「市松模様 (*damier*)」[CV-504]という語で、そしてファサードを細かく区切る空間はファサード幅 2 倍分の「あいた空間 (*vide*)」[CV-504]と記されている¹⁴。これは Fig. 2.2.5 に示すように、市松模様とは言い難いものの、建物ファサードと「あいた空間」がおおよそ 1:2 の割合で短手方向に交互に配される様子を指している。ジャンヌレは、起伏のある地形は多彩で素晴らしい解決策を可能にするにもかかわらず、市松模様状の街区によって幅が狭いファサードが連続し、道の眺望が何度も切り刻まれたように見え醜いと批判している。反対に、各街区がより細長い場合には、道の眺望に街区の長辺が役立つことを肯定的に予測している。

〈庭両側に建物の長方形〉については、ジャンヌレはドイツの風景画家、建築家パウル・シュルツェ＝ナウムブルク (Paul Schultze-Naumburg, 1869-1949) が主著“*Kulturarbeiten*” (以下『文化作品』) 第四巻 *Städtebau* (以下『都市計画』) に収録した図 (Fig. 2.2.6 中左図) を用いようとしていたようである¹⁴。同図では黒く塗りつぶされた部分が建物を示していると理解できる。同図中左図は建物が両側に集まり隣接している。ジャンヌレはこのパーティについて、建物同士が壁を共有するので経済的であること、もう一方の同図中右の図に比べ面が連続し長く広がるので部屋の集まりが快適になること、庭は奥行きが深く長い眺望が美しいこと、2つの建物の間の距離が大きいため空気と太陽が十分に取り入れられ、庭が道の騒音や埃から守られることを賞賛している。なお、「街区」の節でわずかに言及されているヘレラウ、ポーンヴィル、ハムステッドは、Fig. 2.2.6 中左の図の説明直後に挙げられていることから、これらはその実例

¹² ここにおいても、多くのファサードが道に面する形を賞賛していたこととの矛盾がみられる。

¹³ ジャンヌレは“*vide*”という語を度々用いている。ジャンヌレは「何も見えない砂漠 (*un désert où les yeux ne saisissent rien*)」[CV-300]のような、「際限の無い表面に据えられた視界の一点にある、4本の線からなる心につきまとうような消失点 (*la fuite obsédante de quatre lignes en un point d'horizon planté sur une surface qui ne limite pas*)」[CV-300]だけが見えるような空虚な「空いた」空間と、閉じた空間に対置される「開いた」空間を批判していることから、本論文では“*vide*”を「あいた空間」と訳出する。

¹⁴ Schultze-Naumburg, Paul: *Kulturarbeiten*, Band IV: Städtebau, Munich: Callwey, 1906.

と理解されるが、実際のこれらのプランには曲線も用いられており、矩形よりもむしろ長方形の派生形 (Fig. 2.2.2) に近い¹⁵。

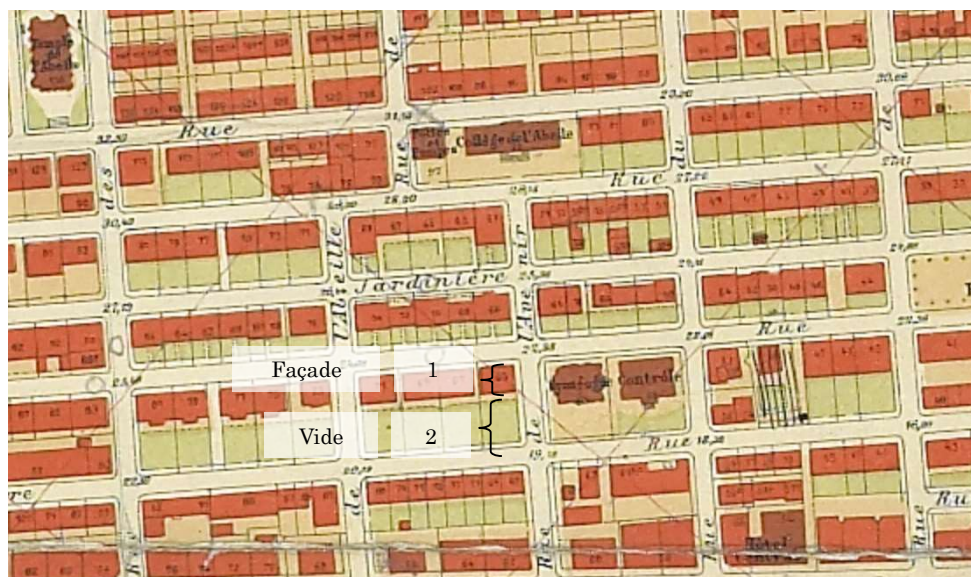


Fig. 2.2.5 City blocks compared to a chequerboard

(La Chaux-de-Fonds, *Plan de La Chaux-de-Fonds*, supplemented by author)

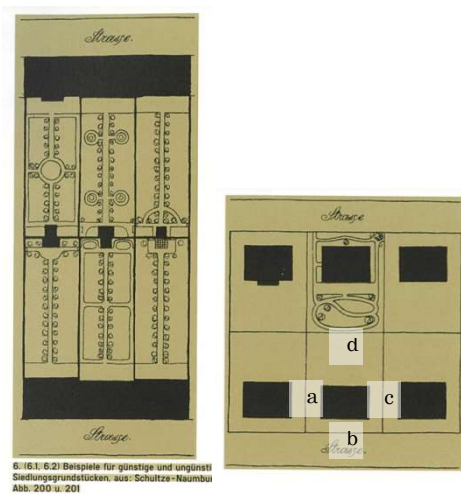


Fig. 2.2.6 Drawings by Schultze-Naumburg [CV-278]

(Schultze-Naumburg: *Kulturarbeiten*, Städtebau, Abb. 200 u. 201) (supplemented by author)

¹⁵ 実際、ハムステッドは草稿の第一部第三章「可能な手段」においても挙げられ、その「地面は最も好ましいシェゾに従って分割される (Le sol est partagé suivant les chéaux les plus favorables)」[CV-470]として街区割りも肯定的に捉えられている。

III 独立型

独立型のバルティは、独立して配される建物の街区内の位置によって〈独立建物が複数ある長方形〉(III①)、〈真ん中に建物がある長方形〉(III②)、〈端に建物がある長方形〉(III③)に細分できる。

〈独立建物が複数ある長方形〉は Fig. 2.2.6 中右図として、同図中左図の〈庭両側に建物の長方形〉(II③)と対比的に論じられている。同図中右図は各戸が分散している。ここでは、「小庭 (jardinets)」[CV-276]と表現される建物周囲の4つの空間のうちの3つが狭く不快な道に接している状態を批判されている。3つの位置は前面道路との関係から同図中 a~c に示すように推察でき、残り1つの位置は同図中 d に示す部分であると考えられる¹⁶。〈独立建物が複数ある長方形〉では先に見た同図中左図の〈庭両側に建物の長方形〉と比べて、採光の少なさや、交通騒音や埃といった前面道路から受ける悪影響を批判していると理解できる。ただし、dの「小庭」は奥行きがなく悪いものの、安易な形をしているので辛うじて適切に配置可能であると述べられていることから、先の3つの「小庭」に比べて衛生の確保に十分な広さがないことを批判されつつも、道路から離れた配置を肯定的に捉えられていると考えられる。また、〈庭両側に建物の長方形〉ではこの〈独立建物が複数ある長方形〉に比べたときのファサードの経済性を肯定されていたことから、〈独立建物が複数ある長方形〉では比較的非経済的であることが否定的に捉えられていると読み取ることができる。

〈真ん中に建物がある長方形〉は、先に見た「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分において紹介されていた重要な建物が街区の幾何学的中心に配置されている場合に相当し、例として、コレージュ・ド・ルエスト、コレージュ・ド・ラ・シャリエール、コレージュ・プリメール、ギムナジウム、監査事務所、シナゴークが挙げられている。ジャンヌレはこれらの事例について、4面すべてのファサードに装飾が施されることを想定しその非経済性を批判している。また、建物の周りに「あいた空間」[CV-508]が生じることによって建物が裸にされ大きさが縮められたかのように見えると予測しており、建物が強調されない状態を否定的に捉えている。とくにギムナジウムについては、ジャンヌレは図を用意していたようであり、エムリーによって地図上の位置が推察され (Fig. 2.2.7)、シュノールによってギムナジウムの写真が示されている (Fig. 2.2.8)。ジャンヌレはこの事例において建物が道の眺望に全く貢献しないと批判している。Fig. 2.2.7においてギムナジウムは街区の右角に位置しているが、「街区の幾何学的中心に配置されている場合」の具体例であることを考慮すると、ジャンヌレはギムナジウムよりむしろ街区中央に独立して配された建物 (Fig. 2.2.8 コレージュ・アンデュストリエル) を指し、ファサードがセットバックしていることで、道から「あいた空間」が見えることを批判していると考えられる。

〈端に建物がある長方形〉は、「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分における建物が街区の端に配置されている場合に相当する。事例には、時計学校¹⁷、アンデパンダン教会堂、カトリック教会堂、青十字、ルウエスト教会堂が挙げられている。この配置方法では、ファサードの3、4面が似通うことと、ファサードが道の眺めに役立たないことが予測され批判されている。これは、街区の端に建物を配することで、道に接する3 (もしくは4) 辺でファサードが類似することによる単調さと、ファサードがセットバ

¹⁶ エムリーも同様の位置関係を推察している。Émery, 1992, *op. cit.*, pp. 80, 202.

¹⁷ シュノールは “École d’Horlogerie mécanique” [CV-510]、エムリーは “École d’Horlogerie et de mécanique” (Émery, 1992, *op. cit.*, p. 55) と表記している。後に示す Fig. 2.2.9 の写真のキャプションでシュノールははたんに “Ecole d’Horlogerie” [CV-512] と表記していることも考慮して、ここでは「時計学校」と訳出している。

ックすることで、道から見える「あいた空間」に対する批判だと考えられる。たとえばカトリック教会堂、ルウェスト教会堂は地図で確認できないが、時計学校についてはシュノールが示した写真 (Fig. 2.2.9) やエムリーの示した位置から、Fig. 2.2.7 のコの字をした建物を指すと思われる。この建物はコの字の凹部分が道からセットバックしている。青十字についても建物が道からセットバックしているように見受けられる。また、「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分における建築物が隣接する2つの家の間に窮屈に配置されている場合についても、例で挙げられている裁判所は地図では確認できないが、これは新しく必要とされる1,2面のファサードが道の眺望に役立たないとの予測から批判されていることから、建物が街区の端に配置されている場合と同様に、ファサードが道からセットバックしていることへの批判であると思われる。

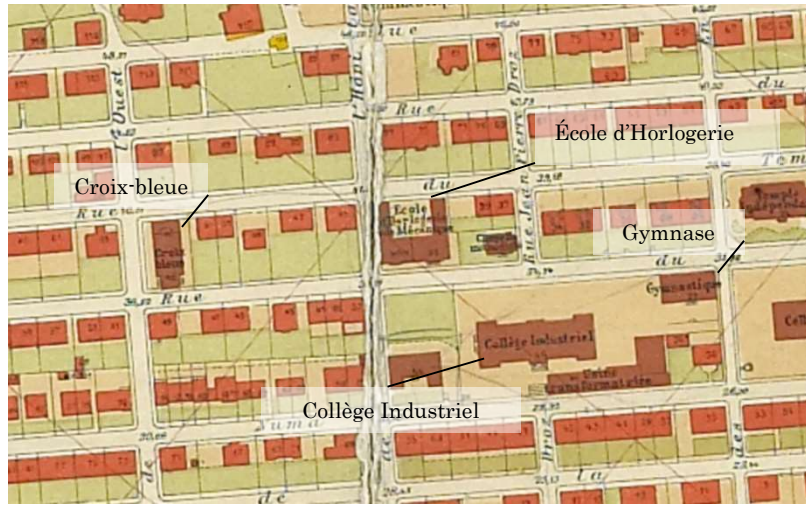
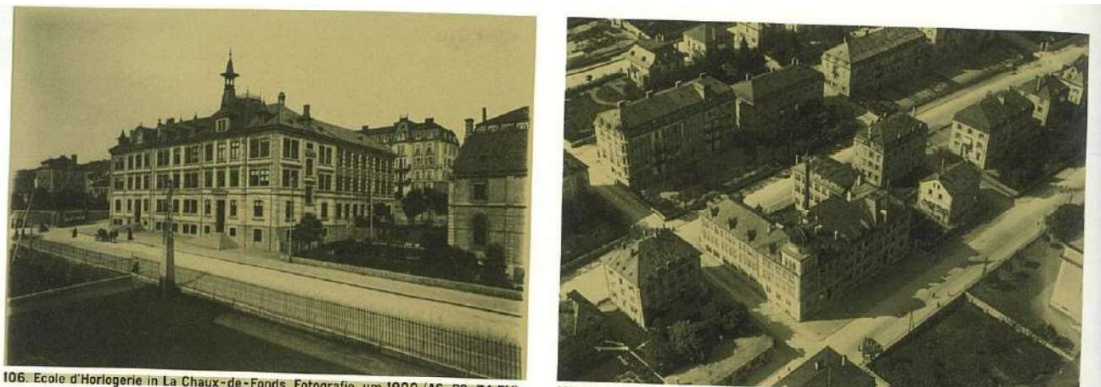


Fig. 2.2.7 Gymnase, Collège Industriel, École d'Horlogerie, et Croix-bleue in La Chaux-de-Fonds
(La Chaux-de-Fonds, *Plan de La Chaux-de-Fond*, supplemented by author)



Fig. 2.2.8 Photo of Collège Industriel in La Chaux-de-Fonds, ca. 1900
[CV-511] (AS-P2-76 BV)



106. Ecole d'Horlogerie in La Chaux-de-Fonds. Photographie um 1900. [AS-P2-74 BV]

Fig. 2.2.9 Photos of École d'Horlogerie in La Chaux-de-Fonds, ca. 1900
[CV-512] (AS-P2-74 BV, B2-4663 BV)

2-3 パルティの評価軸

視覚的観点の評価軸

前節のようにパルティを分類し、その評価を見渡してみると、ジャンヌレのパルティの評価はいくつかの評価軸に基づいて行われていることがわかってくる。

〈三角形〉(I①)では鋭角や鈍角における眺望が批判的に捉えられていた。それに対して〈長方形〉(I②)および〈長方形の派生形〉(I③)では街区の角の直角が賞賛されていた。直角の必要性の評価軸があると言える。

〈六角形〉は各辺の道が同一であり単調である点を批判されていたし、〈前庭付きの建物一列配置の長方形〉(II②)においても繰り返しによる単調さが否定的に捉えられていた。〈前庭付きの建物一列配置の長方形〉(II②)においても、道の単調さが批判されていた。これらより眺望の多様性の評価軸があるとわかる。

同じ街区では、ファサードがセットバックしていることで、道から建物が見えないことが批判されている。またとくに、「批判すべき適用:ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分では、幅が狭いファサードと「あいた空間」が連続する道の眺望が醜いと批判されていた。これらより、ファサードが道に面することの評価軸があるとわかる。

〈庭両側に建物の長方形〉(II③)は、奥行きのある庭における長い眺望が美しいとして肯定的に評価されていた。庭の眺望の美しさにかんする評価軸があるとわかる。

実用的観点の評価軸

〈三角形〉(I①)は隅の日当たりの悪さを否定的に捉えられていたのに対し、〈六角形〉(I④)〈長方形〉(I②)やその〈長方形の派生形〉(I③)は採光の良さが肯定的に捉えられていた。また、〈長方形〉やその〈長方形の派生形〉は前面道路の交通騒音や埃の悪影響から保護されることが肯定されていた。〈独立建物が複数ある長方形〉(III①)のa、b、cに示す建物周囲の庭は狭く不快な道に接していると批判され、dは道から離れてはいるものの広さは衛生確保に不十分であることを否定されていた。〈庭両側に建物の長方形〉(II③)では採光の多さが肯定的に評価されている。〈家一軒分の厚みの長方形〉(II①)では、庭がなく騒音や埃の影響が大きいため否定されている。これらから衛生状態の評価軸が確認できる。このようにパルティの評価には衛生状態の評価軸があり、その中には光、音、空気の観点があるとわかる。

〈六角形〉(I④)、〈長方形〉および〈長方形の派生形〉では戸数の多さが肯定されていた。街区あたりの戸数の評価軸があると言える。また〈庭両側に建物の長方形〉(II③)は、部屋の集まりが快適になると肯定されていた。これは戸数の評価ではないものの、街区あたりの戸数の評価軸に関連した評価だと言える。

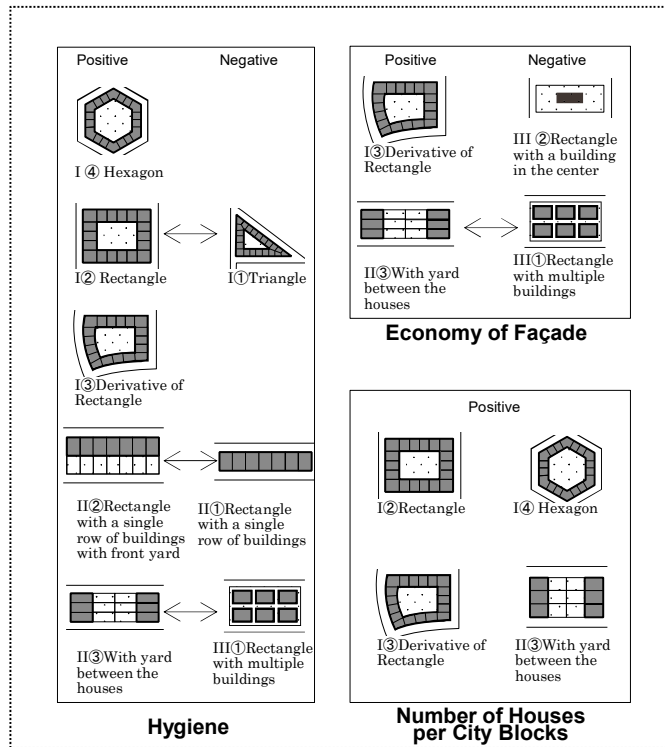
さらにこの街区は、建物同士が壁を共有する経済性を肯定されていた。それに対して、〈独立建物が複数ある長方形〉(III①)では建物同士が壁を共有せず、ファサードが非経済的になるとして批判されていた。ファサードの経済性の評価軸があるとわかる。なお〈長方形の派生形〉(I③)においても、街区形態に起因する経済性ではないようであるが、簡素で費用の安いファサードが肯定されていた。

このように、ジャンヌレがパーティを評価する際には視覚的観点の4つ評価軸（庭の眺望の美しさ、眺望の多様性、ファサードが道に面すること、直角の必要性）と、実用的観点の3つの評価軸（衛生状態、街区あたりの戸数、ファサードの経済性）に従って評価していると言える。

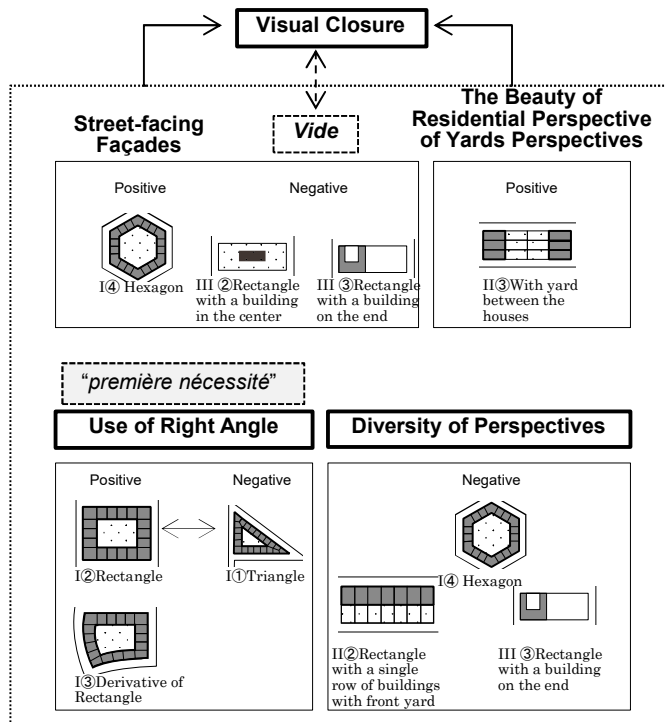
2-4 パルティの評価軸の相互関係

前節 2-3 で析出した9つの評価軸とパーティの対応関係は Fig. 2.4.1 に示すとおりである。このうち実用的観点の評価軸にかんしては、街区の都市構成要素は光や清浄な空気といった良好な衛生状態を提供する庭と建物の関係を中心に論じられており、衛生状態にかんする評価が支配的であると言える。一方で視覚的観点の4つの評価軸（庭の眺望の美しさ、眺望の多様性、ファサードが道に面すること、直角の必要性）についてさらに詳しく吟味すると、同図に示すように、各評価軸の関係は同列ではなく偏りがあり、とくに直角の必要性和眺望の多様性の評価軸、そして視覚的閉鎖性の観念が支配的であることがわかってくる。

Practical Criteria



Paul Schultze-Naumburg (1869-1949)
Siegfried Sitté (1876-1945)



Visual and Corporeal Criteria

Fig. 2.4.1 Correspondence between criteria and parti of city blocks, and interrelationship of criteria

庭の眺望の美しさ

この評価軸で評価されるパルティは〈庭両側に建物の長方形〉(II③)であった。そしてこのパルティにおける庭は奥行のある形態であり、その長い眺望に美しさを見出されていた。この眺望は長いと形容されてはいるが、このパルティにおける庭の長手方向の視線は両側の建物によって塞がれている。庭は中庭のように閉じていないものの、ここでジャンヌレが論じる眺望は庭の長手方向のものであり、視線は街区両側の建物に留まる。したがって、ジャンヌレが繰り返し否定する「あいた空間」とは異なり、むしろ視覚的な閉鎖性をもたらすと言える。庭の眺望の美しさの評価軸は視覚的閉鎖性の希求に基づいたものであると言えるのである (Fig. 2.4.1 中“The Beauty of Residential Perspective of Yards Perspectives”から“Visual Closure”へ向かう実線矢印)。

ファサードが道に面すること

この評価軸も視覚的閉鎖性の志向に基づいたものである。たとえばこの評価軸で評価される〈真ん中に建物がある長方形〉(III②)のパルティなど、セットバックしたファサードが批判される街区では、道とファサードの間に「あいた空間」があり、道からの視線が壁に留まらない。ジャンヌレは視線が壁に留まる視覚的閉鎖性を好んでいることが確認できる。このように、ファサードが道に面することの評価軸も視覚的閉鎖性の希求に基づいて展開されていると言える (Fig. 2.4.1 中“Street-facing Façades”から“Visual Closure”へ向かう実線矢印)。そしてその際に「あいた空間 (vide)」という語を用いて批判を展開していることは注目される。

ただし、このように、ジャンヌレは視覚的閉鎖性を求め道に面するファサードの表面積の最大化を目指しているにもかかわらず、〈建物一列配置の長方形〉(II①)や〈前庭付きの建物一列配置の長方形〉(II②)では、建物をセットバックさせファサードを道から遠ざけようともしていた。これは、ジャンヌレが街区を居住に供するよう想定している点も考慮すると、住宅の庭による良好な衛生状態の希求、すなわち先に述べた衛生状態の評価軸によるものであると考えられる。

たとえば〈庭両側に建物の長方形〉(II③)の説明時にジャンヌレはシュルツェ＝ナウムブルクによる図を模写していたが、ジャンヌレはこの事例で、庭における清浄な空気や採光の確保と、道の騒音や埃からの保護を主張していた。一方シュルツェ＝ナウムブルクの建築は、民族的で田舎風の郷土様式に属していたことで知られるが、ジャンヌレの模式図から土着的な造形を読み取ることはできない。ほかに、〈長方形の派生形〉(I③)の具体例としては、ジークフリート・ジッテによる学校の提案を挙げ賞賛していた。この利点は、戸数の多さ、採光に優れ風や埃から守られた中庭、テニスコートや子供の遊び場といった、「有益で快適で衛生的な居住条件 (tous les facteurs de l'habitat utile, confortable et hygiénique)」[CV-272]を満たす点にある。

すなわち、ジャンヌレはジークフリートとシュルツェ＝ナウムブルクの両提案において、中庭に着目し、近代的公衆衛生や健康の確保を賞賛していると言える。いずれの人物もピクチャレスクや郷土様式といった中世的な土着のデザインを志向していたが、ジャンヌレが両者の提案でとくに着目し共鳴しているのは、中庭の近代的衛生観念である。このような衛生状態の評価軸と、視覚的閉鎖性の好みは共存しているために、ファサードのセットバックにかんして肯定と否定が混在していると理解できる。

眺望の多様性

ジャンヌレは六角形や前庭付きの街区において、同じ形の反復による、道の眺望の単調さを否定している。繰り返しやその単調さを退け、変化や多様であることを好む姿勢が読み取れる。

直角の必要性

「街区」の節の記述を確認すると、街区の角の直角は「第一の必要性 (première nécessité)」[CV-274]によるものとされており、強く勧められていることがわかる。ジャンヌレは、このような街区の角の直角を保ちつつ、「最も有用で最も美しい (les plus utiles et les plus belles)」[CV-274]曲線の道に対応した〈長方形の派生形 (I③)〉も肯定している。また、直角により「最も美しい建築的な眺め (les plus beaux aspects architecturaux)」[CV-271]が街区の外部にもたらされ、直角が隣接すると互いに同じ効果を生み「最も好ましい交差点 (les plus favorables intersections de rues)」[CV-271]になるとされており、直角という造形の視覚的な見え方を賞賛していると言える。直角の性格について、さらにジャンヌレの言説を見てみると、例えば節「道」の交差点にかんする記述において、直角の交差点は最も美しく最もモニュメンタルであるとの賛美が述べられている。

「街区」の節における長方形の派生形への肯定的な評価からは、ジャンヌレの勧めるパルティは規則的な矩形に限定されるわけではなく、曲線を含んだ多様な形が許容されていることがわかる。そして、その際には、モニュメンタルな直角とピクチャレスクな曲線を同時に肯定していると言える。ジャンヌレは規則的な繰り返しを退け、モニュメンタルな幾何学である直角とピクチャレスクな曲線を同時に満たす街区を肯定しているのである。また、モニュメンタルな直角を好んでいる点にル・コルビュジェの思想の萌芽が指摘できる。

このように、視覚的観点の4つの評価軸（庭の眺望の美しさ、眺望の多様性、ファサードが道に面すること、直角の必要性）の関係は並列ではなく、とくに庭の眺望の美しさおよびファサードが道に面することの評価軸は視覚的閉鎖性の希求に基づいたものである。

2-5 小結

本章では「都市の構築」から計20箇所の街区のパルティの記述箇所を取り出し整理することで、計10個の街区のパルティを抽出し、これらの中庭型、連続型、独立型の3つに大別することで、ジャンヌレの街区のパルティを体系的に把握した。街区のパルティの評価軸を明らかにし、実用的観点の3つの評価軸（衛生状態、街区あたりの戸数、ファサードの経済性）と視覚的観点の4つ評価軸（庭の眺望の美しさ、眺望の多様性、ファサードが道に面すること、直角の必要性）に分けられることを示した。実用的観点の評価軸にかんしては、街区の都市構成要素は光や清浄な空気といった良好な衛生状態を提供する庭と建物の関係を中心に論じられており、衛生状態にかんする評価が支配的であった。また視覚的観点の評価軸については各評価軸の関係は同列ではなく偏りがあり、とくに庭の眺望の美しさおよびファサードが道に面することの評価軸は視覚的閉鎖性の希求に基づいたものであることがわかった。ジャンヌレは視覚的閉鎖

性、眺望の多様性というピクチャレスクな性格の原則と、直角の必要性というモニュメンタルな性格の評価軸に基づきパルティを評価していた。ジャンヌレは規則的な矩形が反復される都市デザインを退け、モニュメンタルな幾何学である直角とピクチャレスクな曲線を同時に満たす街区を肯定していた。また、このような直角への好みにル・コルビュジェの思想の萌芽を指摘した。また、視覚的閉鎖性を好む際には、そうでない空間に対して「あいた空間 (vide)」という語を用いて批判を展開していることを指摘した。

なお、ジャンヌレが批判する単調な一列配置の街区は、19世紀のイギリスの労働者住宅と類似している¹⁸。前庭による公衆衛生の改善を肯定しながらも連続する一列配置の単調さを批判するジャンヌレの主張は、産業革命を経て発展した最低限度の生活水準を担保する労働者住宅から芸術的な郊外住宅地へと至る、田園へ脱出する住宅デザインの流れと同様である。これはジャンヌレが、中世へ回帰するようなロマンティックでピクチャレスクな計画として知られる工業村ボーンヴィル、田園郊外ハムステッド、田園都市ヘレラウ¹⁹を挙げ肯定していたことから確認できる。

また、〈六角形〉(I④)の説明時にジャンヌレの言及するアメリカの具体例は、オーガスタス・ブレヴォート・ウッドワード (Augustus Brevoort Woodward, 1774-1827) 知事によるデトロイトの計画 (1807)²⁰を指す可能性がある²¹。20世紀初頭にはチャールズ・ロリンソン・ラム (Charles Rollinson Lamb, 1860-1942) などの複数の計画家によって、芸術的かつ経済的で実用的な土地利用として六角形に基づく街区がデザインされ、1930年頃まで住宅地の長方形のグリッドをおもに代替していた²²。

したがって、ジャンヌレが単調さを批判する一列配置の街区は初期労働者住宅のデザインに、六角形の街区はアメリカで広がった都市美運動における新古典主義的軸線や多角形のデザイン²³に、直角と曲線を両

¹⁸ 産業期を経て、労働者の健康を求め都市を脱出する雇い主が増えたが、初期の労働者住宅は美的関心を向けられなかった (シヨエ, 彦坂訳, 前掲書)。これらについて、例えば、レイモンド・アンウィン (Raymond Unwin, 1863-1940) は排水システムの整備による衛生状態を肯定しながらも、単調な「箱の列」による「生活の楽しさ」の喪失を批判している (Unwin, Raymond: *Town Planning in Practice*, T. F. Unwin in London, 1909.)。一方ジャンヌレも、一列配置の街区において道の騒音や埃から住居を遠ざける庭の存在を肯定しながらも、同一の街区の繰り返しによる単調さを批判している。

¹⁹ 産業革命以降、イギリスでは都市問題が深刻化し、ユートピア思想家が提案したモデルコミュニティを、博愛主義主義的な産業資本家が工業村として実現した。最初の工業化村は住宅密度も高く社宅団地の域を出なかったものの、後にボーンヴィルが建設される頃には公共オープンスペースと十分な広さの庭を有するようになる。一方、田園郊外はおもに19世紀後半以降、鉄道によって田園地帯からの通勤が可能になった中流階級が、職住分離の生活様式に則って郊外に構えた住居である。それに対して田園都市は、労働も含むことで自足的で完結した都市である (橋詰直道: イングランドにおけるガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバープ, 駒沢地理, No.36, pp.55-78, 2000. 3.)。

²⁰ 1805年の大火の後に計画され建設された後、1820年代に棄却されたが、ウッドワードアベニューや一部の街区は現在に残っている。

²¹ シュノールは、ジッテも六角形の街区を痛烈に批判していることや、ドイツの芸術史家アルベルト・エーリヒ・ブリックマン (Albert Erich Brinckmann, 1881-1958) も自身の著作“Platz und Monument (広場とモニュメント)”の中でこの形態について批判的に言及していることを指摘している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 76, note 86)。ブリックマンの著作については、ジャンヌレはとくに「広場」の部分で参照している (Schnoor, 2020, *op. cit.*)。

²² ほかに、ニューヨークの建築家チャールズ・ラムは芸術的かつ経済的な観点から六角形を用い、シャンゼリゼ通りやウンター・デン・リンデンのようなヨーロッパの美しいブルヴァードと健康的な生活が両立される点を主張した。ジャンヌレも「都市の構築」において、シャンゼリゼ通りやウンター・デン・リンデンの延長線上にある戦勝記念塔を肯定的に描写しており、大都市の直線の道と良好な衛生状態の希求はラムと共通である。六角形の計画はアメリカのほかにも、エンジニアのルドルフ・ミュラー (Rudolf Muller, 1853-1926) によるウィーンのシュメルツ地区の計画がある。これは実現されないが20世紀初頭に多く参照され、例えば建築家ウォルター・バーリー・グリフィン (Walter Burley Griffin, 1876-1937) によるキャンペラの計画 (1912) では一部で六角形の街区が実現した (Ben-Joseph, Eran et al.: *Hexagonal Planning in Theory and Practice*, *Journal of Urban Design*, Vol. 5, No. 3, pp.237-265, 2000.)。なおシュノールは、ジャンヌレの街区の形態論の多くはジッテに依らないが、六角形にかんしては例外的にジッテも批判していたこと、そしてブリックマンも六角形について言及していることを指摘している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 76, note 86.)。

²³ コロンブス世界博覧会 (1893) では建築家ダニエル・バーナム (Daniel H. Burnham) らによって計画された会場が高く評価され、都市美運動が全米に広まった。デザインは軸線や古典主義様式に則り、やがて影響は世界に及ぶ。多角

立する長方形の派生形はピクチャレスクな郊外住宅地のデザインに、それぞれ端を発するとも捉えられる。衛生的かつより美的な住宅地への関心は、ジャンヌレが街区の検討時に「居住の楽しみ (*agréments d'habitation*)」[CV-271]を求めていることから確認できる。このようにジャンヌレの街区にかんする思考は、当時の住宅デザインの潮流の中に位置づけられる可能性が示唆される。

形や対角線はキャンベラやニューデリーなど世界の首都において重要な要素となったが、都市美運動はその非実用性と過度な審美的アプローチにより 1910 年までには攻撃されることとなる (Ben-Joseph, *op. cit.*, 長谷川洋, 玉置伸吾: 都市美運動の起源と意義 アメリカ都市美運動に関する研究(1), 福井大学工学部研究報告, 第 39 卷, 第 2 号, pp. 171-187, 1991. 9.)。

第三章 道のパーティ

第三章 道のパーティ

既述のとおり、第二章、第三章、および第四章ではジャンヌレが論じた主要な3つの都市構成要素のパーティに着目して都市形態論を整理する。街区を扱った第二章に引き続き、第三章では、ジャンヌレがパーティを論じるおもな3つの都市構成要素のうち「道」を扱う。「街区」を扱った前章と同様、最初に検討対象を示した後、それら検討対象でどのようなことが論じられているのかその概要を確認する(3-1)。その後、草稿で論じられている道のパーティを抽出し、それらを形態によって分類し直す(3-2)。そして、各タイポロジー形態に対するジャンヌレのコメントにもとづき、それらの評価軸を導出する(3-3)。その後、導出された評価軸相互の関係と思想的背景を考察する(3-4)。

草稿には「街区」や「広場」といった都市構成要素ごとに節が設けられているが、「道」はその中でもジャンヌレのデザイン思想についてとくに議論がなされてきた。たとえば、ブルックスは「道」の節について小冊子の中で最も注意深く執筆された部分であり、ジャンヌレの熱意がよく表れていると評している¹。「都市の構築」の記述はカミロ・ジッテの『広場の造形』²に多くを負っているが、ジャンヌレの同郷人カミーユ・マルタンによる同書の仏語訳³にはマルタンによって「道」の章が付け加えられており、ジャンヌレはこの変更も参照していた可能性がある⁴。とくにジャンヌレは草稿の中で、傾斜の変化に富んだ「ろばの道」を賞賛しているのに対し、ル・コルビュジエは『ユルバニスム』の中で、曲線の「ろばの道」を直線の「人間の道」に對置し退けている⁵。ブルックスも指摘しているように、ろばの道の評価は「都市の構築」と『ユルバニスム』で正反対になっているのである⁶。このように、ジャンヌレの道に対する思想は一般に知られるル・コルビュジエのモダニズムの理念とは異なるようである。また近年では、シュノールが草稿執筆において参照された数々の文献を指摘する中で、ジャンヌレが論じる「ろばの道」はドイツの建築家カール・ヘンリチから影響を受けていることを示唆した⁷。本章では、こういった影響源との関係も含めてジャンヌレのパーティ論を分析する。

3-1 検討対象

道についての記述は「道」の節が中心ではあるが、「批判すべき適用:ラ・ショー＝ド＝フォン」および「街区」の部分で挿話的に述べられている箇所もある。本章ではこの3つの部分を検討対象とする。

¹ Brooks, 1982, *op. cit.*

² Sitte, *op. cit.*. ジッテ, 大石訳, 前掲書。

³ Sitte, Martin, tr.: *op. cit.*

⁴ 本論文の序章で示したとおり、ジャンヌレが「道」の章を参照していたと考えるコリンズらに対し、シュノールはジャンヌレが参照していなかったと主張している。シュノールはジャンヌレの主張がマルタンの「道」の章のものと同様としながらも、ほかの参照源からの援用と比べて、細部は異なっていると指摘している。

⁵ ル・コルビュジエ: ユルバニスム, 樋口清訳, 鹿島出版会, 1967.

⁶ Brooks, 1982, *op. cit.*

⁷ Schnoor, 2020, *op. cit.*

3-1-1 第一部第二章第三節「道」の概要

「道」の節は、導入部および道の種類ごとに分析される8つの項の計9つの部分からなる。項の見出しは基本的にジャンヌレが設けたものであるが、すべてが見出しを設けられ細分化されたわけではなかった。たとえば、導入部には見出しがない。また、6つ目の「道均し」の項にかんしてもジャンヌレは見出しを設けず、次に続く「傾斜した道」の項とは明確に分けていなかったようであるが、エムリーとシュノールはその記述内容の違いによって項を分けられると推察している⁸。また、エムリーとシュノールは、「傾斜した道」の後に8つ目の項を分類しているが、これにかんしても、ジャンヌレは見出しを設けていない。本稿ではこの見出しを、シュノールに倣って「広い大通り」と表記する⁹。以下に各部分の内容を順に示す。

導入部

ジャンヌレは冒頭にて、「道」の部分が最重要であると宣言している。その理由は、都市の印象が道の眺めから生まれるからであると説明されている。

(1) 「退屈な道—おもしろい道—普通の道」

議論の中心は「錯視 (illusions d'optique)」[CV-296]であり、おもしろい道、退屈な道、普通の道について、それぞれ説明される。おもしろい道と退屈な道について、ジャンヌレはヘンリチを引きながら説明している。シュノールによれば、ジャンヌレは「街区」においても参照していたヘンリチの著作『都市計画における実用的な美学への貢献』をここにおいても参照していたようである¹⁰。その後、長い直線の道を対象に、道の長さの錯視現象と、退屈な長い道のりを解決するための解決策が分析される。

(2) 「曲がった道」

曲線街路の形状による印象の違いが述べられる。最初に、道の両側にある壁の湾曲が凹か凸か、次に、壁が平行か否か、つまり道幅が一定であるかどうかによる違いが語られる。

(3) 「交差点」

最初に、空間において、眼で幾何学的図形を測定することはできないという「視覚現象」[CV-304]について簡単に述べられている。その後、交差角が検討される。

(4) 「一時的拡幅や連続的突出のある道」

⁸ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p.101, note 174 を参照。シュノールによれば、これら2つの項はパウル・シュルツェ=ナウムブルクの“Kulturarbeiten (文化作品)”第4巻 Städtebau (都市計画) 第6章 Niveauunterschiede (レベルの違い) におおいに基づいている。Shultze-Naumburg, Paul: *Kulturarbeiten*, Band IV: Städtebau, Munich: Callwey, 1906.

⁹ この項についてエムリーは“Autres types de rues (道の他のタイプ)”と題する一方、シュノールは“The broad boulevard (広い大通り)”としている。Émery, 1992, *op. cit.* Schnoor, 2020, *op. cit.*

¹⁰ Henrici, *op. cit.* Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 85-87 を参照。シュノールは、ヘンリチの『都市計画における実用的な美学への貢献』の中の“Langweilige und kurzweilige Straßen (退屈でおもしろい道)”という章の一部を、ジャンヌレが翻訳して用いていることを指摘した上で、ジャンヌレの草稿では詳細な議論が省かれているため、退屈な道と普通の道の違いが理解し辛くなっていると分析している。

道の拡幅位置ごと、つまり直線街路の場合、曲がった道の場合、セットバック部分 (*décrochement*) の場合の拡幅が順に記述される。その後、車道と歩道の境界線に着目して交通問題を論じた後、街路を閉じる門について説明される。

(5) 「パサージュ」

この項では、前項末尾で述べられた門などを受け、こうした過去の手法を新しい都市に適用するための造形的かつ有用な手法として、パサージュの事例が紹介されている。ただし事例の中には、ガラス屋根のパサージュのほかに、建物下部に通されたいわゆるアーケードの事例も含まれる。

(6) 「道均し」

記述内容は、おもに画地計画にかんするものである。

(7) 「傾斜した道」

冒頭は、曲がりくねりながら坂道を上るろばの様子が描写される。その後、道の傾斜が途中で変化する場合や、道が分岐する場合などが分析される。

(8) 「広い大通り」

この項では、都市計画において土地の起伏を考慮することの重要性が主張された後、ピクチャレスクな都市デザインとモニュメンタルな都市デザインについて検討されている。ジャンヌレは初等幾何学を批判しピクチャレスクの支持を示した後、唐突に直線への賛美を述べている。

3-1-2 「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の概要

本研究の前章でも示したとおり、この部分では、ジャンヌレの故郷ラ・ショー＝ド＝フォンの、地形を考慮せずに直線で構成された、「市松模様 (*damier*)」[CV-504]のような幾何学的形態の都市計画と、それをもたらした行政が、道や広場などの実例を通して批判される。道にかんしては、ジャンヌレは次期拡張計画で道がさらに延長される可能性を指摘し、何本かの道について、延長後の予定長さと現在の長さ、図面での形状を記録し一覧にしている。これらの道はほぼ全て直線である。

前章までと同様、本章においても、シュノールがラ・ショー＝ド＝フォン市の図書館のコレクションから収録した 1910 年頃の写真や、ジャンヌレがラ・ショー＝ド＝フォンの地図上のどの位置を示していたのかを推察したエムリーの分析¹¹や参考にしながら、1908 年のラ・ショー＝ド＝フォンの地図 (Fig. 2.1.1)¹²を精査しジャンヌレの意図を確認する。この部分で論じられている道の事例は以下のように大別できる。行政によって斜面に設けられた直線街路、それに対置される過去に斜面に設けられた曲線街路、そして東西方向の街路、それに直交する南北方向の斜面の街路である。

¹¹ Émery, 1992, *op. cit.*

¹² La Chaux-de-Fonds, *op. cit.*

3-1-3 第一部第二章第二節「街区」の概要

「街区」の節の概要は本研究の第二章で示したとおりである。本研究の第二章で示したとおり、この「街区」の節の途中でパサージュを有する街区について少々語られている。ただしその記述はわずか2文ほどであり、また、特定の都市を指したものではないように窺われる。

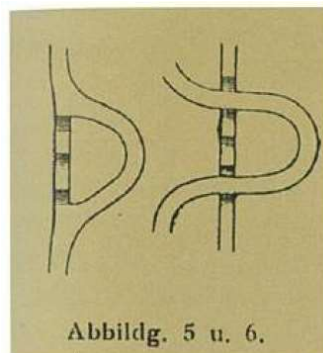
3-2 パルティの抽出と類型化

草稿では以上のように道が論じられてきた。ジャンヌレは草稿の中でさまざまな道の形態について説明しており、「パルティ」の語を用いずに型を記した箇所も含めると、パルティの記述箇所の総数は88ある¹³。この道のパルティを整理・分類した類型をTable 3.2.1に示す。同表の36個の道のパルティは、その対象範囲に着目すると以下の4つに大別できる。対象の道が一本の場合はI 単独街路に、道が二本以上に増え交わるとII 交差点に、交差点の数が増大すると、III 交差点の反復に拡大され、これが繰り返されるとIV 道のネットワークに分類できる。

計36個の同表の類型のうち、19の類型(I③④⑥⑦⑪⑫⑬⑭⑮⑰⑱⑳㉑、II⑤⑥、III①②③④、IV③)はジャンヌレのスケッチに基づいており、15の類型(I①②⑤⑧⑨⑩⑲⑳㉒㉓、II①②③④、III⑤、IV②)は草稿の記述を筆者が図化した。その他2の類型(I⑯、IV①)はエムリーが収録した図版¹⁴に基づいている。以下、

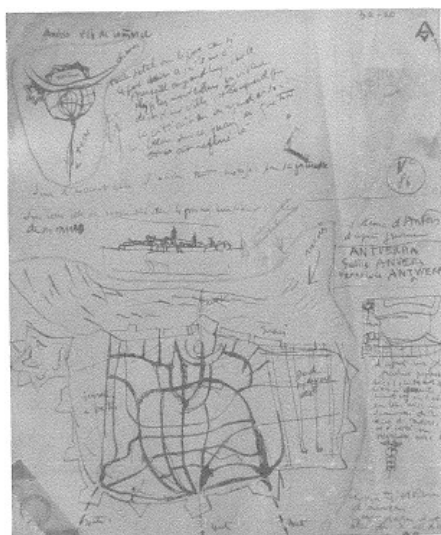
¹³ 「道」の節の中の「傾斜した道」の末尾 ([CV-321-322]) で説明されている階段の配置方法については具体的な形態が不明瞭であることから対象から除外した。シュノールはこの部分でジャンヌレがヘンリチの描いた図 (Appendix Fig. 3.2.1) を用いようと思図していたのではないかと推察しているが (Schnoor, *op. cit.*, 2020, pp. 106-108)、ジャンヌレの文章は道の形態が読み取りづらく、ヘンリチの同図に描かれているようなヘアピンカーブの形状が描写されているわけではない。ジャンヌレは階段の配置の意義を説いている。

¹⁴ Émery, 1992, *op. cit.*, p. 205, Fig. 13 および p. 209, Fig. 27. 後者の図版は17世紀のアントワープとして用いられている (Appendix Fig. 3.2.2)。この図版について、シュノールはジャンヌレが1915年の国立図書館での研究の間に模写したものであると指摘し、1910年に描かれたアントワープのプランは存在しなかったとしている。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 85, note 123. ただし「蛇行した曲線 (ligne courbe et sinueuse)」 [CV-293] が用いられているというジャンヌレの描写や、Appendix Fig. 3.2.2 と17世紀のアントワープの平面 (Appendix Fig. 3.2.3) とはおおむね形態が対応していることから、エムリーが掲載した図版 (Appendix Fig. 3.2.2) は草稿で意図されている17世紀のアントワープの形態とおおむね一致していると判断し、本研究ではこのエムリーの図版を参照して類型の図を作成した。

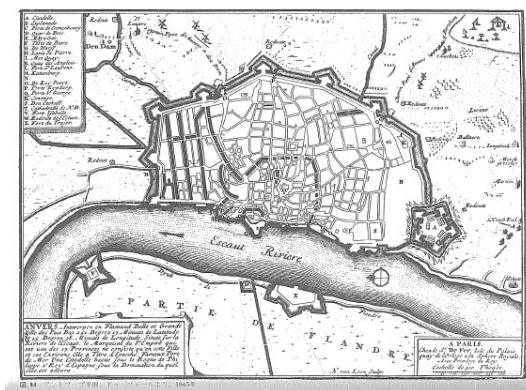


Appendix Fig.3.2.1 Diagrams drawn by Henrici [CV-323] (Henrici, *Beiträge*, S. 102, Abb. 5-6.)

各類型に対するジャンヌレの評価を整理する。



Appendix Fig. 3.2.2 Antwerp in the 17th century
(Émery, 1992, *op. cit.*, p. 209)



Appendix Fig. 3.2.3 Antwerp in 1645
(De Fer, *Les Forces de l'Europe ou descriptions des principales villes avec leurs fortifications*,
in アルガン, ジュウリオ・C.: ルネサンス都市, 堀池秀人, 中村研一訳, 井上書院, 1983, p. 84)

Table 3.2.1 Parti of streets

I Single street									
Plan							Section		
Straight		Curve		Saw-toothed	Enlargement both sides		-		
① Straight	② Long with points	③ Parallel frontages beside a street	④ Not parallel frontages beside a street	⑤ Saw-toothed roadway boundary	⑥ Enlargement with straight lines	⑦ Enlargement with curved lines	⑧ Varied slope	⑨ Convex slope	⑩ Concave slope

I Single street										
Building and street										
Planar shape - Straight		Planar shape - Curve				Planar shape - Saw-toothed	Planar shape - Bend	Plan layout of street and building		
⑪ Enlargement of one side with straight line	⑫ Enlargement of one side with curved line	⑬ Gate on the axis	⑭ Enlargement at concave side	⑮ Disposition at enlargement at concave side	⑯ Enlargement at convex side	⑰ Sawtooth shaped enlargement	⑱ Bent enlargement	⑲ Buildings at the both ends of the street	⑳ One building on-axis and the other off-axis	

I Single Street		II Intersection					
Building and street		Angle				Y-jnc.	
Covered street		-	-	-	-	-	-
⑴ Passageway	⑵ Arcade	① Greater than right angle	② Slightly greater than right angle	③ Right angle	④ Smaller than right angle	⑤ Symmetry	⑥ Asymmetry

III Repetition of intersections					IV Network of roads and streets		
-					Curve		Straight
① Crossroads	② Enlargements	③ Tree-planted enlargements	④ T-jnc.	⑤ Crossroads with building at the end	① Network of curves	② Ring boulevard encircling the network	③ Chequerboard grid

I 単独街路

単独街路のパーティ (Table 3.2.1 I、以下アルファベットと番号のみ示す) の総数は 22 であるが、これらは 7 の平面形状のパーティ、3 の起伏のパーティ、12 の道と建物の関係のパーティに分類できる。

○平面形状のパーティ

これは街路形状に応じて、直線街路、曲線街路、鋸状街路、両側拡幅街路に細分できる。

直線街路の中には、たんなる〈直線街路〉(I①)と〈区切り点のある街路〉(I②)がある。後者は草稿中で図示されていないが、次のように説明されている。この街路の側面には「区切りとして機能し、距離の正確な評価を与えてくれる 1 つ、2 つの点 (points)」[CV-297]が存在することによって、街路長さが実際よりも短く見え「退屈な性格」[CV-297]がなくなる。この「点」が具体的にどのようなものなのかは示されていない。また、この「点」によって街路長さを正確に把握できると説明されているが、街路長さを短く錯視すると述べておられ、理論はいささか理解しづらい。草稿ではこうした錯覚について繰り返し論じられており、ジャンヌレはおおむね、街路が永遠に続くかのように錯覚することで歩行者が感じる退屈さや疲労感を批判している。つまり、〈区切り点のある街路〉では区切り点が街路長さの把握に寄与することで、長い街路の退屈さが避けられることが肯定されているのである。〈直線街路〉のパーティも道のりが長い場合に批判されている。また、このパーティについては、行政が作った幹線道路についての記述の中で、交通量に対して道幅が狭い場合や道幅が「過度に広く、過度に開いて」[CV-291]いる場合にも批判されている。ほかに、道幅や勾配が一定であることによる単調さも批判されている。ただし草稿中には、〈直線街路〉であっても街路の規模が身体に即しているかどうかによって異なる印象が見出され、それぞれ賞賛されている箇所もある。その印象とは「荘厳な印象；美の印象 (l'impression de grandiose; l'impression de beauté)」[CV-327]である。前者は直線が例外的に用いられることで街路が目立つときや、街路の規模が並外れて大きいときに生じるとされ、実例としてパリのシャンゼリゼ通りなどが描写されている。一方後者は、街路が「身体性の感覚 (le sentiment de corporalité)」[CV-328]を明確にするとき、すなわち身体感覚に即した控えめな規模のときに生まれる。また、「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分では、かつて農民によって地面の起伏を考慮して設けられた道に対置させる形で、行政が急勾配の斜面に設けた直線街路が批判的に記述されている。

曲線街路には道幅が一定か否かによる区別がある。つまり、「道の側壁 (les parois latérales d'une rue)」[CV-300]すなわち沿道建物のファサードが平行か否かによって、〈側壁が平行な道〉(I③)と〈側壁が平行でない道〉(I④)に区別できる。草稿を通して、曲線街路では視線が抜けず眺望が閉じていることが肯定されているが、ここでの側壁の比較においては、〈側壁が平行な道〉では「通行人はあまり関心を持たない状態のままになる」[CV-300]ことが否定的に捉えられている。つまり、通行人が退屈するような変化の少ない一定の道幅が批判されている。それに対し、〈側壁が平行でない道〉では道の眺望の豊かさが肯定されている。ジャンヌレはこうした両者の印象の違いについて Fig. 3.2.1 を用いて語っている。とくに同図 c、d の〈側壁が平行でない道〉にかんしては次のように肯定的に捉えている。「ついに、何らかものの上で目は休息できるようになるし (l'œil enfin aura quelque chose sur quoi se reposer) …中略…目はファサードの建築のモチーフに関心を持つだろう」[CV-300]。このように、ジャンヌレは通行人の視線が壁に留まることを目にとつての「休息」と捉えて賞賛している。

鋸状街路とは、〈鋸状歩車道境界の街路〉(I⑤)である。境界形状は「鋸の歯 (dents de scie)」[CV-310]に例えられており、車道の幅は拡幅と縮小を交互に繰り返す。これは、「車道の幅の変化における唐突な跳躍 (les brusques sauts)」[CV-310]と表現され、車の往来を妨害し「歩道の線への数々の不適切な接触」[CV-310]をもたらす。このように、ジャンヌレは車がスムーズに往来できない鋸状形態を批判し、ここでは直線の形態を比較的肯定的に捉えている。歩道と車道の接触長さを短くし、歩車分離を進めようとする意図が窺える¹⁵。

両側拡幅街路の中には、〈直線で拡幅した街路〉(I⑥)と〈曲線で拡幅した街路〉(I⑦)がある。これらについて、ジャンヌレは Fig. 3.2.2 を用いて説明している。同図 c の〈直線で拡幅した街路〉は否定的に捉えられているのに対し、同図 d の〈曲線で拡幅した街路〉では、「巨大建物の崇高な眺めや美しい集まり」[CV-305]が賞賛されている。曲線で拡幅を行うと、道幅が徐々に変化するので沿道の家並みが連続して見えるのに対し、直線で拡幅すると、道幅は急激に変化しその部分で家並みは断絶する。ジャンヌレは〈曲線で拡幅した街路〉の家並みの連続性を賞賛し、〈直線で拡幅した街路〉の不連続で途切れた家並みを批判していると言える¹⁶。

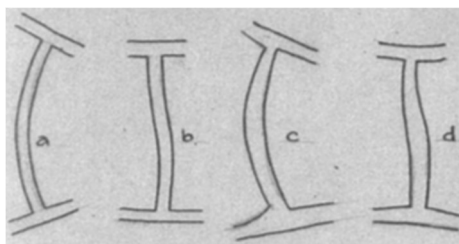


Fig. 3.2.1 Curved streets [CV-301] (B2-20-308 FLC)

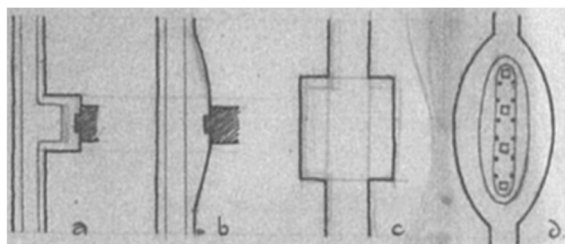


Fig. 3.2.2 Enlargement of streets [CV-304] (B2-20-317 FLC)

○起伏のパーティ

これは起伏の形状によって3つに細分できる。一定勾配ではなく〈勾配が変化する断面〉(I⑧)、上り勾配の後に下り勾配に変化する〈凸状勾配の断面〉(I⑨)、下り勾配の後に上り勾配に変化する〈凹状勾配の断面〉(I⑩)である。〈勾配が変化する断面〉については、ジャンヌレはろばの例えを用いて説明している。

¹⁵ ジャンヌレは以下のように述べている「歩道の線、これは、速度の速い車の流動的で危険な領域と、歩行者の静かな領域との境界である；これはいわば、波に取り囲まれた防波堤の欄干である。詩的な感覚 (un sentiment poétique) はしばしばこの線に留まる」[CV-310]。

¹⁶ ただしジャンヌレがこの実例として挙げるミュンヘンのプロムナーデープラッツは、やや曲線と直線の拡幅が入り混じっているようにも見える。とはいえ規則的な矩形による拡幅ではない。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 306, Abb., 20.

荷物を運搬するロバは休息を必要としている。そのため、休みなく上り続けるような一定勾配の道ではなく、勾配の緩急や平坦な箇所のある「自然な斜面 (une pente normale)」[CV-320]が好ましい。そしてこれは人間にとっても好ましく、楽しいものとなる¹⁷。また、ラ・ショー＝ド＝フォンの記述の中では、かつて、市松模様状の計画の前に可能であった起伏ある地形による多様で素晴らしい解決策として曲線の道が挙げられており、これも〈勾配が変化する断面〉とみなせる。この事例はシャリエール通り (Fig. 3.2.3) であると思われ¹⁸、素晴らしくうまく線を引かれていると賞賛されている。

〈凸状勾配の断面〉の断面形状は「《こぶ状》(un «dos d'âne»)」[CV-297]と表現されている。このパルティでは、「こぶ」にあたる斜面の頂点に達したときに初めて、上り道では見えなかった下りの道のりが視認される。ジャンヌレはこのように、同様の道のりが頂の先に再度繰り返される退屈さと、頂における開いた眺望とを批判している。これに対置される〈凹状勾配の断面〉では、「より大きな道の表面が見える」[CV-299]こと、つまり終端までの道のりとすべての道路表面が視認でき、眺望が閉じていることが肯定されている。



Fig. 3.2.3 Les Rues de La Chaux-de-Fonds

(La Chaux-de-Fonds, *Plan de La Chaux-de-Fonds*, supplemented by author)

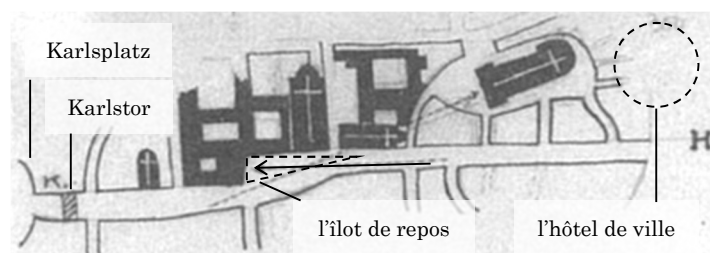


Fig. 3.2.4 Neuhauser strasse [CV-308] (B2-20-300 FLC, supplemented by author)

¹⁷ Sitte, Camillo, Martin, Camille, tr., *op. cit.*, , p. 105 を参照。シュノールは、ヘンリチも荷物を運搬する動物に関心をもち、疲労をもたらす一定勾配の上り道を批判しているとして、ジャンヌレへの影響を示唆している。Henrici, *op. cit.*

¹⁸ シュノールはバランス通りからヴェルソワ通りに向かって撮影された写真を収録しているが、これはシャリエール通りと繋がっている。本研究では山側にあたるシャリエール通りと表記する。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 507, Abb., 102.

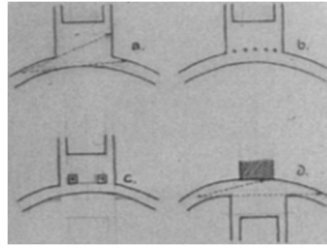


Fig. 3.2.5 Enlargement at concave or convex side [CV-308] (B2-20-309)

○道と建物の関係のパーティ

これはさらに、平面形状のパーティ（直線街路、曲線街路、鋸状街路、屈折街路）、街路と建物の平面配置のパーティ、そして屋根付街路のパーティに細分できる。なお、このうち屋根付街路は断面形状に依存する点で分類の観点が異なる。

平面形状による分類のうち、直線街路には、対になっている〈直線による片側拡幅街路〉(I⑪)と〈曲線による片側拡幅街路〉(I⑫)、そして道の〈軸上に門を設けた街路〉(I⑬)がある。街路の拡幅方法については、ジャンヌレは Fig. 3.2.2 を用いて説明している。同図 a の〈直線による片側拡幅街路〉については「平凡な効果」[CV-305]が生まれることを否定的に捉え、同図 b の〈曲線による片側拡幅街路〉のほうを好んでいる。それは、後者のほうが「視線に対して家の表面をたくさん見せてくれる (*offre aux regards toute l'ample surface de ses maisons*)」[CV-305]から、つまり沿道の建物ファサードが断絶せず連続して見え、視覚的な表面積が大きくなるからである。〈軸上に門を設けた街路〉は、ミュンヘンのノイハウザー通りを例に説明されている。この通りは門が設置されていることで、「広場の軸にある大きな幹線道路によるくぼみ (*la trouée*) の好ましくない効果を避ける」[CV-311]ことができる。この通りが描かれている Fig. 3.2.4 を見てみると、同図中央の屈曲部分より左側において、街路形状はおおむね直線を維持してカールス広場へと通じている。その広場の手前にはカールス門が設置され、広場に向かう直線街路の開いた眺望を閉じていることがわかる。つまりこのパーティでは、門によって街路が区切られ眺望が閉じられることが肯定されている。ジャンヌレは門の事例をいくつか紹介した後、次のように説明している。「こういった方法を用いることで、まっすぐな道は醜さや退屈といった性格を失う；第一の必須条件は、道のりをわずかな長さの区間に区切ること (*de recouper leur parcours en des tronçons de faible longueur*) である。」[CV-312]

曲線形状の街路には、〈凹側の側壁を拡幅しくぼみを設けた街路〉(I⑭)、その凹側のくぼみに〈モニュメントや樹木を設けた街路〉(I⑮)、〈凸側の側壁を拡幅しくぼみを設けた街路〉(I⑯)がある。ジャンヌレは、たとえば Fig. 3.2.5 を用いて説明している。同図左上 a の〈凹側の側壁を拡幅しくぼみを設けた街路〉では、「くぼみ」[CV-306]によってもたらされた開いた眺望を批判し、そのくぼみを閉じるための解決策として、同図右上 b および左下 c の〈モニュメントや樹木を設けた街路〉を提案している。ただし、この解決策では費用がかかることが否定的に捉えられている。一方、同図右下 d の〈凸側の側壁を拡幅しくぼみを設けた街路〉では、くぼみ部分から見た建物（同図 d 中斜線）の眺めが讃えられている。そこでは、道路を往来する交通から守られた安らかな雰囲気の中で、人は連続した建物ファサードを見ることが

できる。このことは次のように表現されている。「そのときファサードの線が途切れるようには見えないし (La ligne des façades ne paraît dès lors pas interrompue)、そのすばらしい建築によって道の拡幅を正当化した建物は、休みながら (dans le repos) 讚えられるだろう」[CV-306-307]。こうした賞賛も、(曲線で拡幅した街路) (I⑦) の場合と同様に家並みの連続性を讚えるものであり、そのファサードに視線が留まり眺望が閉じられた状態を指したものである。

鋸状街路に分類される(鋸状に拡幅された歩道) (I⑰) は、建物が雁行配置され歩道の形状が鋸状になっている。これは「セットバック部分の拡幅」[CV-309]と表現されている。当代においてはこれが商店建築に用いられると利点があるという。ジャンヌレによれば、商店同士はショーウィンドウの華やかさで競い合っているため、鋸状のデザインを用いれば、その分ショーウィンドウの表面積が2倍になるので有利である。そして歩道を歩く客は、「交通を妨害することなく」[CV-309] ショーウィンドウを眺めることができる。ジャンヌレは、鋸状の形状によって歩道面積が大きくなることで、歩車道が十分に分離される様子を肯定的に捉えているようである。

屈折街路に分けられる(拡幅した屈折街路) (I⑱) は、道幅が大きくなった部分に建物がせり出すことで屈曲した形状になっている。ジャンヌレは Fig. 3.2.6a および b を用いて説明している。ジャンヌレは、凸状に起伏した道の頂点における「大きくあいた空間のような印象 (l'impression d'un grand vide)」[CV-320]を批判しており、同図 a および b はその解決策にあたる。これらのパルティでは斜面の頂点で道が拡幅され、せり出した建物がその頂点の眺望を閉じている。このファサード部分は、「好ましくない頂から気をそらせてくれるであろう、目を休息させる表面 (surface de repos pour les yeux)」[CV-320]と表現され、美しい解決策として賞賛されている。同様に、Fig. 3.2.4 のノイハウザー通りも屈折した街路形態をしている。屈折部分については Fig. 3.2.6a および b のような起伏はないが、同様の眺望の閉鎖性が次のように説明されている。道幅は、Fig. 3.2.4 中左方向に向かって「気づかないくらい少しずつ幅が大きくなって、最大値に達すると突然最初の幅に戻る」[CV-307]。つまり、道幅が徐々に広がってゆきやがて最大幅になると、沿道建物の壁が街路上にせり出すことによって道幅は急激に狭くなる。すると、「拡幅と突然の縮小によって道の過度な長さが区切られる」[CV-307]。つまり、道幅が急激に狭くなると、道が屈曲して区切られたような格好となる。そして「休息の島 (l'îlot de repos)」[CV-307] (同図中破線三角部分) と表現されるくぼみが生じる。ジャンヌレは同図の中で、道にせり出した壁へ向かって矢印を描き (同図加筆部分)、この壁を「力強い視像 (une image de force)」[CV-307]と表現している。そして、市役所 (同図右上) から休息の島へ向かってやって来る通行人にとっては、この壁によって道が閉じられて見えることを肯定的に記している。また、「休息の島」は街路を往来する激しい交通から守られており、その場所で辻馬車の御者が馬を休める様子が肯定的に描写されている。

街路と建物の平面配置による分類、つまりアイストップとなる建物と街路の位置関係のパルティには、(両端に建物がある街路) (I⑲) と (一端の建物が軸外の街路) (I⑳) がある。(両端に建物がある街路) は「平凡な印象 (une impression de banalité)」[CV-312]、つまり対称的な建物配置の単調さを批判されているのに対し¹⁹、(一端の建物が軸外の街路) ではそうした印象が避けられるので肯定されている。

¹⁹ こうした(両端に建物がある街路)の一例には「公的な誇示の道 (la rue officielle, de parade)」[CV-324]という表現も見られる。「誇示の道 (rue de parade)」[CV-383]という表現は「広場」の節においてシャンゼリゼ通りとエトワール広場が論じられている際にも用いられている。これは広場を部屋に例える際の誇示の部屋 (la salle de parade) とい

屋根付街路には、〈パサージュ〉(I②)と〈アーケード〉(I②)がある。前者にかんしては、パサージュにおいて車の通行が禁じられているので、とくに「複数のマッサが連続する場所でこの方法を繰り返すことで、パサージュがもたらす交通の改良はより完全なものとなる」[CV-313]。つまり、複数のパサージュを連続して設けることにより歩車分離が進むことが肯定されている。また、本研究の第二章で簡単に示したとおり、草稿の「道」に先んじた「街区」の節では、パサージュについても短く述べられていた。その記述から具体的な形態は読み取り辛いですが、パサージュが街区の中庭と前面道路を結んでいるようであり、I②に示すような形態を指すと推察できる²⁰。これは公共領域として機能しており、無味乾燥な前面道路を切ることで、交通を容易にすると同時に人々に楽しみを与えているとして賞賛されている。〈アーケード〉については「道の過度な長さを区切ること」[CV-314]が肯定的に捉えられている。これは、アーチを支える柱が、〈区切り点のある街路〉(I②)における側面の「点」と同様に機能し、アーケードの眺望が短く区切られて見えることを指すと思われる。

II 交差点

6つの交差点のパーティは、交差角にかんする4つのパーティと、Y字路の形状にかんする2つのパーティに分類できる。つまり交差点の分析には、交差点全体の形状にかんする観点と、とりわけ交差角に限った観点がある。

○交差角

交差角が大きい順に、〈直角より大きい角度〉(II①)、〈直角よりわずかに大きい角度〉(II②)、〈直角〉(II③)、〈鋭角〉(II④)に細分できる。このうち〈鋭角〉については「永遠に醜い」[CV-304]と述べられ、強く批判されている。またラ・ショー＝ド＝フォン²⁰の事例研究では、〈鋭角〉に相当するレオポルド＝ロベール通りの終端のY字路を最も醜いと批判している。一方〈直角より大きい角度〉のパーティについては、「目に見落とされたり—あるいはあまりショックを与えなかつたりする (lui [引用者注: à l'œil] échappe—ou le choque moins)」[CV-304]ことが肯定的に評されている。つまり、交差角が90度を超えるか否かによって人が視認する際に衝撃的な印象を受けるかどうかが変わる。一方〈直角〉は「最も美しく最もモニュメンタル」[CV-304]であると賞賛され、また〈直角よりわずかに大きい角度〉も「ひじょうに造形的」[CV-304]であると讃えられている。このように、ジャンヌレはとりわけ直角を賛美し、直角からの位相差によって、視認する人が受ける印象をそれぞれ分析している。

○Y字路

Y字路の形状の分析は、〈左右対称なY字路〉(II⑤)と〈左右非対称なY字路〉(II⑥)に細分できる。ジャンヌレはFig. 3.2.6を用いて起伏した街路を分析する際、〈左右対称なY字路〉については「冷淡に左右対称な線」[CV-321]と批判的に表現している。これは、平面形状の対称性を持つ単調さや素っ気なさを否定しているようである。〈左右非対称なY字路〉は、同図のうちdを用いて説明されている。このパーティは交点で道幅が拡幅されており、拡幅によって生じた面によって道の眺望を閉じることができるので肯定されている。

う表現に対応しているようである。

²⁰ エムリーは自らが推察して描いたのであろう図を掲載している。Émery, 1992, *op. cit.*, p. 202, Fig. 6.

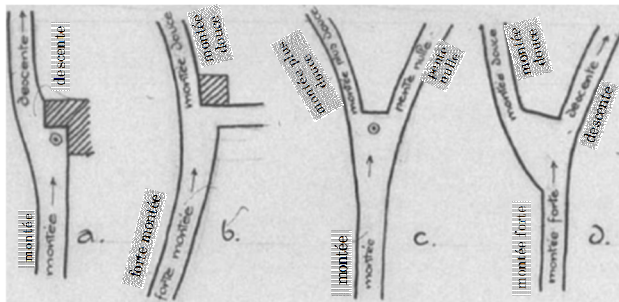


Fig. 3.2.6 Enlargement at slope [CV-322] (B2-20-316 FLC) (supplemented by author)

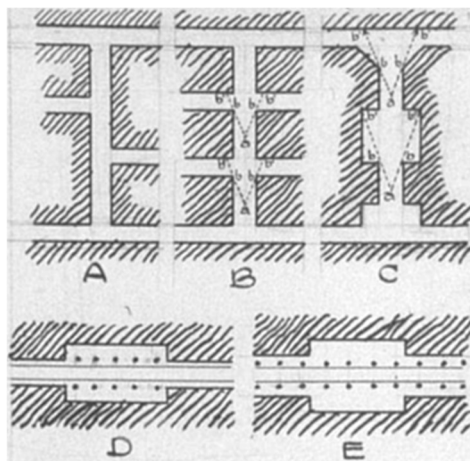


Fig. 3.2.7 Intersections and enlargements of streets [CV-298] (B2-20-314 FLC)

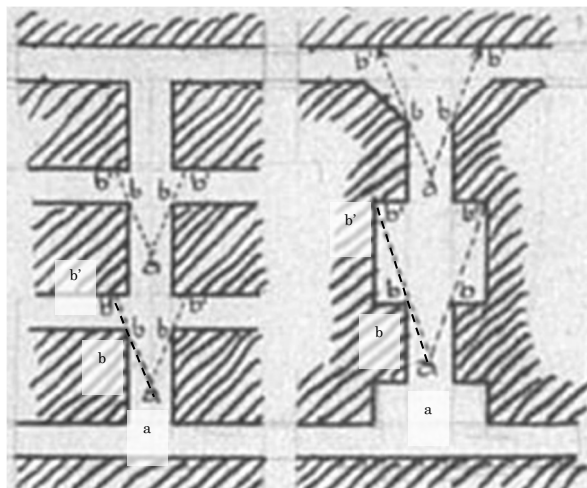


Fig. 3.2.8 Details of diagrams [CV-298] (B2-20-314 FLC) (supplemented by author)

III 交差点の反復

交差点の反復のパーティには、〈十字路が反復される街路〉(III①)、その変形である〈拡幅が反復される街路〉(III②)、その解決策にあたる〈拡幅部分に植樹した街路〉(III③)、〈T字路が反復される街路〉(III④)、そして街路終端にかんする視点の加わった〈先端に建物のある十字路が反復される街路〉(III⑤)がある。〈T字路が反復される街路〉では、「道の側面で中断することなく家の線が続く (*la ligne des maisons se poursuit sans interruption d'un côté de la rue*)」[CV-305]こと、つまり沿道の家並みが連続して見えることが肯定されている。この現象は〈十字路が反復される街路〉でも同様に生じると推察される。ただし、これら〈十字路が反復される街路〉と〈拡幅が反復される街路〉では、進行方向に対し直交する街路に視線が抜けるので、街路を進んでもさらに街路が続いて見えることによる疲労感が批判されている。これは Fig. 3.2.7 を用いて次のように説明されている²¹。なお、同図中 B および C の拡大図を Fig. 3.2.8 に示す。点 a を出発した歩行者からは点 b' が点 b に重なって見えるので、区間 bb' は点 b に到達したときに初めて認識される。したがって歩行者は、区間 bb' の分だけ街路長さを予想外に長く感じることになり、「こうした勘違いが同じ道で 10 回 20 回と繰り返されると、その道は疲れさせるようなものとなる」[CV-298]。つまり同一街路においてこうした交差点や拡幅が複数設けられると、歩行者は距離の誤認を繰り返し、その結果退屈し疲労してしまう²²。以上のように、ジャンヌレは側壁の連続性は肯定しながらも、街路の直交方向に視線が抜け眺望が開いていることは否定している。〈十字路が反復される街路〉の形態はラ・ショー＝ド＝フォンの事例研究においても見られ、たとえばタンブル＝アルマン通り (Fig. 3.2.3) をはじめとする市の中心部を東西方向に走る直線街路も、その道幅の単調さや開いた眺望が批判されている。同様の形態であるレオポルド＝ロベール通りは、2 枚の平行な壁が長く続くことによる「永遠に逃げていく眺望 (*l'éternelle fuite en perspective*)」[CV-503]が否定的に捉えられ、やはり閉じずに開いた眺望が批判されている。つまりこうした〈十字路が反復される街路〉や〈拡幅が反復される街路〉といった形態においてジャンヌレは進行方向に対しても直交方向に対しても視線の抜けを批判し、沿道の家並みの連続性にかんしてのみ肯定していると言える。なお、ラ・ショー＝ド＝フォンの東西方向の直線街路については、風が最も激しく吹く方向が東西方向であるために、夏にはフェーンによって埃の渦が舞い、冬には風で雪が吹き付けることが批判されている。また、これら東西方向の直線街路について建物の位置関係を考慮する場合は、ジャンヌレはこれらを実質〈拡幅が反復される街路〉のように捉えて、街路からセットバックして建つ建物を批判的に捉えている。ジャンヌレはセール通り、パーク通り、ペ通り、ニューマ＝ドゥロ通り、プログレ通り (Fig. 3.2.3)、タンブル＝アルマン通り (同図)、ノール通りといった東西方向の道を例示し、沿道に建ち並ぶ多くの公共建物が道の眺めを美しくはしないとして批判している²³。こうした建物は道から「見えない (*ne se voit pas*)」[CV-500]、「完全に見えない (*absolument invisibles*)」といったように表

²¹ ジャンヌレは「l'image a de la fig. LVII (Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 305) を指してこうした説明をしている。シュノールによれば、ジャンヌレは草稿中で LVII という記号を用いて Fig. 3.2.7 を指している。本研究では、ジャンヌレの指す「l'image a de la fig. LVII」は同図中大文字 A を指すと判断した。

²² ジャンヌレはヘンリチの理論に基づいて錯視の議論を展開し、ダイアグラムも流用している。詳しくは Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp.86-87, note 132 を参照。

²³ ジャンヌレは次のように述べている。「多くの公共建築物からなるが、それらはいずれもいっこうに眺めの美化に役立っていない。(Beaucoup comportent des édifices publics, mais aucune de ceux-ci n'entre un instant dans l'embellissement des aspects.)」[CV-500]ほかに、名称は挙げられていないものの、レオポルド＝ロベール通りと思われる道も例示されている。

現されており²⁴、ジャンヌレは建物がセットバックすることで道と建物間に「あいた空間」が生じ沿道の眺望が開くことを批判しているように理解できる²⁵。

〈拡幅部分に植樹した街路〉は、Fig. 3.2.7において解決策の1つとして挙げられている。植樹は家並みの延長線上に施されており、拡幅部分で断絶する家並みに、植樹による疑似的な表面によって連続性をもたらそうとする意図が読み取れる。ただしこれは、植樹に費用がかかることを批判されている。そのため、こうした改善策よりも、道の表面を凹状にくぼませたり側壁を湾曲させたりするほうが、費用をかけることなく「大きな魅力がもたらされる」[CV-300]として、より好まれている。また、一見、ジャンヌレの批判する直交方向の視線の抜けは〈T字路が反復される街路〉でも同様に生じると思われるが、ジャンヌレは植樹や湾曲といった提案とともにこのパーティを列挙しており、十字路に比べて視線の抜けが少なくなる解決策の1つとして意図しているようである。ジャンヌレはこのように、交差点や拡幅による家並みの断絶部分へと抜ける視線が遮られているかどうか、つまり側壁が視覚的に連続し眺望が閉じられているかどうか、そして退屈と疲労が避けられるかどうかを評価している。

〈先端に建物のある十字路が反復される街路〉については、ラ・ショー＝ド＝フォンの事例研究で挙げられている東西方向の道に直交する斜面の道が相当する。事例には、コレージュプリメール通り、ブルミエール＝マルス通りのほか、名称の示されない道が3か所挙げられている²⁶。こうした道の眺望は、市松模様状に細かく区切られたファサードの連続となり醜いと批判されており、ここにおいてもやはりジャンヌレは側壁の連続性を求めていることがわかる。ただし、たとえばコレージュプリメール通り (Fig. 3.2.3) のように、建物で閉じられた道の先端は賞賛されている。

IV 道のネットワーク

道のネットワークは、曲線で構成されるものと直線で構成されるものに細分できる。前者は〈曲線の道のネットワーク〉(IV①) およびそれを取り囲む〈輪の形の道〉(IV②) からなり、後者は〈碁盤の目街路〉(IV③) である。このうち〈輪の形の道〉とは、中世に道として機能するようになった昔の城壁であるという。〈曲線の道のネットワーク〉と〈輪の形の道〉はともに、道における多様な眺望が肯定されている。〈曲線の道のネットワーク〉については、たとえば17世紀のアントワープを例に説明されている。ここでは道が曲がり沿道ファサードが部屋のように閉じることで、強風が通り抜けづらくなることや、眺望が変化に富んでいることが肯定されている。ジャンヌレによれば、「都市は生きた有機体 (*un organisme vivant*) であり、道はその太い動脈 (*grosses artères*) であると考えられていた」[CV-294]。そして、そうした主要な道や無数の小道などが最短距離かつ自然に都市の主要な各点を結ぶ状態を、実用的で美しい解決策として賞賛している。太い幹線道路の間を細い道が縫う様子は「ネットワーク (*un réseau*)」[CV-291]と表

²⁴ ジャンヌレはたとえば次のように述べている。「セール通りにおいては、市町村の役所は目立たない。(Fig A (rue de la Serre) à gauche l'hôtel communal ne se voit pas.)」[CV-500]「シナゴグと連邦の検査所は、完全に人目を避けている。(la synagogue [sic] et le Contrôle Fédéral, sont absolument invisibles.)」[CV-500]

²⁵ たとえばアンデパンダン教会堂は「どの道からも見えない (*ne se voit d'aucune rue*)」[CV-510]ことが否定的に捉えられている。Fig. 3.2.3を確認すると教会堂はプログレ通りからもタンブル＝アルマン通りからもセットバックしており、これを指した批判だと理解できる。

²⁶ このうち「図 I」[CV-506]、「図 L」[CV-506]と記されている場所は、エムリーの図版を参考にするとおそらくそれぞれアヴニール通りと現在のコレージュ＝アンデュストリエル通りと推察できる。後者の名称は地図 (*La Chaux-de-Fonds, op. cit.*) 上では異なるように見受けられるが、判読できていない。残りの1か所は草稿では「図 H」[CV-505]と指し示されているが、この場所は確認できない。

現されている。さらにジャンヌレは、農民が斜面に作る田舎道を「生活の線 (les lignes de vie)」 [CV-303] と表現し次のように述べている。「道は、斜面、気候、広げる努力の最小化、そして最速化が課す義務に取り組む最も優れた標準 (la normale la mieux) である」 [CV-303]。つまり、自然発生的な曲線の田舎道は、気候や道を作る労力といったさまざまな条件に対して最適化した形態であり、そういった道では身体の疲労が最小限になることが肯定されていると言える²⁷。

〈碁盤の目街路〉は〈曲線の道のネットワーク〉に対置されるパルティである。ジャンヌレによれば、曲線の道は距離や時間の短さといった実用性と美しさを兼ね備えていたのに対し、「直線の図面は道のりを長くするので適さない」 [CV-293]。しかしながら当代では、古い都市のような曲線の道は時間がかかるとして批判され、直線のほうが時間短縮に役立つと考えられている。こうした当代の人々の心理を、ジャンヌレは碁盤の目状の「(le schema du morcellement dit en damier)」 [CV-291] Fig. 3.2.9 を用いて説明している²⁸。

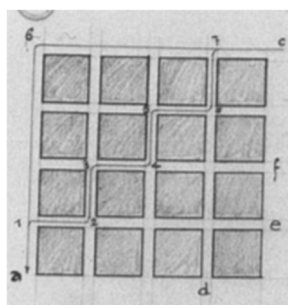


Fig. 3.2.9 Chequerboard grid [CV-292] (B2-20-307 FLC)

3-3 パルティの評価軸

視覚的・身体的観点の評価軸

前節のようにパルティを分類し、その評価を見渡してみると、ジャンヌレのパルティの評価はいくつかの評価軸に基づいて行われていることが窺える。とりわけ目につくのは視覚的な閉鎖性にかんする評価である。ジャンヌレはおおむね街路終端の開いた〈直線街路〉(I①)や頂点での眺めが開いた〈凸状勾配の断面〉(I⑨)よりも、道の表面積が大きく見え眺望が閉じて見えるような、曲線の〈側壁が平行でない道〉(I④)や〈凹状勾配の断面〉(I⑩)を好んでいた。また拡幅街路では、沿道の家並みが途切れて見える〈直線で拡幅した街路〉(I⑥)よりも、家並みが連続して見える〈曲線で拡幅した街路〉(I⑦)を賞賛していた。こういったパルティは、ファサードの連続性および視覚的表面積の大きさ、つまり眺望が閉じているか否かという観点から評価されている。ジャンヌレはたとえば〈十字路が反復される街路〉(III①)につい

²⁷ 先の注で示した、本研究の類型化の対象から除外した階段の配置方法についての説明において、ジャンヌレは具体的な形態を記述していなかったものの、斜面で構成される車道に比べて歩行者にとって「より直接的な交通手段 (Des circulations plus directes)」 [CV-321] として階段をみなしている。こうした歩行者の経路の着目は身体的疲労の回避に相通じるようにも思われる。

²⁸ 碁盤の目状の模式図について、シュルツェ=ナウムブルクの前置書からの引用が指摘されている。たとえば Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 83-85 を参照。

て、街路側壁の連続性は肯定しながらも、街路の進行方向および直交方向に視線が抜け眺望が開いていることは否定していた。このように、同じパーティの中であっても視線が留まるための連続的な表面を見出す着目箇所によって異なる評価が下されているのである。

また、〈両端に建物がある街路〉(I⑨)や〈左右対称な Y 字路〉(II⑤)では、建物配置や街路形状の対称性が批判的に捉えられていたのに対し、〈側壁が平行でない道〉(I④)や〈曲線の道のネットワーク〉(IV①)では、非対称な形状における変化する多様な眺望が賞賛されていた。これらは眺望の単調さや退屈を避けようとする多様性の観点に基づいた評価である。ジャンヌレは「道」の節の導入部で次のように結論付けている。「最初の結論が得られる：道の大きさや坂は変化することが可能である—しなくてはならない—ということと、幅の等しいすべての道のシステムは非難すべきものであるということだ。」[CV-291]

これらの視覚的な閉鎖性や眺望の多様性に基づいた評価では、ジャンヌレはおおむね直線よりも曲線街路を好んでいたが、部分的には直線街路を肯定的に評価する場合もあった。〈直線街路〉(I①)では、街路の規模が身体性を凌駕するか否かによってそれぞれ荘厳な印象と美の印象が見出され、どちらの場合も肯定されていた。つまり、パーティの評価軸には、閉鎖性や多様性とは別の道の長さや幅と身体の関係にかんする観点があると言える。

交差角については、ジャンヌレはとりわけ直角を賞賛していた。〈直角よりわずかに大きい角度〉(II②)もおおいに讃えられており、直角を基準に評価を行う姿勢が見られた。

ただし、直角からの位相差がいくぶん大きいパーティ、つまり〈直角より大きい角度〉(II①)および〈鋭角〉(II④)については、通行人がそれらを視認する際に受ける衝撃の大きさによって評価されており、衝撃の小さい前者が肯定的に捉えられていた。こういった視認主体が受ける印象にかんしては、〈側壁が平行でない道〉(I④)や〈拡幅した屈折街路〉(I⑧)の分析においても論じられ、壁に視線が留まることが目にとつての「休息」と捉えられて賞賛されていた。つまり、これらは目に衝撃を与えるかどうか、あるいは「目の休息」という生理学的な「視認」にかんする観点から評価されている。

生理学的な観点には、視認のほかに身体的疲労がある。たとえば〈直線街路〉(I①)では、退屈な長い距離を歩くことによる疲労が否定的に捉えられていた。一方、〈拡幅した屈折街路〉(I⑧)における「休息の島」、つまりポケットパークのような部分や、〈勾配が変化する断面〉(I⑧)においては、歩行者が歩みを止め休憩できることが肯定的に捉えられていた。これらにおいては、身体的な休息の観点から歩行者の身体的疲労が回避される形状が高く評価されている。

実用的観点の評価軸

生理学だけでなく、衛生的観点に基づいた評価も存在する。〈曲線の道のネットワーク〉(IV①)は道が湾曲しているので風が道を吹き抜けづらいことが肯定されていた。風にかんするジャンヌレの記述を見ると、「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分において、直線街路を吹き抜ける強風によって夏には埃の渦が舞い冬には雪が吹き付けることが批判的に記されている。したがって〈曲線の道のネットワーク〉において風が吹き抜けづらいことが肯定されているのは、強風による粉塵の巻き上げりを回避できるからであると考えられる。都市の近代化に合わせて発展した公衆衛生の概念に対応した観点もあるとわかる。

しばしば近代都市の公衆衛生とともに語られてきた交通にかんしても、パルティの評価に表れている。〈鋸状歩車道境界の街路〉(I⑤)では、鋸状の形態によって車が往来しづらくなることが批判され、〈直線街路〉(I①)では、交通量に対して道幅が狭い幹線道路が批判されていた。これらは歩車分離や渋滞回避といった交通問題の観点から批判的な評価が下されている。

また、植樹等が用いられたパルティ、つまり街路のくぼみ部分に〈モニュメントや樹木を設けた街路〉(I⑤)や〈拡張部分に植樹した街路〉(III③)においては、樹木等の設置に費用がかかる点が批判されていた。これらは経済性にかんする観点に基づいた評価である。また、〈曲線の道のネットワーク〉(IV①)や〈碁盤の目街路〉(IV③)では、最適化されたルートとしての曲線が歩行時間を短縮できることを肯定されていた。これも同様に、経済的な観点に基づいた評価である。

このように、パルティを評価する際の評価軸には視覚的・身体的観点の6つの評価軸（視覚的閉鎖性、眺望の多様性、大きさの身体性、直角の必要性、目の休息、身体の休息）と、実用的観点の3つの評価軸（衛生状態、交通問題、経済性）があると言える。

3-4 パルティの評価軸の相互関係

3-3で析出した9つの評価軸とパルティの対応関係はFig. 3.4.1に示すとおりである。9つの評価軸のうち、視覚的・身体的観点の6つの評価軸をさらに詳細に吟味すると、同図に示すように、各評価軸の関係は同列ではなく偏りがあることがわかってくる。

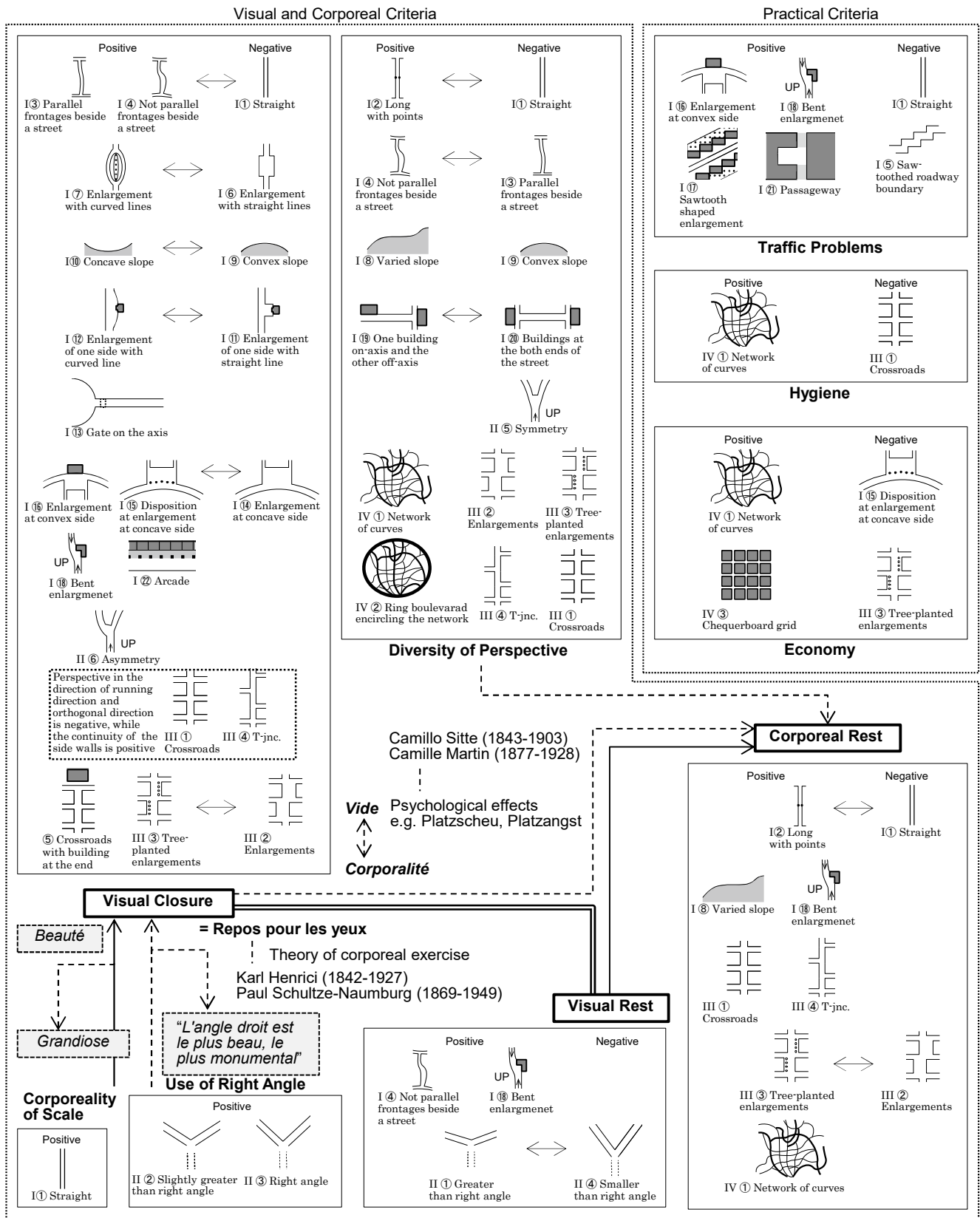


Fig. 3.4.1 Correspondence between criteria and parti of street, and interrelationship of criteria

視覚的閉鎖性

ラバサも指摘するように、ジャンヌレの論じる閉鎖性は、ゼンパーやジッテなどによって独語圏で論じられてきた囲いの空間である²⁹。ラバサやシュノールは、ジャンヌレが部屋のような囲いの空間について語る際に「身体性 (corporalité)」という語を用いていることを指摘している³⁰。たとえばベルンのマルクトガッセという曲線街路について、ジャンヌレは美の要因を「道の完璧なヴォリュームの感覚 (sentiment de parfait volume de la rue)」[CV-302]に見出している³¹。シュノールが指摘するように、ここで讃えられている美はファサード自体の美というよりも空間の美である³²。そしてこの道についてラバサも指摘するように、ジャンヌレは空間を閉じることに関心があった³³。ジャンヌレはたとえば〈曲線の道のネットワーク〉(IV①)の実例としてアントワープの道を論じる際、道の眺望が閉じた様子を「部屋の4枚の壁」[CV-293]になぞらえて肯定している。反対に、眺望の開いたうつろで空虚な「あいた空間」[CV-301]は否定的に捉えている。

ところで、3-3 までで見てきたように、ジャンヌレは視線が面に留まることを「目」にとつての休息と考えていた。これは視覚的閉鎖性と実質同義である (Fig. 3.4.1 中“Visual Closure”と“Visual Rest”を結ぶ二重線)。たとえば目の休息の評価軸によって肯定的に評価されていた〈側壁が平行でない道〉(I④)において、通行人は「様々に変化する模様タペストリーがある広い部屋の壁の間に自分が居るような心地の良い感情 (le sentiment) を持つ」[CV-300]。こうした部屋にいるかのような圍繞感を与える閉じた空間では、ヴォイドとヴォリュームの境界面を視認することができる。面への着目はほかの箇所からも見て取れる。たとえばジャンヌレは、〈拡幅した屈折街路〉(I⑩)における建物で閉じられた眺望に対して、“perspectives”ではなく、二次元的な面を表す“image”や“surfaces”の語を用いていた。眺望の閉鎖した空間においては、視認主体から面までの距離が近く、その視線は面に留まる。このように、ジャンヌレが目の「休息」と表現するのは視線が面によって遮断されることであり視覚的に閉鎖した状態である。

一方「身体」の休息については、「休息の島」にかんする記述の中でも論じられていた。「休息の島」では、そこから眺める建物ファサードにおいて「目」の休息が可能であるだけでなく、人間や動物が滞留する空間として機能し「身体」の休息も可能にしていた。反対に、〈十字路が反復される街路〉(III①)のように、「休息の島」のような滞留空間がなくより線状に近い街路については、視線が抜けることで街路長さの誤認が繰り返され、想定外の長い距離を歩くことになり身体が疲労する。つまり眺望を閉じ「あいた空間」を回避することで、長く続く単調な道を歩き続けるような身体的疲労が避けられるのである (Fig. 3.4.1 中“Visual Rest”から“Corporeal Rest”へ向かう実線矢印)。

以上で見てきたように、視覚的閉鎖性すなわち視線が面に留まるという「目の休息」、そしてその結果として起こる視認される距離の短縮による身体的疲労の回避、つまり「身体」の休息が可能になる。したが

²⁹ Rabaça, *op. cit.*, p. 182, note 60 など。

³⁰ Rabaça, *op. cit.*, p. 188 など。

³¹ ジャンヌレは次のように述べている。「この道の美しさは、一般に、道に沿う建物によるもの、活気を与えてくれる素晴らしい噴水によるものだとみなされている。これは間違いだ。美は道の完璧なヴォリュームの感覚から生まれ、それから—こうした理由だけで—ファサードが効果的に寄与することができるのだ。(La beauté de cette rue est attribuée d'une manière générale aux édifices mêmes qui la bordent, aux superbes fontaines qui l'animent. C'est une erreur. La beauté naît du sentiment de parfait volume de la rue, et ensuite —et seulement à cause de cela— les façades peuvent apporter un tribut effectif.)」[CV-302-303]

³² Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 90 を参照。

³³ Rabaça, *op. cit.*, p. 193 を参照。

って、目の休息ならびに視覚的閉鎖性の評価軸の一部は身体の休息の評価軸に包含される (Fig. 3.4.1 中 “Visual Rest” から “Corporeal Rest” へ向かう実線矢印ならびに “Visual Closure” から “Corporeal Rest” へ向かう破線矢印)。

身体的な大きさ

ジャンヌレは基本的に直線の道を批判していたが、大きさが身体性に適合している場合には「美の印象」をもたらすとして、以下のように賞賛している³⁴。

[引用者注：直線の道の]2 つめの性格 (caractère) は美の印象だ！ そのとき、直線の道は身体性 (corporalité) の感覚を明確にするに違いない；道の長さや幅、建物の高さは遠近する消失点あまり目立たないような関係になるだろう；それゆえ、道の長さはひじょうに短縮され、先端は閉じられるだろう。—美、それはリズム、比率、調和 (l'harmonie) だ；親密なつながり (parenté intime) がすべての建物を結びつけるときにだけ、そうして、それぞれによってまとまり (l'Ensemble) を生み出す調和のとれた調子がもたらされるためには、相互に理解し合うことがそれぞれにとって有利なことだと建築家が理解するときだけ、道は美しくなるだろう。[CV-328]

「身体性の感覚を明確にする」ような道の大きさは身体感覚に即し、道の長さは短く眺望が閉じられる。また、周囲の建物のつながりを形容する「親密」の語からは、建物間の物理的距離の小ささも窺われる。つまり道の長さ、幅、および周辺建物の規模が身体感覚に即していることで眺望が閉じられる。したがって、身体的な大きさの評価軸によって評価されるパルティは視覚的閉鎖性すなわち「目の休息」を可能にする。つまり身体的な大きさの評価軸は視覚的閉鎖性および目の休息に包含され (Fig. 3.4.1 中 “Corporeality of Scale” から “Visual Closure” へ向かう実線矢印および “Visual Closure” と “Visual Rest” を結ぶ二重線)、先に示した相互関係を考慮すればそれらはさらに身体の休息の評価軸に含まれ得る (Fig. 3.4.1 中 “Visual Rest” から “Corporeal Rest” へ向かう実線矢印ならびに “Visual Closure” から “Corporeal Rest” へ向かう破線矢印)。

ただし身体性を凌駕した場合であっても、ラバサがフランチェスコ・パッサンティを引きながら指摘するように、美学における崇高 (sublime) かのような荘厳な (grandiose) 印象が賞賛されている場合もある³⁵。このように身体的な大きさの評価軸による評価であっても、例外的にジッテ的な閉鎖性から逸脱したル・コルビュジエの思想の萌芽も見られる (Fig. 3.4.1 中 “Corporeality of Scale” から “Visual Closure” へ向かう実線矢印から分岐し “Grandiose” へ向かう破線矢印)。

眺望の多様性

ジャンヌレは視覚現象と疲労の関係を論じる際、道の印象が連続的に大きく変化していくことを、歩行者にとっての「疲労に対する最良の緩和薬」[CV-297]であると表現している。「彼 (引用者注：通行人) は、変化しやすい印象が連続して増大していくことで、快い精神状態へといざなわれる (Il est, par la suite

³⁴ ラバサは、このように時折直線を肯定するジャンヌレの思想の揺らぎに、ヘンリチやマルタンの理論からの影響を指摘している。両者は直線を完全に否定していたわけではなかった。Rabaça, *op. cit.*, p. 194 を参照。

³⁵ Rabaça, *op. cit.*, p. 195 を参照。

croissante des impressions changeantes, transporté dans un état d'esprit agréable)」[CV-296-297]のである。また、ろばの例えを用いながら身体的休息の必要性を論じる部分では、「休息とは仕事の変化だ (le repos c'est le changement de l'occupation)」[CV-320]と述べている。このように、道における変化や多様性、つまり単調さや退屈の回避が歩行者の身体的疲労を軽減すると考えているのである。こうした評価も身体の休息を拠り所としており、眺望の多様性の評価軸は部分的に身体の休息の評価軸に含まれ得る (Fig. 3.4.1 中“Diversity of Perspective”から“Corporeal Rest”へ向かう破線矢印)。

直角の必要性

ジャンヌレはとりわけ〈直角〉(II③)を賞賛していた。そして直角を基準にパルティを評価する際には、直角に近い〈直角よりわずかに大きい角度〉(II②)も讃えていた。ただし、これほどまでに賛美される直角であっても、紙上のデッサンにおいては「不愉快な方法で目にぶつかる」[CV-304]と述べ批判している。ジャンヌレは交差点の分析の直前に、「こうした視覚現象：「目は空間における幾何学図形を測ることは絶対にできないということ」(ce phénomène d'optique: «l'œil est absolument incapable de mesurer certaines figures géométriques dans l'espace»)[CV-304]を説明しているし、「交差点」の項の末尾では、広場の評価においても目が支配的ではないことを指摘した上で、「紙上のデッサンは価値がない (la nulle valeur du dessin sur le papier)」[CV-305]と主張している。ジャンヌレは紙上のデッサンを実際の空間に比べ価値がないと考えているのであり、二次元的な平面ではなく三次元ヴォリュームに対し直角を無条件に賞賛している。これを考慮すると、直角より「わずかに」大きい交差点の空間では、交差点はほぼ直角に保たれながらも、道の眺望は直角交差点のような一点消失の「あいた空間」が避けられ閉鎖性が両立されると言える。つまり、このパルティでは直角超過が微少であるからこそ、眺望の閉鎖性と直角のモニュメンタルな性格を併存させることが可能になるのである。このように直角の必要性の評価軸と視覚的閉鎖性および目の休息の評価軸は部分的に重なり合う (Fig. 3.4.1 中“Use of Right Angle”から“Visual Closure”へ向かう破線矢印)。とはいえ、ジャンヌレは十字路の直角を最も美しく最もモニュメンタルであるとして賞賛しており、そうした評価は視覚的閉鎖性から逸脱している (Fig. 3.4.1 中“Use of Right Angle”から“Visual Closure”へ向かう実線矢印から分岐し“L'angle droit est le plus beau, le plus monumental”へ向かう破線矢印)。このように、ル・コルビュジェの幾何学的な好みの萌芽も部分的に見られる。

このように、6つの評価軸は同列ではなく重複や包含、そこからの逸脱といった揺らぎのある相互関係が存在する。6つのうちとりわけ支配的であるのは身体の休息の評価軸および視覚的閉鎖性 (= 目の休息) の評価軸である。前者は身体的疲労の回避を評価するものであり空間を把握する主体の身体運動に着目している。一方後者は部屋のような閉鎖性を評価するものでありジッテをはじめとする独語圏の囲いの空間に基づいていた。ここでジャンヌレは一般に心身の疲労に対して用いる「休息」という用語を視覚的閉鎖性の説明時に「目」に対して用いている。ここには、「広場恐怖症 (Platzscheu)」といった心理的作用に鑑みて「だだっぴろい空虚な空間」を拒絶するジッテ的な閉鎖性の根拠として³⁶、身体運動的な理論を重ね

³⁶ ジッテ, 大石訳, 前掲書, p. 63. 広場恐怖症については Collins, George R. and Collins, Christiane Crasemann: *Camillo Sitte and the Birth of Modern City Planning*, London, Phaidon Press, 1965., p. 157, note186 も参照。

て補強していこうとする方向性が部分的に見られる。これらの評価軸による評価内容は心理的なもの（視覚的閉鎖性の評価軸＝目の休息）と身体的なもの（身体の休息）という異なる状態であるが、このように「休息」という語を前者にも用い身体運動的な観点を重ねていくことで、両者とも、茫漠とした「あいた空間」を彷徨う歩みや視線といった人体のなんらかの諸器官の動き（視覚という感覚機能および歩行という運動機能）を停止させるという生理学的な着眼点を有している³⁷。このようにジャンヌレの道の都市形態論は身体的な空間把握に則っている。

道のパーティに通底するこうした身体的な動機は道という都市構成要素の特質と対応している。広場や街区といったほかの都市構成要素に比べて道は線状であり、そのシークエンスは歩行者が一方向に移動することで認識される。つまり、道では空間を認識する際に多かれ少なかれ運動が行われ身体的疲労が生じる。ジャンヌレはそうした際に一定の運動を誘起するような単調なデザインではなく、視覚や歩行といった人体の諸器官の動きに静止や緩急をもたらすよう、平面・立面・断面の各フェーズで、道という線形の都市構成要素の中に疎密やリズムのあるデザインを好んでいる。平面の例で言えば「休息の島」のような滞留スペース、立面ではたとえば「目を休息させる表面」、断面では傾斜に富んだ「ろばの道」という具合である。

こうした議論は一本の道だけでなく、都市全体に広がった道にも同様に見られる。ジャンヌレは、最短距離で都市の各点を結ぶ曲線について述べる際、都市のことを有機体と表現していた。ジャンヌレは自然発生的な曲線の道で、身体的疲労を軽減するルート最適化を肯定的に評価し、生理学的構造との類似を指摘している³⁸。

「道」の節の導入部で論じられているこうした理論はシュルツェ＝ナウムブルクの色濃い影響が指摘されてきた³⁹。また歩行者の道の長さの錯視理論が展開される「退屈な道－おもしろい道－普通の道」の項はほとんどヘンリチの著作の内容の仏訳であることが指摘されている⁴⁰。身体の休息を論じるための「ろばの道」の例えや道を血管に例える有機体論的な論調が見られる「傾斜した道」の項についても両者の影響が知られている⁴¹。このうち長年アーヘンにおいて建築の教授を務めたヘンリチ（1842-1927）はジッテ（1843-1903）と同時代に活躍した人物で、ジッテの本に感化され都市計画家に変貌していくほどに当初はジッテにおおいに共鳴していたが、のちにジッテ的な過度にロマンチックでピクチャレスクで中世的な側面を批判するようになった⁴²。シュルツェ＝ナウムブルク（1869-1949）はやや後代の人物であるが、ジャンヌレも参照していたその主著『文化作品』第4巻『都市計画』は都市景観（Stadtbilder）システムに則って都市の眺めの写真と視線の描かれた平面図とを結び付けて示すような構成をしており、ジッテ的な原則の手引書であった⁴³。このように両者ともジッテの影響下にはあったが、「道」の各項の参照源を考慮

³⁷ ジャンヌレの参照するジッテが視覚に着目し空間知覚の生理学に早い段階で注意を払った人物であることはこれまでに知られてきた。たとえばファン・デ・フェン、コルネリス：建築の空間、佐々木宏訳、丸善、1981、p. 131。

³⁸ こういった有機体論的な理論は、ル・コルビュジエも論じている。たとえば、ル・コルビュジエ：前掲書など。付章には内臓の挿絵が掲載されている。都市組織は人体構造に準えられ、交通は循環器系統にあたる。そしてシュノールはこれらの挿絵について、「シュルツェ＝ナウムブルクの理論を具体的に描いたものにすぎない」と評している（Schnoor, 2020, *op. cit.*, p.85）。

³⁹ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 82f.

⁴⁰ とくに Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 85f.

⁴¹ とくに Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 104f.

⁴² Collins & Collins, *op. cit.*, pp. 76-77.

⁴³ Collins, *op. cit.*, p. 137, note 98., Shultze-Naumburg, *op. cit.* 本研究第二章でも触れたとおり、ジャンヌレはシュル

すると、ジャンヌレが両者から取り入れ草稿に反映したのは「身体の休息」の評価軸に通じるような有機体論的な理論への関心や歩行者の身体運動にかんする観点であったと考えられる。一方「視覚的閉鎖性(=目の休息)」で高く評価される圍繞感ハジッテの『広場の造形』やその伝語版にマルタンが付加した「道」の章の主張と同様である。ただしジッテの著作は基本的に広場の分析に主眼を置いたものであるし、マルタンの文量も多くはなく「都市の構築」のように道の種類毎に項目を分けた構成にはなっていない。ジャンヌレはジッテやマルタンの視覚的閉鎖性にかんする理論を通底させながらも、「道」の節の各項で展開される具体的な道のパーティの論述にはむしろヘンリチやシュルツェ=ナウムブルクの身体運動的あるいは有機体論的な観点をおおいに織り込んでいと言えよう。このようにジッテの影響下にあった人物の視点を反映していることは、先に見たようにジャンヌレの形態論において「視覚的閉鎖性(=目の休息)」と「身体の休息」の評価軸が支配的であること、そして前者の論拠として心理的なものから身体運動まで理論を展開していくような思考の重なりに対応している。先の評価軸の相互関係と考え合わせれば、ジャンヌレにはジッテらの心理的な視覚的閉鎖性の論拠としてヘンリチらの身体運動的観点を重ね補強していく志向があると言える。

なお、ジャンヌレが参照していたシュルツェ=ナウムブルクの『文化作品』第四巻には、「交通の中の静寂の島 (stille Insel im Verkehr)」という表現が見られ、ジャンヌレの用いた「休息の島」という言葉と明らかに類似している⁴⁴。ル・コルビュジエは生理学的に理解される近代的身体の鍛錬と生活時間の効率化を目指したが⁴⁵、本稿で見てきた通り、「都市の構築」では克己的に身体を錬磨することよりも、疲労の回避や休息に主眼を置いている。

ツェ=ナウムブルクの本書を「街区」の節においても参照していた。

⁴⁴ シューベルトは、ジャンヌレによる 1910-1911 年のリヒテンフェルスの写真やスケッチについて、シュルツェ=ナウムブルクが『文化作品』第 4 巻都市計画で「交通の中の静寂の島」の表現とともに用いた道の写真や図 (Appendix Fig. 3.4.1) との類似を指摘している (Schubert, Leo: Jeanneret, the city, and photography, in: Moos, Stanislaus von, et al., ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier: applied arts, architecture, painting, photography, 1907-1922*, New Haven: Yale University Press, pp. 55-67, 2002.)。シュルツェ=ナウムブルクの本図には矢印が書き込まれ、曲線街路の側壁にぶつかったり、くぼみ部分で樹木 (同図の点) によって遮られていたりしており、ジャンヌレが描いた視線の矢印 (Fig. 3.2.4, Fig. 3.2.5) や「休息の島」と類似している。ジャンヌレはシュルツェ=ナウムブルクの「交通の中の静寂の島」という言葉に「休息」の観点を加え独自の「休息の島」を着想した可能性がある。



Appendix Fig. 3.4.1 Diagrams drawn by Schultze-Naumburg (Schultze-Naumburg, *Kulturarbeiten, Städtebau*, pp. 44, 96)

⁴⁵ 医師ピエール・ウィンターは生理学の知識により身体を再解釈する必要を説き、近代的健康増進のためのスポーツの時間確保のため、テイラー主義による生活時間の効率化を主張した。ル・コルビュジエは 1920 年代初頭にウィンターと出会い、生涯にわたり協働した (森山学: 「レスプリ・ヌーヴォー」期におけるピエール・ウィンターの身体文化理論: ル・コルビュジエとその協働者ピエール・ウィンターの身体文化理論に関する研究 その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 69 巻 585 号, pp. 213-218, 2004.) (森山学: ル・コルビュジエの 1920 年代の住宅作品における身体文化: ル・コルビュジエとその協働者ピエール・ウィンターの身体文化理論に関する研究 その 2, 日本建築学会計画系論文集, 第 70 巻, 第 593 号, pp. 225-229, 2005.)。しかし「都市の構築」執筆時点ではウィンターの近代的健康や「新身体 (le corps nouveau)」の概念にはまだ触れていなかったと考えられる。

3-5 小結

本章では「都市の構築」の「道」の節、「街区」の節および「批判すべき適用:ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分から計 88 箇所の道のパルティの記述箇所を取り出し整理することで、計 36 個の道のパルティを抽出した。それらを、単独街路、交差点、交差点の反復、道のネットワークの 4 つに大別し、とくに単独街路についてはさらに平面形状、起伏、道と建物の関係に細分することで、ジャンヌレの道のパルティを体系的に把握した。そして道のパルティの評価軸を明らかにし、実用的観点の評価軸と視覚的・身体的観点の評価軸に分けられることを示した。前者は衛生状態、交通問題、経済性の 3 つからなり、後者は、視覚的閉鎖性、眺望の多様性、直角の必要性、大きさの身体性、身体の休息、目の休息の 6 つの評価軸からなっていた。直角超過が微小な交差角はジャンヌレが賞賛する直角の性格と視覚的閉鎖性を両立するし、身体に即した規模も閉鎖した眺望を可能にする。このようにして成立した視覚的な閉鎖性はすなわち目の休息であり、運動量の減少や歩行者の退屈の回避を可能にし、身体の休息をもたらし得る。身体の休息をもたらすのは閉鎖性だけではない。眺望の多様性も歩行者が退屈するのを防ぎ身体の休息をもたらす。本稿ではこのように各評価軸相互の関係は同列ではなく重複や包含、そこからの逸脱といった揺らぎのある相互関係が存在し、とりわけ視覚的閉鎖性（＝目の休息）および身体の休息の評価軸が支配的であることを指摘した。そしてジャンヌレは一般に心身の疲労に対して用いる「休息」という用語を視覚的閉鎖性の説明時に「目」に対して用いていることで、心理的な作用に鑑みた閉鎖性の根拠として身体運動的な理論を重ねて補強していこうとしている方向性が部分的に見られた。また、ジャンヌレはジッテやマルタンの視覚的閉鎖性にかんする理論を通底させながらも、「道」の節の各項で展開される具体的な道のパルティの論述にはむしろヘンリチやシュルツェ＝ナウムブルクの身体運動的観点や有機体論的な理論を参照していたようである。このことは、ジャンヌレの形態論において「視覚的閉鎖性（＝目の休息）」と「身体の休息」の評価軸が支配的であること、そして前者の論拠として心理的なものから身体運動まで理論を展開していくような思考の重なりに対応している。つまり、ジャンヌレにはジッテらの心理的な視覚的閉鎖性の論拠としてヘンリチらの身体運動的な観点を重ね補強していく志向が部分的に見られた。具体的なパルティについては、ジャンヌレはリズムや疎密によって多様性や閉鎖性が創出され、視覚的閉鎖性（＝目の休息）や身体の休息が得られるようなデザイン、つまり曲線街路を好んでいた。ただし、例外的に直角のモニュメンタルな性格や直線の荘厳さを賞賛しており、ル・コルビュジェの思考の萌芽もみられた。

ところで後のル・コルビュジェとは異なり「都市の構築」では克己的に身体を錬磨することよりも、多様性や閉鎖性による疲労の回避や休息に主眼が置かれていた。ジャンヌレ時代については、エミール・ジャック＝ダルクローズのリトミックやデンマークのフィットネスの第一人者ヨルゲン・ピーター・ミュラーによるエクササイズにジャンヌレが触れていたことや、身体的な形態知覚としての感情移入理論やアウグスト・シュマルゾーをはじめとする独語圏の空間理論との関連も指摘されている⁴⁶。本稿では物理的形態としてのパルティから評価軸を抽出し、ジャンヌレの道の都市形態論は身体的な空間把握に則っていることを指摘したが、こうした身体的な空間把握に則った道の都市形態論や、空虚な「あいた空間」の抽象性の批判、それに対置されるような具体的対象物の視認とその結果生じる圍繞感への賞賛は、後に鍵概念と

⁴⁶ Rabaça, *op. cit.*

して展開していく身体性の文脈に則って捉えることが可能であろう。

第四章 広場のパーティ

第四章 広場のパルティ

ジャンヌレが論じるおもな都市構成要素のパルティに着目して都市形態論を整理してきた第二章および第三章に引き続き、第四章では「広場」のパルティを扱う。それぞれ「街区」と「道」を扱った第二章および第三章と同様、本章においても最初に検討対象を示した後、それら検討対象でどのようなことが論じられているのかその概要を確認する(4-1)。その後、草稿で論じられている広場のパルティを抽出し、それらを形態によって分類し直す(4-2)。そして、各タイポロジー形態に対するジャンヌレのコメントにもとづき、それらの評価軸を導出する(4-3)。その後、導出された評価軸相互の関係と思想的背景を考察する(4-4)。

「都市の構築」ではカミロ・ジッテの著作“Der Städtebau nach seinen Künstlerischen Grundsätzen” (以下『広場の造形』)¹が参照されているが、「広場」の節はその表題からわかるとおり、ほかの都市構成要素の節に比べて『広場の造形』に多くを依っていたようである。

『広場の造形』は、19世紀のオスマンのパリ改造に代表されるような幾何学的デザインの都市計画に反論し、自然発生的な中世都市に基づいた都市再生を提案するものであった。古代、中世、およびバロックの広場が多数紹介されるこの本の表題は『広場の造形』と邦訳されているが、原題は「芸術的原理に基づく都市計画」といった意である²。『広場の造形』は1889年に出版されると数週間のうちに完売し、その後多言語に翻訳され世界的ベストセラーとなった。中世的広場の復権を唱えたジッテの影響はジャンヌレにも及び、「都市の構築」では『広場の造形』への賛同が明示され、曲線や不規則な都市構成要素が好まれている。しかしながら、「都市の構築」の草稿は後に推敲され『レスプリ・ヌーヴォー』誌にて連載し、1925年に『ユルバニスム』として出版されると、『広場の造形』は「独断に充ちた著作」³として痛烈に批判されることとなった。

一方、ジャンヌレの同郷人で建築家、考古学者のカミーユ・マルタン (Camille Martin, 1877-1928) により訳出された仏語版⁴には「道」という章が付加されている。またこの仏語版の第8章“Quelques Exemples de Places (広場のいくつかの例)”には、原著の第7章および第11章の文章の一部と、マルタンによる文章とが混在し、原著にない事例も紹介されている⁵。ジャンヌレはこの仏語版も参照していたようである。また、ジャンヌレの草稿はドイツの芸術史家アルベルト・エーリヒ・ブリンクマン (Albert Erich Brinckmann, 1881-1958) の“Platz und Monument” (以下『広場とモニュメント』)⁶からも多くを引用していたことが指摘されている⁷。ブリンクマンはフランス古典主義を独語圏にて評価した最初期の人物の

¹ Sitte, *op. cit.* ジッテ, 大石訳, 前掲書

² 玉置啓二は「都市の構築」の書名について、『広場の造形』の表題中の独語“Städtebau”の直訳である可能性を指摘している。玉置, 前掲論文。

³ ル・コルビュジエ, 1967, 前掲書。

⁴ Sitte, Martin, *op. cit.*

⁵ 原著と仏語版の相違は、Collins & Collins, *op. cit.*, 1965. に詳しい。

⁶ Brinckmann, Albert Erich: *Platz und Monument. Untersuchungen zur Geschichte und Ästhetik der Stadtbaukunst in neuerer Zeit*, Berlin: Wasmuth, 1908, reprint with an afterword by Meyer, Jochen, Berlin: Gebr. Mann, 2000.

⁷ Schnoor, 2020, *op. cit.* など。

ひとりであるとされている⁸。

4-1 検討対象

広場についての記述は第一部第二章「都市を構成する要素」第四節「広場」を中心に記述されている。先述したとおり、シュノールが収録する草稿は、A4 のルーズリーフ、13 のノートブック (cahiers)、そして図版からなる。「広場」の節の前半部分はルーズリーフに記されており、シュノールはこれを「広場 I」として収録している。後半部分はノートブック C.7 および C.8 に記されており、この部分が「広場 II」にあたる⁹。また、「批判すべき適用:ラ・ショー=ド=フォン」の部分で広場について挿話的に述べられている箇所もある。本章ではこれらの部分を検討対象とする。

4-1-1 第一部第二章第四節「広場」の概要

以下に「広場」の節の記述内容を順に示す。草稿にはないが、適宜見出しを設けて内容を整理する。

○広場 I

(1) 導入

ジャンヌレは「非審美的な眺めをもたらした (a conduit aux aspects inesthétiques)」[CV-330]として 19 世紀の広場を批判する。そして、ジッテの『広場の造形』を紹介し、不規則な形の中世の広場が綿密に調査されていると高く評価する。続いて「広場」の節の検討事項として、「視覚現象、審美的原則、そして実用的必要性や適合性に基づいた法則 (les lois, qui, basée sur des phénomènes d'optique, sur des principes d'esthétique, sur des nécessités utilitaires et de convenance)」[CV-330]を宣言する¹⁰。広場を作る理由には以下の 3 つを挙げている。①緻密な道のネットワークの中に、マルシェや公共集会を行う静かな「表面 (une surface)」[CV-331]を得るため ②建物は性格を強調されるべきであり、ファサードの前に良い比率の空間をしつらえるため ③何本もの道が一点に交わることで、広場は広場自体から生まれるから。

(2) 19 世紀の広場①

19 世紀の広場は形態が要求に適應していないとして批判され、前述の広場を作る理由に対応した、以下の 3 つの広場の分類が示される「**広場自体のために生まれる広場**、(いわば休息の島 (l'île de repos))、**建物のための広場** (いわばすべての視線を名誉ある主に向け直すために広場自体は控えめにすること)、**十字路** (いわばすべての交通が一点に凝縮すること)」[CV-331]¹¹。ジャンヌレは図を用いながら 19 世紀の広場

⁸ Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 29-30.

⁹ 「広場」の節の前半部分 (広場 I) 唐突に終わっている。エムリーは前半部分とこれに続く後半部分 (広場 II) を合わせて一つの節「広場」として収録している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p.129, note 301 も参照。

¹⁰ ウィトルウィウスの用 (utilitas) に通じる実用的必要性、適合性といった概念からは、中世、とくにエコール・デ・ボザールの影響が窺える。

¹¹ シュノールによれば、こういった広場の分類はジャンヌレの参照源のどれにおいても言及されていない (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 114.)。

を分析する。ただしその分析は、シュノールも指摘するように3つの分類に明確に対応したものではない¹²。

(3) 造形的要素

ジャンヌレは広場の造形的要素として「身体性 (*la corporalité*)」[CV-338]を挙げた後、広場を部屋に例えている。

(4) 広場に入る道

部屋の例えは、広場と道の関係にも敷衍される。道の端は扉に例えられ、部屋の印象が扉に依るのと同様、広場の快適さやヴォリュームの印象は広場に出る道の入り口 (*embouchure*) に依存するとされている。ジャンヌレは、広場の隅や側面における道の入り方のさまざまなパターンを検討する。

(5) 19世紀の広場②

ジャンヌレは19世紀の広場を、意図が明瞭でなく生氣のない印象しか生まないと批判し、「情動の性格 (*le caractère de l'emotion*)」[CV-347]を考慮すべきだと主張する¹³。また、建築の位置や広場の形といった、建築と広場の関係も熟慮すべきだと示される。

(6) 教会前広場

そこで、建築と広場の関係が教会建築の場合で検討される。分析対象はさまざまな大聖堂建築に拡大される。

(7) 建物配置

幾何学的に単純な形の19世紀の広場の中心に建物を配することが批判され、左右非対称な建物配置が事例を用いながら賞賛されている。ルーズリーフに記された「広場」の節はこうした記述の途中で唐突に終わり、*Cahiers* 7 および 8 に続いていく¹⁴。

○広場 II

(8) 高さの異なる2つの広場

「広場/テキスト/節 4 I (PLACE. // Texte. // §4 I)」[CV-362]と題されたこの部分から *Cahiers* の記述となる¹⁵。高さの異なる2つの広場について文量は多くないが具体的に描写されている。

¹² Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 118.

¹³ シュノールは、ジャンヌレが使う“character”という語がドイツの建築家テオドル・フィッシャー (Theodor Fischer, 1862-1938) による1903年の講義“*Stadterweiterungsfragen* (都市拡張の問題)”の影響を受けたものであると指摘している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 124-125)。シュノールは、19世紀から20世紀初頭における“character”という語の用法を論じたロウの下記の論考についても注意を促している。Rowe, Colin: *Character and Composition*, in Rowe, Colin: *The mathematics of the ideal villa, and other essays*, Cambridge, Mass.: MIT Press, 1976, pp. 59-87.

¹⁴ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 129 および同頁 note 301. Émery, 1992. *op. cit.*においても、*Cahiers* の文章がこの部分の続きとして編集されている。

¹⁵ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 130.

(9) モニュメント配置

「栄光の広場(*place de gloire*)」[CV-362]の検討が宣言されると、最初に、親密な部屋(*La chambre intime*)と誇示の部屋(*la salle de parade*)の2種類の部屋が示される¹⁶。モニュメントはこうした部屋の贅沢品に例えられ、その配置が検討される。その後は実例を用いながら広場の中心の配置が批判され端に配置されることが勧められている。

(10) 絶対王政の広場

当世における古典主義(*classicisme*)の模倣が指摘される。これは味気なく無味乾燥であり、芸術的ではないとして批判されている。対して、幾何学的中心にモニュメントがある絶対王政下の広場はその成り立ちと美しさが説明されている。節の終盤には、エトワール広場を19世紀のプロトタイプとみなし、優れた幾何学的な広場とともに表を作成している。

(11) まとめ

これまでの考察を受けて広場の建設方法をまとめている。そしてジャンヌレは古代にまで遡りながら数々の広場を例示し、散在させず1つにまとめることで商業の騒々しい生活から隔離するべきであるとしている。

4-1-2 「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の概要

前章までと同様、本章においても、シュノールがラ・ショー＝ド＝フォン市の図書館のコレクションから収録した1910年頃の写真や、ジャンヌレがラ・ショー＝ド＝フォンの地図上のどの位置を示していたのかを推察したエムリーの分析¹⁷や参考にしながら、1908年のラ・ショー＝ド＝フォンの地図(Fig. 2.1.1)を精査しジャンヌレの意図を確認する。この部分で論じられている広場の事例は道と比べて少なく5つのみである¹⁸。広場にかんしては道に比べると事例の数は少ない。ジャンヌレは最初に「既存の公共広場とは何であって、未来のそれらは何なのだろうか？(Que sont les places publiques existantes, qui seront celle futures?)」[CV-507]と問いかけた後、これらの事例を検討している。

¹⁶ ジャンヌレはテーブルを部屋の軸上に配することを肯定している。シュノールは、部屋と広場にかんするジッテの理論とフランスの左右対称なバロックの広場にかんするブリンクマンの理論とをジャンヌレが組み合わせていると分析している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 131.

¹⁷ Émery, 1992. *op. cit.* エムリーはジャンヌレの図版が地図上のどこの箇所を示したものであったのか推察し、1908年のラ・ショー＝ド＝フォンの地図に示したものを収録している。

¹⁸ またこのうちの1つであるガール広場にかんする記述はおもに広場の周辺建物についての記述であることから、広場の形態の型は記述されていないとみなして、後の類型化の対象からは除外している。

4-2 パルティの抽出と類型化

「都市の構築」の草稿では、以上で概観したように広場が論じられてきた。「パルティ」という語を用いない都市構成要素の型の説明箇所も含めると広場のパルティの記述箇所の総数は70ある。これらについて整理・分類した類型をTable 4.2.1に示す¹⁹。計19の同表の類型のうち、8の類型(I①③④⑤⑥⑦⑧II①)はジャンヌレのスケッチから7の類型(I③⑤⑦⑫⑬⑭⑯⑰)は草稿の文章やジャンヌレの参照源とされる図および実際の広場の形状をもとに筆者が図化した。その他4の類型(I②④⑥⑧)はエムリーが収録した図版に基づいている。

同表に示す広場のパルティは、対象となる広場の数に着目すると、I 単一の広場とII 複数の広場に大別できる。以下にジャンヌレによる各類型の評価を示す。

Table 4.2.1 Parti of squares

I A square								II Squares	
Without building or monument								—	
Entire square							Corner of square	—	
① Irregular form	② Turbine square	③ Streets along the four main geometric axes	④ Streets reaching side walls at right angle	⑤ Streets reaching side walls at not right angle	⑥ Arch at the end of streets	⑦ Colonnade	⑧ Intersection out of the corner	⑨ Two squares at different level	
I A square									
With building or monument									
Entire square									
⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	⑪ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	⑫ Monument at the edge	⑬ Building asymmetrically	⑭ Smaller church square than the facade	⑮ Large church square	⑯ Square in depth	⑰ Square in breadth	⑱ Building on axis at the end of square	⑲ Building surrounded by splendid facades

¹⁹ ジャンヌレが広場を指す際に用いる仏語は“place”である。本研究において英語で広場を指す際は基本的に“square”と記す。シュノールは、コリンズがジッテの著作を翻訳する際に、星型などかならずしも幾何学的な矩形ではないものを表現するには“square”が不十分であるという理由から“Platz”を“plaza”と英訳していることを指摘しながらも、イギリス英語において“plaza”が適切でないことから適宜“market”などの表現を付け加えながら“square”と英訳している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 9.

I 単一の広場

単一の広場のパーティはさらに、その論述における建物やモニュメントの有無に着目すると、建物やモニュメントがない広場と建物やモニュメントがある広場に分類できる。つまり、広場自体の構成にかんするパーティと、建物やモニュメントとの配置関係も考慮して論じられているパーティに分けられる。

○建物やモニュメントがない広場

建物やモニュメントがない広場は、パーティの対象範囲によって広場全体のパーティと広場の隅のパーティに細分できる。

(広場全体)

広場全体のパーティには、対比的に捉えられる〈不整形の広場〉(I①)と〈卍状の道の正方形広場〉(I②)、そして道の入り方にかんするものとして〈幾何学的軸上の道の広場〉(I③)、〈側面に直角で道が入る広場〉(I④)、〈側面に直角以外で道が入る広場〉(I⑤)、〈道の端にアーチのある広場〉(I⑥)、および〈列柱で囲まれた広場〉(I⑦)のパーティがある。

〈不整形の広場〉の一例にあたるシュトゥットガルトのマルクト広場は、広場が「完全に閉じて (*parfaitement close, de quelque point qu'on la regarde*)」[CV-343-344]見えることが讃えられている (Fig. 4.2.1)。〈卍状の道の正方形広場〉についても同様に広場が閉じて見えることが賞賛されている。このパーティではどの道から来た人に対しても「目に見える表面を最大化 (*maximum des surfaces vues*)」[CV-339]し広場の表面が丸まって閉じこもっているように見せ、静かな印象や有効な印象を与えるとして、ジャンヌレは具体例にラヴェンナのドゥオモ広場も挙げながらその魅力を記している (Fig. 4.2.2 中、中左)²⁰。このパーティでは道が卍状に広場に入るので、通行人がいずれの道を通ったとしても壁が正対し道からの視線は正面の壁に留まることがわかる。ところがこうした賞賛の直後にジャンヌレは批判を述べている。「決定的に四角く整えられ (*irrévocablement carrée et régulière*)」[CV-340]た広場では、目は「空間の中の物 (*des choses dans l'espace*)」[CV-340]を正確に捉えられないとの理由からである²¹。

示された図式のように広場の形が決定的に四角く整えられているとすれば、まったく役に立たない。わたしたちはすでに一時的拡幅のある道の研究で、目で理解できないのは空間の中の物であると述べた。ヴェネツィアのサンマルコ広場やフィレンツェのシニョーリア広場やシエナのパーリオ広場からわたしたちの目がまったく影響を受けないようにするものこそ、こうした視覚現象である²²

(Il n'est point utile que la forme de la place soit comme dans le schéma proposé, irrévocablement carrée et régulière. Nous avons dit déjà lors de l'étude des rues à élargissement momentanés, qu'il est des choses dans l'espace que l'œil ne saisit pas. C'est ce phénomène d'optique qui permet à nos yeux de ne point être affectés par

²⁰ シュノールは、ジャンヌレが1907年の自身初のイタリア旅行ですでにこの広場を訪れていたことを指摘している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 120. またシュノールも指摘しているようにジャンヌレはジッテの模式図を模写している (Schnoor, 2008, *op. cit.*, S.340, Sitte, *op. cit.*, Abb. 12, 18, 19, 23, 25, 40-44, 52, 78, 81)。

²¹ ジャンヌレはこの理由を、道の拡幅を論じた際の理論と同様のものだとしているが、節「道」項「一時的拡幅や連続的突出のある道」ではそのような視覚現象は論じられていない。

²² シエナのパーリオ広場とはカンポ広場のことであると思われる。

les places de St Marc à Venise, de la Signoria à Florence ou du Palio à Sienne) [CV-340-341]

本研究の第三章で見たように道の節において距離の錯視現象を論じていたことや、『広場の造形』第4章「広場の大きさと形」における、目測では距離を正確に測ることが難しくとくに正方形の広場は好ましくないとの主張も考慮すると、ジャンヌレは物体までの「距離」の視認の難しさを指し批判していると考えられる。対して引用後半で肯定的に捉えられている視覚的影響を受けない広場の3つの実例は〈不整形の広場〉にあたる形態である²³。

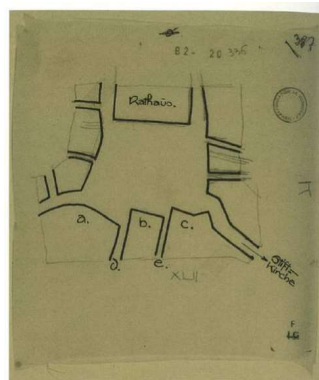


Fig. 4.2.1 Marketplace, Stuttgart drawn by Jeanneret [CV-344] (B2-20-336 FLC)

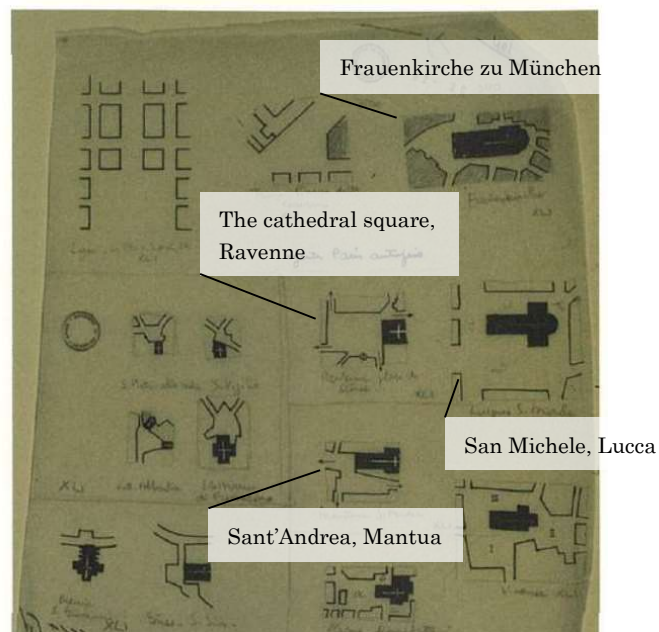


Fig. 4.2.2 Irregular square forms drawn by Jeannerets following Sitte [CV-340] (B2-20-340 FLC, supplemented by author)

²³ 不整形な広場を賞賛するここでのジャンヌレの態度は、シュノールも指摘するように、ジャンヌレは『広場の造形』第五章「古い広場の不規則な形」の内容に従ったものであろう。

ところで〈卍状の道の正方形広場〉で賞賛される視覚的閉鎖性は道の卍状の平面配置に起因するものであった。広場への道の入り方にかんするパルティはほかにもある。〈幾何学的軸上の道の広場〉は正方形、円、楕円といった幾何学的形態であって、「道がしばしば4つの主要な軸に沿ってファサードの中心で開いていた (il arrivait souvent aux rues de s'ouvrir au milieu des façades suivant quatre axes principaux)」[CV-344]広場であり、開いた眺望が批判されている。なおこのパルティにかんしては、ジャンヌレは当代における用法を批判しているのであって、建物とともに用いた過去の用法については肯定している。本研究ではこうした過去の用法は建物やモニュメントがある広場に〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉(I⑭)として分類した。

こうした当代の〈幾何学的軸上の道の広場〉に分類されるようなパルティには、ジャンヌレが「広場」の節の冒頭で示す広場の3つの分類のうち「3番目の近代の広場、十字路や円形交差路 (à la troisième place modern, le carrefour ou le rond-point)」[CV-335] (Fig. 4.2.3)もある²⁴。これらの求心性のある配置の道は漏斗に例えられ、幾何学的形態の「中心」へと集中する交通は次のように批判的に記述されている。「これは《中心》である、と幾何学者たちが言っている (Ce sont des « centres », disent les géomètres) (…中略…) 市内電車、自転車、車、トラックの、この漏斗の奥への厳かな到着！ (l'arrivé majestueuse des trams, des bicyclettes, des autos et des camions, en ce fond d'entonnoir!)」[CV-335]

また、道の入り方についてはその角度にかんするパルティもある。たとえば「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分では〈側面に直角で道が入る広場〉に相当するルエスト広場 (Fig. 4.2.4)にかんして、ジャンヌレは道の端によって広場の四隅が開かれることを批判している²⁵。また「広場」の節ではおなじく〈側面に直角で道が入る広場〉にあたる「道のまっすぐな眺望によって全ての側面が開いた広場 (la place ouverte de tous côtés par les perspectives rectilignes des rues)」[CV-343]を批判している²⁶。この類例としてドレスデンのマルクト広場が挙げられてはいるが、「道が湾曲していることで眺めが十分に閉じられている (les aspects sont très suffisamment clos grâce à l'incurvation des rues)」[CV-343]ことが肯定され、実質「反対の例」²⁷のように扱われていることから、これは〈側面に直角以外で道が入る広場〉に相当する。ジャンヌレはシュルツェ＝ナウムブルクの『文化作品』第四巻『都市計画』から Fig. 4.2.5 に示す図を用いていたようである²⁸。広場に入る道は直線であり、道の「湾曲」というよりも広場に入る角度が直角ではないことによって道へ視線が抜けにくくなり、眺望が閉じられるのだと理解できる。ラ・ショー＝ド＝フォンの事例研究においても、同様の形態である市役所広場 (Fig. 4.2.4) は、何度も区切られているとはいえ最も美しいと賞賛されている。同図を見ると「広場」の節で示されたドレスデンのマルクト広場 (Fig. 4.2.5) と似た形をしており、道が広場の側壁に出ることでファサードが区切られているとはい

²⁴ シュノールは同図について Sitte, *op. cit.*, Abb. 84-86 と Henrici, *op. cit.*, Abb. 9 との類似を指摘している。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 336

²⁵ またここでは、小さな町の広場において幾何学的中心に噴水が配置されるかのような空間となることが批判されているが、Fig. 4.2.4 からシュノールの収録した写真 (Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 509, Abb. 103) からルエスト広場中心に何らかのモニュメントが配されているようには見受けられない。ジャンヌレはいわゆる「ルエスト広場のタイプのような最近のもの (les récentes dont le type est celui de la place de l'Ouest)」[CV-507]、すなわち「19世紀の広場」の典型的なタイプを批判しているようである。

²⁶ 本研究ではジャンヌレの文章とエムリーの図を基にダイアグラムを作成したが、シュノールは残されたスケッチからジャンヌレがジッテによるリヨンのルイ 16 世広場の図を用いようとしていたことを推察している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 121, note 259.

²⁷ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 121, "Dresden provides a counterexample to this".

²⁸ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 121 note 260, Shultze-Naumburg, *op. cit.*

え、それらと同様に道がわずかに湾曲しており視線が抜けにくくなっていることを肯定していると考えられる。

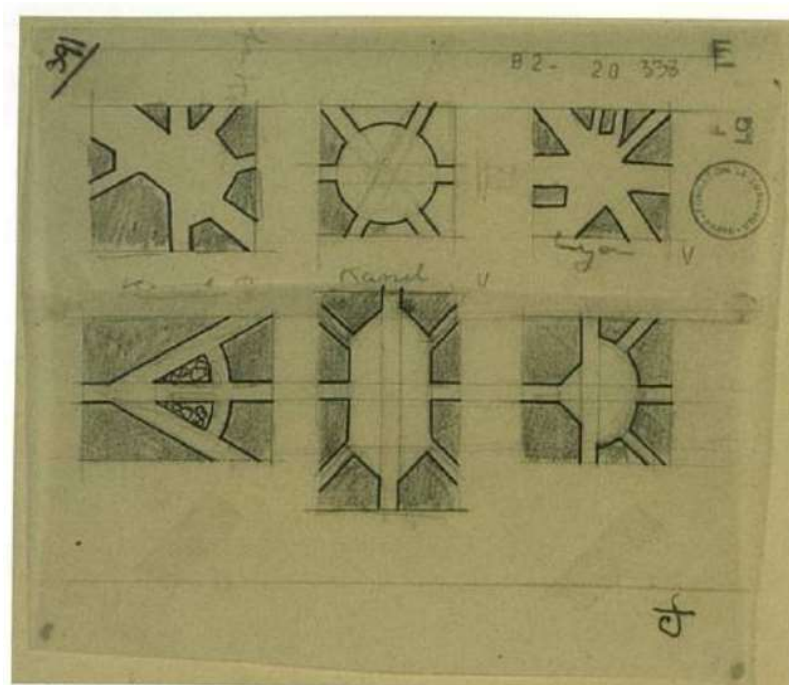


Fig. 4.2.3 drawn by Jeannerets following Sitte, *Der Städtebau*, and Henrici, *Beiträge* [CV-336] (B2-20-338 FLC)



Fig. 4.2.4 Squares in La Chaux-de-Fonds
(La Chaux-de-Fonds, *Plan de La Chaux-de-Fonds*, supplemented by author)



Fig. 4.2.5 Market-place, Dresden by Schultze-Naumburg
[CV-343] (Schultze-Naumburg: *Kulturarbeiten, Städtebau*, Abb. 33)

そしてジャンヌレは道による開いた眺望の改善策として〈道の端にアーチのある広場〉や〈列柱で囲まれた広場〉を論じている。前者は広場に通じる道の端による「好ましくない切れ目 (la trouée) を閉じるため」[CV-344]に用いられており、ヴェローナやシエナなど多くの都市で用いられたことが示されている。ジャンヌレはポンペイのフォルムの図も指し示しているが、これは『広場の造形』の図 (Fig. 4.2.6) を指していたようである²⁹。またジャンヌレはこうしたアーチの「魅力的な眺めのほかに (A côté de leur aspect charmant)」[CV-344]、構造的な観点からもアーチを肯定的に評価している。アーチを複数設けることで「レンガという小さな装置でできたとても高い壁が、たわんだり崩れたりしないようにして (empêchant les trop hautes murailles de petit appareil de brique, de faire ventre et de s'écrouler)」[CV-344]建物をさらに補強することができるのである。〈列柱で囲まれた広場〉については、「これはアンリ 4 世やルイ 13 世の治世下のパリのヴォージュ広場の建造者がファサードに静けさを最大限に残すために行った前例から派生した方法だと言える (ce qui nous amène à parler d'un procédé dérivé du précédent qui permit au constructeur de la place des Vosges à Paris, sous Henri IV et Louis XIII, de conserver à ses façades le maximum de tranquillité)」[CV-346]と肯定的に捉え、類例には〈不整形の広場〉の実例であったサンマルコ広場の執政官官邸も挙げてスケッチを示している (Fig. 4.2.7)³⁰。なおこのとき、ジャンヌレはアーチの実例として先ほど言及したポンペイの図を再度指し示しながら、フォルムは単純なアーチによって閉じられてはいないと述べ、建築家たちは「厳かな柱廊 (portique) の後ろにすべての道を到達させた」[CV-346]として列柱による閉鎖性を説明している。ポンペイのフォルムについては道を閉じる方法にかんして観点が揺れ動いていたようである。Fig. 4.2.6 より周縁部の列柱が確認できる。このように〈道の端にアーチのある広場〉や〈列柱で囲まれた広場〉では側壁の道に視線が抜けず、広場が閉じて見ることが好まれている。

²⁹ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 123, note265. Sitte, *op. cit.*, Abb. 1

³⁰ シュノールも指摘しているように、これは『広場の造形』の模写である (Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 347, Sitte, *op. cit.*, Abb. 49)。またジャンヌレは別の部分では「広場と道を閉じるための解決策 (Solution pour clôture de place, et rue)。Bellini の絵画の後のポストカード」[CV-349]と記して広場の眺めをスケッチしている。広場は列柱で囲まれている。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 349 参照。

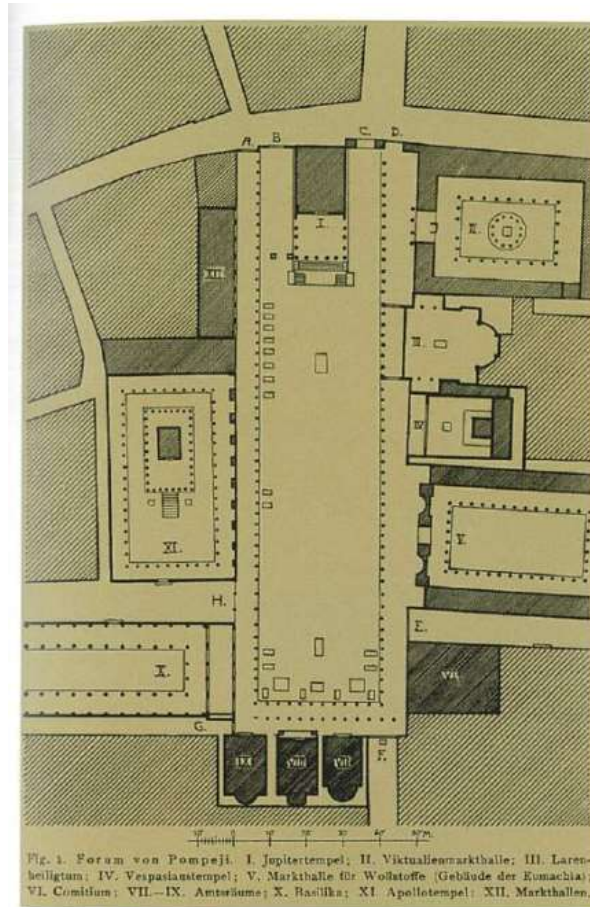


Fig. 4.2.6 Le Forum de Pompei by Sitte [CV-345] (Sitte, *Der Städtebau*, Abb. 1)

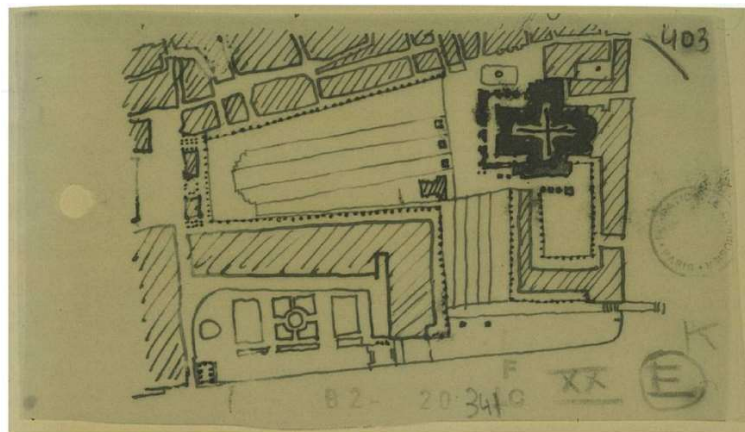


Fig. 4.2.7 Piazza San Marco, Venice drawn by Jeanneret [CV-347] (B2-20-341)

(広場の隅)

広場の隅のパーティには、(交差点が隅から外れた広場) (I⑧) がある。ジャンヌレは Fig. 4.2.8 に示すスケッチを残しており、同図中矢印は車の軌道を示している³¹。ジャンヌレは同図中 b から e に比べて残りの1つのパーティは交通渋滞が激しいことと、「囲いの性格を目立たせるべきまさにその場所で広場を開き、広場の最も重要な美的状態を弱める (ouvrant la place là précisément où doit s'accuser le caractère de clôture, elle infirme la plus importante des conditions esthétiques de la place)」 [CV-341] こと、つまり広場が開いて見えることを批判している。草稿からは、この残り1つのパーティがどのような形態なのかは判然としないが³²、いずれにせよ b から e は、シュノールも指摘するように、「道による広場の開きが、閉じた隅ができるだけ影響を受けなくて済むようなさまざまな方法で、隅から後退あるいは前進している」³³パーティのパターンなのである。たとえば d では左下の建物が広場に向かってせり出しており、「この道の入り口の様式によって生まれるあいた空間の悪い印象 (la mauvaise impression de vide créé par ce mode d'embouchure)」 [CV-342] の改善にその建物が有効であることが示されている。

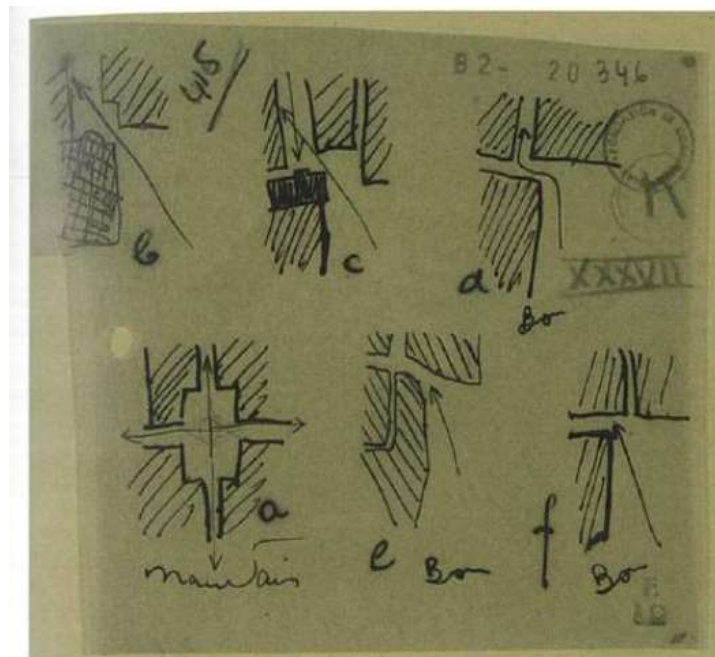


Fig. 4.2.8 Corner situations of squares drawn by Jeanneret,
following Schultze-Naumburg, *Kuturerbeiten, Städtebau* [CV-341] (B2-20-346 FLC)

³¹ シュノールは Fig. 4.2.8 b~d のスケッチについて、シュルツェ=ナウムブルクの『文化作品』第四巻『都市計画』の図との対応関係を示している。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 341, または Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 121, and p. 121 note 255 を参照。シュルツェ=ナウムブルクは『文化作品』第四巻『都市計画』の中で、道が広場に通じて開く問題についてジッテよりも詳細に検討していた。シュルツェ=ナウムブルクは閉じた広場のレイアウトに適合している交差点という、交通量よりも美学 (aesthetics) にかんする形態論を論じていたが、一方でジャンヌレはシュルツェ=ナウムブルクを参照しながらも交通渋滞を避けるような、十字路を2つのT字路に分割する形態を論じていた。これはシュノールによればジッテ的なモデルであった。

³² Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 341 参照。残り1つのパーティを指す図番号は空欄になっているようであり、Émery, 1992, *op. cit.*, p. 203, Fig. 24 a のような形態なのか、あるいは Fig. 4.2.8 中左下 a のような形態なのか判然としない。そのため本稿ではこのパーティを Table 4.2.1 の類型化から除外した。

³³ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 121.

○建物やモニュメントがある広場

建物やモニュメントがある広場には、対比的に捉えられる〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉(I⑪)と〈モニュメント中心配置の大きすぎる幾何学的広場〉(I⑫)、広場における配置にかんする〈端にモニュメント配置の広場〉(I⑬)と〈左右非対称建物配置の広場〉(I⑭)、大きさが対照的な教会前広場である〈小さな教会前広場〉(I⑮)と〈大きな教会前広場〉(I⑯)、とりわけルネサンスの教会前広場の平面比率にかんする〈奥行型の教会前広場〉(I⑰)と〈間口型の教会前広場〉(I⑱)³⁴、そしてとくに広場の主要建物とその周辺との関係を論じる〈広場の奥に建物がある広場〉(I⑲)と〈壮麗なファサードが建物を囲む広場〉(I⑳)がある。

〈大きすぎない幾何学的広場〉は「絶対王政の広場」の典型例である。絶対王政の広場は「人間的尺度 (l'échelle humaine)」[CV-382]に則っており、「富を見せびらかしたいと思うときにつくるような広場 (elle[引用者注: des places] que nous faisons lorsque nous voulons étaler notre luxe.)」[CV-204]に比べてとても小さい。ジャンヌレはこうした控えめな規模を賞賛している。ところで先に見たようにジャンヌレは当代において〈幾何学的軸上の道の広場〉(I③)がかつての手法を用いずに作られていることを批判していたが、その「かつての手法」に相当するのがこの〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉である。ルイ 14 世やその後継者のもとで用いられたこの方法は、「広場の入り口から数百メートル離れたところに宮殿や教会などの高貴な建物を用いることで、こうした道をいつも荒々しく閉じていた (fermaient toujours brutalement ces rues, à quelque cent mètres de leur embouchure dans la place, au moyen d'un palais, d'une église, d'un édifice noble quelconque)」[CV-344]³⁵。当代の用法では眺望が開いているのに対し、こうした過去の用法では広場が閉じられていることをジャンヌレは肯定しているのである。

この「絶対王政の広場」のパーティは「支配者の精神、強力な中央集権—《朕は国家なり》—を具現化し (Incarnant l'esprit du maître, la puissance centralisatrice — « L'Etat c'est moi »—)」[CV-377]た結果である。その「具現」方法については、ジャンヌレはたとえば広場のファサードでのモチーフの反復による「統一性 (l'Unité)」[CV-377]を説明している³⁶。広場の側壁の道はあまり奥行が深くなく、道の端から数百メートル離れた場所で宮殿や凱旋門などによって閉じられていなくとも、「道の入り口 (l'embouchure) を貫いてファサードのモチーフを追い求め、このようにして重要な統一性を増やすことで、折の悪い切れ目が偉大な建築的性格を持つ柱廊によって無効にされていた (la trouée inopportune dans les parois de la place, était annulée par des portiques à grand caractère architectural, poursuivant à travers l'embouchure des rues, les motifs des façades, ajoutant ainsi à l'unité imposante)」[CV-378-379]ことを肯定的に記している。つまり実際には道の端が閉ざされてはいなかったとしても、ファサードのモチーフが側壁の道の端を貫いて連続することで統一性が生み出され、道の端が

³⁴ 〈奥行型の教会前広場〉と〈間口型の教会前広場〉という呼称はジッテの著作を参考にした。ジッテ, 大石訳, 前掲書, p. 55.

³⁵ シュノールによれば、この部分でジャンヌレはプリנקマンの『広場とモニュメント』を参照していたようである。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 122.

³⁶ シュノールはこうした記述について、個々のフランスバロックの広場を正確に記したプリנקマンの記述をジャンヌレがまとめ一般化して論じている、というように分析している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 135-136.

閉ざされているかのように見える状態を肯定しているのである³⁷。「具現」方法にはほかにも、モニュメント（騎馬像）を強調するよう広場とモニュメントの比率を計算することや、広場に入る道にいるときから人々がモニュメントに気づくことなども論じられている。このパルティではモニュメントは広場の中心に設置されている。ジャンヌレはルイ 14 世の広場の幾何学的な形態とその中心にあるモニュメントを指しながら、ヴィクトワール広場、ヴァンドーム広場、ルーヴルの中庭、ナンシー（Fig. 4.2.9、現在のスタニスラス広場）³⁸など他の場所で派生したものも含めて、「完璧に美しかったし、最大の賞賛にさえ値していた（*parfaitement belle et digne encore de notre plus grande admiration*）」[CV-377]と称揚している。そして広場の比率はこのモニュメントを強調するよう計算され、モニュメントの大きさや高さなどは広場自体によって決められているとして、広場とモニュメントが互いに効果を高め合う設計を指摘している。また、当時の交通量はわずかであったため、中心配置による交通への悪影響はなかったとしている。そして広場にやってくる人々は、広場の中心に据えられたモニュメントを広場の軸上の道にいるときから視認でき、「こここそ国王の広場である（*c'est là la place du Roi.*）」[CV-377]と認識できる。広場は支配者（*le maître*）が住まう場所であり、「宮殿の前にある玄関広間（*Vestibules d'honneur au devant des palais*）」[CV-377]なのである。とくにこうした広場の派生例であるヴォージュ広場については、革命前後の広場をそれぞれ描写し、騎馬像が孤独に佇み「周囲の枠組みと対照をなす（*en une matière contrastant avec le cadre ambiant.*）」[CV-379]革命前の広場の状態を肯定している³⁹。

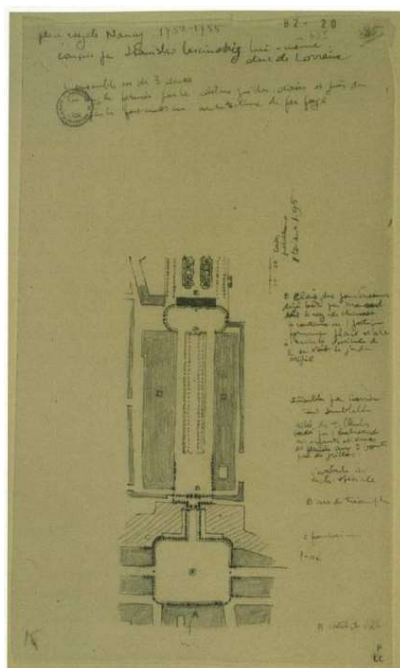


Fig. 4.2.9 Place Royale in Nancy, drawn by Jeanneret
copied from Brinckmann, *Platz und Monument* [CV-378] (B2-20-335)

³⁷ 実例には追加的にルイ 15 世広場も挙げられており、シュノールによればジャンヌレはブリンクマンを参照していたようである。

³⁸ シュノールによれば、同図はブリンクマンの『広場とモニュメント』から模写したものであったようである。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 378. Brinckmann, *op. cit.*, Abb. 40

³⁹ ヴォージュ広場についてはブリンクマンを参照していたようである。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 136, note 332.

一方「19世紀の広場」の代表例にあたる〈大きすぎる広場〉は、「平凡な表面 (la surface ordinaire)」[CV-383]や「あいた空間 (Le vide)」[CV-384]の醜さが批判されている。事例にはベルリンの国会議事堂前広場、ロンドンのバッキンガム広場、パリのエトワール広場が示されている⁴⁰。とくにエトワール広場には大きさを比較するものがなく、広場から見て凱旋門が立派に見えないと批判されている。また批判の後には交通問題が少々言及されている。ジャンヌレは、こういった絶対王政を模倣した「偉大な時代に倣った星形の広場」[CV-384]は交通渋滞を考慮して計画されてはいないので「《交通の広場》(«places de circulation»)」[CV-384]との呼称は間違いだと指摘する。そしてエトワール広場に限り、その大きさはパリの交通問題には十分であると認めている⁴¹。またこういった「19世紀の広場」では幾何学的中心にモニュメントがあり、「そしてモニュメントと広場自体の4つの眺望が似通っていて、あるいは少なくとも2つずつがそうであって単調さを引き起こしていた (Les quatre aspects perspectifs du monument et de la place elle-même, étaient dès lors semblables, – ou du moins l'étaient-ils deux à deux provoquant la monotonie)」[CV-359]こと、つまり眺望の単調さも批判されている。また、ラ・ショー＝ド＝フォンの事例研究においても、マルシェ広場 (Fig. 4.2.4) の中心に配置された小建築物が、広場に対する美の貢献のなさを批判されている⁴²。このマルシェ広場の事例の直前に論じられている。ジャケ＝ドゥロ広場 (Fig. 4.2.4) の建物については、図面上では建物が広場を美化するように見えたにもかかわらず実際に建つと広場の性格を奪ったとして批判されている。建物位置は正確には幾何学的中心ではなく、批判の意図は不明確であるが、前後の文脈も考慮するとマルシェ広場と同様に対称性のある配置を批判されているとも考えられる。

反対に〈端にモニュメント配置の広場〉は様々な角度から作品鑑賞が可能になるために勧められている。ジャンヌレが「《死点》の法 (la loi du «point mort»)」[CV-366]に則っているとして肯定する配置場所も、こうした広場の端を指すようである⁴³。つまりジャンヌレの言う「死点」は軸から外れた広場の端を指す⁴⁴。ジャンヌレは数々の事例から、モニュメントは端に集められ、広場の中心はつねに自由な状態に保たれる

⁴⁰ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 137 を参照。ベルリンの国会議事堂前広場への批判はプリンクマン『広場とモニュメント』から影響を受けたようである。ただしシュノールも指摘するように、この事例におけるスケール感の欠如への批判はジッテの理論と類似している。またシュノールは、プリンクマンによるドイツの都市デザインへの批判をジャンヌレがパリの適用しているとして、プリンクマンが過大な規模のミュンヘンの計画を批判する部分を引用している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 137-138.

⁴¹ エトワール広場の規模が交通に適していることも、プリンクマン『広場とモニュメント』からの援用であったようである。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 138.

⁴² マルシェ広場にかんしてはまた、この広場の建設によって建物同士が不調和な状態で建つようになったとして批判的に捉えられている。Schnoor, 2008, S. 507.

⁴³ また、ジャンヌレはこの説明において、子供が本能的に死点で雪だるまを作っていたと示したジッテの調査に言及している。これは、轍が雪を分けて取り残した部分に雪だるまが作られたのと同様、モニュメントも、交通の激しい場所や、広場の中央、記念門の軸から外れた配置になっているというジッテの指摘を指すと思われる。『広場の造形』第2章「広場の中央を自由にしておくこと」の内容。ジッテとの類似については Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 133 も参照。

⁴⁴ ジャンヌレが用いる“point mort”という仏語は、ジッテが記した独語“toten Punkt”の直訳であると思われる。実際マルタンも仏語版『広場の造形』の中で“points morts”という表現を用いており、ジャンヌレはマルタン経由でこの語を用いた可能性があるが、いずれにしろ独語から直訳された語であろう。『広場の造形』の原著と日本語版を見比べてみると、“toten Punkt”は「死角」と訳出されているようであるが（たとえば Sitte, *op. cit.*, S. 28 “Zu der antiken Regel, die Monumente am Rande der Plätze herum zu stellen, gesellt sich also die weitere echt mittelalterliche und mehr nordische: Monumente, besonders aber Marktbrunnen, auf den toten Punkten des Platzverkehrs aufzustellen.”）という部分は次のように邦訳されている。「さて、広場の端にモニュメントをおくという古典古代の原則については、モニュメント特に市場広場の噴水を交通の死角に配置するという生粋の中世的、さらに北方的原則がくる。」ジッテ、大石訳、前掲書、pp. 34-35.）、本研究ではジャンヌレがギュメと斜体で強調していたことを考慮して、文字通り「死点」と訳出する。

との原則を導き出したという⁴⁵。この配置場所は轍が高く取り残した場所であるので、モニュメントは車の往来を妨げないし、人々は車に邪魔されることなくモニュメントを鑑賞できる。ジャンヌレによれば、「尊重すべき最初のことは自由な交通である (La première chose à respecter, c'est la libre circulation)」[CV-366]。このパルティではほかにも、素材の対照やモニュメント自体の大きさの主張するような配置が肯定されている。たとえばジャンヌレは、フィレンツェのシニョーリア広場にあるミケランジェロのダヴィデ像と、パドヴァにあるドナテッロのガットメラータの騎馬像⁴⁶との2例をとくに賞賛している⁴⁷。ダヴィデ像にかんしては、ジャンヌレはミケランジェロによる当初の配置を賞賛している。広場と同一平面上に配置することでダヴィデ像は「まるで、群衆のなかに降りてきた巨人かのように (comme un géant descendu parmi la foule)」[CV-370]その大きさが強調されている。またジャンヌレは、広場の端において古い宮殿の褐色の壁を背景に白く光り輝く像の様子を描写している。

また、かつて用いられていたという〈左右非対称建物配置の広場〉も、建物周辺に異なる性格の広場が生じることで「建物を多様な角度から見せていた (présentaient l'édifice sous des angles multiples)」[CV-360]ことが賞賛されている。事例にはサン・ミケーレ教会広場などが挙げられている (Fig. 4.2.2 中、中右)⁴⁸。

〈小さな教会前広場〉に相当する事例にはミュンヘンのフラウエン教会⁴⁹がある (Fig. 4.2.2 中上)。ジャンヌレはこの事例とヴェネツィアのサンマルコ広場 (Fig. 4.2.7) とを交互に対比的に説明している。サンマルコ広場の形態は建物正面にかんしては〈奥行型の教会前広場〉、建物側面にかんしては〈間口型の教会前広場〉に見えるが⁵⁰、ここではそういった分析はなされていない⁵¹。ジャンヌレによれば2つの事例は性格が正反対ではあるが、ジャンヌレはこれらの事例においてともに、建物に対応した広場の大きさや素材の対比による建物の強調を賞賛している。前者は曲線からなる三角形の小さな広場であり、簡素な赤煉

⁴⁵ ジャンヌレの示す原則は、明らかに、『広場の造形』第2章「広場の中央を自由にしておくこと」の表題にも表れているような、広場の中央や軸から外したモニュメント配置を勧めるジッテの援用である。

⁴⁶ ビアツァ・デル・サントに立つ傭兵隊長エラスモ・ダ・ナルニ將軍の記念像を指すと思われる。ガットメラータの渾名は斑猫、老獺の意。ジッテもその中心を外した配置による「壮大な印象」を賞賛している (ジッテ, 大石訳, 前掲書, p. 34.)。

⁴⁷ ジャンヌレはこれら2つのモニュメントをイタリア旅行で知ったようである。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 133 参照。ガットメラータの事例にかんしてはプリンクマン『広場とモニュメント』を参照していたようである。描写の詳しい比較は Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 133-134 参照。ダヴィデ像の数年前に行われた配置については、ジャンヌレはジッテへの賛同を明言し批判している。この新しい配置では、像は6~8m 高い場所に、それも広場の中心に配され、像の大きさが目立たないのである。当初の配置を賞賛し後の改悪を批判する姿勢はジッテと共通であるが (シュノールもジャンヌレがジッテを参照していることを指摘している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 345, note 24.)、シュノールによればジャンヌレはダヴィデ像にかんしてもプリンクマンの同書を参照していたようである (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 134)。ダヴィデ像は1504~1873年の間、ミケランジェロが選んだ、正面入り口の左手に建っていた。『広場の造形』第1章「建物とモニュメントと広場の関係」では、広場が狭く、像が人間の大きさと比較されいっそう大きく見えることや、パラッツォの暗色の石積み背景となり彫刻を浮き立たせていることが賞賛されている。像の配置と素材の対比にかんするジャンヌレの指摘は、明らかに上記のジッテの援用である。しかし像は後にアカデミア美術館に収容され、ブロンズ製のレプリカがフィレンツェ郊外のヴィアーレ・デイ・コッリにある広大な広場の中心に配置された (ジッテ, 大石訳, 前掲書, p. 28)。ジッテは駐車場やカフェなどの入り混ざる雑多な場所では像の大きさが主張されないとして批判している。

⁴⁸ ジャンヌレが単にルッカ (Lucques) と記す広場はイタリア、トスカーナ州ルッカのサン・ミケーレ教会広場を指すと思われる。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 129 と同頁 Note 298 も参照。サン・ミケーレ教会広場は、ジッテも端や隅に建物配置された例として挙げている。ここでジャンヌレの用いる理論はジッテのそれであり、この類似については Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 128 も詳しい。

⁴⁹ ジッテの『広場の造形』第7章「北ヨーロッパ諸国の広場構成」にもフラウエン教会が登場する。そこでは教会が周囲の壁から独立して配された事例として些か否定的に語られるが、それでも、幾何学的中心に配する当世の広場に比べて好ましく捉えられている。

⁵⁰ ジッテ, 大石訳, 前掲書, p. 78

⁵¹ ここでのジャンヌレはジッテの分析に依っているわけではない。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 125.

瓦の「ざらざらして一様な壁 (un mur rude et uniforme)」[CV-350]の大聖堂が人々を圧倒している。後者は広い台形広場であり、これが聖堂を「古典的で簡素な宝石箱の中にある空想上の東方の宝石かのように」[CV-350]演出している。側にある赤く無地の無骨な鐘楼は、足下にある彫刻の施された白いロτζアによって大きさが強調されて見えることを肯定的に記されている。

こうした「ミュンヘンのフラウエン教会の力を作った原則」[CV-351]は中世ヨーロッパ全体に広まっていたという。この原則とは「大きさと支配を主張しようとする意志を持って、大聖堂の足下に広がっている広場はいつもファサードそのものよりも小さかった (la volonté étant d'affirmer la grandeur, la dominance, la place s'étendait au pied des cathédrales était toujours plus petite que la façade même)」[CV-351]という傾向を指す⁵²。

この反対例である〈大きな教会前広場〉では建物が強調されないことが批判されている。たとえばパリのノートルダム大聖堂の事例では、大聖堂の大きさを強調する小さな周辺建物が撤去され、代わりに巨大な建物が建てられことで、大聖堂のファサードは「当惑し呆然としている (désorienté, anéantie)」[CV-353]ようだとして批判的に描写されている⁵³。なお仏語版『広場の造形』の章「広場のいくつかの例」には改造前後の図面 (Fig. 4.2.10) が掲載されている⁵⁴。工事前 (同図上) と比べて工事後 (同図下) の空地が大きくなっている。

このようなノートルダムの退廃を受け、ジャンヌレはルネサンスの精神を引用するよう主張する。この事例にあたるのが〈奥行型の教会前広場〉〈間口型の教会前広場〉のパーティである。これらについてジャンヌレは次のような「2つの一般的原則 (deux principes généraux)」[CV-353]を明示する。1つ目が「ファサードの幅よりも高さが大きいなら、広場は下部に深く広がる。」[CV-353]、2つ目が「ファサードが幅を広げると、広場は奥行きよりも幅が広い形になりその性格が共鳴する。」[CV-353]というものである。これらは「大聖堂の前の広場の線がしたように荘厳というとても暴力的な印象を観衆に与えることが目的ではなく、建築的形態の静けさの中にある建物をその眺めに示すことが目的であるとき (Lorsque le but visé n'est pas de fournir au spectateur l'impression très brutale du grandiose, ainsi que le faisait le tracé du parvis des cathédrales, mais d'offrir à sa vue un édifice dans la tranquillité de ses formes architecturales)」[CV-353]に導き出される原則である。これらのパーティでは建物が静かな印象の中で見ることができることが肯定されているのである⁵⁵。この原則に則った広場にはたとえばマントヴァのサンタ

⁵² こうした〈小さな教会前広場〉にあたる事例にはルーアン大聖堂も分析されている。ファサードを強調するような小さい広場は、ファサードや翼廊部分で3か所も用いられているという。また、訪問者に事前にファサードを見せないような道の入り方が印象をより強め、滝のように頭上になだれ込む彫刻群が広場に着いた人々を圧倒する。シュノールはこのルーアンの事例を、広場を集めることにかんするジッテの章を説明するためにジャンヌレが自身の経験をもとに描いた部分だと分析している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 125)。シュノールによればジャンヌレは1909年にルーアン大聖堂の写真撮影している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, 同頁 note276.)。またジャンヌレは「フィレンツェの古い宮殿 (Le Palais Vieux, à Florence)」[CV-351]についても言及している。これはシニョーリア広場のヴェッキオ宮殿のことだと思われるが、ここでは事前に見えるのではなく広場に突然現れて圧倒する鐘楼の描写が見られることから、先のように〈不整形の広場〉の事例として挙げられているのではなく、〈小さな教会前広場〉の類例として扱われていると読み取れる。

⁵³ ノートルダム大聖堂前にはオスマンが巨大な広場を設置した。

⁵⁴ シュノールはジャンヌレがプリंकマン『広場とモニュメント』から模写したパリのノートルダム寺院周辺の旧市街のスケッチを収録している。Schnoor, 2008, *op. cit.*, S. 354.

⁵⁵ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 126 こうした原則の参照源は明らかにジッテであるが、シュノールも指摘するように、ジッテは『広場の造形』の中でこの内容に相当する第四章「広場の大きさと形」において、ここでジャンヌレが挙げている5つの事例、ヴェローナのドーム広場、ジェノヴァのサンシーロ教会前広場、ブレシアのサン・ジョヴァンニ教会広場、マントヴァのサンタンドレア教会広場、ウルムの大聖堂に言及しているわけではない。

ンドレア教会広場が挙げられている (Fig. 4.2.2 中下)。この事例では、「主要なファサードには奥行のある広場、側面のファサードには(引用者注:横に)長い広場 (place profonde en façade principale, place longue en façade latérale)」[CV-354]がある。

なお、〈奥行型の教会前広場〉の一例にはかつてのウルム大聖堂も挙げられているが、この広場にかんしては後に経た周辺建物撤去等の工事についても詳述されており、工事前後の広場はそれぞれ先の〈小さな教会前広場〉と〈大きな教会前広場〉としても捉えられる。〈小さな教会前広場〉にあたる工事前については、「ファサードの大きな三角形 (grand triangle de la façade)」[CV-354]を強調する教会前広場の小ささや、広場にやってくる人をこのファサードによって驚かせるような入り方の道、性格の異なる広場を分け光景を豊かにする囲い壁、後陣の左右や後ろの空地の小ささが肯定的に記されている。これは〈小さな教会前広場〉に相当した「ミュンヘンのフラウエン教会前広場の形や、昔のパリのノートルダム前の広場の形をしていた」[CV-354]⁵⁶。それに対し工事後の〈大きな教会前広場〉では、広場が4倍に拡張されたことが強く批判されている⁵⁷。ジャンヌレは大聖堂について次のように述べている。要塞化した中世都市では、水平方向に広げられずに垂直方向に伸びた大聖堂を「対照によって (par le contraste)」[CV-351]強調するために広場が小さくなった、つまり「大聖堂自体が教会前広場の大きさや深さを定めた」[CV-351]。とりわけ控え壁やその派生物を使用する北方の大聖堂については、側面の空地を小さくすることで教会側面にある「長くてしばしば痩せた腕」[CV-352]かのような尖塔やフライングバットレスの不愉快な眺望が隠され装飾の施された正面のみが見える状態を賞賛している⁵⁸。

このように、広場と主要建物との関係については道や周囲の建物も考慮して論じられている。それは教会前広場のパーティに限ったことではない。〈壮麗なファサードが建物を囲む広場〉では、建物の印象の弱さが否定的に捉えられている。周囲の教会や宮殿のファサードは、「荘厳な性格 (le caractère de grandeur)」[CV-334]を強調するために18~20メートルもの高さに計画されているが、こうした壮麗な周辺建物の中に配すると建物は目立たない。なおジャンヌレはシュルツェ=ナウムブルク『文化作品』第四巻『都市計画』に掲載の図を参照し模写していたようである (Fig. 4.2.11 中右上)⁵⁹。〈広場の奥に建物がある広場〉は「こうしたテーマの変化形」⁶⁰にあたる。ジャンヌレはヘンリチの『都市計画における実用的な美学への貢献』の理論と図 (Fig. 4.2.12) を参照していたようである⁶¹。このパーティでは、「彼 (引用者注:幾何学者) は広い広場で道の先端を開き、大きな幹線道路のちょうどその軸や広場の奥には理想的な建物が建つ (Il ouvrira l'extrémité de la rue en une vaste place, et dans l'axe même de la grande artère, au fond de place, s'élèvera l'édifice rêvé)」[CV-334]。これは「華やかな建物によって美しく道を終えたい (voudra la

⁵⁶ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 126, note 283. ジャンヌレは Braun, E.: Eine deutsche Stadt vor hundert Jahren, in *Der Städtebau*, 6, no. 10, 1909, pp. 135-137 からウルムの平面図をトレースしていたようである。

⁵⁷ ジャンヌレはウルムの拡張工事で、教会前広場の噴水が美術館に収容されたことを批判しているが、この噴水をドーム広場へと移すウルム市企画のコンペを雑誌“Städtebau (都市計画)”から知り驚愕したことも記している。シュノーールによれば、1905~1906年の“Süddeutsche Bauzeitung (南ドイツ建設新聞)”に広場とコンペにかんして報じた記事が3つ掲載されたようである (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 128, および同頁 note 291.)。テオドール・フィッシャー (Theodor Fischer) によるエッセイ、カール・ホシュダー (Carl Hocheder) による“Städtebau (都市計画)”に掲載のエッセイ、そして次の記事である。“Wetthwerb zum Ulmer Münsterplatz (ウルム市ミンスター広場コンペ)” in *Süddeutsche Bauzeitung*, 16, No. 50, 1906, pp. 393-396, and No. 51, pp. 401-403.

⁵⁸ 『広場の造形』第7章「北ヨーロッパ諸国の広場構成」のジッテの主張と同様である。

⁵⁹ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 116. Schultze-Naumburg, *op. cit.*, Abb. 79

⁶⁰ “a variation on this theme”, Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 116.

⁶¹ Henrici, *op. cit.* Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 116-117.

terminer bellement par un édifice splendide) [CV-334]と意図したものであったが、結果として側面の建物は道から見えないので奥の建物を引き立てない上、奥の建物は道から離れており大きさを主張しないし、歩行者は道の先端にいるときから建物に見慣れているので広場に着いたときには建物の印象が弱まってしまうことなどが次のように批判されている。「その結果は不幸にも失敗するだろう。というのも、歩行者が道を進むと、たとえば a 点では側壁 fc, eg はどれも全く見えないだろうし、建物はさらに離れており、そのまっつき荘厳さで歩行者に対して自ら主張することはないだろうから。広場に着くとその印象はとても弱まるだろう。道の先端から歩行者の目は大きな建物の眺めに慣れていたし、そうしてこの建物は感動させる力をすべて失うだろうから。(L'effet, malheureusement sera manqué, car le piéton, en s'avancant dans la rue, au point a par ex, ne verra rien des parois latérales fc, eg et l'édifice, encore éloigné, ne se proposera pas à lui dans toute sa grandeur. Arrivé sur la place, son impression sera très amoindrie, car depuis l'extrémité de la rue, son œil s'était habitué à l'aspect du grand édifice qui dès lors perdra toute puissance de saisissement.)」 [CV-334]

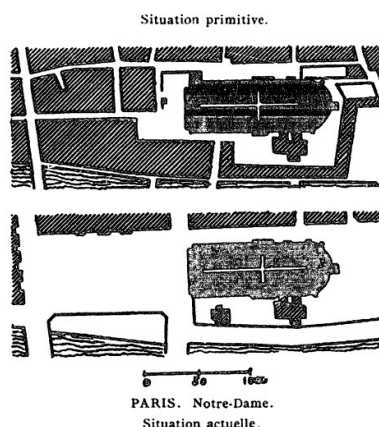


Fig. 4.2.10 Parvis of Notre-Dame, Paris, before and after clearance
(Sitte, Martin tr., *L'Art de bâtir les villes*, .p. 89, Fig. 59)

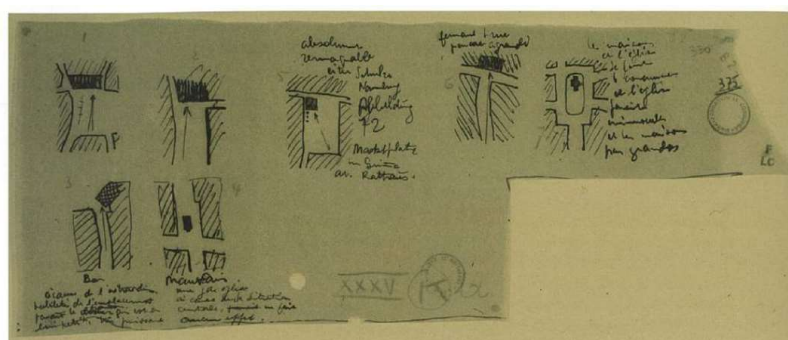


Fig. 4.2.11 Sketches of monumental buildings at square drawn by Jeanneret
following Schultze-Naumburg, *Kulturarbeiten, Städtebau* [CV-332] (B2-20-330 FLC)

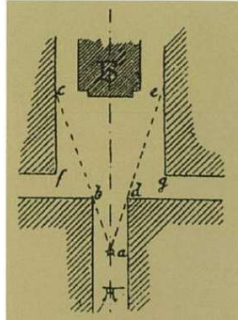


Fig. 4.2.12 Diagram by Henrici [CV-334] (Henrici, *Beiträge*, Abb. 7)

II 複数の広場

複数の広場には〈高さの異なる2つの広場〉(II①)がある。〈高さの異なる2つの広場〉については、ジャンヌレはシュルツェ=ナウムブルクを参照し図を模写していたようである (Fig. 4.2.13)⁶²。草稿の記述は特定の広場を指してはいないものの、その描写はひじょうに具体的である。高低差のある2つの広場を結ぶのは「ピクチャレスクな、あるいはモニュメンタルな階段 (escaliers pittoresques ou monumentaux)」[CV-362]であり、高い方の広場は大きな擁壁 (le grand mur de soutènement) で支持されていて、並木がそれを飾っている。こうした描写は同図のスケッチとは必ずしも対応していないが、これらの広場は「2つの広場の、とても特別なそしてピクチャレスクなあるいはひじょうに建築的な源が豊かな性格 (le caractère très spécial et riche de ressources pittoresques ou puissamment architecturales de deux places)」[CV-362]を持つとして賞賛されている。ジャンヌレは地面の起伏を尊重したこれらのデザインの豊かさを豊かな色調に表現して讃えている⁶³。

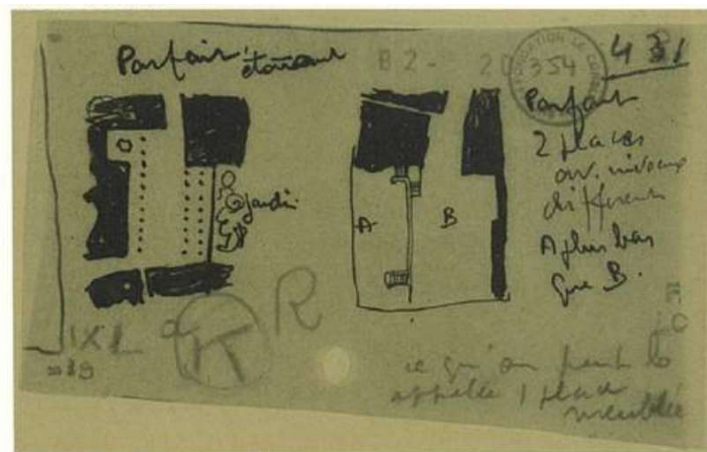


Fig. 4.2.13 Two squares drawn by Jeanneret, following Schultze-Naumburg [CV-362] (B2-20-354 FLC)

⁶² Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 130.

⁶³ 「製図工のパレットの上の豊かな無限の色調、つまり、よく考えようとすれば起伏のある都市の地面が何度も与えてくれたであろう色調 (une gamme infiniment riche sur la palette du traceur de plans, gamme que fournirait maintes fois le sol des villes accidentées, si on voulait bien y songer)」[CV-362]。

4-3 パルティの評価軸

視覚的・身体的観点の評価軸

前章のようにパルティを分類しその評価を見渡してみると、ジャンヌレの評価はいくつかの共通の評価軸に基づいていることが読み取れる。まず目に留まるのは視覚的閉鎖性にかんする評価である。ジャンヌレはたとえば〈側面に直角以外で道が入る広場〉(I⑤)のように広場が閉じて見えるような道の入り方を好み、〈道の端にアーチのある広場〉(I⑥)といった広場に通じる道の端を閉じるための改善策も提案していた。広場の隅にかんしては、〈交差点が隅から外れた広場〉(I⑧)のように交差点を隅からずらすことで広場の閉鎖性が保持されることが肯定的に論じられていた。建物やモニュメントを有する広場にかんしても、閉じた広場である〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉(I⑩)と「あいた空間」を有する〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉(I⑫)が対比的に論じられていた。

こうした対比的な説明は広場の規模にかんしても同様に展開されていた。〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉に対して、〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉では「*人間の尺度*」に則った控えめな規模が賞賛されていた。このように、ジャンヌレが下す評価には広場の身体的な大きさという観点もある。

この2つのパルティの対比的な記述は、モニュメントを含めた検討においても見られた。「19世紀の広場」にあたる〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉では大きさを比較するものがないので広場から見てモニュメントが立派に見えないことが批判され、「絶対王政の広場」である〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉ではモニュメントを強調するような配置や広場の比率が肯定されていた。こういったモニュメントの強調にかんする観点は〈端にモニュメント配置の広場〉(I⑬)でも同様に見られ、モニュメントを強調するような素材の対照や配置が肯定されていた。こういった主張は対象がモニュメントではなく建物の場合も同様である。〈小さな教会前広場〉(I⑮)は、素材、広場の小ささ、側面の空地の小ささ、道の入り方、そして周辺建物との対比による建物正面の強調が肯定されていた。反対に〈大きな教会前広場〉(I⑯)は、その大きすぎる規模や小さな周辺建物の撤去によってファサードが強調されない状態が批判されていた。このように、広場のパルティの評価には建物やモニュメントといった広場を構成する対象物の強調に基づいた観点もある。〈奥行型の教会前広場〉(I⑰)と〈間口型の教会前広場〉(I⑱)にかんしては教会建物を強調することが分析されているわけではないが、静けさの中で建物に対峙できることが肯定されていたことから、広場における主要建物の見え方という、上述の建物の強調に関連した観点の評価であると言えよう。

〈端にモニュメント配置の広場〉(I⑬)や〈左右非対称建物配置の広場〉(I⑭)では、モニュメントや建物の周囲に生じる広場の形態が変化に富みモニュメントや建物を多様な角度から鑑賞できることも好まれていた。これらは眺望の多様性にかんする観点から評価されている。また複数の広場のパルティについても、〈高さの異なる2つの広場〉(II①)において地面の起伏に即したデザインの豊かさが賞賛されており、多様性に関連する評価として捉えられる。

ところで〈卍状の道の正方形広場〉(I②)は広場の閉鎖性が肯定されていたが、広場における物体までの距離を正確に視認することが難しいことは批判されていた。そして〈不整形の広場〉(I①)はその反対

例として肯定されていた。これらは物体までの距離という、空間における視認の正確性の観点から評価が下されている。

実用的観点の評価軸

上述の観点では基本的に批判されていた〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉(I⑫)は、その莫大さが渋滞緩和に役立つことにかんしては肯定的に捉えられていた。〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉(I⑪)はしばしばこれと対比的に論じられていたが、交通にかんしてはこれと同様に肯定的に捉えられており、当時の交通量の少なさから中心配置による交通への悪影響はなかったとの分析がなされていた。しかしながら〈幾何学的軸上の道の広場〉(I③)は広場の大きさというよりもその幾何学性による交通渋滞に着目されており、広場の中心に向かって交通が集中することが批判されていた。また広場の隅の分析においては、比較的交通渋滞が少ないとされる〈交差点が隅から外れた広場〉(I⑧)が肯定されていた。これらの評価は交通問題の観点によるものである。また〈端にモニュメント配置の広場〉(I⑬)も、交通に妨げられることなくモニュメントを鑑賞できることが肯定されており、同様の観点に則った評価である。

〈道の端にアーチのある広場〉(I⑥)ではアーチが建物を補強する効果も肯定されており、構造的な観点の評価も部分的も見られた。

このように、ジャンヌレのパーティの評価軸には視覚的・身体的観点の5つの評価軸（視認の正確性、視覚的閉鎖性、身体的な大きさ、建物やモニュメントの強調、眺望の多様性）と実用的観点の2つの評価軸（交通問題、建築構造）があると言える。

4-4 パルティの評価軸の相互関係

4-3で析出した7つの評価軸とパーティの対応関係はFig. 4.4.1に示すとおりである。7つの評価軸のうち、視覚的・身体的観点の5つの評価軸をさらに詳しく吟味すると、同図に示すように、5つの評価軸の中でもとくに視覚的閉鎖性、視認の正確性、多様性の3つが支配的であること、そしてジャンヌレがこうした評価軸に基づいていて評価を行う背景には「感情（感覚）(sentiment)」の高揚という理念が貫いていることがわかってくる。

Visual and Corporeal Criteria

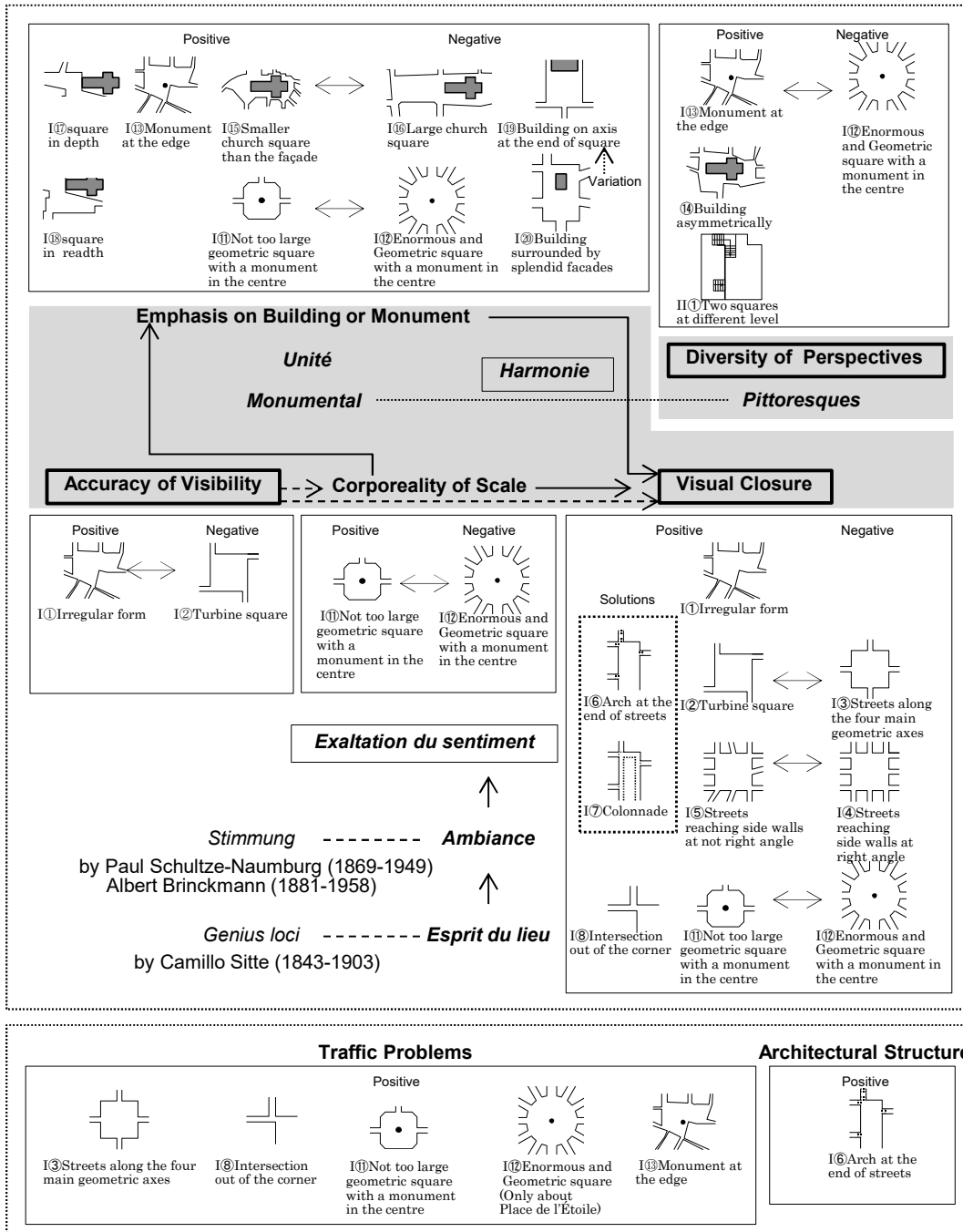


Fig. 4.4.1 Correspondence between criteria and parti of square, and interrelationship of criteria

視覚的閉鎖性

視覚的閉鎖性はファサード、つまり囲いの空間の境界面を視認することで感知される。これについては草稿の至る所から確認できる。

たとえば、〈不整形の広場〉(I①)の実例であるシュトゥットガルトのマルクト広場は、「たくさんの道や路地が壁 (ses parois) を開いているにもかかわらず」[CV-344]、つまり、多くの道が広場の側壁に通じることで広場を開いているにもかかわらず、「遮られることのないファサードの表面だけを目に示そうとする意思 (la volonté de n'offrir à l'œil qu'une surface non interrompue de façades)」[CV-343]をもって、すなわち「ヴォリュームの驚くべき意識を持って線が引かれることで、この広場はどの点から見ても完全に閉じて見える (Tracée avec une étonnante conscience du volume, cette place est parfaitement close, de quelque point qu'on la regarde)」[CV-343-344]ことが肯定されている。つまり、道が広場に通じていたとしても、たとえば道がわずかに曲がっていたりすることで、目で見るときに空間が閉じているように感じられるようなパルティが好まれているのである。そしてこういった記述からは、広場を囲うファサードの「表面 (surface)」という囲いの境界面への着目が見て取れる。

身体的な大きさ

視覚的閉鎖性をもたらす一因には規模の小ささがある (Fig. 4.4.1 中“Corporeality of Scale”から“Visual Closure”へ向かう実線矢印)。空間境界面をなす周囲のファサードまでの距離が小さいと、視線は面に留まるからである。たとえば以下の引用のように、「絶対王政の広場」では「人間的尺度の感覚 (le sentiment de l'échelle humaine)」に基づいた控えめな規模の「表面」が賞賛されている。

ルイ 14 世は権勢を誇っていたにもかかわらず、ルイ 14 世は、わたしたちが富を見せびらかしたいときに作る広場と比べると、大きさがひじょうに小さい広場しか作らなかった。数千平方メートルにわたるヴェルサイユの秩序ある庭をすべての部分で実現したこの国王は、建築的広場には[]あるいは[]平方メートルで満足していた。これは、彼の建築家たちが健全なゴシックの伝統によって、人間的尺度の感覚を持続していたということだ。彼らは、高さの制限された宮殿を建て、そして眺望が減少することを恐れ、その広場の規模の小ささそのものによって、偉大さに到達していた。

(Malgré toute sa puissance, Louis XIV ne bâtit jamais que des places de dimensions très réduites, comparées à celles que nous faisons lorsque nous voulons étaler notre luxe. Ce roi qui avait réalisé de toutes pièces les jardins ordonnés de Versailles, sur [] milliers de mètres carrés, se contentait pour ses places architecturales de [] ou [] mètres carrés. C'est que ses architectes avaient conservé de la saine tradition gothique le sentiment de l'échelle humaine. Erigeant des palais dont la hauteur avait une limite, ils redoutaient les amoindrissements perspectifs et atteignaient à la grandeur par la petitesse même des dimensions de leurs places.) [CV-381-382]

また「身体性」という語は用いられていないが、〈小さな教会前広場〉(I⑮)の実例であるフラウエン教会においては、巨大な壁が「目がくらむような表面によって観衆を圧倒し、むき出しの線全体をかろうじて受け入れさせるために、観衆の体を曲げさせている (écrase le spectateur de sa vertigineuse surface,

l'obligeant à se contorsionner pour embrasser, malaisément encore, l'ensemble de ses lignes brutales)」[CV-350]という、広場にいる人々の身体の動きも描写されている。身体感覚に即した小さな教会前広場では、教会建物のファサード面の全体像を見渡させるために体の動きが強いられるほどであり、そのファサード表面が人々を文字通り圧倒するのである。このように、身体的な大きさによって可能になる「建物やモニュメントの強調」の評価軸で評価されるような面の強調（Fig. 4.4.1 中“Corporeality of Scale”から“Emphasis on Building or Monument”へ向かう実線矢印）が、視覚的閉鎖性をさらに強めている場合（Fig. 4.4.1 中“Emphasis on Building or Monument”から“Visual Closure”へ向かう実線矢印）もある。

建物やモニュメントの強調

なにかが強調されるということは、その対象物が目立つようになり目で認識し易くなるということである。これは空間の境界面、すなわち対象物の表面が視認し易くなるという点で視覚的閉鎖性がもたらされ得ることにつながる（Fig. 4.4.1 中“Emphasis on Building or Monument”から“Visual Closure”へ向かう実線矢印）。

たとえば先に見たように〈モニュメント中心配置の大きすぎない幾何学的広場〉（I⑩）では広場のファサードのモチーフ部分の統一性も肯定的に評価されていた。このパルティにあたるフランスの「絶対王政の広場」の派生例やイタリアバロックの広場についても、周囲のファサードだけでなく地面の敷石を含めた人を取り囲む3次元的な広がりに対して、モニュメントを強調する統一性が次のように描写されている。

モニュメントの意志が生じたのを強調すると同時に囲いの周りを発展させながら、地面は敷石を張られ大きな幾何学的デッサンによって飾られていた（le sol était dallé et orné de grands dessins géométriques développant le pourtour de l'enclos en même temps qu'ils accusaient la surgie volontaire du monument）。そのとき本当に、広場と宮殿とモニュメントは一気に流し込まれた鑄鉄のように均質の塊しか形作っていなかった（Véritablement alors, la place, les palais et le monument ne formaient plus qu'un bloc homogène, comme une fonte coulée d'un coup）
[CV-379]

視認の正確性

視認の正確性は身体的な大きさおよび視覚的閉鎖性の評価軸と同様に視覚にかんずるものであるという点で、それら2つの評価軸と部分的に重なり合う（Fig. 4.4.1 中“Accuracy of Visibility”から“Corporeality of Scale”および“Visual Closure”へ向かう破線矢印）。先に見たように、視認の正確性とは物体までの距離を正確に視認できるかどうかという観点であった。一方、身体的な大きさによってもたらされる視覚的閉鎖性は空間境界面の視認によって感知される。このように、視覚的閉鎖性はとりわけ境界面への関心に基づいた評価軸であったのに対し、視認の正確性はとくに視認主体からその面に到達するまでの距離にかんずる観点であり、これらはともに視覚にかんずる観点であると言える。

眺望の多様性

眺望の多様性とは人が広場を移動する際に受ける印象の変化であり、ジッターらが好んできたピクチャレ

スク（独語の“malerisch”）である⁶⁴。この評価軸も「眺望」の多様性を評価しているという点で視認行為に基づいた基準ではあるが、「多様性」という点ではその変化の程度に依るのであり、明らかに、上で考察してきた視認にかんする4つの評価軸とは性格を異にするとと言える。

このように、5つの評価軸は、視覚的閉鎖性、視認の正確性、そして眺望の多様性の評価軸に集約できる。このうち視覚的閉鎖性と視認の正確性は視認主体から物体の境界面までを含めた空間の視認にかんする観点であるのに対し、眺望の多様性も視認を前提にはいるがその観点は単調さ・変化の程度についてである。

続いて、ジャンヌレはなぜこうした視認にかんする観点と単調さ・変化の程度にかんする観点の評価を行ったのかという、これらの評価軸の動機について考察すると、「感情（感覚）の高揚」と「調和」の観念が背景に浮かび上がってくる。

〈感情（感覚）の高揚〉

視覚的閉鎖性や視認の正確性の評価軸、つまり視覚にかんする議論で強く主張されていた、閉鎖性と囲いの空間についてさらにジャンヌレの言説を見てみると、ジャンヌレが視覚的閉鎖性を主張する背景には感情（感覚）の高揚（*l'exaltation du sentiment*）の希求があることがわかってくる。

たとえば広場を閉じるための解決策として〈列柱で囲まれた広場〉（I⑦）のパーティがあったが、以下に引用する部分では列柱がスクリーンという二次元的広がりを持つものに例えられており、先に指摘した囲いの境界面への着目がここにも表れている。そして、こうした閉鎖性を勧める動機は「目がぼんやり」する状態を避け、面の視認によって「感覚」を鋭くすることであると読み取れる。

広場のヴォリュームの統一性と建築の線の力強い簡素さを何よりも主張したいときはいつも、目がぼんやりしないために、そしてその結果として感覚をより鋭敏にするために、列柱というスクリーンの後ろに道を通したのである。

(Toutes les fois qu'on voulut affirmer par dessus toute autre chose, l'unité de volume de la place, la puissante sobriété des lignes architecturales, on fit déboucher les rues derrière le écran d'une colonnade afin que l'œil ne fût pas distrait et que par suite, le sentiment fût plus incisif.) [CV-346]

こういった面の視認と感情（感覚）の高揚は身体的な空間把握が可能なパーティで生じる。たとえば先述したように身体的な大きさの広場で教会ファサードが人々を圧倒していた〈小さな教会前広場〉（I⑮）のフラウエン教会について、ジャンヌレはこの事例を「諸感情の抽象を具体的にする相関性の法則（*les lois de relativité qui rendent tangibles l'abstraction même des sentiments*）」[CV-348]の典型例として肯定している。ほかにも感情にかんする記述を見てみると、たとえば下記引用では、部屋のように身体に即した大きさの広場において、芸術作品を視認できる状態を「具体的」と表現し、視線を空間境界面である「壁の表面」に留めるような閉鎖性を「美」と捉えている。とくにモニュメントがある場合には、「建築

⁶⁴ 仏語では“pittoresque”である。字義通りには“painterly”と英訳できるがシュノールも提案しているとおり“picturesque”のほうが適切であろう（Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 236, note 3）。

の線の抽象」に「親密でより個人的な感情」が与えられると示されている⁶⁵。

広場の美 (la beauté d'une place) に必要不可欠な造形的要素は原初的な条件に由来している：身体性 (la corporalité)。わたしたちはすでに、この自明の理、つまり、造形的芸術作品は具体的 (concrète) であるべきで、視線によって捉えうるべきだということを述べた。ところが、上に述べた 19 世紀の広場は身体性を持っていない；美しいすべての時代の都市は、ヴォリュームや部屋の性格 (le caractère de volume, de chambre) の最高点を持っていたのに。

もし広場が、内面仕上げが広く施され、適切に家具を配置され、美しい眺望へと穿たれた窓のある部屋でないなら、それはどんな美も望むことができない；直線で長く閉じていない道のような広場は、目にとってはヴォリュームが存在せず (un volume inexistant pour l'œil)、それゆえ、表現力に乏しい。

その身体性は美に変わるだろう、その平面と取り囲む壁の関係が構想の統一性を強調するときに、そして、壁の表面にある数多くの深い穴を通して視線を遠くへ導く代わりに、視線を壁の表面に留めファサードの最大値 (le maximum de façades) を視線に示すときに、また、好ましい方角によって、指定した建物の美化に全体として協力するときに、そして最後に、モニュメント—噴水、像などを加えることで、建築の線の抽象 (l'abstraction des lignes architecturales) に、親密でより個人的な感情 (un sentiment intime, plus personnel) を与えるときに。
[CV-338]⁶⁶

上に引用した部分では、閉鎖性とその美が肯定されているのに対し、「19 世紀の広場」は身体性がなく「ヴォリューム」が視認されない状態の表現力の乏しさを批判されている⁶⁷。こうした広場は上記において、「直線で長く閉じていない道」に例えられて批判され、反対に「ヴォリュームや部屋の性格」を持つような都市が賞賛されている。これらから、「目にとってヴォリュームが存在」する状態、つまりヴォリュームが視認できる状態とは、部屋のように空間境界面が視認でき身体を取り囲まれる感覚が得られる状態であり、ジャンヌレはこの状態を表現力が豊かな状態として肯定しているのだと理解できる⁶⁸。

このときジャンヌレがヴォリュームを視認できるものとして捉えていることには注目される。ジャンヌ

⁶⁵ 引用部分にあるような部屋や家具の例えを用いた閉ざされた空間にかんするジャンヌレの記述は、シュノーールも指摘しているように、ジッテの『広場の造形』第三章「閉ざされた空間としての広場」の内容である。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 119.

⁶⁶ 引用部分のすべての原文は次のとおり。

“Les éléments plastiques indispensables à la beauté d'une place dérivent tous d'une condition primordiale: la corporalité. Nous avons déjà dit cette vérité de La Palysse [sic] qu'une œuvre d'art plastique doit être concrète, saisissable aux regards. Or les places du XIX, passées en revue plus haut, n'ont pas de corporalité; tandis que celles de toutes les belles époques, avaient au plus haut degré le caractère de volume, de chambre.

Si une place n'est pas une chambre aux vastes lambris, aux meubles judicieusement placés, aux fenêtres percées sur de belles perspectives, elle ne peut prétendre à quoi que ce soit de la beauté; telle la rue droite, longue et non fermée, elle est un volume inexistant pour l'œil, par conséquent inexpressif.

Sa corporalité se muera en beauté, lorsque le rapport de son plan et des murs qui la bordent accusera une unité de conception, lorsqu'au lieu de mener loin le regard au travers des percées nombreuses et profondes de la surface de ses murs, elle le retiendra en lui offrant le *maximum de façades*, lorsque par une orientation favorable elle participera, entière, à l'embellissement d'un édifice désigné, — lorsqu'enfin, par l'addition d'un monument, — fontaine, statue etc. — elle ajoutera à l'abstraction des lignes architecturales un sentiment plus intime, plus personnel.” [CV-338]

⁶⁷ シュノーールによれば、ジャンヌレが展開する身体性の欠如への批判はプリンクマンの『広場とモニュメント』に基づいている。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 135 や同頁 note 323 を参照。

⁶⁸ 本論文第三章で見たように、道のパルティ論におけるマルクトガッセの事例では、ジャンヌレは「ヴォリュームの感覚」が道の美に寄与することを論じていた。

レは閉鎖性のある空間において「壁の表面」などの二次元「表面」を視認することによって、「ヴォリューム」という三次元の視認が可能になり、圍繞感が生じると考えているのである。上に引用した同じ部分では、「造形的芸術作品は具体的であるべきで、視線によって捉えうるべきだということ (qu'une œuvre d'art plastique doit être concrète, saisissable aux regards)」が示されている。これらより、ジャンヌレは茫漠とした「あいた空間」の抽象性を批判し、具体的な囲いの境界面や身体周囲の空間を視認することで喚起される、身体を取り囲むような感覚を好ましく捉えているからだと言える。つまりジャンヌレの主張する感情（感覚）の高揚とは、面と空間の具体的な視認によって身体を取り囲まれるような親しみやすい感覚が増すことであり、そういった感情（感覚）を創出するので視覚的閉鎖性を好んでいるのだと理解できる。こういった圍繞感には上に引用した同じ部分で示されていた、「建築の線の抽象」という素っ気なさに対するような「親密でより個人的な感情」の親しみ易さと同様の近しさがある。つまり先に見たとおりモニュメントがある場合に生じるとされていた「親密でより個人的な感情」は、「ヴォリューム」が視認できる部屋のような閉じた広場であれば、モニュメントがない場合も含めた広場一般に敷衍可能であると考えられる。こうした親密さと閉鎖性の結びつきは、ジャンヌレが広場を部屋に例える際に用いていた「親密な部屋」という表現からも確認できる。

そしてジャンヌレによれば、「前の時代のとても強いヴォリュームの感覚 (*Le sentiment du volume*) は14世紀に消え去った。この時代の古典主義者は、その表現に用いた線のみ、過去から再び得ようとした：彼はそこで精神 (*l'esprit*) を失った」[CV-375]のであり、ジャンヌレは当代の広場で「ヴォリュームの感覚」が失われてしまったことを嘆いている⁶⁹。この感覚は、身体を取り囲む「ヴォリューム」が視認できるときの圍繞感であると考えられる。

ヴォリュームを考慮することの大切さは以下に引用する部分においても論じられている。引用末尾では、ヴォリューム、対照、そして人間的尺度を考慮しないことは身体性を無視することだと換言されている。これまでに見てきたように、「ヴォリューム」が視認可能なものとして捉えられていたことや、「対照」などによる建物やモニュメントの強調が表面の視認性を高めていたこと、そして「人間的尺度」がその規模の小ささによって視覚的閉鎖性をもたらしていたことを考えあわせれば、ジャンヌレはここで「身体性」という語を用いて身体周囲の三次元空間の把握とその「視認性」を論じているのだとわかる。

味気ない無味乾燥な方法を適用しながら、彼ら（引用者注：市議員たち）は芸術を忘れていて、つまり、彼らはヴォリュームも、対照も、《人間的尺度》も気かけなかったということだ；一言で言えば、彼らは身体性を無視したのである

(Applicant [sic] la formule sèche et aride, ils oublient l'art, c'est-à-dire, qu'ils ne se souciaient ni de volume, ni de contrastes, ni « d'échelle humaine » ; en un mot, ils ignorèrent *la corporalité*.). [CV-376]

莫大な規模への批判は「19世紀の広場」であるエトワール広場の例で展開されると、隣接するシャンゼリゼ通りにも及ぶ。これらは以下の引用のように批判されている。大きさが身体感覚を越えた規模になる

⁶⁹ 引用部分のすべての原文は次のとおり。“*Le sentiment du volume* si puissant aux époques antérieures a disparu au XIXe siècle. Le classicisme de cette période n'a voulu retenir du passé que les lignes qu'il avait employées pour s'exprimer: il en a perdu l'esprit.”

と、具体的な「空間の境界」までの距離が遠くなるので視認しづらくなり、ジャンヌレの否定する「あいた空間」となるのである。なおこの部分において、ジャンヌレは「ヴォリューム」という語によって二次元平面に対する三次元空間を指しており、「ヴォリューム」を構想せずに平面のみを考えて広場をつくることを批判している。身体を取り囲む三次元空間への関心はここからも確認できる。そして「あいた空間 (vide)」では「目は身体性の意識 (conscience de la corporalité) をすべて失う」とされていることから、ジャンヌレは視覚を通して三次元空間に自己が拡張されるかのように考えていることがわかる。そしてジャンヌレはその三次元空間を視認可能なものとして捉えていたという先の議論を考えあわせれば、ジャンヌレは視認をとおしてその視認主体の身体が周囲の空間に拡張されると考えているのだと理解できる。

この歪んだ方式の継承者は、いわばシャンゼリゼ通りやエトワール広場から出発して異例の方法によって誇示の道 (rue de parade) を広くした；彼らはとても遠くにある眺望を追い求めて、広場の平凡な表面を著しく増加させた。つまりそこでの平面についてしか考えず、ヴォリュームを構想していなかったのである。(…中略…) そうして、過度に拡大したこの空間の境界 (frontières de ces espaces) を視線に知らせるはずだった壁はその距離の分だけ卑小に見え、遠くへと逃げていくような眺望 (lointaines fuites perspectives) しか見えない目は身体性の意識 (conscience de la corporalité) をすべて失う。あいた空間は非審美的である (Le vide est antiesthétique) [CV-383-384]⁷⁰

上記のような「あいた空間」への批判は、空間の知覚は相対的なものだと考えたジッテによる、「広場恐怖症 (Platzschau)」⁷¹の批判に相当する⁷²。この病について述べるにあたり、ジッテもシャンゼリゼ通りなどを例示し、幅が大きすぎる道には釣り合いを取るために巨大な広場が必要であることや、そこでは建物とモニュメントの印象が強くないことを批判しており、事例も含め、ジャンヌレの主張と一致している。これは先のドイツ的な囲いの空間の対概念として理解できる。

⁷⁰ 引用部分のすべての原文は次のとおり。

Les héritiers de cette formule faussée, partis pour ainsi dire de l'Avenue des Champs Elysées et de la place de l'Etoile, ont élargi leurs rues de parade d'une façon anormale; ils ont décuplé la surface ordinaire des places, poursuivi trop loin leurs perspectives. Bref, ne pensant qu'en plan, ils n'ont pas conçu en volume. (...) Dès lors, les parois qui devaient signaler au regard les frontières de ces espaces démesurément amplifiés paraissent mesquines dans leur éloignement et l'œil auquel ne s'offre que de lointaines fuites perspectives perd toute conscience de la corporalité. Le vide est antiesthétique [CV-383-384]

⁷¹ Sitte, *op. cit.*, S. 56. ジッテ, 大石訳, 前掲書, pp. 62-63

⁷² 今日しばしばパニック障害との関連からも論じられる広場恐怖症は、広い空間の恐怖に限定されず、公共交通機関や閉じられた空間といった逃げ場がない状況への恐怖や不安である。一方ジッテが現代病として批判した広場恐怖症 (Platzschau, Platzangst) は開かれた広場の恐怖であり、当時の医師、作家、芸術家の大いなる関心事であった (Collins & Collins, 1965, *op. cit.*, p.157)。ドイツの美学者テオドール・リップス (Theodor Lipps, 1851-1914 の感情移入理論に抽象衝動を対置させたことで知られるドイツの美術史家ヴィルヘルム・ヴォリンガー (Wilhelm Worringer, 1881-1965) は、抽象に対する衝動とは空間理念の欠如、つまり、空間に対する広大で精神的な不安の結果であり、恐場症 (Platzangst) つまり広場恐怖症の現象は人間の正常な残滓として説明している (ヴォリンガー: 抽象と感情移入—東洋芸術と西洋芸術, 草薙正夫訳, 岩波書店, 1953, p.33-34, 原著は Worringer, Wilhelm: *Abstraktion und Einführung: ein Beitrag zur Stilpsychologie*, München, R. Piper, 1908.)。ジャンヌレは1910年の「都市の構築」執筆から1915年の再編集の間に行った東方への旅で、ヴォリンガーの生徒であった同行者オーギュスト・クリプシュタインからヴォリンガーの同書を勧められ、ノートや手紙の中でヴォリンガーについて言及している (Brooks, 1997, *op. cit.*, p.256)。ヴォリンガーと広場恐怖症については次の文献も参照。Collins, R. George & Collins, C. Christiane, *op. cit.*, 1986, pp. 379-380.

〈調和〉

眺望の多様性とは、変化の程度が大きいという点でジッテが好む中世的なピクチャレスクと親和性が高いように思われる。しかしながら多様性にかんするジャンヌレのほかの記述を見てみると、下に示す引用後半にあるように、ジャンヌレは多様性と同時に「統一性」の必要性も認めている⁷³。一見、統一性の持つモニュメンタルな性格はピクチャレスクな性格と対立するように思われるが、それらにかんする記述を詳細に見ていくと、ジャンヌレが多様性と統一性を同時に認める背景には、調和を好む態度があることが分かってくる。そしてその調和とはその場所の個性を考慮したものなのである。

たとえば下に引用する部分では、眺望の多様性という視認する主体の移動を伴うシークエンスの変化ではなく、ある空間における要素の多様性が論じられており、ジャンヌレは広場を部屋に例えながら、部屋における複数の要素が変化に富みながらも統一性を保っている状態を肯定している。つまりジャンヌレが賞揚する多様性とは、たんにヴァリエーションが多いだけではなく、変化に富みながらも統一感のあるものなのである。

親密な部屋 (La chambre intime) は、部屋が満たすべき趣味や要望が様々であるゆえに、すべて不均整 (toute d'irrégularités) になるだろう。明るさと暗闇、ここでは素朴さと和やかさ、そこでは洗練された貴重な贅沢さ、夢想や瞑想に適した繊細さと親密さ、といった—一定に保たれる統一性 (une unité) における—多様性が必要である。 [CV-364]⁷⁴

ところで統一性については先にみたとおり、建物やモニュメントの強調の評価軸においても、モニュメントを強調するような統一性への関心が窺われた。そこでこの統一性について、さらにジャンヌレの言説を見てみる。

統一性については、「絶対王政の広場」を中心に論じられていた。ジャンヌレは絶対王政の広場における中心配置を賞賛していた。これは一見、不整形な広場を賞賛し幾何学的な広場を批判してきたことと対立するように思われるが、ジャンヌレは矛盾はないと主張する。その理由は、「19世紀の古典主義のように、不規則な広場の原則を再確立することは問題にならないから (Car il ne s'agit pas, à l'instar du classicisme du XIX siècle, de réinstaurer une formule: celle de la place irrégulière)」 [CV-377]であるという。こうした理由は少々理解し辛いですが、ジャンヌレは「絶対王政の広場」と「19世紀の広場」の違いについて、前者が「一気に構想され一度で建てられた (furent conçues d'un jet et bâties d'une fois)」 [CV-377] 点にあることを強調していることを考慮すると、前者の当初から一貫した幾何学性と後者の模倣的で不完全な幾何学性とはまったく異なった性格のものであるから矛盾は生じ得ないという理屈であると理解でき

⁷³ シュノールは、町 (towns) だけでなく大都市 (cities) にもピクチャレスクな造形を適用したジッテに対し、ジャンヌレは都市にはモニュメンタルな直線の道を許す一方で町に対して同じようには望まなかったことを指摘している。 Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 236.

⁷⁴ 引用部分のすべての原文は次のとおり。

La chambre intime sera toute d'irrégularités, du fait même de la multiplicité des goûts et des désirs qu'elle doit satisfaire. Il y faut la variété - dans une unité toute fois observée - le clair et l'obscur, la simplicité et la bonhomie ici, le luxe raffiné, précieux, délicat et intime en une telle autre partie qui sera préférée pour les rêveries ou la méditation.

る。

つまり「建物やモニュメントの強調」の評価軸で評価されていた「絶対王政の広場」の統一性は、このように「19世紀の広場」との違いとして強調されていた計画から建設まで一貫した幾何学的形態によるものと言える⁷⁵。加えて「広場」の節の末尾では、ジャンヌレはこれまで考察の総括として、広場の建設方法とその結果生まれるモニュメンタルなあるいはピクチャレスクな性格について次のように論じている。新しい広場を作る際には徐々に周囲の建物が建てられる場合と、一気に建設される場合の2つがある。新しい建物の目的を事前に決めず日毎に建物群が建つ場合は、「新しい建物それぞれが、以前から存在している隣の建物に調和し適応していくにつれて (*permettant au fur et mesure l'adaptation harmonieuse de chaque nouvel immeuble à ses voisins préexistants*)」、つまり、その状況の計画の厳しさが少ないほど、そして導入される要素がより少なくなりうるほど、そして、ピクチャレスクな要素—アーケード、柱廊、部分や全体での取り消しや突出部が導入されうるほど容易になる適応が進んでいくにつれて、美学は不規則な広場の形を必要とする」[CV-385]⁷⁶。一方、広場を一度に建設したり構想したりする場合は、「統一性によって、モニュメンタルな解決策が可能になる (*les solutions monumentales seront possible, dues à l'Unité*)」[CV-385]。そうして作られた幾何学的な広場には「その広場に固有の造形的な性格が調和の中で強く適用される (*seront appliqué puissamment dans l'harmonie, les caractères plastiques inhérents à cette place*)」[CV-385]ことが期待できる。このように、ジャンヌレはジッテ的なピクチャレスクな性格を持つ自然発生的な広場の不規則な形態を無条件に好んできた一方で、芸術性をもって意図された一貫性のある幾何学が持つモニュメンタルな性格もたしかに認めている。そして広場周囲の建物が徐々に建てられる場合においても、一気に建設される場合においても、その場所の固有の性格や既存建物といったその場所の個性を考慮したうえで調和 (*l'harmonie*) 的であることを明示している。つまり一見異なる性格に思われる、「統一性」のモニュメンタルな性格と「眺望の多様性」の評価軸で測られるようなピクチャレスクな性格をとともに肯定するのは、このようにその場所にすでにあるものとの調和を肯定する姿勢が通底しているためであると考えられる⁷⁷。

このように、支配的な評価軸である視覚的閉鎖性と視認の正確性 (視認)、および眺望の多様性 (変化の程度) の背景には、感情 (感覚) の高揚と調和の希求があると言える。そして広場においてこれらを生み出すのが、以下で見るように、ジャンヌレが強調する「場所の精神 (*l'esprit du lieu*)」である。場所の精神が調和的な雰囲気を生み、その雰囲気が感情 (感覚) を高揚させるのである。

⁷⁵ 一気に構想及び建設について、ジッテやマルタンも言及している。ジッテはバロック建築の固有性を、その構成が「製図板の上で一度に仕上げられたということ」に帰している (ジッテ, 大石訳, 前掲書, p. 95.)。マルタンは「パリでは一気に作られた (*d'un seul jet*) 最も古い広場の一つがヴォージュ広場」であるとし (Sitte, Martin tr., *op. cit.*, p. 110)、こうした絶対王政の広場の事例を章「広場のいくつかの例」に多数掲載している。なおこれらの事例は独語の原著には掲載されておらず、ジャンヌレは絶対王政の広場にかんしてマルタンから大きな影響を受けていると推察される。

⁷⁶ 原文は次のとおり。 *l'esthétique exige une forme de place irrégulière, permettant au fur et mesure l'adaptation harmonieuse de chaque nouvel immeuble à ses voisins préexistants, adaptation qui sera d'autant plus facile que la rigueur du plan de situation sera moindre, et que pourront être introduits les éléments pittoresques, -- arcades, portiques, retraits et saillies partiels ou totaux.* [CV-385]

⁷⁷ ただしシュノールが強調するように、ジャンヌレがバロックや初期古典的なレイアウトについて熱意をもって語るのは、ブリンクマンの理論を参照していた「広場」の節の後半においてであることに注意するべきである (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 241)。

〈場所の精神〉

広場という都市構成要素においては、周囲のファサードだけでなく広場の中の建物やモニュメントの配置が空間把握に影響する。「場所の精神」とはその制作に寄与するものである。

まずモニュメントと「場所の精神」の関係を見てみる。先に示した部屋の例えはモニュメントにも適用されると、家具つまり贅沢品 (*objet de luxe*) に例えられたモニュメントや噴水が視線を集め、部屋の隅々にまで影響を及ぼす様子が描写されている。ジャンヌレは部屋の例えにおいて親密な部屋と誇示の部屋を挙げ、前者を好み、「人々が生きた、心に存在するすべてのいとしい親密さが印された部屋 (*la chambre où l'on vit, toute empreinte de l'intimité chère au cœur*)」[CV-364]と表現している。贅沢品、つまりモニュメントは、下記に引用する部分に示されるように、2つの部屋のいずれにおいても「装飾 (*ornement*)」として機能し、周囲のものと「密接に (*intimement*)」関係しながら「場所の精神」をもたらす⁷⁸。

(引用者注：2種類の部屋の) いずれの場合でも、装飾の役割を担うことになるだろうが、装飾には存在理由があって、その造形によるのと同様にその意義によって、それを取り囲むものと密接に共存するものなのである。他の何よりも最も貴重なものであるから、場所の精神をもたらすに違いないのである。

(Dans l'un et l'autre cas il jouera le rôle d'un *ornement*. mais d'un ornement ayant sa raison d'être, vivant intimement avec ce qui l'entoure, autant par sa signification que par sa plastique. Etant la chose la plus précieuse, plus que toute autre, il devra porter en lui l'esprit du lieu.) [CV-365]

上記に引用する部分の直後、ジャンヌレは応接間にある蒸留器や、絵画と対をなすメダイヨンに入った肖像画のちぐはぐさを例に挙げ、場所の精神が明確であれば、そういった不釣り合いな状態を感知し人々は驚くことを説明している⁷⁹。つまり上に引用する部分と考え合わせれば、「場所の精神」とは周囲との調和をもたらすものであることがわかる。ただしここにおいては、ジャンヌレは“*harmonie*”という語を用いているわけではない。

実際の広場の例では、ガットメラータの騎馬像にかんして論じられている。ジャンヌレは「作品に場所の精神を与えていたもの (*ce qui donnait l'esprit du lieu à son œuvre*)」[CV-370]として「サント (引用者注：バシリカ・デル・サント) に近いすべての圧倒的なマッサや、原始的で粗野な、そして押しつぶされた切り妻壁によっていつまでも無言のままであるれんがの壁 (*l'imposante masse toute proche du Santo, paroi de briques sauvages et barbares, et obstinément rendue muette par son fronton écrasé*)」[CV-370]を挙げ、「厳粛で垂直 (*solemnelle verticale*)」[CV-370]なそれらの印象とガットメラータの「水平なふるまい (*son geste horizontal*)」[CV-370]との対照を肯定的に捉えている。つまり、すでにその場

⁷⁸ ここで論じられている装飾にかんしては、アンリ・プロヴァンサル (Henry Provensal, 1868-1934) の著作“*L'Art de demain*”の影響が指摘されている (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 132, 同頁 note 311.)。この時期のジャンヌレがプロヴァンサルから受けた影響については Brooks, 1997, *op. cit.*, pp. 69-71 も参照。Provensal, Henry: *L'Art de demain*, Paris: Perrin, 1904.

⁷⁹ ジャンヌレは次のように続けている。「これはとても明白なものなので、わたしたちは応接間の中心で、実験室の蒸留器や、それぞれがオークや月桂樹の枠をつけられたメダイヨンに入っていて、絵画と対をなしている、連邦の7人の議員のリトグラフの肖像画を見つけて本当に驚くほどである。(Ceci est si clair, qu'on s'étonnerait vraiment de trouver au milieu d'un salon une cornue de laboratoire ou, faisant pendant à une peinture, le portrait lithographié des sept conseillers fédéraux chacun en un médaillon encadré de chêne et de laurier.)」[CV-365]

所にある建物やその素材が場所の精神をもたらすのである。さらに以下に引用する部分からは、「場所の精神」が用いられた結果、モニュメントは「死点」で「装飾として」機能して周囲と「対照 (contraste)」をなし「雰囲気」を顕わにしていたことがわかる。

モニュメントを構想する芸術家は、かつて、場所の精神 (l'esprit du lieu) から靈感を得ていた；そして、表現する際にはその形 (ses formes) が雰囲気 (l'ambiance) を確かにしていた。彼はそれを配置するために、最も美しい枠組み (le cadre le plus beau) を与える広場の死点 (points morts de la place) を選んでいた。それによって彼が自分の意志を主張しすべてが装飾として (*en ornements*) 作り出された対照の法 (les lois de contraste) が生じたのは、そのときである。そのおかげで、スイスの噴水は、その配置もさることながら、その精神も驚くべきものであり、必要に応じて彫刻を施し、建築の飾り気のなさに対照をなすことができた。[CV-367]⁸⁰

これらを考え合わせると、「場所の精神」とは、それによって作品を制作することで、周囲の建物やその素材といったすでにその場所にあるものを汲み取って、モニュメントの形によりモニュメントと周囲の枠組みが呼応したもの、つまり「雰囲気」を顕わにして「対照」を生むと言える。そしてこの「雰囲気」は調和的なものである。上に示す引用部分にあるように、ジャンヌレはモニュメントが「対照の法 (les lois de contraste)」によって「装飾」として機能するようになり、「その形が雰囲気を確かにして」いると考えているのである。主観的な情感を含み得る「雰囲気」が、「形」という物理的対象によって明確になること、そしてその際には「対照」が生じていると示されていることには注目される。この「対照」とは、先に確認したガッタメラータの事例のように、モニュメントとすでにその場所にある建物やその素材との間に生じるものであって、モニュメントが既存の枠組みに対してどのように見えるかという観点でのそれらの差異の大きさを測られていると言える。ジャンヌレは「場所の精神」や「雰囲気」といった言葉によって、その場所の歴史性や風土性を中心に論じているというよりも、むしろその場所の既存のものを考慮した結果、広場やモニュメントがどう見えるかという視覚的な事象に着目していると言えよう。そして下に引用する部分に示されているように、「装飾」は「均斉とリズムの働き」をもたらす。この「均斉とリズムの働き」という表現からは、「装飾」として機能するような対照のあるモニュメントは、周囲との差が大きいという点で一様ではなく変化のある状態でありながら、釣合いの取れた状態であることが理解できる。そしてこの「均斉とリズムの働き」が「眺望の感覚 (sens de la vue) を喜ばせる」と述べられていることから、ジャンヌレはこういった対照が視覚にとって好ましいと考えていることがわかる⁸¹。このような対照はモニュメントを目立たせ視認性を高めており、ジャンヌレはそれを好ましく捉えているのだと理解できる。そして以下に引用する 2 か所の部分に示されているように、ジャンヌレはこのような「装飾」つまり周囲と対照をなし視覚に対して好ましいモニュメントが、「雰囲気」や「感情を呼び起こす (évoquer des

⁸⁰ 引用部分すべての原文は次のとおり。 “L'artiste dans la conception de son monument s'inspirait autrefois de l'esprit du lieu; et dans son extériorisation, ses formes aidaient à [Alternativ:] confirmaient l'ambiance. Il choisissait pour le placer celui des points morts de la place qui lui fournissait le cadre le plus beau. C'est alors qu'intervenaient les lois de contraste, par lesquelles il affirmait sa volonté et tout était créé *en ornements*. Cela nous a valu les merveilleuses fontaines suisses, aussi étonnantes par leur esprit que par leur emplacement grâce auquel venait se proposer là où il était nécessaire le contraste de leurs ciselures, avec la sévérité des architectures.” [CV-367]

⁸¹ たとえばこれまでに見てきたサンマルコ広場の赤い鐘楼と白いロジリアの対比の描写のように、ジャンヌレがその素材の色についてたびたび言及していることから、視覚への着目が確認できる。色は視覚によってのみ知覚される。

sentiments)」と考えている。つまり視認行為をとおして形式的な美と「雰囲気」や心理的な感情とを結び付けている。形式の視認性の高さが感情を高揚させると論じているのである。

装飾は、どんなものでも表現してしまう前にうまくやってくれるものであり、それゆえ、均斉-しかし必ずしも左右対称ではない-とリズムの思考をもたらしてくれるものである；光が優しく触れるもとの、美しいヴォリュームを奏でる色や形の高揚 (exaltation)、均斉とリズムの働き-これらは眺望の感覚 (sens de la vue) を喜ばせる-によつてのみ生まれる高揚と美 (exaltation et beauté)、効果的な意志の象徴であり精神を喜ばせる線 (une ligne) に従って結びついた均斉とリズム。装飾は、材料に制約される形に従って生み出され、そうして、感情を呼び起こす (évoquer des sentiments)、-心を惹きつける感情を。[CV-365-366]⁸²

雰囲気 (l'ambiance) へのこの完璧な適応と対照による感情の高揚 (l'exaltation du sentiment par les contrastes)、これらを、パドヴァでガットメラータを作ったドナテッロや、フィレンツェでダヴィデを作ったミケランジェロが見事に用いているのが見られる。[CV-369]⁸³

なお、このように「場所の精神」が用いられる際、モニュメントの配置場所が広場の端なのか中心なのかといったことは問われない。上の引用中のガットメラータやダヴィデは〈端にモニュメント配置の広場〉(I⑬) のパルティに相当する、中世やルネサンスにおいて広場の端の「死点」に配されたモニュメントの事例であった。それに対し絶対王政の広場では、騎馬像のモニュメントは広場の中央に配されていたが、騎馬像自体が「本質的に装飾的なので(…中略…)周囲の枠組みと対照をなして (contrastant avec le cadre ambiant)」[CV-379]いた。そのため、騎馬像が幾何学的の中心に配された場合であっても、以下に引用する部分のように、死点に配置された場合の中世の「ガットメラータの精神」、すなわち「場所の精神」による対照は存続していたのである。これは以下に示す引用部分において、「《ヴォリュームの》感覚」が生きてきた状態にあることと表現されている。先に見たとおりジャンヌレは「ヴォリューム」も視認できると考えていた。したがってこういった「場所の精神」が適用された広場においても面と空間の具体的な視認によって親密な感情が高揚すると理解できる。ジャンヌレは、閉鎖性による「親密でより個人的な感情」や対照がもたらす「雰囲気」といった心理的な動きを、モニュメントやファサードなどのなんらかの形態の「表面」の視認性の高さと結び付けて論じているのである。

ガットメラータの精神は、良い趣味 (goût) と感触 (tact) のあるこの時代に、まだ存続していた。《ヴォリューム

⁸² 原文は次のとおり。“Un ornement est une chose *qui fait bien*, avant que d'exprimer quoi que ce soit, ce qui implique donc des idées d'équilibre – mais non forcément de symétrie – et de rythme; exaltation des couleurs, ou formes jouant en de beaux volumes sous les caresses de la lumière, exaltation et beauté qui ne naîtront que par des jeux d'équilibre (équilibre) et de rythmes – lesquels plaisent au sens de la vue – équilibre et rythme s'unissant suivant une *ligne*, laquelle, étant le symbolisme effectif de la volonté, plaît à l'esprit –. L'ornement étant créé, soumis dans sa forme aux servitudes du matériau, il peut dès lors évoquer des sentiments, – lesquels plaisent au cœur.” [CV-365-366] またシュノールはこの部分を、『建築をめざして』におけるル・コルビュジエの記述の萌芽としてみなしている (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 132)。

⁸³ 原文は次のとおり。“Cette adaptation parfaite à l'ambiance, et l'exaltation du sentiment par les contrastes, nous les voyons magistralement employés par Donatello à Padoue avec son Gattamelata, par Michel-Ange à Florence avec son David.” [CV-369]

ムの》感覚 (Le sentiment « du volume ») は生き生きとしていた；方法が、無感覚になり心の潤いを失い縮み上がるということは、まだ全くなかった。[CV-383]⁸⁴

反対にジャンヌレが批判するようなモニュメントの中心配置とは、行政が行うような無味乾燥で平凡なものであって「雰囲気」をもたらさない。ジャンヌレはそうして生まれた無個性な広場の味気ないモニュメントが広場の「表面」を損ない、それぞれが雑多で平凡な状態に「目が慣れて」しまい感動しないと批判する。

このようにしてヨーロッパは、個性のない広場にある味気ないモニュメントによって埋め尽くされている。広場はもはや感動させるものではない。というのも、その表面が損なわれているからだ。モニュメントも心を打つようなものではない。その状態は永遠に同じであるからだ。そして、戸惑い、啞然とし、雑多な孤立や雰囲気欠落によって邪魔された平凡な光景に目が慣れてしまっている。

(C'est ainsi que l'Europe s'est couverte de monuments insipides sur des places amorphes. Ni la place n'impressionne plus, car sa surface est détruite, ni le monument car sa situation est éternellement la même, et l'œil s'est habitué au banal spectacle de ses allures désemparé, ahuri, gêné, de son isolement hétérocyte [sic], de son manque d'ambiance.) [CV-375]⁸⁵

以上より、中世の自然発生的で不規則な形であれ幾何学的な形であれ、そしてモニュメントの配置が広場の中心であれ端であれ、場所の精神による創造であれば、場所の調和的な雰囲気が明確になり対照が生まれることで、モニュメントが強調され、それを視認した鑑賞者はヴォリュームを認知でき、面の具体的な視認によって身体を取り囲まれるような温かで親しみやすい感情が誘起されると理解できる。また、雰囲気という語で表現されるものを感知する手段は一般に目で見ることに限らず嗅覚、触覚といったあらゆる感覚器官に依存するように思われるが、ここでジャンヌレが論じているのは、「雰囲気」が明確になるような広場では広場の「表面」を視認することができ、その結果として身体感覚に即した圍繞感が誘起されるという視認行為を媒介とした因果関係であると言える。ジャンヌレが「雰囲気」という語を用いて、場所の精神による創造、つまりその場所の既存のものを考慮することで生じる空間の性格と、視認行為を媒介として、その創造を認知する主体の主観的な情感とが混在したものについて論じているということは興味深い。反対に雰囲気をもたらさないようなモニュメント配置では、上に引用した部分に記されているように、表面が損なわれる (sa surface est détruite) ので、その面の視認によって感情が高揚することはない。

〈雰囲気〉

広場という都市構成要素は、道や街区といったジャンヌレが論じるほかの要素と比べて建物やモニュメ

⁸⁴ 原文は次のとおり。“L'esprit du Gattemelata subsistait encore à ces époques de bon goût et de tact. Le sentiment «du volume» était vivant; la formule ne s'était point encore racornie, desséchée et recroquevillée.” [CV-383]

⁸⁵ 引用部分の“amorphe”という語は「特徴のない」といった意とともに「形をなさない、無定形の」の意味もある。これより、ジャンヌレが形という目でとらえられるものについて構想していることが推察される。

ントとともに成立しうる点が特異である。一般に線形に近い形態を呈す道という都市構成要素に比べて、広場は人が滞留しやすい平面形状であり、ジャンヌレはほかの都市構成要素においても繰り返し論じてきた面や閉鎖性に加えて、広場という滞留空間においてモニュメントなどの対象物とともに規定される「雰囲気」を論じていることに注目される。このように広場における閉鎖性を論じる際には明らかに「雰囲気」という語が鍵語となっているが、ジャンヌレの用いる仏語“*ambiance*”はマルタンによる仏語版『広場の造形』でも用いられていない。この語に相当する独語“*Ambiente*”、“*Atmosphäre*”についてもジッテ『広場の造形』には見当たらないし、「広場」の節でもジャンヌレが参照しているシュルツェ＝ナウムブルクの主著『文化作品』第4巻『都市計画』やブリックマンの『広場とモニュメント』にも確認できない。ただし後の二人は「気分」を意味する“*Stimmung*”およびその複合語⁸⁶を用いている。この“*Stimmung*（気分）”という語はドイツの哲学者イマヌエル・カント（Immanuel Kant, 1724-1804）やドイツの哲学者マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger, 1889-1976）によって論じられてきた言葉である⁸⁷。たとえばブリックマンは『広場とモニュメント』の“*Andere Plätze in Rom.（ローマの他の広場）*”という節で、空間境界芸術としての建築について、外側の面を分割することで内部の“*Stimmung（気分）*”が外部に表れることを説明している⁸⁸。また、シュルツェ＝ナウムブルクは囲い壁にかんする記述の中で“*Stimmungswerte（気分の価値）*”について論じている⁸⁹。シュルツェ＝ナウムブルクが論じるには、壁がその内部だけでなく外部からの眺めのためにも「気分の価値」を与えるというのである⁹⁰。つまり両者とも隔てられた空間内部と外部に着目しながら「気分」について論じている。一方、ジャンヌレは囲いの空間の外部について論じてはおらず、広場における雰囲気にかんして直接的に両者の記述を引用しているわけではないが、囲いによって限定された空間において主観的な情感を含めて論じているという点は、両者の「気分」の用法と心理的な現象を指すようなその語感に類似している。なお、“*Atmosphäre（雰囲気）*”について哲学的な思索が行

⁸⁶ 合成語とも呼ばれる。

⁸⁷ 気分についてはじめて哲学的思索の主題として論じたのはドイツの哲学者ハイデガー（Martin Heidegger, 1889-1976）であるとされている（池部寧：気分について—ハイデガーを手がかりにして—, 奈医看短紀要, Vol. 6., 2002, pp. 22-33.）。およそハイデガー頃までの“*Stimmung*”という語の語義については次の文献が詳しい。Thonhauser, Gerhard: *Beyond Mood and Atmosphere: a Conceptual History of the Term Stimmung*, in *Philosophia*, 49, pp. 1247-1265, 2021. DOI: <https://doi.org/10.1007/s11406-020-00290-7> また、場所の気分（*Stimmung*）についてはドイツの教育哲学者オットー・フリードリヒ・ボルノウ（Otto Friedrich Bollnow, 1903-1991）が1963年に『人間と空間』で述べることになる（ボルノウ, オットー・フリードリヒ: 人間と空間, 大塚恵一, 池川健司, 中村浩平訳, せりか書房, 1978. 原著は Bollnow, Otto Friedrich: *Mensch und Raum*, Stuttgart, W. Kohlhammer, 1963.）。また、ボルノウは1956年にすでに“*Das Wesen der Stimmungen*”『気分の本質』を著している（Bollnow, Otto Friedrich: *Das Wesen der Stimmungen*, Frankfurt am Main, 1956. 邦訳はボルノウ, オットー・フリードリヒ: 気分の本質, 藤縄千艸訳, 筑摩叢書, 1973.）。なお、気分（*Stimmung*）という言葉は声（*Stimme*）から派生した言葉である（レーマン, アルブレヒト: 雰囲気語る, 金城ハウプトマン朱美訳, 所収: 日常と文化, 日常と文化研究会, pp. 73-99, 2019.）。

⁸⁸ Brinckmann, *op. cit.*, S. 57-59. 原文は次のとおり。“*Die formalen Darstellungsmöglichkeiten liegen für die Plastik in dem Absetzen ihrer Oberfläche gegen den umgebenden Luftraum, für die Architektur als raumumgrenzende Kunst in dem Absetzen der Wände gegen den inneren, umschlossenen Raum. Die äußere Flächendurchgliederung läßt die Stimmung des Innenraumes nach außen in Erscheinung treten. Erst wenn die architektonischen Formelemente nicht als Ausdruck eines bestimmten Raumgefühls, sondern unorganisch dekorativ verwendet werden wie im XIX. Jahrhundert, wird der ganze Wirkungsakzent in die äußere Erscheinung verlegt: die Architektur wird zum minderwertigen plastischen Dekorationsstück, das Raumgefühl verkümmert.*”ブリックマンが展開した空間論については、ファン・デ・フェン, 佐々木訳, 前掲書, pp. 132-136 もとくに詳しい。

⁸⁹ Schultze-Naumburg, *op. cit.*, S. 391-393. 原文は次のとおり。“*Leider trat noch viel zu wenig die Erkenntnis hervor, dass die Mauer wie jede andere Einfriedigung ihre Existenzberechtigung hat und gewisse Stimmungswerte mit sich bringt, die durch nichts anderes ersetzt werden können. Die Mauer bringt diese Stimmungswerte nicht bloss für die Innenseite des Grundstücks, sondern auch für den Anblick von aussen.*”

⁹⁰ シューベルトはこれとその後続く部分について、「囲い壁」の節でのジャンヌレの記述との類似を指摘している。Schubert, *op. cit.*, pp. 61-62.

われるのはドイツ、キールの哲学者ヘルマン・シュミッツ (Hermann Schmitz, 1928-2021) による「新しい現象学 (Neue Phänomenologie)」の創始を待たなければならない⁹¹。ここで本研究が指摘した類似から推察されるのは、ジャンヌレがブリンクマンとシュルツェ=ナウムブルクから“*Ambiente*”や“*Atmosphäre*”ではなく“*Stimmung*”を取り入れ、“*ambiance*”と仏訳して用いている可能性である。なお、ブリンクマンは歴史家ハインリヒ・ヴェルフリン (Heinrich Wölfflin, 1864-1945) の下で美術史を学んでいた⁹²。ヴェルフリンが建築理論へと再翻訳することになったことで知られる感情移入論では⁹³、“*Stimmung*”の語が用いられてきたし⁹⁴、この“*Stimmung*”の語は心理学的な概念として変化していき、20世紀初頭の心理学的な議論においてその動きは頂点に達していたことが指摘されている⁹⁵。「都市の構築」における感情移入論の影響はこれまでも指摘されてきたが⁹⁶、本章で見てきたように、「雰囲気」についても、“*Ambiente*”や“*Atmosphäre*”ではなくブリンクマンやシュルツェ=ナウムブルクの用いた“*Stimmung*”の語を通して感情移入の議論のニュアンスも含みながら、情感づけられた空間の経験を表現する語としてジャンヌレが“*ambiance*”という仏語を用いていた可能性が指摘できる。そしてジャンヌレが論じる「雰囲気」は、先述したように、広場という都市構成要素に特有の、比較的人が滞留しやすい形態に応じた概念であった。ブリンクマンの『広場とモニュメント』は1908年、シュルツェ=ナウムブルクの『文化作品』第四巻『都市計画』は1906年の著作であり、ジッテの『広場の造形』が発表された1889年の20年近く後のものであった⁹⁷。

このように広場にかんしてジャンヌレが用いる鍵語は独語圏における空間論との関連から論じることができる⁹⁸。たとえばシュノールは、ジャンヌレの用いた“*esprit du lieu* (場所の精神)”という仏語が、ジッ

⁹¹ 「雰囲気」の現象に正面から取り組むきっかけを与えたのはシュミッツによる「新しい現象学」であった (ベーメ, ゲルノート: 雰囲気的美学: 新しい現象学の挑戦, 梶谷真司, 齊藤渉, 野村文宏編訳, 晃洋書房, 2006, p. i)。そもそも現象学を確立したのはオーストリアの哲学者エドムント・フッサール (Edmund Gustav Albrecht Husserl 1859-1938) であって、1900年/1901年に著書『論理学研究』で現象学の基盤を築いたが、小川によればフッサールは雰囲気の詳細は行わなかった (小川侃: 雰囲気と集合心性, 京都大学学術出版会, 2001, pp. 5-6)。それに対してハイデッガーやシュミッツは、感情を人間の意識体験の内部に帰属するものとして考えるのではなく、気分として (ハイデッガー) あるいは雰囲気として (シュミッツ) 私の周りの空間に溢れ出ているものとして捉えた (上掲書, pp. 5-6)。なおドイツの哲学者ゲルノート・ベーメ (Gernot Böhme, 1937-) は『雰囲気的美学: 新しい現象学の挑戦』の中の「第IV部 建築」において「都市の雰囲気」という章を設けて、ジッテが『広場の造形』の中で「美的なもの (das Ästhetische)」と名付けた空間の配置や交通といったものは別のものにかんして言及している。そしてゴードン・カレン (Gordon Cullen, 1914-1994) の「景観的なもの (das Landschaftliche)」といった語彙やケヴィン・リンチ (Kevin Lynch, 1918-1984) の「都市のイメージ」における英語の“*image*”からの“*Bild* (像)”といった独訳も引きながら、そういった視覚的なものに限定された探求を批判的に捉え、目で見るものというよりも匂いや音といったものに着目して雰囲気を論じている (ベーメ, 前掲書, pp. 164-179)。

⁹² ファン・デ・フェンは、ブリンクマンがヒルデブラントとシュマルゾーとリーゲルを通じて、空間における視覚的ヴィジョンと触覚的運動との結合を自覚するようになったとみなし、ブリンクマンの論文によって、建築的な量塊によって刺激された、空間における人間の運動の理念が広がったと評価している (ファン・デ・フェン, 佐々木訳, 前掲書 p. 132)。

⁹³ ヴェルフリンについては本論文第五章に含まれる補論も参照。

⁹⁴ たとえばリップスは“*Stimmungseinführung* (情調感情移入もしくは気分感情移入)”について論じており、ソルハウザーはリップスやヨハネス・フォルケルト (Johannes Volkelt, 1848-1930) からはじまる感情移入論における“*Stimmung*”の語法を分析している。Thonhauser, *op. cit.* Lipps, Theodor: *Leitfaden der Psychologie. 3rd ed.*, Leipzig: Engelmann, 1909.

⁹⁵ Thonhauser, *op. cit.*

⁹⁶ たとえば, Rabaca, 2014, *op. cit.*,

⁹⁷ なお、シュルツェ=ナウムブルクはヘンリチやテオドル・フィッシャーと同様にジッテを賞賛していたのに対し、ブリンクマンはジッテのロマンティックな主張を批判した、とシュノールは位置づけている。ただしシュノールは、ジッテ自身もバロックのモニュメンタルな様式には賛成していたので、過度なロマンティズムを批判するブリンクマンのジッテ批判には懐疑的であるべきだとしている (Schnoor, *op. cit.*, p. 29)。

⁹⁸ ほかにジャンヌレの語法に着目してみると、広場の敷地としての物理的な場所や環境を指す場合に“*cadre*”という語

テの用いた“genius loci”の語に相当するものであると指摘している⁹⁹。これも考慮すると、独語圏の思想の強い影響下にあったジャンヌレが、ジッテから導入した創造の動機となる「場所の精神」とジッテよりも後代のシュルツェ＝ナウムブルクやブリンクマンから取り入れた限定された空間における「気分 (Stimmung)」の考え方を組み合わせ、「雰囲気 (ambiance)」という仏語として導入し論じていると考えられるのである。

なおジャンヌレが広場のパルティで論じる雰囲気は建築内部ではなく戸外に存在しており、空間の形を規定するとは考えられていないが、後のル・コルビュジエはラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸について、「内部が自ずから広がり、その結果として外部が決定される」という設計過程を示しており¹⁰⁰、「都市の構築」の広場のパルティ論で論じられている限定された空間内部の「雰囲気」という概念は、内部が外部の決定要因とするこうした考えの萌芽とも捉えられる。

4-5 小結

本章では「都市の構築」の「広場」の節および「批判すべき適用:ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分から計70箇所の広場のパルティの記述箇所を取り出し整理することで、計19個の広場のパルティを抽出した。そして、それらを単一の広場と複数の広場に大別し、前者についてはモニュメントの有無によりさらに細分することで、ジャンヌレの広場のパルティを体系的に把握した。そして広場のパルティの評価軸を明らかにし、実用的観点の3つの評価軸（交通問題、建築構造）と視覚的・身体的観点の5つの評価軸（視認の正確性、視覚的閉鎖性、身体的な大きさ、建物やモニュメントの強調、眺望の多様性）に分けられることを示した。とくに後者の評価軸は視覚的閉鎖性、視認の正確性、そして眺望の多様性の評価軸が支配的であった。

具体的なパルティについては、ジャンヌレはおおむね視覚的閉鎖性や眺望の多様性や建物やモニュメン

を用いている。ジャンヌレはたとえば「壮麗さに値する枠組み (dans un cadre digne de la pompe)」[CV-332]「自分たちの作品に、それが値する枠組みを与えることができなかった (ils n'ont pas su donner à leur œuvre le cadre qu'elle mérite)」[CV-352]、「後陣のむき出しの丸みとピラスターの刺激とが対照をなしている、バロックのピラスターがある大きな塔によって、力の枠組みが相補っているのに対して (tandis qu'à l'opposé le cadre de force se complète par la grande tour aux pilastres baroques contrastant dans leur nervosité avec les rondeurs nues des absides)」[CV-368]といった具合で用いており、その用法からは物理的な場所だけでなくその場所の固有の性格も含めた両義性が感じられる。“Grand Larousse de la langue française (グランラルースフランス語辞典)”で“cadre”を参照すると、“I. 1. Bordure, originellement carrée, qui entoure un tableau, une glace, etc. (絵画や鏡などを囲む、本来は四角い縁取り。)”といった意味に加えて、下記のように定義されている。“II. 1. Limites d'un espace (空間の境界) ... 2. Fig. Entourage, milieu dans lequel on vit (比喩的に、周囲、生活する環境) ... 3. Fig. Ce qui borne, limite étroitement une activité, une réalité abstraite (比喩的に、ある活動、抽象的な現実を厳密に制限し境界を定めるもの) ... 4. Ce qui limite, circonscrit un sujet, et spécialement un sujet littéraire (ある対象を、とくに文学的な対象を制限し囲い込むもの) ...” (sous la direction de Guilbert, Louis, Lagane, René, et Niobey, Georges, *op. cit.*, p. 558) このように“cadre”の語が指すものには物理的な周囲のものと抽象的な枠組みとがあり、ジャンヌレの用法はこういった語義の両義性に対応したものであると理解できる。

⁹⁹ 一般に“l'esprit du lieu”は拉語“Genius Loci (ゲニウス・ロキ)”の仏訳として用いられている。これは古代ローマの概念でありしばしば「地霊」と邦訳されるが、「都市の構築」では宗教的・儀礼的意味は論じられておらず旧来の意味と異なることから、本研究では「場所の精神」と訳出している。シュノールはジャンヌレの用いた“l'esprit du lieu”はジッテの用いた“genius loci”に同等だとみなしている (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 131)。ジッテが用いる“genius loci” (Sitte, *op. cit.*, S. 102) は、日本語版の『広場の造形』では「守護神」と邦訳されている (ジッテ, 大石訳, 前掲書, p. 109)

¹⁰⁰ ル・コルビュジエ: プレシジョン, 井田安弘, 芝優子共訳, 鹿島出版会, 1984, p.25.

トの強調をもたらす不整形な平面形状を好んでいたが、幾何学的な形状であっても道の入り方やファサードの統一性などにより閉じて見えるパーティや、モニュメントや建物を強調するような控えめな大きさや配置のパーティであれば高く評価していた。大きさが身体性つまり人間的尺度を越えた場合については、ジャンヌレは「空間の境界 (frontières de ces espaces)」を視認できないので批判を展開していた。モニュメントがある場合は、その配置が広場の中心であれ端であれ、「場所の精神」による創造であれば、場所の調和的な雰囲気が明確になり対照が生まれることで、モニュメントが強調され、境界面を視認しやすくなり、面の具体的な視認によって身体を取り囲まれるような温かで親しみやすい感情、つまり「親密でより個人的な感情」が誘起されると理解できることを指摘した。またジャンヌレは閉鎖性のある空間において「壁の表面」などの二次元「表面」を視認することによって、「ヴォリューム」という三次元空間の視認が可能になり、圍繞感が生じると考えていた。ジャンヌレはこの状態を表現力が豊かな状態として肯定し「ヴォリュームの感覚」と表現していた。こういった身体を囲われる感覚の近しさや親密さは「親密でより個人的な感情」と同様であり、この感情はモニュメントがない広場一般にも敷衍可能であると考えられることを示した。

一般に線形に近い形態を呈す道に比べて広場という都市構成要素は人が滞留しやすい平面形状であり、ジャンヌレはほかの都市構成要素においても繰り返し論じてきた面や閉鎖性に加えて、広場という滞留空間においてモニュメントなどの対象物とともに規定される「雰囲気」を論じていることを指摘した。そしてジャンヌレが「雰囲気」という語を用いて、場所の精神による創造、つまりその場所の既存のものを考慮することで生じる空間の性格と、その創造を認知する主体の主観的な情感とが混在したものについて論じているということを指摘した。独語圏の思想の強い影響下にあったジャンヌレは、ジッテから導入した創造の動機となる「場所の精神」とジッテよりも後代のシュルツェ=ナウムブルクやブリンクマンから取り入れた限定された空間における「気分 (Stimmung)」の考え方を組み合わせ、感情移入の議論のニュアンスも含みながら情感づけられた空間の経験を表現する語として「雰囲気 (ambiance)」という仏語として導入し論じていると考えられる可能性を示唆した。また、限定された空間内部の「雰囲気」という概念に、内部が外部の決定要因とするル・コルビュジェの建築設計の萌芽が見られる可能性を指摘した。

第五章 ジャンヌレの究極目標

第五章 ジャンヌレの究極目標

ジャンヌレは前章までで見てきたように各都市構成要素のパーティを論じていた。本章では前章までで明らかにした街区、道、広場の要素のパーティ論とその思想的背景のまとめ（5-1）を行った後、ジャンヌレの都市全体のデザイン論を確認する（5-2）。その後、こうした都市形態論の執筆意図、つまり草稿全体の都市論では何を実現しようとしていたのかを把握する（5-3）。さらにそうした執筆意図について、同時代の社会運動などとの関係を確認し、ジャンヌレがどういった背景のもとにそれを構想したのかを位置づける（5-4）。

5-1 各都市構成要素のパーティ論の総括

第二章から第四章までで見てきたジャンヌレの都市形態論を総括する。街区、道、広場のパーティ論について本研究で導出した評価軸を Table 5.1.1 に、おもなキーフレーズを Table 5.1.2 にそれぞれ一覧にして示す。

Table 5.1.1 Criteria of parti

	City blocks	Streets	Plazas
Practical criteria	Economy of Façade Number of Houses per City Blocks Hygiene	Traffic Problems Hygiene Economy	Traffic Problems Architectural Structure
Visual and Corporeal Criteria	Street-facing Façades The Beauty of Residential Perspective of Yards Perspectives Use of Right Angle Diversity of Perspectives	Diversity of Perspective Visual Closure Corporeal Rest Visual Rest Use of Right Angle Corporeality of Scale	Diversity of perspective Emphasis on Building or Monument Visual Closure Corporeality of Scale Accuracy of Visibility

Table 5.1.2 Key phrases of parti

	City blocks	Streets	Plazas
Keywords	Vide Surface	Vide Corporalité Repos pour les yeux Surface	Vide Corporalité Ambiance Esprit du lieu Échelle humaine Surface “Sentiment intime, plus personnel”

これらと、各章で示してきたパーティと評価軸の対応関係および評価軸相互の関係を示す Fig. 2.4.1、Fig. 3.4.1、および Fig. 4.4.1 より、街区、道、広場の 3 つの都市構成要素のパーティ論における共通点として以下が挙げられる。

- ・ 評価軸が、実用的観点のものと視覚的・身体的観点のもの 2 つに大別されることが、3 つの都市構成要素に共通している。
- ・ 眺望の多用性の評価軸が 3 つの都市構成要素に共通している。
- ・ 視覚的閉鎖性の希求が支配的であることが、3 つの都市構成要素に共通している。
- ・ 直角や直線といった幾何学の賞賛という、おおむねピクチャレスクを好むその他の評価からの部分的な逸脱が、3 つの都市構成要素に共通している。

またこれらの図より、パーティと評価軸のあいだの概則として、上記の 3 つの都市構成要素の総括にそれぞれ対応して下記が導き出せる。

- ・ 実用的観点の評価軸の中でも、とくに交通問題の改善をもたらすのは、渋滞を緩和するような規模の大きさ（例：Fig. 4.4.1 I⑫など）に加えて、線状の形態とは別に設けられたポケットパークのような平面形状（例：Fig. 3.4.1 I⑬や Fig. 4.4.1 I⑧など）である。これは線状の街路形態と対比的に捉えることができる。
- ・ 眺望の多様性をもたらすのは、平面形状（例：Fig. 3.4.1 I④など、Fig. 4.4.1 I ⑭など）であれ、断面形状（例：Fig. 3.4.1 I⑧）であれ、その対称性を崩し単調さを打破することである。
- ・ 視覚的閉鎖性をもたらすのは、形態の軸（視線）に平行な面（例：Fig. 2.4.1. I②、Fig. 3.4.1 I⑮など）（Fig. 5.1.1 中左図）あるいは形態の軸（視線）に直交する面（例：Fig. 3.4.1 I⑬、Fig. 4.4.1 I ②など）（Fig. 5.1.1 中右図）という、視認対象としての表面（あるいは植樹等の連なりという模倣的な面）を設けることである。つまりかならずしも囲いの形態を呈していなくとも、連続的な「表面（surface）」によって視覚的な閉鎖性をもたらすことができる。
- ・ ジャンヌレの幾何学の賞賛の中には、直角を無条件に好む態度と、規模（大きさ）に依存する評価（例：Fig. 3.4.1 I ①、Fig. 4.4.1 I⑩）とがある。

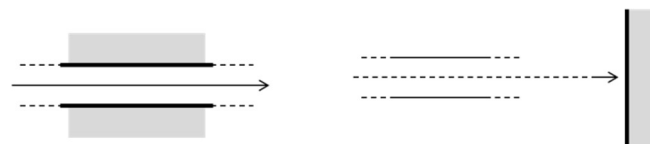


Fig. 5.1.1 Diagrams of *surface* as a visible object

各都市構成要素のパーティの評価軸の関係を統合し Fig. 5.1.2 に示す。上述の3つの都市構成要素の共通点として見られた視覚的閉鎖性と眺望の多様性およびは網掛けで示している。視覚的閉鎖性の希求という3つの都市構成要素の共通点に表れているように、ジャンヌレは各都市構成要素のパーティ論をとおして、街区ではたとえば道にファサードが面するような形態、道ではたとえば道の側壁の表面積が大きく見えるような曲線の形態、広場ではたとえば道が広場に入る角度が直角からずれた形態といった具合に、視線が抜けず都市構成要素の表面 (surface) に留まるような眺望が閉じたパーティを好んでいた。そして本研究で「視覚的」閉鎖性と表現しているとおりに、ジャンヌレは都市構成要素を「見る (voir)」行為について繰り返し論じている。目を通して都市構成要素を知覚することで、その形態は身体と結び付けて把握されるのである。とくにジャンヌレは道と広場にかんする論述の中で身体について論じており、その観点には身体を中心にした閉じた場についてのものと、生理的な休息 (repos) についてのものの2つがあった (Fig. 5.1.2 中破線四角)。前者については「身体性 (corporalité)」という語を用いて、その都市構成要素の身体感覚に即した規模、つまり「人間的尺度 (l'échelle humaine)」によって可能になる、パーソナルスペースのような、都市構成要素表面と身体周囲の空間の視認による身体周囲の空間把握が論じられていた。たとえば本研究第三章で見た道の都市構成要素では、直線街路であっても「身体性の感覚 (le sentiment de corporalité) を明確にする」[CV-328] ような長さが短く眺望の閉じた街路は讃えられ、反対に、たとえば第四章で見た広場の都市構成要素では「遠くへと逃げていくような眺望しか見えない目は身体性の意識をすべて失う (l'œil auquel ne s'offre que de lointaines fuites perspectives perd toute conscience de la corporalité)」[CV-384] ような、眺望の開いた「あいた空間 (vide)」の広場が批判されていた。このようにジャンヌレは「身体性の感覚」といった表現でそのパーティ規模の小ささによってもたらされる身体が取り囲まれるような圍繞感を論じていたが、とくに広場は比較的人が滞留しやすい平面形状の都市構成要素であり、上述の閉じた囲いの空間への好みとともに、モニュメントがある場合は、身体周囲の空間の「雰囲気 (ambiance)」についても論じられていた。この「雰囲気」とは、「場所の精神 (l'esprit du lieu)」を用いて周囲の建物やその素材といったすでにその場所にあるものを汲み取った創造によって明確になる、調和的なものであった¹。そしてジャンヌレは「ヴォリューム」を視認できるものとして捉えていた。こういった都市構成要素の表面と身体周囲の空間を視認することで身体周囲の空間把握が可能になるパーティでは、本論文の第四章で示したとおりに、「親密でより個人的な感情 (un sentiment intime, plus personnel)」が生じるのである²。この感情は「ヴォリュームの感覚」が論じられていたような視覚的閉鎖性のある道や、同様に視覚的閉鎖性が支配的であった街区のパーティにおいても同様に生じると考えられる。

一方、生理的な身体という観点については、他の都市構成要素に比べて線形に近い要素である道についての論述の中で、たとえば退屈な長い距離を歩くことによる疲労をもたらすような直線街路を批判し、歩行者が歩みを止め休憩できるような、勾配がさまざまに変化する道を肯定するなどしていた。こういった身体の運動を説明する際、ジャンヌレは「身体性」という語を用いてはいないが、一般に心身の疲労に対

¹ 本論文の第四章で見たとおりに、ジャンヌレは次のように述べていた。「モニュメントを構想する芸術家は、かつて、場所の精神 (l'esprit du lieu) から靈感を得ていた；そして、表現する際にはその形が雰囲気 (l'ambiance) を確かにしていた」[CV-367]

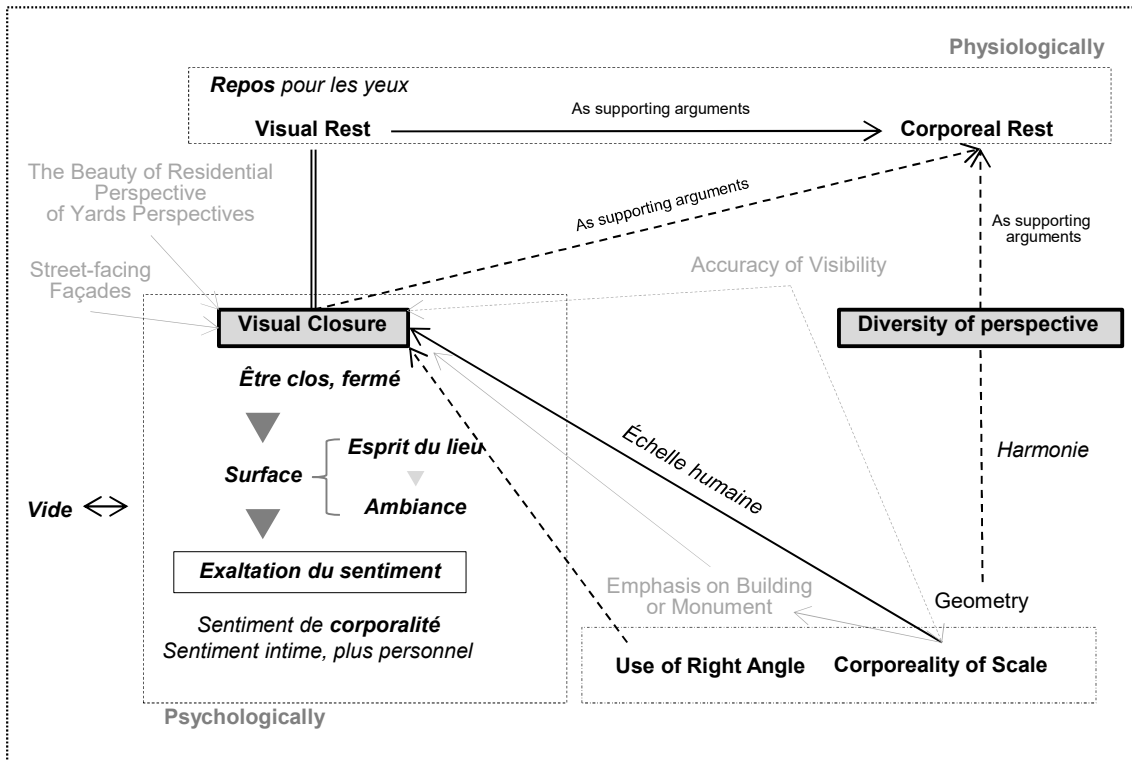
² 本論文の第四章で見たとおりに、ジャンヌレは次のように述べていた。「身体性は美に変わるだろう…それ (引用者注：身体性) が建築の線の抽象 (l'abstraction) に、親密でより個人的な感情 (un sentiment intime, plus personnel) を与えるときに」[CV-338]

して用いる「休息 (repos)」という用語を視覚的閉鎖性の説明時に「目」に対して用いることで、「広場恐怖症」といった心理的作用に鑑みて「ただっぴろい空虚な空間」を拒絶するジツテ的な上述の閉鎖性の根拠として³、論じていたのであった。また、3つの都市構成要素に共通する眺望の多様性の希求についても、部分的には、生理的な身体反応を論拠に主張されていた。道のパルティ論で見られたように、ジャンヌレは連続的な印象の変化を「疲労に対する最良の緩和薬 (le meilleur palliatif contre la fatigue)」[CV-297]と表現したり、「休息とは仕事の変化だ (le repos c'est le changement de l'occupation)」[CV-320]と述べたりと、歩行者の身体的疲労を軽減することを論拠に、眺望の多様性による単調さや退屈の回避を主張していたのであった (Fig. 5.1.2 中“Diversity of perspective”から“Corporeal Rest”へ向かう破線矢印)。ただし眺望の多様性については、たとえば左右非対称に建物が配置されることで「建物を多様な角度から見せていた (présentaient l'édifice sous des angles multiples)」[CV-360]広場に対する評価のように、生理的な身体的作用を論拠とせずとも、単調さを批判し、ただその眺望の変化の大きさ、つまり非相称性のみを肯定している場合も多い。上述してきたように、圍繞感や心理的な心の動きをもたらすのは「視覚的閉鎖性」であり、これがパルティ論の評価軸の相互関係の中で支配的であると言える。そしてジャンヌレはその視覚的閉鎖性を主張するための論拠として、身体の休息を論じたり (Fig. 5.1.2 中“Visual Closure”から“Corporeal Rest”へ向かう破線矢印および“Visual Rest”から“Corporeal Rest”へ向かう実線矢印)、一般に心身の疲労に対して用いる「休息」という用語を「目」に対して用いて視覚的閉鎖性を説明したり (Fig. 5.1.2 中“Visual Closure”と“Visual Rest”を結ぶ二重線) しているのだと理解できる。

このように、ジャンヌレのパルティ論で支配的であるのは視覚的閉鎖性を求める観点であり、その観点から、囲いの形態、その表面の視認、それによる身体的な空間把握とその結果生じる「親密でより個人的な感情」という心理効果⁴、といった一連の段階的な作用が論じられていたと言える。なお、冒頭に示した各パルティ論の共通点のうち、2つ目の項目である眺望の多様性の評価軸と4つ目の項目である幾何学の賞賛 (これは上述したように、直角を無条件に好む態度と、規模 (大きさ) に依存する評価からなる。Fig. 5.1.2 中一点鎖線四角) は、それぞれピクチャレスクな性格とモニュメンタルな性格への好みであると言えるが、本論文第四章の広場にかんする検討で示したとおり、こういった一見対立するように思われる性格を好む背景には、その場所の個性を明確にすることを勧める姿勢が通底しているためであると理解できる。

³ ジツテ, 大石訳, 前掲書, p. 63.

⁴ また「囲い壁」の節の記述からも、囲いの空間とその視認による感情の喚起、という一連の作用が確認できる。そしてそれを論じた次の部分についてはシュルツェ＝ナウムブルクの著作“Kulturarbeiten (文化作品)”の記述との類似をシューベルトが指摘している (Schubert, 2002, *op. cit.*) (Shultze-Naumburg, *op. cit.*)。「壁は美しい。その造形的美しさだけではなく、壁が呼び起こすことのできる印象によっても。壁は快適さについて語り、繊細さについて語る；壁は力と荒々しさについて語る；壁は不快であり、あるいは居心地がいいものである；壁は時には謎を秘めている。壁は感情を呼び起こすものである (Un mur est beau, non seulement de sa beauté plastique, mais aussi des impressions qu'il peut éveiller. Il parle de confort, il parle de délicatesse ; il parle de puissance et de brutalité ; il est rébarbatif ou il est accueillant ; il détient le mystère parfois. Un mur est évocateur de sentiments.)」[CV-395] また「囲い壁」の節の冒頭には「囲い壁が感情を呼び起こすことが次のように示されている。「ささやかな石組みの中で、特に様々な感情を呼び起こす可能性が高いもの：それは囲い壁である。(Parmi les modestes assemblages de pierres, il en est un susceptible spécialement d'évoquer les sentiments les plus variés: c'est le mur de clôture.)」[CV-393]



Visual and Corporeal Criteria

Regional Realism

Practical Criteria

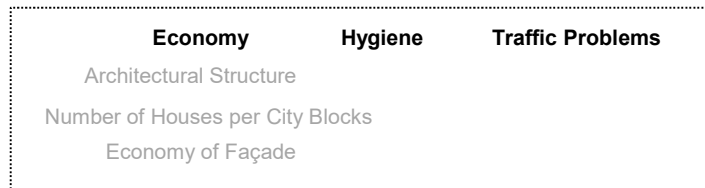


Fig. 5.1.2 Interrelationship of criteria in the manuscript

上述の身体的な空間の知覚にかんする議論の一方で、先ほど挙げた3つの都市構成要素のパーティ論の共通点の1つ目に示すように、そしてとくに日光や清浄な空気といった良好な衛生状態を提供する庭と建物の位置関係を中心に論じられる街区の論述で顕著であったように、3つの都市構成要素に共通して実用的観点の評価軸が見られた⁵。ただし実用的な形態が美しいと評価されているとは限らない。ジャンヌレは実用に美を見出す機能美というよりもむしろ実用と美の両立、美しくなければ実用的な造形も価値を持たないということを主張している。これは「有用で美しい目的 (*un but utile et beau*)」[CV-266]への強い欲求に基づいている。たとえばたとえば「風を遮り、太陽光を最大限に受けるように家の前面を向け、見事な最良の眺めを生み出すような (*qui couperont les vents, orienteront le front des maisons au soleil maximum, créeront les aspects les mieux réussis*)」[CV-268]実用性を持った道の形態は、「有用で美しい曲線 (*courbes utiles et belles*)」[CV-268]と形容されている。ジャンヌレがここで主張するのは、下に引用する部分に示されるように、機能的なものに美を見出すというよりもむしろ美しくなければ実用的な造形も価値を持たないということ、つまり美と実用性を両立しなければならないということである⁶。

様々な実用的要求に基づいて設定されたこの膨大な仕事は、完璧な人間によって練り上げられるときにだけ真の価値を有することになるだろうし、美によって構想されることになるだろう。

(Ce vaste travail de mise en place, basé sur de multiples exigences utilitaires, n'aura de valeur réelle que si, élaboré par un homme complet, il aura été *conçu en beauté*.) [CV-268]

各都市構成要素のパーティ論に先立って設けられている第一部第二章「都市を構成する要素」第一節「導入」は⁷、「導入」と題されてはいるが、その記述内容は以降の節をなす各都市構成要素の説明というより

⁵ シュノールも指摘するように、美と有用性の結びつきは「囲い壁」の節にも見られる (Schnoor, *op. cit.*, pp. 140-141)。

⁶ ただし「可能な手段」の部分の中で、ジャンヌレが給水塔などの機能美、機械美を賞賛する部分もある。たとえばジャンヌレは次のように述べている。「芸術は、偉大になるための有用性への欲求を持っている。それは時折その無益な有用性にしかならないのに！しかし、芸術と有用性の優れた組み合わせのためには、さらに、美の余地があるものを見分けることが問題となる—もっといえば、さまざまな美を知ることが問題となる。芸術的な意図を持ち合わせないというまさにその理由によって美しくある建物が存在する；その美しさは、目的と建設が完璧に適合しているということだ。

(L'art a besoin de l'utilité pour être grand, quand ce ne serait parfois que l'utilité de son inutilité! Mais pour la bonne collaboration de l'art et de l'utilité, il faut encore discerner entre ce qui est susceptible de beauté, — ou mieux, il faut *savoir* les différentes beautés. Il y a des édifices qui sont beaux du fait même qu'ils n'ont aucune prétention artistique; leur beauté est la convenance parfaite de leur construction pour leur destination.)」[CV-462] ブルックスはこの部分について、ジャンヌレの最初期の機械美への賞賛であること、そしてジャンヌレが2つの美について論じていることを指摘している。1つ目は「美の余地があること (*susceptible de beauté*)」[CV-462]であり、これはジャンヌレの口癖であるという。2つ目には「その美しさが目的と建設が完璧に適合している (*leur beauté est la convenance parfaite de leur construction pour leur destination*)」[CV-462]ということを挙げており、これは機関車、飛行機、発電機やレーシングカーが持つような、その組成を容易に読み取ることのできる「《一時的な美》(*la «beauté temporaire»*)」[CV-463]であると示している (Brooks, 1982, *op. cit.*)。

⁷ 「導入」の部分は「命題」や第一部第一章「全体的考慮」と類似点が多く、こういった序論としての章と第一部第二章「都市を構成する要素」とをつなぐ架け橋のような役割を担っている (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 71)。シュノールはジャンヌレが1910年4月初めには都市デザインの定義にかんしての回答を見出しドイツ滞り前に「導入」を記していた可能性を指摘する一方で、ジャンヌレが1910年5月にミュンヘンで読んだ、オーストリアの建築家ヨハン・ヒュバツチェック (Johann Hubatschek, 1861-1933) による著作“Die bautechnischen Aufgaben (建設作業)”とこの「導入」部分との類似を指摘し、ジャンヌレが「導入」執筆の際にこの文献を参照していたのではないかと推察している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 71-72)。Hubatschek, Johann: *Die bautechnischen Aufgaben einer modernen Stadt, Vortrag gehalten im Vereine der Hausbesitzer der Landeshauptstadt Linz a. D., 28. Jänner 1904, von dem Architekten und Baumeister Johann Hubatschek, Bauwerkschuldirektor a. D. in Tetschen a. E., hrsg. auf Veranlassung der Vereines der Hausbesitzer der Landeshauptstadt Linz, Linz: E. Mareis, 1905.*

も、節全体をとおして強調される「近代的な衛生 (l'Hygiène moderne)」[CV-267]、つまり工場や交通による塵埃や交通騒音への問題意識と、風通しや日当たりの確保といった主張に重きを置いたものであり⁸、衛生条件を満たすようにその場所に応じて要素をうまく取りまとめる計画の必要性が論じられている⁹。

彼（引用者注：製図工 (traceur de plans)）が活躍する場面はいつも、最小の土地面積となる傾向がある。様々な要素を支配して、有用で美しい目的に、要素を貢献させなければならない。

(La scène de son jeu est un terrain toujours porté au minimum. En se rendant maître des divers éléments, il doit les faire concourir un but utile et beau.) [CV-266]

「導入」においてもこのように論じられている実用と美の希求は、先に示した、実用的観点の評価軸と視覚的・身体的観点の評価軸という3つの都市構成要素のパーティ論の共通点に対応している。「身体性は美に変わるだろう」[CV-338]という記述にも表れているように、美は視覚的・身体的観点の評価軸によって肯定的に評価されるパーティにおいて見いだされており、それはジャンヌレがとくに広場のパーティ論などで論じていたように、その場所の個性を考慮することと両立されるべきものでもあった。

このようにパーティ論を通底する実用と美の両立やその場所の個性を考慮することの重要性といった主張は、19世紀末にドイツの批評家リヒャルト・シュトライトー (Richard Streiter, 1864-1912) が主張した「即物性 (Sachlichkeit)」にかんする理論と同様であると言える。シュトライトーは、芸術を創造するには「機能性 (Zweckmässigkeit)、快適さ、健康といった要求を最も完璧に満たすもの」といったリアリズム (Realismus) と等置されるような「即物性」だけでは十分ではなく¹⁰、その場所の個性や材料も考慮しなければならないという地域主義的なリアリズムを論じていた。

建築のリアリズムとは、建築物の創造にあたって、現実の状況を最も広範囲にわたり斟酌することを指し、機能的、快適さ、健全さといった要求すなわち〈即物性 (Sachlichkeit)〉を最も完璧に満足させることを指す。ただし、それがすべてではない。詩のリアリズムが登場人物と彼を取り巻く環境 (ihrem Millieu) との関係を考えるように、芸術上の誠実性の満足という、建築のリアリズムが考える主要目標は、目的の満足だけに根拠をもつのではない。周

⁸ とくに塵埃について繰り返し言及されるのは、ラ・ショー＝ド＝フォンが風の強い地方であったためであるとシュノーールは考察している。そしてジャンヌレのこのような衛生にかんする立場はたんにヒュバツチェックから取り入れたものではなく、ジャンヌレが参照したオーストリアの理論家ヨーゼフ・アウグスト・ルクス (Joseph August Lux, 1871-1947) やシュルツェ＝ナウムブルク、そしてジッテなども騒音や塵埃などについて論じていた (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 74)。ルクスの“*Ingenieur-Ästhetik* (エンジニア美学)” (1910) は建築家が芸術家から離れエンジニアに近づく必要性を説くものであった (マルグレイヴ, ハリー・フランシス: 近代建築理論全史 1673-1968, 加藤耕一監訳, 丸善, 2016, p. 512)。⁹ ジャンヌレは次のように述べている。「要するに、製図工による最初の仕事は、託された土地から、住むのにふさわしい地区や、工場に必要な地区を選びだし、商業上の大きな幹線道路でこの2つの相容れない領域をうまく区切ることである。(En résumé, la tâche première du traceur de plans sera de choisir dans le terrain qui lui est confié, les quartiers dignes de l'habitation, et ceux nécessaires à l'usine, les grandes artères commerciales limitant bien ces deux domaines inconciliables.)」[CV-268]

¹⁰ Streiter, Richart: Aus München, 1896. この一節の引用はフォーティエ, エイドリアン: 言葉と建築 語彙体系としてのモダニズム, 坂牛卓, 邊見浩久監訳: 鹿島出版会, 2006, p. 268 から。フォーティエは次の論文の p. 339 から引用している。Anderson, Stanford: *Sachlichkeit and Modernity, or Realist Architecture*, in Mallgrave, Henry Francis ed.: *Otto Wagner*, 1993, pp. 323-360. 英語には“functional (機能的)”の一語しかないが、独語には1900年までにその意味を持つ語が3つあったという (フォーティエ, 前掲書, p. 267.)。“sachlich (即物的)”と“zweckmässig (合目的)”と“funktionell (機能的)”である。

辺環境 (Milieu)、使用可能な素材の特質 (Eigenart der jeweilig vorhandenen Baustoffe)、景観 (landschaftlich)、歴史に条件づけられた場の雰囲気 (geschichtlich bedingten Stimmung der Oertlichkeit heraus) に根差した建物の性格 (Charakter eines Bauwerks) の開発の中にある¹¹

リアリズムはたとえば 1890 年代のヴァーグナーに見られるようにドイツでさかんに議論されていたが、「即物性 (Sachlichkeit)」という語を 1896 年に建築の語彙として導入したシュトライターは、このようにリアリズムを地域主義的に解釈していた¹²。ジャンヌレが主張する場所の個性を汲み取ることの重要性や実用と美の両立は、ドイツリアリズムから発展した即物性の理論と同様の主張であるとみなせるだろう¹³。なお、上に引用したシュトライターの記述には、“Stimmung”という、本論文第四章で指摘したジャンヌレの広場のパルティ論における鍵語“ambiance”の参照源と思われる語も見られ、その場所の既存のものを考慮することで生じる空間の性格を指す際に用いられていることがわかる。街区、道、広場の 3 つのパルティ論に共通していた実用的観点の評価軸と、美をも評価する視覚的・身体的観点の評価軸は互いに独立したものとしてではなく両立すべきものであり、地域主義的なリアリズムと同様のものとして当時の独語圏での議論の中で理解できると言える。

¹¹ Streiter, *op. cit.*, in Richard Streiter: *Ausgewählte Schriften zur Aesthetik und Kunstgeschichte*, Munich: Delphin, 1913, 32. 本研究が引用した邦訳は次の文献による。マルグレイヴ、加藤監訳、前掲書、pp. 461-462. ただし後半部分の邦訳はフォーティ、前掲書、p. 268 を参考にして筆者が修正した。原文は次のとおり。“Realismus in der Architektur, das ist die weitgehendste Berücksichtigung der realen Werdenbedingungen eines Bauwerks, die möglichst vollkommene Erfüllung der Forderungen der Zweckmässigkeit, Bequemlichkeit, Gesundheitsförderlichkeit, mit einheim Wort: die Sachlichkeit. Aber das ist noch nicht Alles. Wie der Realismus der Dichtung al seine seiner Hauptaufgaben es betrachtet, die Zusammenhang der Charaktere mit ihrem Millieu scharf ins Auge zu fassen, so sieht die verwandte Richtung in der Architektur ein vor allem erstrebenswertes Ziel künstlerischer Wahrhaftigkeit darin, den Charakter eines Bauwerks nicht aus seiner Zweckbestimmung allein, sondern auch aus dem Millieu, aus der Eigenart der jeweilig vorhandenen Baustoffe, auf der landschaftlich und geschichtlich bedingten Stimmung der Oertlichkeit heraus zu entwickeln.” 即物性については、マシューカ、ジョン・V.: ビフォーザバウハウス、田所辰之助、池田祐子訳、三元社、2015、p. 129 および第二章原註 65 も参照。なお、シュトライターは独語“Milieu”を「環境」の意で用いているが、ジャンヌレが仏語“milieu”を用いる際、その多くは物理的な場所の「中心」を指す意である。ただし、たとえば次の箇所ではジャンヌレは同じ語を「環境」の意味で使用している。「建物が立ち上がっているはずだった環境が、夢に見る情動の種類に対して好ましいかどうかを考慮する必要もあった (Il fallait aussi considérer si le milieu où se dresserait l'édifice allait être propice au genre d'émotion rêvée)」[CV-348]。

¹² 「リアリズム」と「即物性」の概念については、とくにフォーティ、前掲書、pp. 267-268 やマルグレイヴ、加藤監訳、前掲書、pp. 457-463 などを参照した。ドイツの建築界で「リアリズム (Realismus)」という言葉が初めて使われたのは 1860 年代のゼンパーの著作においてである。その後 1880~90 年代ドイツ文学やドイツ絵画ではリアリズム運動が起こりリアリズムという言葉が頻繁に用いられるようになった。1890 年代のオットー・ヴァーグナーはリアリズムに傾倒していた。「リアリズム」という言葉は独語圏の国で構築的な合理主義、つまり近代的な土木工事に見られるような構造の力学的表現を意味していた。絵画におけるリアリズムの影響も肯定したヴァーグナーは、工学におけるリアリズムの教訓を建築の素材にも引き入れようとして、英米の住宅建築に目を向けた。それらは快適な生活環境を提供すると同時にヴァナキュラーな伝統を通して“homeliness (家庭性)”という理念の表象にも成功していたからである。シュトライターは、ドイツ人がそういった英米の住居の特性を模倣することはできないと批判しながらも、それらから学びを得ることはできるとして、それらの特質を表現する言葉として“即物性 (Sachlichkeit)”という言葉を選び出し 1896 年に建築の語彙として導入した。後にこの用語はベルリンの建築家、批評家のヘルマン・ムテジウス (Adam Gottlieb Hermann Muthesius, 1861-1927) によって採用されてたとえば 1902 年の小著“Style-Architecture and Building-Art (様式建築と建築芸術)”においてなど広く用いられることとなった (フォーティ、前掲書、pp. 268-269)。

¹³ 先述の草稿の「導入」部分について、シュノールは、ジャンヌレが衛生を強調していることと、ヒュバツチェックの著作“Die bautechnischen Aufgaben (建設作業)”における主張の類似を指摘していた。またシュノールによれば、ヒュバツチェックは機能性と美の調和的なバランスを求めていた。Schnoor, *op. cit.*, 2020, p. 72. 一方、本研究で指摘しているのは、ジャンヌレが主張する実用と美の両立、そして地域性の考慮が、ドイツリアリズムから発展した即物性に対応していることである。

5-2 都市全体のデザイン論

このように、ジャンヌレが各都市構成要素について展開するパーティ論では実用と美の両立という主張が通底しており、それは地域主義的なリアリズムに類似したものであった。一方、都市全体についての議論を見てみると、ジャンヌレは地面の起伏を考慮した計画を勧めており、地域主義的な観点は都市全体レベルにおいても見られる。ジャンヌレが描写する土地の起伏を考慮した都市の中には、草稿の第二章「都市を構成する要素」で論じられたパーティ論に即した道や広場といった都市構成要素が配されている¹⁴。またとくにジャンヌレは公共建築を分散させるのではなく広場の周りに集めて配置することや、「より親密な関係 (leur plus intimes rapports)」[CV-476]として丘の頂に集めることを提案しており¹⁵、ハムステッドや17世紀のブライザッハ (Fig. 5.2.1) といった事例も用いながら論じている¹⁶。そうやって公共建築が集められていることで、分散配置に比べて効率的に公共サービスを提供できるというのである。ジャンヌレはこうした説明の直後に、「都市のシルエット (la *Silhouette* d'une ville)」[CV-475]について論じたド・モンタックの記述を引用している¹⁷。ここで「シルエットの探求」[CV-475]とは、「ある敷地を、ある高さの建物に指定することを意味し、何としても到達しなければならないもの (ce qui implique la désignation de certaines parcelles pour certains bâtiments avec certaines hauteurs à atteindre à tout prix.)」[CV-475]であると述べられており、とくに高さ方向を考慮して都市の輪郭 (シルエット) を検討する必要性を主張していることがわかる。ただし、ジャンヌレは都市全体の輪郭 (シルエット) にかんして深くは考察せず、具体的な形態の提案も行っていない¹⁸。とはいえこのように、集められた建築群やその結果形作られる都市全体の輪郭 (シルエット) という考え方は、おおむね規模の小さいまとまりのある形態を好んでいるという点で各都市構成要素のパーティ論に通底していた視覚的閉鎖性をもたらす囲いの空間の都市全体レベルへの拡張版であると見なせるだろうし、各都市構成要素に論じられていた実用と美の共

¹⁴ ジャンヌレは次のように記している。「地面は最も好ましい街区に従って分割される；家々は孤立したり集合したりして広場や通りを形成しており、そこではこの研究の第二章で説明した法則が確認される。(le sol est partagé suivant les chéaux les plus favorables; les maisons, isolées ou groupées forment des places et des rues où se trouvent confirmées les lois exposées au chapitre second de cette étude.)」[CV-470]

¹⁵ こういった都市全体のデザイン論は「可能な手段」の部分を中心に論じられている。なお、この部分においても再度、美と有用性 (utilité) といったことについて主張されている。

¹⁶ シュノールによれば、ジャンヌレはハムステッドの事例について Hans-Eduard von Berlepsch-Valendàs によるハムステッドについてのエッセイ、「Eine Studie über Städtebau in England」を参照していたようである。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 185. Fig. 5.2.1 のブライザッハの図については、スイスの銅版画家マテウス・メーリアン (Matthäus Merian, 1593-1650) の次の書籍から模写したものであったようである。Merian, Matthäus: *Topographia Alsatiae, &c, Completa, Das ist Völkömliche Beschreibung und eygentliche Abbildung der vornehmsten Städt und Oerther im Obern und untern Elsaß auch den benachbarten Sundgow Brißgow Graffschafft Mümpelgart und andern Gegenden...*, Frankfurt am Main: Merian Erben 1663; repr., Kassel and Basel: Bärenreiter, 1964, p. 6)

¹⁷ たとえばジャンヌレは草稿の余白に「シルエットについてモンタックのメモを見ること、ルーズリーフ (voir les notes prises à Montnach au sujet de Silhouette feuille volante)」[CV-475]と書きつけ、「都市のシルエット」について論じたド・モンタックの記述を“Pour le visage aimé de la patrie! (郷土の愛すべき顔のために!)”から引用していたようである (De Montnach, Georges: *Pour le visage aimé de la patrie! Ouvrage de propagande esthétique et sociale*, Lausanne: Sack-Reymond, 1908)。ただしジャンヌレはド・モンタックからの引用を分けて記しており、草稿本文に組み込むことはなかったようである (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 185.)。ド・モンタックからの引用はシュノールが「付録：批判すべき適用の資料 II」として収録する部分に多く見られる。

¹⁸ 後のル・コルビュジェが提案する「300万人のための現代都市」(1922) やアルジェの「オビュ計画」(1933) の概形はそれぞれ幾何学的なものとは有機的な曲線による構成であって大きく異なるが、いずれも印象的な輪郭 (シルエット) を有している。都市のシルエットのデザインにかんしてジャンヌレそしてル・コルビュジェがどれだけ意識を向けていたのかはここでは不明確である。

存は効率的なサービス提供として都市全体のレベルにおいても考えられていたと言える。なお、シュノー
ルは、上記が論じられている「可能な手段」の部分における都市デザインの美と機能性の組み合わせにか
んする議論が、ジッテではなくテオドール・フィッシャーに由来することを示唆しているが、ジャンヌ
レが「可能な手段」を下書きする前にどの程度フィッシャーの議論を知っていたのかは不明確であるとして
いる¹⁹。

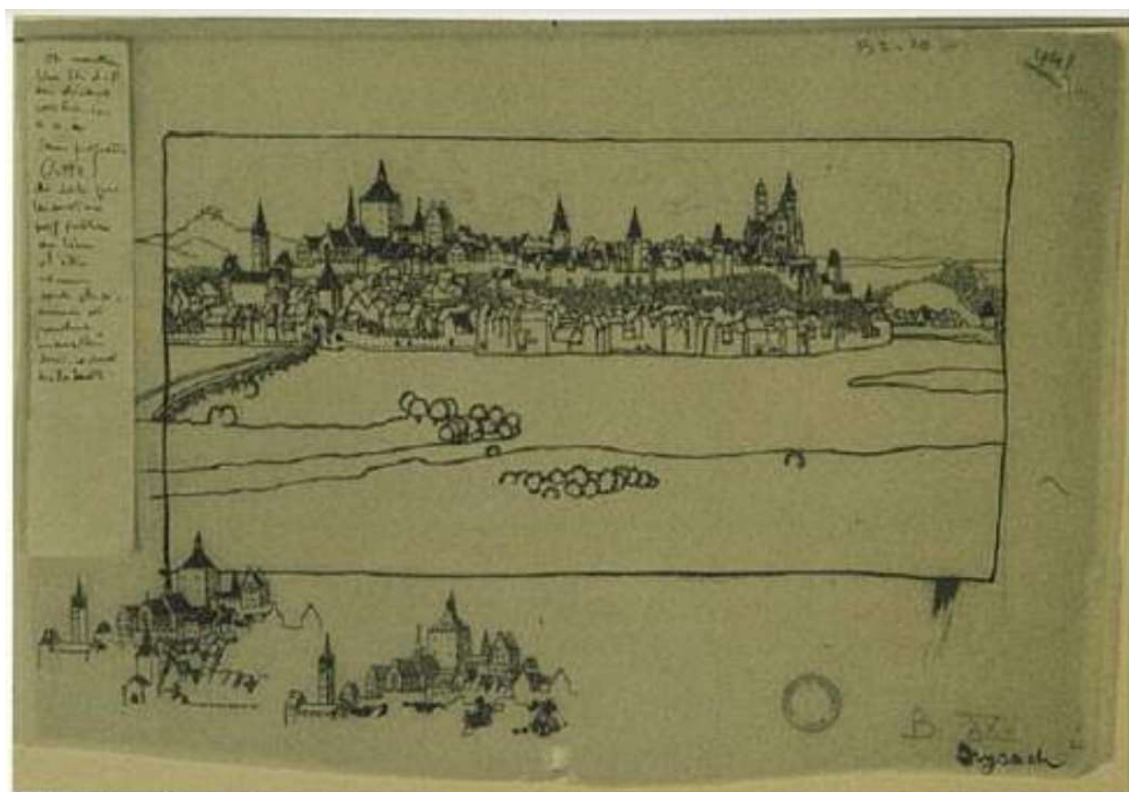


Fig. 5.2.1 Breisach on the Rhine, drawn by Jeanneret, copied from Merian, *Topographia Alsatie*
[CV-468] (B2-20-360 FLC)

¹⁹ 経済性、衛生、機能性といった実用（ジャンヌレの言葉では有用性（l'utilité）と芸術の共存は、たとえば「可能な手段」の冒頭においても主張されている。この部分の分析については Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 183 も参照のこと。シュノー
ルは、「可能な手段」における都市デザインの美と機能性の組み合わせにかんする議論がジッテではなくテオドール
・フィッシャーに由来することを示唆しているが、ジャンヌレが「可能な手段」を下書きする前にフィッシャーの
“Stadterweiterungsfragen（都市拡大の問題）”からまったく抜粋していなかったことから、「可能な手段」執筆時点で
ジャンヌレがどの程度フィッシャーの議論を知っていたのかは不明確であるとしている。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 189

また、公共建築群の集まりを形容する「親密 (intimes)」という表現からは建物同士の物理的な距離の小ささだけでなく精神的な近しさも窺われる。こうした心理的な作用はジャンヌレが地形を考慮するようを勧める理由とも対応している。ジャンヌレは地形が調和的に美しくデザインされ、その上に建物群が芸術的に集められていることで何らかの情動 (émotion) が引き起こされると考えているのである。ジャンヌレは集められた建物群を「キューブ (cube)」と呼び、その建物群の「台座 (socle)」にあたる地形について「ブロック (bloc)」という語を用いて記述している²⁰。ジャンヌレがブロック (bloc) という言葉で指すのは街区 (英語の city block) ではなく、量塊的な地面のことである。この「ブロック」そのものが美しくなければ「美を呼び起こすことはできない (ne sauraient évoquer la Beauté)」[CV-482]し、「不調和な醜さの台座の上 (sur un socle de laideur / désharmonie)」[CV-482]に据えられる場合は、建物がすばらしかったとしても「決して情動を引き起こすことはない (ne provoqueront jamais émotion)」[CV-482]。ジャンヌレは既存の地形との調和による「美 (la Beauté)」に対して心が動かされ「情動」が生じると考えているのである。ジャンヌレは建築を彫刻に例えているようである。ジャンヌレによれば、美しい細部を作ることのできる彫刻家であっても、「集めるという芸術 (l'art de grouper)」[CV-482]を知らなければ情動を引き起こすことはできない。つまりジャンヌレは、1つ1つの建物だけでなくそれらの集まりも芸術的でなければならないと考えているのである。ジャンヌレはこの後次のように述べる。「これが芸術の重要な核心であり、調和の法である；これを理解しなければ、すべての努力は無駄になる (C'est là le nœud vital de l'Art, cette loi d'Harmonie; elle doit être comprise. Hors de cela, tout effort est vain)」[CV-483]。ジャンヌレにとって、情動を喚起するためには建物群の芸術的な集め方とその台座としての地形の尊重が必要なのである。ジャンヌレが「シルエットの探求」を勧めるときに注意を促していた高さ方向の検討とは、地形と建物群を一体として捉えたときの稜線のような都市の輪郭 (シルエット) を指していると言え

²⁰ 下に示す引用部分や脚注 25 に示す引用部分などでは集められた建物群は「キューブ (cube)」、その台座が「ブロック (bloc)」と表現されているように理解できる。これらの表現は「可能な手段」の中でしばしば見られる。

「いわば、より大きな家のプランを作り、そのプランの線によって、その大きな家のファサードがどのように見えるかを定める、偉大なドラフトマンなのである。そして、冒頭で述べたように、彼はブロックの美醜をその手に握っているのである。しかし、ブロックそのものが美しくなければ、世界中のどんな芸術家に来て、美を呼び起こすことはできない。彼らは最も精巧なもの、最も均整のとれたもの、最も豊かなもの、最も巨大なものを作ることができるが、決して情動を引き起こすことはない。なぜなら、彼らの造形的な建物すべてが、不調和な醜さの台座の上に乗っているからである。

同じように、像の細部を作る方法しか知らず、しかも最も立派な方法を知っている彫刻家、集めるという芸術を無視したり、何らかの理由で、自分が協力しなければならぬモニュメントの 10 体あるいは 15 体をすべて構想することを禁じられたりする彫刻家；この彫刻家は、比率の悪いヴォリュームに、最も美しい造形の細部を作ることになるが、情動を呼び起こそうとは一瞬たりとも思わないだろう。彼の才能はここでは役に立たない；美しさを増すごとに不調和な印象が強調され、労働の日々は醜さへの新たな一歩となるのである。

これが芸術の重要な核心であり、調和の法則である；これを理解しなければ、すべての努力は無駄になる。

(Faisant pour ainsi dire le plan d'un plus vaste maison, décidant par les lignes mêmes de ce plan de la tenue des façades de cette grande maison, il est lui le grand ébaucheur. Et comme, nous le disions au début, il détient entre ses mains la beauté ou la laideur du bloc. Or si le bloc lui-même n'est pas beau, tous les artistes de la terre pourront venir, ils ne sauraient évoquer la Beauté. Ils pourront créer les choses les plus exquises, les mieux proportionnées, les plus riches, les plus colossales, ils ne provoqueront jamais émotion, car tout leur édifice plastique reposera sur un socle de laideur / désharmonie.

De admirer un sculpteur qui ne saurait faire que le détail d'une figure, et qui même le saurait faire de la plus admirable façon, qui ignorerait l'art de grouper, ou même à qui on interdirait p. une raison quelque, de concevoir l'ensemble de dix ou quinze figures du monument auquel il devra collaborer; ce sculpteur venant créer sur des volumes mal proportionnés, les plus beaux détails plastiques, ne pourra un instant songer à éveiller l'émotion. Son talent est inutile ici; chaque beauté qu'il ajoutera accentuera l'impression de désharmonie, chaque jour de son labeur sera une étape de plus vers la laideur.

C'est là le nœud vital de l'Art, cette loi d'Harmonie; elle doit être comprise. Hors de cela, tout effort est vain.)」[CV-482-483]

る。そし公共建築群を分散させずにまとめるよう勧める主張も考え合わせれば、ジャンヌレが論じる「都市のシルエット」は、Fig. 5.2.1のように起伏した地面と建物群が調和的に一体となった、高さ方向に変化のある量塊の輪郭を表すと言える。またこのとき、地形を含めた都市全体を彫塑のように捉えて、既存の地形との調和を論じている点には注目される²¹。「ブロック」についてはドラフトマンがその美醜を「その手に握っている」[CV-482]と表現されているように、美は元来の土地の形態の良し悪しではなく、既存の地形 (*modelé du terrain*) を建物の台座としてどのように活かすかということにかかっているのである²²。公共建築とともに地形を彫刻に例える記述は、下に示すような「根本的な今日の間違い」の節の中にも見られる。

公共の建物は、その目的が十分に達成される場所に設置された。—つまり、実用性を目的としたもの、豊かさを目的が十分に達成される場所に。他のすべての建築物についても同様である。—製図工は、3次元で見ることで、彫刻家であった；自然の法則に染まった美によって、都市での滞在を心地よく魅力的なものにすることができる、人間の手で作られた風景を創造するので、詩人であった。[CV-258]²³

そして、こうした地形の考慮によってジャンヌレが喚起を意図する情動 (*émotion*) とはすなわち都市への誇りつまり愛郷心である²⁴。ジャンヌレは“*patriotisme*”という語を用いて愛郷心について論じている。

²¹ 草稿の序盤における「調和した全体」、「統一性」、そして「性格」といった鍵語は、都市デザインの文脈から「統一性」と「性格」という語の意を説明したテオドール・フィッシャー (Theodor Fischer, 1862-1938) による 1903 年の講義“*Stadterweiterungsfragen* (都市拡張の問題)”からの影響が指摘されている。フィッシャーは“*harmonische Einheit* (調和した統一性)”を求めており、シュノールは、これがジャンヌレの用いた“*ensembles harmonieux* (調和した全体)”という表現に反映されていると指摘している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p.65)。

²² ジャンヌレはジャンヌレが「道の線を土地の起伏に本能的に適応させるさまを示す (*montre d'instinctives adaptations du tracé des rues au modelé du terrain*)」[CV-481]事例としてカールスバート (現在のカルロヴィ・ヴァリ) を挙げた後、次のように記している。なお下記引用のように地形の悪さではなく下手なディレクタントを批判するのは、シュノールによればシュルツェ＝ナウムブルクの援用であったようである (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 188, note 507)。「地形が悪いからということではなく、下手なディレクタントが引いた線が問題であると確信できるだろう。土の美しさへの敬意も、土の要求への敬意も、受け入れがたい手順によって盲目となった幾何学者を煩わせることはもはやない。都市の美、すなわち、実用主義、公共の福祉、美学のすべての必要性を正しく適応させた成果は、芸術家、つまり理想という大義に熱中する人間の使命という深い責任を感じている人間によってのみ達成できるものだ、とわたしたちは言っている。 (*on peut être sûr qu'il ne s'agit pas d'un terrain particulièrement défavorable mais bien d'un tracé fait par un mauvais dilettante. Ni le respect des beautés d'un sol, ni le respect des exigences d'un sol ne tracassent plus nos géomètres aveuglés par des procédés inadmissibles / inacceptable. Nous disons que la beauté d'une ville, fruit d'une juste adaptation de toutes les nécessités de utilitarisme de bien-être public, d'esthétique ne peut-être réalisée que par des artistes, des hommes sentant la profonde responsabilité de la vocation des hommes se passionnant pour cette cause d'idéals [sic]*)」[CV-481-482]

²³ 原文は次のとおり。On plaçait les édifices publics là où leur destination recevait pleine satisfaction, - destination à l'utilité, destination à la munificence. Il en était de même pour tous les autres édifices. - Le traceur de plans était statuaire parce qu'il voyait dans les trois dimensions; il était poète, parce qu'il créait des paysages faits de main d'homme, en lesquels, la beauté, toute imprégnée des lois de la Nature pouvait rendre agréable et charmant le séjour des villes. [CV-258]

²⁴ 本研究では“*patriotisme*”を「愛郷心」と訳出する。“*Grand Larousse de la langue française* (グランラールースフランス語辞典)”で“*patriotisme*”を参照すると下記のように記されている。“*Attachement sincère et dévouement à la patrie, volonté de la défendre contre toute attaque (patrie に対する誠実な愛着と献身、あらゆる攻撃からそれを守る意思)*”。そこで次は“*patrie*”の語義を同書で確認すると、次のように定義されている。“1. Pay où quelqu'un est né ou dans lequel ont vécu ses ancêtres, et auquel il est attaché par des liens affectifs. (ある人が生まれた国あるいは祖先が暮らした国、そして感情的なつながりによってそこにつながりとめられる国。) ... 2. *Petite patrie*, ou simplem. *patrie*, province natale, ville natale (*Petite patrie* で、またはたんに *patrie* で、生まれ育った州、生まれ育った町) ... 3. Tout lieu, tout milieu de vie où l'individu a l'impression de se trouver chez lui (個人がくつろげるあらゆる場所、あらゆる環境) ... 4. *La patrie de*, la contrée, le climat, le pays ou le lieu précis où l'on rencontre par excellence choses, certaines personnes (*La patrie de* で、地域、気候、国、または、特定の物や人に遭遇する特定の場所)”。(sous la direction

ジャンヌレは「より親密な関係」として公共建築をまとめるよう論じ²⁵、その後、結果として都市の誇りと真の愛郷心が生じることを次のように記している。

そうすれば、有名な都市のどこでも賞賛されるその美は、ついに強力なブロックの中に生まれるだろう：静謐で堂々とした統一性の中にある多様性。そのため、このキューブの大きさは、複数の目的を持った巨大なものとなってしまうのです。都市は新たなアクロポリスを、新たなピアツェッタを、新たなブルグを手に入れることになるのです。

[_____]建築家の才に従って、より少ない費用で、しかし独自に望まれた目標における合意によって[?]、都市

de Guilbert, Louis, Lagane, René, et Niobey, Georges, *op. cit.*, pp. 4086-4087.) これより、“patrie”は国家というよりも場所そのものを指していると言える。そこで本研究ではナショナリティにより重きを置いたニュアンスの「祖国」ではなくより中立的な響きのある「郷土」と邦訳する。これに伴い“patriotisme”は「祖国愛」ではなく「愛郷心」と訳出する。また日本語版のジッテ『広場の造形』では次の引用に示すように、「その都市の住民の喜び」「自分の町に対する愛着と誇り」「郷土感」、「郷土感情やその地方の愛郷心」といった表現が用いられている。「したがって計画の芸術的価値は、事実上ゼロに等しく、その結果として効果も同様にゼロとなる。その都市の住民の喜びもゼロなら、結局自分の町に対する愛着と誇りもゼロとなり、非芸術的で退屈な新しい都市の住民に事実認められるように、一口にいえば郷土感がゼロなのである。(…中略…) 芸術には社会的経済的価値もそなわっているのであるから、都市計画における芸術の奨励にいくばくかの金額を当てれば、郷土感情やその地方の愛郷心、さらには異国人をひきつけるという形で報われるので、結局それも悪くないと、無情な都市経済学者が思うようになるかもしれない。」(ジッテ, 大石訳, 前掲書, pp. 153-154)『広場の造形』独語原著の該当箇所は次の通り。「その都市の住民の喜び」「自分の町に対する愛着と誇り」「郷土感」、「郷土感情やその地方の愛郷心」といった表現はそれぞれ“die Freude der Bewohner an ihrer Stadt”、“die Anhänglichkeit an dieselbe, der Stolz auf dieselbe”、“das Heimatsgefühl gleich”、“Heimatsgefühl, Lokalpatriotismus”、と表現されている。下線は筆者。“Die künstlerischen Anlagewerte sind da tatsächlich gleich Null und somit auch nachträglich die Wirkung gleich Null und infolge davon wieder die Freude der Bewohner an ihrer Stadt gleich Null und somit in letzter Instanz auch die Anhänglichkeit an dieselbe, der Stolz auf dieselbe, mit einem Worte das Heimatsgefühl gleich Null, wie man es an den Bewohnern kunstloser, langweiliger Neustädte tatsächlich beobachten kann. (…中略…) Da aber der Kunst überhaupt auch ein sozialer und ökonomischer Wert innewohnt, so könnte es sein, daß selbst hartherzige Stadtökonomien finden dürften, es wäre am Ende nicht schlecht, auch einmal einige Summen am Wege der Kunstpflege bei Stadtanlagen in Heimatsgefühl, Lokalpatriotismus und eventuell auch in Fremdenverkehr umzusetzen.” Sitte, *op. cit.* [Reprint der 4. Auflage von 1909], S. 148-149. これらを考え合わせても、仏語“patrie”および“patriotism”の訳出は「郷土」および「愛郷心」が適切であると思われる。なお、仏語版の該当箇所は次の通り。先に指摘した表現はそれぞれ、仏語で“joie à y demeurer”、“s’y attache”、“sentiment du foyer”、“le sentiment du chez soi, le patriotisme local”、と表現されている。下線は筆者。“La banalité de nos quartiers modernes a bien des conséquences importantes: l’homme n’éprouve aucune joie à y demeurer, il ne s’y attache pas et n’acquiert aucun sentiment du foyer, ainsi qu’on a pu réellement le constater chez les habitants de villes ennuyeuses et construites sans art. (…中略…) Mais comme l’art a aussi une valeur sociale et pratique, l’économiste au cœur le plus dur pourrait sans inconvénient autoriser quelques dépenses afin d’embellir les villes ou plutôt d’empêcher qu’on les enlaidisse. Ainsi se développeraient chez leurs habitants le sentiment du chez soi, le patriotisme local. Ainsi même croîtrait l’affluence des étrangers, argument propre à convaincre les esprits les plus intéressés.” Sitte, Martin tr., p. 161.

²⁵ ジャンヌレは次のように述べている。

「経済的な結果は著しいものとなっただろう：なぜなら、常に建築研究の対象となっている公共建築は、1つのキューブにまとめられることで、その豪華なファサードの1つ、2つ、3つを純粋に実用的なファサードに置き換えることができたのだから。公共建築のグループ化の原則を採用し、その成長予測を想定し、最も親密な関係に従って集められたサービスの全体についてテンプレートで線を引いただろう。最も実用的で、最も美しく解決できると判断された土地が指定されただろう；そして要求に応じて建築が開始されただろう。年月が経てば、新しい建物ができたり、フロアが増えたりするだろうが、それらはすべて、採用したテンプレートを尊重したものだろう。作品は、それを生み出す時代の進歩や後退に対応したニュアンスの様式が与える統一性の中で、この複雑さに影響を与えながら、それ自体を完成させていっただろう。

(L’économie résultante serait énorme: car les édifices publics toujours prétextes à des recherches architecturales pourraient du fait d’un groupement en un cube unique remplacer un, deux ou trois de leurs façades luxueuses par une façade purement utilitaire. le principe des bâtiments publics groupés serait adopté, on présumerait de leur accroissement probable, on tracerait dans un gabarit l’ensemble des services qui seraient groupés suivant leurs plus intimes rapports. On désignerait le terrain jugé le plus pratique et qui permettrait la plus belle solution; et l’on commencerait à bâtir au fur et à mesure des besoins. Les années viendraient apportant leurs bêtises nouvelles ou leurs étages successifs qui toutes respecteraient le gabarit adopté. L’œuvre se parachèverait d’elle-même, affectant cette complexité dans l’unité que lui confèreraient les styles nuancés correspondant aux progrès ou au recul des périodes qui les créeraient.)」[CV-476]

は都市自体を誇らしく思うだろう。そうすれば、古い戯言ではなく、現実に根差した真の愛郷心が再び現れるだろう。

(Alors naîtrait enfin en un bloc puissant cette beauté, partout admiré dans les villes célèbres: la variété dans l'unité sereine imposante. Les dimensions deviendraient ainsi colossales de ce cube aux multiples fins. La ville aurait de nouveau son acropole, de nouveau sa piazzetta, de nouveau sa Burg, cela _____ et suivant le génie des architectes, avec des frais inférieurs, mais à cause de l'entente de tous dans un but uniquement désiré [?], une ville pourrait être fière d'elle-même. Alors reparaitrait le vrai patriotisme, celui qui a des racines faites de réalité et non de vieux radotages.) [CV-476-477] ^{26 27}

なお、上記引用ではアクロポリスなどが例示されており、ジャンヌレは地形を尊重したブロックやキューブにモニュメンタルな性格を見出しているようである²⁸。ジャンヌレが地形を考慮して公共建築を集めるよう主張するのは、Fig. 5.2.1 に描かれているような、起伏の頂部に屹立する都市というモニュメンタルで印象的な形態の都市をデザインすることで、都市住民が誇りを抱きやすいような象徴としての都市の演出を意図しているからであるようにも推察できる。ただしここで見ている都市全体のデザイン論において、ジャンヌレは地形の考慮を勧めながらも具体的な形態を提案することはなく、「都市のシルエット」について深く考察していない。ここでは具体的な形態と愛郷心を直接結びつけて詳細に論じるというよりも、起伏の頂部にそびえ立つ象徴的な都市から受ける印象が創出する愛郷心を論じているまでである。

また、地形 (*modelé du terrain*) という表現で用いられている“*modelé*”という語は彫刻などの肉付き具合も指す。彫刻に用いる語を地形に転用したこうした仏語表現を、ジャンヌレは土地を彫刻的に捉える一連の例えの中で用いており、地形とともに都市全体のシルエットを目に見えるものとして視覚的に捉えていると言える²⁹。ジャンヌレが彫刻の例えや「都市のシルエット」という言葉で表現する視覚的な明瞭性は、その場所の歴史性ではなく、建物の集まりが既存の地形と調和しているかどうかとともに、情動の喚起に結び付けられている。なお、シュノールによれば、ジャンヌレが上記の部分で例示するアクロポリスなどの事例はテオドル・フィッシャーの1903年の講義“*Stadterweiterungsfragen (都市拡張の問題)*”で挙げられていたものであるが、フィッシャーはアクロポリスを近代都市のスカイラインに持ち込むことがで

²⁶ シュノールはジャンヌレによるこれらの描写について、ブルーノ・タウトの“*Stadtkrone (都市の冠)*”のモデルを見越しているようであり、また、内なる多様性と外なる統一性をもったユニテ・ダビタシオンやサヴォア邸の複線でもあるとみなしている (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 186.)。

²⁷ シュノールおよびエムリーを参考にすると (Schnoor, 2008, *op. cit.*, Émery, 1992, *op. cit.*) ジャンヌレはこの記述の後にジッテの引用を意図していたようである。そしてその内容は、脚注24に示すような、芸術分野に横たわる経済的問題を都市の住民が抱く愛郷心で相殺できる可能性を示すものである。

²⁸ 起伏の頂部に集められた公共建築群におけるモニュメンタルな性格は下記の記述部分にも記されている。「丘の上 (図のA、斜線部分) には、都市の発展に伴って必要となる公共建物のための広大な土地が確保されており、そのため、自身の性格によってモニュメンタルなコンセプトに適した建物が、この特別な場所に集まっているのである (au sommet de la colline (en A, partie hachure sur la fig.) un vaste terrain réservé pour les bâtiments publics, qui deviendront nécessaire avec le développement de la cité, afin que soient groupés en cet endroit particulièrement situé, les édifices que leur caractère destine à une conception monumentale)」[CV-470] その一方で、本文にて引用する部分の中では「統一性の中にある多様性」と記されているように、これまでのパルティ論で賞賛されていた変化に富んだビクチャレスクな性格への好みも同時に窺われる。

²⁹ 日本語で地域性を論じる際にはしばしば「風土」という語が用いられるが、ジャンヌレが論じるこうした視覚的な明瞭性は、この言葉が持つ精神的な環境という意やその曖昧さとは異なるという点で興味深い。

きるかどうかにかんしては懐疑的であったようである³⁰。また、エムリーも指摘するように、丘の頂に集められた公共建築は、後のル・コルビュジエによるチャンディーガルの、都市の頭部としての中央官衙街、カピトールの萌芽にも思われる³¹。

そして上記引用で示されていたように、ジャンヌレが目指すのは偽りない心からの愛郷心の創出である。愛郷心は温かみがある感情であり、この点は都市構成要素レベルで論じられていた視覚的閉鎖性とその結果喚起される圍繞感、「親密でより個人的な感情 (un sentiment intime, plus personnel)」[CV-338]と表現されていたような、親密な感情の心温まるさまと同様の近しさがあると言える

以上で見てきたように、都市構成要素のレベルでは囲いの空間を視認することで親密な感情が生じ、都市全体のレベルでは、物理的な土地の起伏を考慮した調和的なデザインの都市を視認することで愛郷心が生じる³²。このように物理的な形式（都市構成要素レベルの囲いの空間や、土地の起伏に即した都市全体レベルのデザイン）を身体的・生理学的に視認し把握する（都市構成要素レベルの「ヴォリューム」や都市全体レベルの量塊的な「都市のシルエット」）ことで、心理的な作用（都市構成要素レベルの「親密でより個人的な感情」や、都市全体レベルの「愛郷心」）が生じる。「目と精神 (les yeux et l'esprit.)」[CV-247]の働きを考慮したこの段階的な作用は、都市構成要素のレベルから都市全体のレベルまで論じられていると言える。

おそらく建築家に調和した全体への関心呼び起こし、ほかの何よりも様式の法則を確立することにつながるだろう。近代都市の眺めは、そのとき、目と精神に作用するこうした不統一さを失うだろう。道全体における調和を追求することは、必ずや、心の安まる統一へと、そして、きっと性格へと導いてくれる。

(Peut-être éveillera-t-elle chez les architectes la préoccupation des ensembles harmonieux, préoccupation qui, plus que toute autre, amènerait à fixer les lois d'un style. L'aspect des villes modernes perdrait alors cette incohérence qui affecte les yeux et l'esprit. La recherche de l'harmonie dans des rues entières conduirait inévitablement à une *unité* reposante, et de là, fatalement au *caractère*.) [CV-247-248]

5-3 草稿執筆の意図

5-3-1 愛郷心

このように、ジャンヌレは都市全体レベルでは、土地の起伏を考慮した調和的なデザインによる愛郷心の創出を目指していた。この愛郷心はジャンヌレが生活の幸福として称揚する「美しい情動 (belles émotions)」[CV-249]であると言えよう。ジャンヌレはこういった感情を呼び覚ますことが芸術そして芸術的な都市の役割だと考えている。エムリーも指摘するようにジャンヌレは草稿を通して「感情の高揚

³⁰ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 186.

³¹ エムリー, 2007, 前掲論文.

³² 調和的な都市に対して愛郷心を抱くという主張は、『広場の造形』の第11章「現代の方式の改良」の内容に類似したものである。

(*exaltation des sentiments*)」を主張している³³。つまり愛郷心という情動の創出こそが草稿の究極目標であると言える。

美しい情動を覚えること、これこそ人生の幸せである。芸術の力、仕事は、個人の高貴さの度合いに応じて、多かれ少なかれ深い感情を呼び起こすことである。都市は、社会が生き、死ぬための活動の場である。そのため、その美化の問題は、感情を呼び起こす線を探すことであろう。

形や色が感覚を呼び覚まし、そこから感情を呼び起こす。音楽家が音符を、画家がパレットの宝物を使うように、芸術家は都市の計画の線を引きながら、感情を運ぶが形と色を、リズムをつけて使うだろう。都市の多かれ少なかれ美が完璧であるかどうかは、想像力の程度による。

(*Eprouver de belles émotions, voilà le bonheur de la vie. La puissance, la tâche de l'Art, c'est d'éveiller des sentiments qui, suivant le degré de noblesse des individus, seront plus ou moins profonds. La ville est le champ d'action où vit et meurt la société. Le problème de son embellissement sera donc la recherche des tracés évocateurs de sentiments.*

Des formes et des couleurs éveillent des sensations, et de là, provoquent des émotions. L'artiste, traçant le plan d'une ville, emploiera les formes et les couleurs porteurs de sentiments, comme le fait le musicien avec ses notes, le peintre avec les trésors de sa palette. La beauté plus ou moins parfaite d'une ville dépendra du degré d'imagination) [CV-249]³⁴

こうした芸術によって呼び起こされる「美しい情動」が都市への誇り、つまり愛郷心であることは下記の記述からも確認できる。ここで言及されるようなある都市で生きることの喜びとはすなわちその都市への誇りや愛着、まさしく愛郷心のことであると理解できる。こうした感情を喚起するような都市デザインを行うことが都市計画者の役目なのである³⁵。

建築家、エンジニア、画家、彫刻家、詩人として、都市の製図工は最も崇高な仕事を前にしている：それは、同胞の市民に、気持ちの良い都市で生きることの喜びをもたらすことだ。

(*Architecte, ingénieur, peintre, sculpteur et poète, le traceur de plans de villes a devant lui une des plus nobles tâches: celle d'apporter à ses concitoyens la joie de vivre en une ville où il fasse bon.*) [CV-251]

つまりジャンヌレの目指す「美しい情動」すなわち愛郷心、つまりある「都市で生きることの喜び」を感じられるようになるためには、都市が美しくあること（美化、*embellissement*）が必要となる、とジャンヌレは考えているのである。ジャンヌレはそうした都市の美化のために、都市計画者に対して都市構成要素から都市全体に至るまでデザイン論を展開したこの草稿を記したと言えよう。

³³ Émery, 1992, *op. cit.*, p. 24

³⁴ 草稿の第一部第一章第二節「一般的考察」より。

³⁵ 同引用の中で、都市計画を行う者が兼ね備える役割として「建築家」、「画家」、「彫刻家」、「詩人」が列挙されるなかに「エンジニア」が含まれていることから、先に指摘した美と実用性の共存をジャンヌレが考えていることが窺える。

ところでジャンヌレは、物理的な形式、その生理的な視認と把握、そして心理的な感情のすべての段階で具体性や相対性を求めていた。ジャンヌレが論じるこういった具体性や相対性とは、物理的な都市構成要素の形態にかんして言えば、草稿を通して「あいた空間 (vide)」という語で批判される、眺望の開いた空虚な空間の抽象性とは相対するものである。その生理的な視認についても、視認主体周囲の他者や具体的な形態を持つ視認対象があるときに生じるという点で、相対的なものである。そしてそれによって創出される心理的な感情についても、ジャンヌレは相対的なものであると考えている³⁶。下記に示す引用部分で論じているように、ジャンヌレは感情には絶対的な大きさが無いと考えているのである。

都市のレイアウトは、何よりも芸術作品であり、その実現のために、芸術家は他の芸術を支配するのと同じ法則、すなわち適合性、バランス、多様性に触発されるのです。

このように、心の情動や精神の喜びを増すものは、少ないもので多くを行うことであると、彼は心にとどめるだろう。その逆は愚かなことで、-美と過多を混同し、感情を予算の額で測ってしまう現代の愚かさである。贅沢に着飾った人は、地味な服装の人に囲まれて初めてそう見えることを考えると、彼は対照の大切さがわかるだろう。彼は、すべては相対的なものであり、情動の働きにはある次元や印象の絶対性は存在しないことを知ることになるだろう；正しい演出と環境への完璧な適応によってのみ、具体的な形で記したいという考えは高まるだろう。

(Le tracé d'une ville est, par-dessus tout, une œuvre d'art pour la réalisation de laquelle, l'artiste s'inspirera des memes lois qui régissent les autres arts: lois de convenance, d'équilibre, de variété.

Il se souviendra ainsi, que ce qui ajoute à l'émotion du cœur, le ravissement de l'esprit, c'est de faire beaucoup avec peu. Le contraire serait folie, - la folie de notre époque, qui confond beauté avec surcharge, qui mesure l'émotion au montant du budget [sic]. Considérant qu'un homme richement habillé ne paraîtra tel qu'entouré de compagnons sobrement vêtus, il connaîtra la valeur des contrastes.

Il saura que tout est relatif, que l'absolue d'une dimension ou d'une impression n'existe pas dans le jeu des émotions; par une juste mise en scène seulement, et une parfaite adaptation au milieu, s'exalteront les pensées qu'il veut inscrire en des formes concrètes.) [CV-250]

こうした心理的なものであれ、それを喚起する物理的な都市デザインであれ、ジャンヌレは絶対的なものではなく相対的に定まる具体的なものを好んでいる。

そしてこのように、物理的な形式、生理的な視認と把握、そして心理的な感情のすべての段階で具体性を求めることはその場所の個性、地域性を考慮することと結び付けられていると言える。ル・コルビュジェが「現代都市」で計画したようなインターナショナルでユニバーサルな、あるいは敷地を指定しない匿名的な原理としての計画はモダニズムの抽象性や普遍性を有していたが、「都市の構築」ではそれに相対するような地域の土着性が、形態と感情の具体性ととも論じられているのである。そしてそれは都市構成要素レベルのデザインによって喚起される「親密でより個人的な感情 (un sentiment intime, plus

³⁶ また、たとえば広場にかんする記述では、ジャンヌレは「諸感情の抽象を具体的にする相関性の法則 (les lois de relativité qui rendent tangibles l'abstraction même des sentiments)」[CV-348]について論じていた。

personnel)」[CV-338]³⁷や、都市全体レベルで論じられる「生き生きとした地元のものへの愛 (d'amour des choses vivantes et locales)」[CV-491]という表現に表れているように、親密さや近しさといった温かみを持っていて、モダニズムの匿名性や幾何学性が持つ抽象性や冷たさ³⁸とは異なるものであると言える。抽象化されていない、都市住民のその場所での実際の営みへの温かな眼差しが窺える。

5-3-2 教育

芸術を考慮せず無条件に幾何学的な都市計画を行う素養のない行政当局への批判は、草稿内の各所で述べられてはいるが、とりわけ文字通り草稿の目的を示す部分である第一部第一章第一節「この研究の目的」は、こうした権威者についての内容が主であり、「都市の構築」の草稿は当局 (autorités) に対して訴えかけるものであることが宣言されている。ジャンヌレは、都市の構築の分野が、大衆の批判の外で、専門家によって独占されている状態を問題視している。そしてこの分野が広く一般に知られるべきであり、盲目的にではなく、コンペなどによって知的に認められるべきであると主張している³⁹。

また、美しい都市デザインのためには、後述するようなコンペなどといったデザイン選択手段の工夫だけでなく、そもそもその都市計画を遂行する当局自体に美的なものごとにかんする素養が不可欠である。これが欠落した最たる事例こそ、ジャンヌレが草稿で糾弾する自身の故郷ラ・ショー＝ド＝フォンなのである。ジャンヌレが言うには都市デザインには「良い方法と悪い方法がある」[CV-257]⁴⁰。つまり善とされる方法、先に見たような地形を考慮したデザイン方法を選び取らなければならないことになるが⁴¹、当代には「行政的-官僚的 (administrative-bureaucratique)」[CV-258]な都市デザインの間違った方法が蔓延

³⁷ 本研究の第四章で見たように、ジャンヌレは広場にかんする記述の中で次のように述べていた。「広場の美 (la beauté) に必要不可欠な造形的要素は原初的な条件に由来している：身体性 (la corporalité)。わたしたちはすでに、この自明の理、つまり、造形的芸術作品は具体的 (concrète) であるべきで、視線によって捉えうるべきだということ述べた。ところが、上に述べた 19 世紀の広場は身体性を持っていない；美しいすべての時代の都市は、ヴォリュームや部屋の性格 (le caractère de volume, de chambre) の最高点を持っていたのに。もし広場が、内面仕上げが広く施され、適切に家具を配置され、美しい眺望へと穿たれた窓のある部屋でないなら、それはどんな美も望むことができない；直線で長く閉じていない道のような広場は、目にとってはヴォリュームが存在せず (un volume inexistant pour l'œil)、それゆえ、表現力に乏しい。その身体性は美に変わるだろう、その平面と取り囲む壁の関係が概念の統一性を強調するとき、そして、壁の表面にある数多くの深い穴を通して視線を遠くへ導く代わりに、視線を壁の表面に留めファサードの最大値 (le maximum de façades) を視線に示すときに、また、好ましい方角によって、指定した建物の美化に全体として協力するときに、そして最後に、モニュメント-噴水、像などを加えることで、建築の線の抽象 (l'abstraction des lignes architecturales) に、親密でより個人的な感覚感情 (un sentiment intime, plus personnel) を与えるときに。」[CV-338]

³⁸ モダニズムの匿名性や抽象性は、抽象芸術における「冷たい抽象」を彷彿とさせる。

³⁹ ただしジャンヌレは、当局の権威者であっても、「本質的に人間味のある感情 (sentiment essentiellement humain)」[CV-249]を持っていた過去の人物のことは、偉大な芸術作品を生み出したとして讃えている。

⁴⁰ ジャンヌレは「根本的な今日の間違い」の節の中で次のように述べている。

「都市の計画の線を引くには 2 つの方法がある：良い方法と悪い方法がある。

良い方法は、理性と感情の表現なので、太古の昔から支配している；これはつねに有用性の要求と美の法則に従っている。健康な組織を持つ本能的な行為なのである。

(Il est deux manières de tracer le plan d'une ville: la bonne et la mauvaise.

La bonne méthode a régné de tous temps, car elle est l'expression de la raison et du sentiment; elle satisfait toujours aux exigences de l'utilité et aux lois de la beauté. Elle est un acte instinctif d'un organe sain.)」[CV-257]

⁴¹ ジャンヌレは「根本的な今日の間違い」の節の中でも、地形を考慮するよう勧めている。「第 1 の方法は、空間における概念であった。道や広場はその場所の地形を考慮して線を引かれ、地面の構造、実用的、経済的、衛生的な資源、美の能力から恩恵を受けていた。(La première méthode, c'était la conception dans l'espace. Les rues et les places se traçaient en considération de la topographie des lieux, profitaient de la structure du sol, de ses ressources pratiques, économiques, hygiéniques, de ses capacités de beauté.)」[CV-258]

り、およそここ 80、90 年で最悪の状態に達している⁴²。当局の仕事はいわゆるお役所仕事と化して⁴³、土地の起伏を考慮せずに幾何学的に「列に並べること (alignements)」[CV-469]だけ尊重して、全体の計画なしに建設を進めている。土地の起伏を考慮したデザインは、芸術家によってしか実現できない状態にある⁴⁴。とはいえ、ジャンヌレは素養のない当局にもはや期待しておらず、「可能な手段」の部分においては当局の教育というよりも都市デザインを芸術家の手元に戻すように主張する箇所が多い⁴⁵。

それに当局だけではなく、実際に生活を営む大衆の趣味の教育も必要である。芸術は生活の中にあるのであり、すべての人々が教育を施されなければならない。ジャンヌレは下記引用のように、その場所の生活に根差した芸術を勧め、芸術的な生活が行われる場こそ都市であると考えている。ジャンヌレが教育を勧める趣味とは芸術のための芸術 (l'art pour l'art) ではなく人生のための芸術 (l'art pour la vie) を看取できるような趣味を指しているのだと言える⁴⁶。

この新しい分野は、日常生活に導入された芸術である。この、より生き生きとした、芸術的な枠組み、それが都市である：この枠組みは今日ではとても嘆かわしい状況にあり、芸術が逃げ出し、あるいは抑制されてしまっている。

芸術のためだけでなく、何よりも人類の幸福のために、この枠組みを変革することこそ急務である。

生存競争の悩みが薄れたときにだけ、芸術の中に幸福が見出される。社会的なキャンペーンは、より安定した均衡に向かう傾向がある。したがって、わたしたちのために、新しい生活環境に適切な環境をもたらすことが必要である：衛生的な都市、有用な都市、そして美で構想された都市を。

そこにこの研究のテーマがある。

⁴² ジャンヌレは「根本的な今日の間違い」の節の中で次のように述べている。「今日採用された方法はその唯一の修飾語によって定義される：それは行政的-官僚的なものである。(La méthode adoptée aujourd'hui se définit par son seul qualificatif: c'est celle administrative -bureaucratique.)」[CV-258]

⁴³ ジャンヌレの批判はまさに現代のブルジョアへの批判と重なる。芸術的な都市という本来の目標を見失ってはならないのである。「その現実的な反響は、無責任な従業員による、決まった時間に部屋で行われる仕事であった。彼らは上司を満足させたいという正当な欲求から、賞賛に値する仕事をしようと、こうして少しずつ、反論の余地のないドグマ、根本的な悪臭が確立されていったのである：紙の上に素晴らしい効果をもたらす計画への愛、-コンパスと直角定規が打ち勝った。

.....都市を上手く建設する芸術という目標そのものが忘れられていた。(Sa répercussion dans la pratique fut le travail fait en chambre, à des heures fixes, par des employés irresponsables. Ceux-ci, dans le désir légitime de satisfaire leur chef, cherchèrent à faire œuvre méritant louange, et ainsi s'établit peu à peu, en un dogme irréfragable, le vice fondamental: l'amour du plan faisant bel effet sur le papier, - et le compas et l'équerre triomphèrent.

... .. Or en oubliâ le but même, l'Art de bien bâtir les villes.)」[CV-259]

⁴⁴ ジャンヌレは次のように述べている。「地面の美しさを尊重することも、地面の要求を尊重することも、承認できない許容できない方法によってわたしたちの幾無分別な何学者を悩ませることはもはやない。わたしたちは、都市の美、すなわち、実利主義、公共の福祉、美学のすべての必要性を適切に適用するという成果が、芸術家、すなわち、この理想的な原因に夢中になっている人間の使命という深い責任を感じている人間によってしか、実現できないということを言っている。(Ni le respect des beautés d'un sol, ni le respect des exigences d'un sol ne tracassent plus nos géomètres aveuglés par des procédés inadmissibles / inacceptable. Nous disons que la beauté d'une ville, fruit d'une juste adaptation de toutes les nécessités de utilitarisme de bien-être public, d'esthétique ne peut-être réalisée que par des artistes, des hommes sentant la profonde responsabilité de la vocation des hommes se passionnant pour cette cause d'idéals [sic])」[CV-481-482]

⁴⁵ ジャンヌレは次のように述べている。「ある言葉がすべてを要約する：都市の発展の問題は、生き生きとした、責任感のある手の中に戻されなければならない。全てが個性がなく無味乾燥な行政の掃きだめからついに抜け出さなければならないのである。(Un mot résumera tout: La cause du développement des villes doit être remise entre des mains vivantes, responsables. Elle doit sortir enfin du cloaque administratif où tout est \stérile, \anonyme, \)」[CV-483]

⁴⁶ また、こうしたジャンヌレの主張には、芸術と社会との接点を求めたラスキンの影響も見られる。ジャンヌレがラスキンの影響を受けていることは、たとえばブルックスによってこれまでも指摘されてきた。Brooks, 1997, *op. cit.* また、同引用の後半からは、先に指摘した美と有用性の両立という主張が確認できる。

(Ce nouveau champ, c'est l'art introduit dans la vie quotidienne. Le cadre de cette plus vivante vie artistique, c'est la ville: cadre, aujourd'hui si lamentable que l'art est échappé ou y est demeuré étouffé. C'est ce cadre qu'avant tout, non seulement pour les Arts, mais déjà et surtout pour le bonheur des hommes, il est urgent de transformer. Le bonheur ne se trouvera dans l'art, que lorsque les soucis de la lutte pour l'existence auront diminué. – Les campagnes sociales tendent à la réalisation d'un équilibre plus stable. Pour nous, nous aurons donc à nous occuper d'offrir aux nouvelles conditions de vie, un milieu adéquat: *une ville hygiénique, une ville utile, et alors, conçue en beauté.*

Voilà le thème de cette étude.) [CV-240]⁴⁷

またジャンヌレは「命題」の部分において、芸術家が象牙の塔に籠り芸術と大衆の生活とが分離してしまったことを嘆き、芸術作品にかんする大衆の教育が不十分であることを批判している⁴⁸。ジャンヌレは趣味の啓蒙を進めることで都市が美しくなることを期待しているのである。

20世紀は、コミュニンの組織の力を予告している：公共生活へのすべての人の参加、知的な生活へのすべての人の自由な参入。相互の教育が、現在対立している勢力の相互の欲求となるだろう。

そして、その新たな欲求の圧力によって、街は変化していくだろう。道にも家にも美が宿る。

未来はフェスティバルをつくる。

未来は、私たちの現在の日常生活の外に、善の賛美に捧げられた美の聖域を創り出すだろう。

学校は、科学の発展と同様に趣味の発展のために配置されるだろう；そして自然は、常に回想の神殿、人間の力の《呼び起こすこと》ができるように、冒流から保護される。

(Le XXe siècle annonce la puissance des institutions communes: la participation de chacun à la vie publique, l'entrée libre pour tous à la vie intellectuelle. L'éducation mutuelle deviendra le besoin réciproque des forces actuellement opposées.

La ville alors se modifiera sous la poussée de ces nouveaux besoins. La beauté habitera la rue et les maisons.

L'avenir créera des festivals.

l'avenir créera en dehors de notre vie quotidienne actuelle des sanctuaires de beauté mise à la glorification du bien.

Les écoles seront agencées pour le développement du goût autant que pour celui des sciences; et la Nature sera préservée de la profanation afin que toujours elle soit le temple du recueillement, «susciteur» des forces viriles.)

[CV-237-238]⁴⁹

以上で見てきたように、「都市の構築」執筆の目的は、(1) 大衆と当局の教育（本章 5-3-2 での議論に相当、以下同様に本章における節および項の番号のみ示す）、それによって (2) 都市の美化を知的に推進す

⁴⁷ 草稿の「命題」の部分より。

⁴⁸ 「命題」の部分においては、都市の起源と今日の都市問題が論じられている。ジャンヌレは個人と社会について原始から時代を下って論じている。なお、時代を下りながらの社会的な観点からの記述は、『広場の造形』第一章「建物とモニュメントと広場の関係」と類似している。

⁴⁹ 草稿の「命題」の部分より。

ること (5-2)、そしてその結果として (3) 都市住民に美しい情動を喚起すること (5-3-1)、であったと言える。この美しい情動とはすなわち愛郷心のことであり、ジャンヌレの究極目標は都市への誇りやそこで生きる喜びといった愛郷心の創出であった。

5-4 愛郷心の観念の背景

ジャンヌレが論じる愛郷心について、当時の社会運動 (5-4-1)、独語圏でさかんに議論されていた感情移入論や空間論 (5-4-2)、のちに高まっていくナショナリズム (5-4-3) との関係を確認し、ジャンヌレがどういった背景のもとに「愛郷心」を構想したのかを位置づける。

5-4-1 社会運動

草稿内の愛郷心にかんする記述は、スイスの作家、遺産保護の提唱者ジョルジュ・ド・モントナック (Georges de Montenach, 1862-1925) とザクセンの風景画家、建築家パウル・シュルツェ＝ナウムブルク (Paul Schultze-Naumburg, 1869-1949) の名前とともに記されている。そしてその記述内容からは芸術教育運動および郷土保護運動の影響が浮かび上がってくる。ここではそういった社会運動を確認しジャンヌレの論じる愛郷心がどういった社会情勢の中で構想されたものであったのかを位置づける。

ド・モントナックと芸術教育運動

本 5-4 節の直前に示した引用部分⁵⁰においてジャンヌレは趣味の啓蒙と都市の美化を論じた後、下に引用する部分のように述べ、調和的な作品によって生まれる「郷土の感情」の復活を期待し、それを「愛他主義」的で「道徳的な感情」とみなしている。

そのとき、憎しみの激しさは衰え、利己的な《私》を犠牲にすることで均衡がとれて可能になる、同類に対する敬意となるだろう。大衆全体への敬意は再び蘇るだろうし、たくさんの要因によって輝きを失ってしまった郷土の感情は、より真の愛他主義の形で、すなわち、根拠ある地方の誇り、合理的な力を賢明に用いることによってついに完成した作品の高潔さという形で、生き返るだろう。そして、遠い昔の時代のように、全人類の道徳的な感情は、調和の接触から堂々とした一つの塊となって立ち上がるのである！

(Alors, la haine sera moins violente, le respect de son semblable possible à cause de l'équilibre dû au sacrifice du «moi» égoïste. Le respect pour la masse entière renaîtra, et le sentiment de patrie, que tant de facteurs actuels ont terni, revivra sous forme d'altruisme plus réel sous forme d'une fierté locale justifiée, fierté de l'œuvre accomplie enfin par le sage emploi des forces rationnelles. Et, tel qu'aux époques depuis longtemps disparues, le sentiment moral du peuple entier en un bloc imposant, s'élèvera au contact de l'harmonie!) [CV-238]⁵¹

⁵⁰ [CV-237-238]の引用。

⁵¹ 草稿の「命題」の部分より。

ここで愛郷心が愛他主義的な感情であるとみなされているのは、郷土への誇りが都市という自己以外の対象に対するものであるという点を指したものであり、道徳的な感情であるとみなされているのは、愛郷心を有する都市住民はすなわち都市の美を理解できている、つまり芸術的あるいは美的な善悪の区別を付けられるという点を指すものであると理解できる⁵²。芸術的あるいは美的な善を選び取ることができることは⁵³、つまり芸術にかんして啓蒙されており趣味が良いということである。こういった良し悪しの判断能力を身に着けることは、後述するように当時盛んであった芸術教育運動の文脈に沿っていると言える。

ジャンヌレが論じるこういった全人類の道徳的な感情、つまり大衆全員の教育といった考えの直接の参照源は、ド・モントナックであったようである。ジャンヌレは下記引用のように、都市計画分野における大衆の教育の重要性についての同氏の主張を引いている。

芸術の問題、特に見落とされている都市の構築の分野では、大衆は教育を受けなければならない—《ド・モントナック氏が言うように全人類の教育であり、有権者として、あるいは候補者として、主権者としての決定を下すことを常に求められているのは彼なのだから。》

(En matière d'Art, tout spécialement dans ce domaine ignoré de la construction des villes, il faut faire l'éducation du public, — «celle de Monsieur Tout le Monde, comme dit M. de Montenach, puisque c'est lui qui, soit comme électeur, soit comme élu, est appelé sans cesse à prendre des décisions souveraines.») [CV-256]

ド・モントナックは著作“Pour le visage aimé de la patrie”（以下『郷土の愛すべき顔のために！』）（1908）の中でドイツの郷土保護（Heimatschutz）を賞揚し、それをスイスにも適用するよう主張した人物として知られている⁵⁴。先に見たように、ジャンヌレは都市全体のデザイン論において、「都市のシルエット（la *Silhouette* d'une ville）」[CV-475]について論じたド・モントナックの記述を引用していた。つまりジャンヌレは、草稿の究極目標である「愛郷心」を創出する都市全体の視覚的な捉え方や、さらにはそういった

⁵² 道徳と芸術の関係については、長谷川亀太郎：芸術への道徳優先に関する小論考，教育哲学研究，1975 巻，31 号，pp. 20-38，1975 も参照。道徳と芸術、あるいは善と美は関係が深い。長谷川は、カントが美についても軽視はしないものの、感情が道徳的感情（moralischen Gefühl）と一致する場合にのみ真正の趣味（echte Geschmack）があり得ると主張していることから、道徳優先の立場であることを指摘している。

⁵³ 草稿のうちジュノールが「都市!」命題の一部または初期バージョンとして収録した部分では、ジャンヌレは次のように、美的なものを選び取ることについて述べている。

「そして、われわれの信念はここにある：真、善、美が、これまで知られていたすべてのものよりも偉大で壮大な新たな頂点へと人類を押し上げるのである。この神格化は共同体のものであり、その破風の上には、最後に語られた言葉が刻まれている：『我々は互いのために働く』と。

しかし、この冊子を作った理由は、もっと哲学的なものではない。私たちの能力は、形而上学的なきらびやかな高みにこだわることを許さない。私たちはたんに実用的感覚の行為をして、私たちが都市について考えていること、つまり、家や道、地区や郊外といった非常にポジティブな xxx ものについて、一種の迅速な分類と、それに続くさらに限定された出現の批判的な概要によって、述べただけなのである；そして、この短い研究の主要な部分を、私たち自身の都市の美醜—どちらを選ぶかは読者の判断にお任せする—という、切迫した緊急の問題に捧げたいと思う。

(Et notre foi sera ceci: le Vrai le Juste et le Beau poussant l'humanité vers une nouvelle apogée, sembler plus grande, plus magnifique que toutes celles connues. Car cette apothéose, sera celle de la collectivité, sur son fronton grave le verbe enfin parlé: Nous travaillons les uns pour les autres.

Mais la raison de cette brochure est d'un ordre beaucoup moins philosophique. Nos aptitudes ne nous permettent pas le séjour des sommets éclatants de la métaphysique. Nous voulons simplement faire acte de sens pratique et énoncer en une façon de rapide classification, suivie d'une aperçu critique d'émergence plus réduite encore, ce que nous pensons de la ville, de celle xxx très positive des maisons et des rues, des quartiers et des faubourgs: Et nous consacrerons le gros de cette courte étude à la question si pressante si urgente de la beauté ou de la laideur — ces termes étant au choix du lecteur — de notre propre ville.) [CV-242-243]

⁵⁴ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 46.

美的な都市全体の形態を看取できるような大衆の教育といった考え方についても、ド・モンタックから影響を受けていたと考えられる。

そして大衆の教育の必要性を説くモンタックの姿勢は、独語圏で推進されていた、芸術教育運動と同様のものとも言えよう。この運動は大衆の美術と工芸に対する趣味を教育するために、芸術雑誌や工芸学校などで活発なキャンペーンを行い、工業化や都市化への対抗手段として、芸術家を動員してドイツ製品をつくり替えようとするものであった⁵⁵。ヨーロッパでは19世紀半ばまでは国家が教育体制の整備に大きく乗り出すことはあまりみられなかったが、フランスでは革命家に国民教育の議論を経験していたため国家政治による関与はかなり進んでいたし、ドイツでは例外的に早く、19世紀初めのプロイセン改革の時代から小学校・ギムナジウム・大学の三段階でいくつもの両方で公権力が主導していたことが知られている⁵⁶。

シュルツェ＝ナウムブルクと郷土保護運動

ところで上述のド・モンタックは仏語で著作を著すも、その中で用いる「郷土保護 (Heimatschutz)」の語は独語を用いていたことが指摘されている⁵⁷。このことから、ジャンヌレが愛郷心を主張する背景には、ドイツの郷土保護運動があったことが推察される。とりわけジャンヌレは郷土保護連盟の初代会長であったシュルツェ＝ナウムブルクからも愛郷心の概念を引用していたと言える。ジャンヌレは下記に示す引用部分のように、「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」の部分でシュルツェ＝ナウムブルクを引用して、「裸：粗野な単純さ (sa nudité: sa fruste simplicité)」と表現するような地方色の濃い都市やそういった都市の素朴さを認めており、ここでは「愛郷心」という語は用いられていないものの、その場所特有のものに美 (beautés) が見出されている。そして「感情の線、すなわち生き生きとした地元のものへの愛の線 (trace de sentiment, d'amour des choses vivantes et locales)」といった表現からは、その地域特有の造形 (をなす線) という、先に指摘したような物理的な都市デザインと、それに対して抱く心理的な感情 (愛郷心) を結び付けて論じていることが確認できる。こうした都市デザインはラ・ショー＝ド＝フォンの都市計画のような直線による「規整化 (la Régularisation)」に対置されるものである。

《都市の調和した様相が死んだことを示す動詞、それは規整化だ。》かくしてシュルツェ＝ナウムブルクは自分の考えを述べている：《都市の優美さは、美への理解がなくなるというまさにその段階へと消える。-前ページを読んで得をした人は、厳格に引かれた線を和らげることがどれほど必要かということや、その外観の例外がどれほど美しく、おもしろく見えるかということを知るだろう。このような規整化の主要な原因は、感情の線、すなわち生き生きとした地元のものへの愛の線すべてが、都市を管理する会議の中心部において消えてしまったことだ。彼らは、もはや特別な習慣や美を持つ古き良き自然の都市を認めがらない：しかし、この成金たちは、彼らが裸と呼ぶもののことを恥じる：粗野な単純さを。(…中略…)》

⁵⁵ 芸術教育運動の詳細は後の補論にて確認する。

⁵⁶ これは「ナポレオン帝国のくびきを脱して自立した存在を主張するためにも、民族精神の涵養と国民を形成する教育が必要だ」という課題意識が、当時の支配層に共有されていたからにほかならない。」森田安一編：『スイスの歴史と文化』、刀水書房、1999、p. 49-52

⁵⁷ シュノールはド・モンタックが仏語で記した中に“Heimatschutz”という独語を用いていることを指摘しながら、シュルツェ＝ナウムブルクとの議論の類似も指摘している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 195)。De Montenach, *op. cit.*

(«Le verbe de mort des harmonieux aspects des villes, c'est la Régularisation.[...] Ainsi s'exprime de [sic] Schulze-Naumburg: [...] Au même degré que disparaît la compréhension de la beauté, s'en va la grâce des villes. – Celui qui aura tiré profit de la lecture des pages précédentes saura combien l'adoucissement des lignes rigides est nécessaire, combien l'exception de son apparent apparaît belle et amusante. La capitale cause de toutes ces régularisations c'est que, toute trace de sentiment, d'amour des choses vivantes et locales a disparu au sein des conseils qui administrent les villes. Ceux-ci ne veulent plus reconnaître leur bonne vieille ville naturelle avec ses usages et ses beautés spéciales: mais ces parvenus ils ont honte de ce qu'ils appellent sa nudité: sa fruste simplicité. ...») [CV-491]

シュルツェ＝ナウムブルクはカールスルーエの工芸学校、同地のバーデン州立藝術学校に在学し、同地の工科大学で建築について聴講した後、1895年にミュンヘンに移って分離派に参加し、1897年にベルリンへ移った際には同地の分離派にも参加している。また、1907年のドイツ工作連盟結成者の一人でもある。とくに、1900年から1917年の間に出版された9巻からなる著書“Kulturarbeiten”（以下『文化作品』）の第四巻“Städtebau”（以下『都市計画』）⁵⁸は「都市の構築」の中で幾度も参照されている。

このように、ジャンヌレはその地方特有の素朴な造形に美を見出し、さらにそういった物理的な都市デザインと心理的な感情とを結び付けて、その地方への愛、つまり愛郷心を論じているシュルツェ＝ナウムブルクを引用していたと言える。つまり、草稿を通して物理的な都市デザインと心理的な感情を結び付けて記述するジャンヌレの論述は、シュルツェ＝ナウムブルクの愛郷心にかんする論述と類似していると言える。また、草稿で論じられている愛郷心には、先に指摘したその都市で生きる喜びやその都市に抱く誇りに加えて、シュルツェ＝ナウムブルクが論じたその場所固有のものに対する愛もあると言える。両者は大きく異なるものではなく、ともにその場所固有のものを尊重する態度であり、厳密に区別できるものではない。ただし前者は誇りを抱かせるような象徴的な丘の頂における都市デザインとともに論じられていたことに注意すべきである。

また、シュルツェ＝ナウムブルクだけでなくド・モントナックが独語の原語を用いて郷土保護について記述していたことも考慮すれば、ジャンヌレの論じる愛郷心も、ドイツを中心に興隆していた郷土保護運動の流れに即したものであったと言えるだろう。この運動は、世紀転換期の近代化や工業化を受けて、近代以前の人々の有機的、文化的、精神的統合体の復活や農村美の保護を目的に興ったものであった⁵⁹。このように、ジャンヌレが勧める趣味の啓蒙やその結果として美的な都市に対して抱く「愛郷心」の観念は、ド・モントナックやシュルツェ＝ナウムブルクをとおして取り入れたものであり、郷土保護運動や芸術教育運動といった工業化に対する反動としての芸術的な動きを背景に構想されたものであったと考えられる。

⁵⁸ これは、「即物的 (sachlich)」という言葉プラグマティックな質と客観的な質との組み合わせとして初めて用いた、批評家・ジャーナリストのフェルディナント・アヴェナーリウスが名付けた一連の出版物“Kunstwart-Unternehmungen (以下『クンストヴァルト企画』)”の中の一つである (マシュイカ、田所、池田訳、前掲書、p. 97)。

⁵⁹ 郷土保護運動の詳細は後の補論にて確認する。

補論 ドイツにおける芸術にかんする社会運動

このように、ジャンヌレは芸術教育運動や郷土保護運動から影響を受けてきたことが推察される。こうした世紀転換期の運動は何を目指したものであってどのようにして興ったのか、既往研究を参照しながら概観する。

ドイツ経済発展下の芸術家の動き

運動の背景となる世紀転換期のドイツの状況を確認する。

1871年、普仏戦争勝利の結果成立したドイツ帝国は1918年のドイツ革命まで存続した。連邦制をとってはいたが、皇帝にはプロイセン王が付き、帝国宰相はたいていプロイセン首相が兼ねるなど、実質プロイセンが支配していた。この頃のドイツの工業の生産力は20世紀初めイギリスを追い抜き、アメリカに次いで世界第二位になった。また、学問や文化でもドイツは当時の世界をリードした。こうした実力を背景に、ドイツ帝国は対外膨張に努め、世界の強国を目指した。

芸術家、建築家、工芸家は、1890年代に始まった経済拡張の波に乗り、工業発展、商業拡大、個人消費といった振興領域を、文化を生み出しうる分野として認めていた。こういったヴィルヘルム帝政期のめざましい経済発展と文化的実験が展開する中、著名な建築家たちが1890年代終わりから1918年にかけてドイツで活動していた。教養があるヴィルヘルム帝政期の芸術家たちはさまざまな方法でドイツ文化を謳うことにより、工業化、都市化、大量生産からもたらされる不都合な影響を克服することを目指した。1907年にドイツ工作連盟が設立されると、芸術家たちは工場建築であれ、家庭用器具であれ、軍の宿舎や商業広告であれ、趣味の良いそして経済競争力のあるドイツ製品の指導的組織者になろうと努めた⁶⁰。こうした野心的な動きの中でもっとも重要だったのが、1890年代にユリウス・ラングベーンやフェルディナント・アヴェナーリウスそしてアルフレート・リヒトヴァルクといった文化批評家によって広められた芸術教育運動であったとされている⁶¹。

芸術教育運動

芸術教育運動（*Kunsterziehungsbewegung*）は、大衆の美術と工芸に対する趣味を教育するために、芸術雑誌や工芸学校などで活発なキャンペーンを行い、つまり、科学の発展、工業化や都市化への対抗手段として、芸術家を動員して、ドイツ文化を調和させ、ドイツ製品をつくり替えようとするものであった⁶²。芸術教育運動は後にドイツの新教育運動（教育的改革運動、あるいは改革教育運動（*Die Reformpädagogische Bewegung*））の直接的な起源となった⁶³。また、芸術教育運動は、産業革命以前の社会的調和を取り戻し自然と結びついた生活を送ることを目指した、1880年頃から広がったドイツの生活改革運動（*Lebensreformbewegungen*）のひとつとして数えられることもある⁶⁴。

⁶⁰ マシュイカ、田所、池田訳、前掲書、p. 23.

⁶¹ マシュイカ、田所、池田訳、前掲書、pp. 22-23.

⁶² マシュイカ、田所、池田訳、前掲書、pp. 22-24

⁶³ 岡本定男:ワイマール期芸術教育とその方法-改革教育学における位置づけへの試み-, 東京大学教育学部紀要第21巻, pp. 143-154, 1981.

⁶⁴ 副島美由紀: モダニズムが夢見たユトピア:ドイツ田園都市建設の歴史(1)世紀転換期の生活改革運動, 小樽商科大学

芸術教育運動は、1896年にハンブルクで行われた集会「芸術教育保護のための教員集会 (Lehrervereinigung für die Pflege der künstlerischen Bildung in Hamburg)」で組織的な運動として成立し、1901年には活発に講演や討議が行われた⁶⁵。ドイツ芸術教育運動は、1890年代から1910年頃にかけてとくにハンブルクを中心に興ったものであることが指摘されている⁶⁶。また1901年頃から教育改革運動の側面と芸術教育の改革運動の側面とを併せ持っていたとされている⁶⁷。芸術教育運動は1871年に成立したドイツ帝国の近代化政策および民衆教育の近代化の流れの中に位置したと同時に、教育改革を求める国民的・国家的エネルギーのあらわれでもあったとされている⁶⁸。

ハンブルクにおける芸術教育運動は、芸術教育の改革運動という性格を抱えながらも、教育と学校の改革運動として発展し、とくに1903年の第二回芸術教育会会議では、芸術に基づいた教育改革と子どもの個性の尊重の必要性が主張され、教育改革運動が発展していった⁶⁹。

芸術教育運動を広めたのは、ベルリンに生まれドレスデンを基盤に活動していた批評家・ジャーナリストのアヴェナーリウスであった。アヴェナーリウスは1887年発刊の雑誌“Kunstwart”（以下『クンストヴァルト』、芸術展望の意）の創刊者かつ編集者であり、雑誌刊行の初期から「ドイツ芸術とドイツの市民生活と倫理、そして近代国家の生活の実態とドイツの伝統との融合を基礎とした文化のあいだに存在する関連を、ドイツの人々に教えたいと希っていた」⁷⁰。そしてドイツの家庭向けに、ミュンヘンの出版元ゲオルク・カルヴァイを通して発売された芸術と文化にかんする一群の出版物を“Kunstwart-Unternehmungen”（以下『クンストヴァルト企画』）と名付けた。この出版物の中で最も重要な著作が、ジャンヌレも参照していたザクセンの芸術家シュルツェ＝ナウムブルクの『文化作品』であった。これは1901年に最初に『クンストヴァルト』の連載として発表されたものであった。

そしてシュルツェ＝ナウムブルクもまた芸術教育運動のメンバーであった。実際、シュルツェ＝ナウムブルクが『文化作品』で意図したのは、読者を啓発することであった。『文化作品』ではドイツの建物や村、風景の、良い例と悪い例を対にして論が展開され⁷¹、読者が、便利かそうでないか、あるいは道徳的に良いか悪いかといった判断を下すことを最初の目標としていた。ジャンヌレが主張した生活の中の芸術を感じ取る趣味の啓蒙は、こうした芸術教育運動の流れの中で捉えられる。

郷土保護運動

ところで19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパは、イギリスのナショナルトラスト (National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty)、フランス、ポーランド、スイスなどにおけるそ

人文研究, 96, 小樽商科大学, pp. 189-214, 1998.

⁶⁵ 鈴木幹雄: ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究: 芸術教育運動から初期 G・オットーの芸術教育学へ, 風間書房, 2001, pp. 28-30.

⁶⁶ 鈴木, 前掲書, pp. 7-8.

⁶⁷ 鈴木, 前掲書, p. 8.

⁶⁸ 教育改革の側面にかんしては、ペスタロッチやディースター・ペークたちが築いてきた近代的教育の精神が間接的に芸術教育運動の基礎になっていた。鈴木, 前掲書, p. 28

⁶⁹ 教育改革運動は1905年、1906年頃にはザッハリヒなものに基づいた直観教授の原理を発見し、さらに1907年、1908年頃には、授業にザッハリヒなものを導入することによって子どもの主体的で創造的な学習活動を引き起こし、硬直した古い学校を一変させていこうとする労働学校運動へと発展していった (鈴木, 前掲書, p. 9.)。本研究がジャンヌレのパーティ論の背景に指摘した即物性にかんする議論がこのような教育的側面においても見られることは興味深い。

⁷⁰ マシュイカ, 田所, 池田訳, 前掲書, p. 97.

⁷¹ マシュイカ, 田所, 池田訳, 前掲書, p. 97.

の関連団体の登場、パリ（1909）やブレゲンツ（1929）での郷土保護の国際会議の開催などに表れているように、復興運動の潮流の中で郷土保護の関心を高めてきていた。中でもドイツでは、1870年代からの工業化を受けて、19世紀後半から20世紀にかけてドイツでは工業化による大きな人口流動が発生した。これを受けて、失われていった文化・習慣に対し、古いものや懐かしいものを留めておこうとして大都市を否定する復興運動（*Erneuerungsbewegung*）が起こり、これがヨーロッパ全土へと広がっていった。これには田園都市運動、青年運動（*Jugendbewegung*）などが含まれるが⁷²、最も大きな部分を占めたのが郷土保護運動（*Heimatschutzbewegung*）だと言われている⁷³。

郷土保護連盟（*Bund Heimatschutz*）は1904年にドレスデンで、フーゴ・コンヴェンツ（*Hugo Conwentz*）とエルンスト・ルードルフ（*Ernst Rudorff*）によって設立された。先述したように初代会長にはシュルツェナウムブルクが就任している⁷⁴。郷土保護運動は、近代以前の人々の有機的、文化的、精神的統合体（フォルク）の復活や農村美の保護を目的に、近代化や工業化を否定する感傷的・復古主義的な運動を基調としていたので⁷⁵、郷土を捨てて都市に集中する民衆に再び郷土を与えなければならないとするイデオロギーや、根無し草のような民衆に民族性にもとづく精神的な統一を求める動きが高まっていくこととなった⁷⁶。

なお芸術教育運動を広めたアヴェナーリウスは、郷土保護連盟とデューラー連合（*Dürerbund*）というザクセンを基盤とする2団体の緊密な協力を観察していた。デューラー連合はアヴェナーリウスが1902年に設立した団体で、教師、芸術家、文化活動に熱心なドイツ人からなっていた。展覧会組織、コンペ、研究助成などさまざまな文化的問題についての政府関係者への嘆願をとおして、国の文化発展の促進に努めていた⁷⁷。

このように、ジャンヌレが「都市の構築」を執筆していたのは中欧規模で地域主義が流行していた時期であった。ジャンヌレが勧める趣味の啓蒙やその結果として美的な都市に対して抱く愛郷心は、工業化を受けて世紀転換期に興隆した芸術教育運動と郷土保護運動の影響を受けたものであったと言えよう。

⁷² 青年運動にはワンダーフォーゲル時代から自然と過去に逃避する志向があったが、ワイマール期には観念的ロマン主義への方向性を強め、多くの部分がナチズムと融合していくことになる（鈴木、前掲書、p. 131）。

⁷³ 赤坂信：ドイツ郷土保護連盟の設立から1920年代までの郷土保護運動の変遷、造園雑誌 55(3), pp.232-247, 1992.

⁷⁴ 桂修治：創始期の郷土保護論：エルンスト・ルードルフにおける「郷土保護」の立場言語、文化研究、第20巻、pp.55-74, 2012.

⁷⁵ 島山武道、土屋俊幸、八巻一成編著：イギリス国立公園の現状と未来：進化する自然公園制度の確立に向けて、北海道大学出版会、2012., p.258

⁷⁶ 郷土保護運動については赤坂、前掲論文を参照。“*Heimatschutz*（郷土保護）”という言葉は音楽家エルンスト・ルードルフ（*Ernst Rudorff*, 1840-1916）によって、上述のような自然保護や歴史研究に対する関心が高まった19世紀末に考え出されたとされている。

⁷⁷ マシュイカ、田所、池田訳、前掲書、pp. 97-98

補論 感情移入と身体的な空間把握

先に指摘した具体性と感情にかんする観点や身体や視覚への関心は、ドイツの感情移入論を彷彿とさせる⁷⁸。本研究で示した、ジャンヌレが工業化の反動としての世紀転換期の懐古的な社会運動を背景にして記し、そして形態論も交えながら論じた愛郷心の観念が、感情移入の理論とも共鳴している点は興味深い⁷⁹。

なお、本論文の第四章においても触れたとおり、ブルックスやシュノールは、ジャンヌレが東方への旅をともにしたクリプシュタインからヴォリンガーの『抽象と感情移入』を紹介され⁸⁰、ヴォリンガーについてノートに書きつけていたことを指摘している⁸¹。シュノールが言うようにジャンヌレは空間知覚の理論に精通していたわけではないようであるが⁸²、「都市の構築」における感情移入論の影響はこれまでに指摘されてきている。たとえばラバサは⁸³、ジャンヌレがベーレンスを通してヴェルフリンの理論、とりわけ形態にかんする観点、つまり身体を使った形態認識 (bodily engaged perception of form) を取り入れていたことを指摘したり⁸⁴、とりわけ曲線の道については、道のリズムある表面が歩行者に心地よい精神状態をもたらすというジャンヌレの考え方が感情移入論を反映したものであることを、ロベルト・フィッシャーを引用しながら論じ、ジャンヌレが形態のリズムにかんするドイツの議論をたんなる視認に関連したものとしてではなく時空間の体験に関連したものとしても捉えていたと考察したりしている⁸⁵。

本補論ではまず、19世紀から20世紀にかけての独語圏の空間論、とくに感情移入と空間が結び付けられ、さらに身体とともに論じられていった過程を、既往研究を参照しながら概観する。

⁷⁸ 先述した「即物性」という語を建築の語彙として導入したシュトライトーも、ヴェルフリンのフォルマリズムやシュマルゾーの空間理論に精通していた。ミュンヘン大学博士課程在学時には感情移入論にひじょうに興味を持っていた(マルグレイヴ, 加藤監訳, 前掲書, pp. 459, 462-463)。

⁷⁹ シュノールも指摘するように、ジャンヌレが人間的な閉じた空間と深く共鳴した理由のひとつには、イタリアを訪れ、そこでシッテが賞賛した中世の広場を体験したことにあるのかもしれない(Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 120-123.)。1907年にジャンヌレはイタリアを3か月間旅した。19歳のジャンヌレは、「そこで生まれてはじめて芸術に浸る。(C'est là son premier bain d'art.)」(プティ, 前掲書, p. 45, Petit, *op. cit.*, p. 28)

⁸⁰ ヴォリンゲル, 草薙訳, 前掲書。

⁸¹ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 237. Brooks, 1997, *op. cit.*, p. 256. 東方への旅と感情移入論については、ラバサも論じている(Rabaça, 2014, *op. cit.*, p. 241. ff.)。

⁸² Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 237. ジャンヌレはシュマルゾーやヴェルフリンらの名に一切言及していない。ただしブルックスによると1908年時点でジャンヌレはニーチェの“Ainsi parlait Zarathoustra (ツァラトゥストラはこう語った)”(Albert, Henri, tr., 15th edition, Paris, 1908)にかぎってはすでに読んでいたようである(Brooks, 1997, *op. cit.*, pp. 174-175.)。また、ジャック＝ダルクローズはデイドロやショーペンハウアーからニーチェやヴァーグナーに至るまで、身体にかんするさまざまな考え方を取り入れていた(Rabaça, *op. cit.*, p. 231)。

⁸³ またジッテやその後継者は、ラバサがコリンズを引きながら論じるように、ヒルデブラントやシュマルゾーの理論から影響を受けていた(Rabaça, 2014, *op. cit.*, p. 185. 同頁の note 67 も参照)。コリンズは、ジッテが美的な判断を説明するときに“Visurlinie (視線)”という語を用いていることについて、ヒルデブラント、フィードラー、ヴェルフリンといった人物の理論に基づいていることを指摘している(Collins & Collins, 1986, *op. cit.*, p. 375, note 164)。

⁸⁴ Rabaça, 2014, *op. cit.*, p. 179.

⁸⁵ Rabaça, 2014, *op. cit.*, pp. 186-187. またラバサは、テオドル・フィッシャーからクリプシュタインとベーレンスへと至るようなドイツの影響を受け、ジャンヌレが理論的なヴォリューム (volume) を建築カテゴリへと高め上げたとも考察している(Rabaça, 2014, *op. cit.*, p. 181)。なお、こうしたドイツの影響の最初のもは、テオドル・フィッシャーとの個人的なつながりであったとラバサは推察している(Rabaça, 2014, *op. cit.*, p. 181, note 57.)。

美的直観の理論展開

ドイツの哲学者イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は批判哲学の最初の著書『純粋理性批判』(1781)の中で自身にとって空間が何を意味するのか略述し⁸⁶、1790年には三批判書の最後の位置を占める『判断力批判』を発表した。カントは空間と時間を人間の直感の先験的な条件として発見し、美的批判における原理としてはみなしていなかった⁸⁷。こうしたことはアルトゥール・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) にかんしても基本的には同様であった。ショーペンハウアーは空間が美的判断のために機能する可能性を認識していたようであるが⁸⁸、1893年に独立した3つの重要な論考が発表されるまで、ショーペンハウアーが提示した可能性は議論されないままとなる⁸⁹。

感情移入論の発展

1873年、哲学者ロベルト・フィッシャー (Robert Vischer, 1847-1933) ⁹⁰が“Einführung (感情移入)”という語を作った。ロベルトが論考“On the Optical Sense of Form (形の視覚について)”において感情移入を取り上げ初めて建築と関連付けたことで、感情移入は1890年代に「形」という概念を豊かにした⁹¹。ロベルトは人間の感覚、知覚プロセスにかかわる新しい生理学研究のほか、夢解釈の初期の研究にも魅了され、生理学的洞察や心理学的洞察を主観的な芸術的体験に当てはめようとしていた⁹²。ロベルトは夢の中の刺激に反応する身体が空間に投影されることを論じたが、この論点をさらに発展させることはなかった⁹³。ファン・デ・フェンが言うように、「明らかに空間理念が芸術的経験の「本質」であると考えられてきたのは、1890年代の初期以来のことにすぎない」のである⁹⁴。

ロベルトが感情移入の概念を進化させるのと同時期に、ニーチェは身体運動という力学から生まれた、力の場としての空間を考えた⁹⁵。ニーチェが論じるディオニュソス的な精神は、ある空間で演じられるリズム感のあるダンスによって表現される、エネルギーの過剰さが司っていた。つまり、その空間はそういった動きによって理解されるものであった⁹⁶。こうした身体運動という力の場としての空間について、これ以上展開されることはなかったが、ニーチェの著作は19世紀末から20世紀初頭のドイツ語圏の芸術家や建築家には深く浸透していた⁹⁷。

ロベルトが論じた感情移入の概念を建築理論へと再翻訳したのが歴史家ハインリヒ・ヴェルフリン (Heinrich Wölfflin, 1864-1945) である⁹⁸。1886年の博士学位論文『建築心理学序説』(1930年代まで刊

⁸⁶ ファン・デ・フェン, 佐々木訳, 前掲書, p. 394.

⁸⁷ ファン・デ・フェン, 佐々木訳, 前掲書, vi.

⁸⁸ 上掲書, p. 394.

⁸⁹ 上掲書, p. 396.

⁹⁰ ゼンパーのチューリヒでの友人であり学友でもあったフリードリヒ・テオドール・フィッシャー (Friedrich Theodor Vischer, 1807-1887) の息子。

⁹¹ 上掲書, p. 235.

⁹² マルグレイヴ, 加藤監訳, 前掲書, p. 437.

⁹³ ファン・デ・フェン, 佐々木訳, 前掲書, p. 394.

⁹⁴ 上掲書, p. 95.

⁹⁵ 上掲書, pp. 394-396.

⁹⁶ 上掲書, 前掲書, p. 395.

⁹⁷ 上掲書, 前掲書, pp. 394-396.

⁹⁸ 上掲書, 前掲書, p. 438.

行されなかった)では、生理学用語と心理学用語を使いながら、わたしたちが形而下の造形から性格を読み取るのはわたしたちが肉体を持ち、身体的な感性を持っているからであることを論じた⁹⁹。

とりわけ 1893 年には 3 つの重要な論考が発表される。①ドイツの彫刻家アドルフ・フォン・ヒルデブランド (Adolf von Hildebrand, 1847-1921) による論文「造形芸術における形の問題」¹⁰⁰ ②アウグスト・シュマルゾー (August Schmarsow, 1853-1936) による論文「建築的創造の本質」¹⁰¹ ③美学者テオドール・リップス (Theodor Lipps, 1851-1914) による論文「空間の美学と幾何学的・視覚的錯覚」の 3 つである。

①ヒルデブランド「造形芸術における形の問題」

形態を理解する前提として空間を強調した。そして空間それ自体が芸術の主題であること、空間は連続体であること、空間はその内部から活性化されるということを示した¹⁰²。

②シュマルゾー「建築的創造の本質」

マルグレイヴは 1893 年にライプツィヒで行ったこの講義が空間理論化の初期の頂点であったと評している¹⁰³。感情移入の理論はそれまで、中が密な対象を知覚するためにあったが、シュマルゾーはそれを空間と引き合わせ、さまざまな視覚および筋肉の感覚をとおして空間を直観することができる考えた¹⁰⁴。感情移入で論じられていた身体感覚の知識を事物に投影することは、密な対象から空間に拡張されたと言えよう。

③リップス「空間の美学と幾何学的・視覚的錯覚」

リップスは「囲うこと」としての空間という概念をまったく持たず、物質内部にある生命を視覚化する方法として、その中で自由に動くことのできる空間を考えた¹⁰⁵。

「空間」という語彙の発展と「囲い」の空間

1890 年代以前に、用語としての「空間」は建築上の語彙としては存在していなかった(言葉と建築, p. 390)。建築のカテゴリとしての空間の理論展開はドイツで起こる。エイドリアン・フォーティエがピーター・コリンズを引きながら説明するように、物理的に囲まれたものと哲学的な空間概念との結びつけ易さは独語圏で特異であった¹⁰⁶。ジッテの師であるゴットフリート・ゼンパー (Gottfried Semper, 1803-1879) はそれまでに展開されていた哲学的な言説から近代建築における根本的なテーマとして「空間」を紹介した。ゼンパーは、「囲うこと」が建築の合目的性の特徴であると考えたヘーゲルの『美学』を読んでいた。また、壁の「被膜」という空間モチーフはゼンパーの 4 モチーフ理論の中核であった。「囲うこと」は 1840 年代にドイツにおいて建築の主題として建築家の間で話題になっていたが、空間を囲うことが建築の根本的な

⁹⁹ 上掲書, 前掲書, p. 438.

¹⁰⁰ アドルフ・フォン・ヒルデブランド: 造形芸術における形の問題, 加藤哲弘翻訳, 中央公論美術出版, 1993.

¹⁰¹ 1893 年にライプツィヒ大学で講義され、翌年に出版。アウグスト・シュマルゾー: 芸術学の基礎概念—古代から中世への過渡期に即した批判的論究ならびに体系的連関における叙述—, 井面信行翻訳, 中央公論美術出版, 2003 に収録。

¹⁰² ファン・デ・フェン, 前掲書, p. 397.

¹⁰³ マルグレイヴ, 加藤監訳, 前掲書, p. 434, ファン・デ・フェン, 佐々木訳, 前掲書, p. 107 も参照

¹⁰⁴ ファン・デ・フェン, 佐々木訳, 前掲書, p. 398.

¹⁰⁵ 上掲書, p. 400.

¹⁰⁶ これは独語“Raum”の、物理的に囲まれた部屋と哲学的な概念との両義性にも表れている(フォーティエ, 坂牛訳, 前掲書, p. 391)。

属性であると提案することにおいてはゼンパーが最も進んでいたという。これは初期近代の建築家たちの概念の源となり、アドルフ・ロースの論考「被膜の原則」(1898)や、空間を囲う術として建築をみなす H. P. ベルラーへの講義「様式についての考察」(1905)、建築という仕事の本質を空間を囲うことに見出し後に『芸術とテクノロジー』として出版されたペーター・ベーレンスの講義(1910)などが生まれた。このように、様々な建築家がゼンパーのモデルに従いながら空間を囲うことについて考えていた¹⁰⁷。

このように建築家たちが「囲うこと」を室内の見地で考えていたのに対し、ジッテはこれらを戸外に持ち出し、「空間」が建物内部のみならず戸外に帰属していると考えた¹⁰⁸。

このように、19世紀から20世紀にかけて独語圏では身体的な空間論が発展した。本研究で先に指摘したような、物理的な形式¹⁰⁹、その生理的な視認と把握、そして心理的な感情のすべての段階で具体性や相対性を求めているジャンヌレの態度は、密な対象であれ中空の空間であれ、物理的な形態に対して筋肉や視覚といった生理学の知識と心理学に基づきながら発展した感情移入の観点に即している。

また、とくにニーチェは身体運動によって理解される空間を論じ、1893年の3つの論考では密な対象を脱して空間内における運動が論じられていた。本研究で示したように、ジャンヌレの身体にかんする観点には「身体性 (corporalité)」という用語を用いて論じられる閉じた場としてのものと、道のパーティで論じられていた休息や疲労の回避といった身体運動的なものがあったが、後者はル・コルビュジェがのちに傾倒した克己的な身体の鍛錬ほど厳格なものではなかった。筋肉の増強や克己的な鍛錬といった生体構造を理解し自らがその発達を積極的にコントロールするような理論よりも、むしろ“Wirkungsästhetik (作用美学)” / “Wahrnehmungsästhetik (知覚美学)”との関連から、主体がどのように空間を認知し感じるかという点に着目することで、休息や疲労の回避といった身体運動にかんする理論に至ったのだろうか¹¹¹。また、その場所の性格やその場所の建材を考慮するには、たとえば建築の素材なども含めた既存の表面(空間境界面)を視覚によって把握する必要が生じる。こういったいくつかの理由を背景にして、身体そのものの鍛錬よりもむしろ、視認によって身体に生じる影響、つまり休息や疲労の回避への着目に至ったのかもしれない。

なお、パッサンティは、ジャンヌレが用いる“corporalité (身体性)”という用語が、ブリンクマンが『広場とモニュメント』の中で用いた独語の“Körperlichkeit”から作り出した新しい語であったと推察しているのに対して¹¹²、シュノールは、現代では“corporalité”の語はあまり使われていないものの当時のフランス語の辞書“Littré (以下『リトレ』)”(1863/1872)には記載があったことや、ジャンヌレの親友であったリッターが絶えず新しい言葉を生み出して、ジャンヌレにこうした言葉にかんする興味を与えていた

¹⁰⁷ 上掲書, pp. 392-393.

¹⁰⁸ 上掲書, pp. 392-393.

¹⁰⁹ ラバサは、ジッテ的な囲いの空間と、シュマルゾーをはじめとする形態にかんするドイツでの議論の類似も指摘している (Rabaça, 2014, *op. cit.*, p. 182, note 60.)

¹¹¹ 作用美学は啓蒙主義思想のなかで支配的であって、道徳的教化、喜び、幸福等を促進するための有効な手段とみなされていた。こういった手段としての芸術に対して批判を唱えたのがカール・フィリップ・モーリッツ (Karl Philipp Moritz, 1756-1793)であった (斎藤太郎: K.Ph.モーリッツの第一美学論文について, 藝文研究, 慶應義塾大学藝文学会, 1988, pp. 117-131.)。

¹¹² Passanti, Francesco: Architecture: Proportion, Classicism, and Other Issues, in Moos, Stanislaus von and Rüegg, Arthur ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier*, Yale University Press, pp. 69-98, 2002. とくに pp. 84-85, note 64, and note 66. パッサンティはブリンクマンもベーレンスもヴェルフリンの理論を取り入れていたことを指摘している。

可能性を根拠に、パッサンティの推察に疑問を呈している¹¹³。そして 20 世紀初めの“Wirkungsästhetik”（«l'esthétique de perception»と仏訳され、作用美学といった意）の議論の中心に“Körperlichkeit”の語があって、建築の身体的な側面（l'aspect physique）の理解を助けていたことを指摘する。またシュノールは、ジャンヌレが三次元の具体的な（tangible）空間概念について論じるときに“corporalité”という語を用いていることを指摘しながらも、ヴォルテールがとくに“corporalité des âmes（魂の身体性）”という形でこの語を用いて触知できない次元（une dimension intangible）を与えていたこと、そしてこの定義とヴォルテールの用法が当時の『リトレ』にも見られることを指摘している。

補論 視覚による空間把握と感情

このように、ジャンヌレの草稿の究極目標であった「美しい情動」という具体的な感情の動きをもたらすための空間把握には、囲いの空間と生理的な運動という身体にかんする 2 つの観点と視覚に依る知覚が肝要になる。既往研究では、ジャンヌレがジッテやシュルツェ＝ナウムブルクらから知覚美学（aesthetics of perception）を取り入れてきたことが指摘されており¹¹⁴、ジャンヌレの視覚への着目は、当時の生理的な知覚にかんする議論の興隆に対応していたようである。これは本論文の第四章で確認したような、「広場恐怖症」にかんする議論とも呼応している。

心理的な感情である愛郷心は、物理的な都市の形態や空間の視認によって生じていた。つまり両者を結び付けるのは視認であり、視覚をとおして身体的な空間把握がなされていたと言える。ジャンヌレは人間の身体や目といった生理学的な観点を空間認識の手段として用いることで、「美しい情動」と言い表されるような美の感情を、ある形態の美とその空間を知覚して生じた結果として説明していたのである。このとき、ジャンヌレは視覚的閉鎖性をもたらすパルティの構成を美として捉える一方で、その結果喚起される愛郷心のことも「美しい情動」として美と捉えている。つまり物理的な形態と心理的な情動との両方に美を見出していると言える。物理的な形態の美を論じているという点で前者はフォーマリズムの観点であるのに対し、後者は形態を知覚した主体がどのように感じるかという人間の内部の動きに着目して美を論じたものである。

生理学¹¹⁵と心理学は 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて実証科学の一翼として飛躍的に発展し、美学における言説の組み換えに大きな影響を及ぼした¹¹⁶。先に見たロベルトの生み出した感情移入がリップスによって定式化され大きな影響力を持ち、美学の言説が心理学の述語で書き換えられていった過程は、そしてさらには、ジャンヌレが物理的な形態から喚起される親密な感情を論じる際の空間認識の手段として「視

¹¹³ Schnoor, Christoph: *Le Raum dans La construction des villes de Le Corbusier. Une traduction aux multiples strates linguistiques et culturelles*, in Carvais, Robert *et al.*, ed.: *Traduire l'architecture*, Paris, Picard, pp. 133-144, 2015.

¹¹⁴ たとえば Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 5.

¹¹⁵ 生理学にあたる「フェシオロギア」physiologia というラテン語は「フェシス」physis（自然、体の意）と「ロゴス」logos（ことば、学問の意）というギリシア語に由来し、古代イオニアの自然学に発するとされる。18 世紀の生理学は A・フォン・ハラーによって体系化された。19 世紀に入ると、神経生理学が C・ベル、マジヤンディらにより進歩した。19 世紀後半から生理学は非常に勢いで発展するようになる。たとえばヘルムホルツの感覚生理学、一般生理学の創始者としてよばれるフェルウォルンの刺激生理学などが重要な業績として知られる。相賀徹夫編著：日本大百科全書，13，小学館，1987. p. 485.

¹¹⁶ 門林岳史：美はどこへいったのか？-神経美学の批判的系譜学，美学芸術学論集，8，pp. 52-61，2012.

認」を記述していたことは、このように、人間の生理的な知覚と心理的作用が盛んに議論されていた文脈に則ったものであったとみなせるだろう。

1820年代から1840年代にかけての生理学とは後に専門科学となったときの姿とは大きく異なっていて、身体についての興奮と驚きを共通点に集まったさまざまな異なる学問分野出身の人々の仕事の集積として生じ始めたものであった¹¹⁷。心理学については、後に生まれるさまざまな心理学派の始祖となったのがジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) であり、ウィーンで多くの研究を行ったが、その後フロイトの弟子であったアルフレート・アドラー (Alfred Adler, 1870-1937) やカール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) といった人物がウィーン学派から離れて、それぞれ1911年に個人心理学派、1913年に分析心理学といった自らの学派を作り出していった¹¹⁸。ジャンヌレが人間の身体や目といった生理学的な観点を空間認識の手段として用いることで、「美しい情動」と言い表されるような感情の美を、ある形態の美とその空間を知覚し生じた結果として説明しているのは、生理学や心理学と美学との混淆が見られた時流に沿っていると言えるだろう。

一方で、ジャンヌレは視認の不確かさも認め、錯視現象や目測の難しさについて繰り返し主張している。都市の諸要素については、道の長さについてカール・ヘンリチを引用しながら「好ましかったり好ましくなかったりする錯視 (illusions d'optique favorables ou défavorables)」[CV-296]を説明したり、幾何学的な形態の広場における空間視認の難しさ、つまり、「目で理解できないのは空間の中の物であるということ (qu'il est des choses dans l'espace que l'œil ne saisit pas.)」[CV-340]を説明したりしている。都市全体のデザインについては、ジャンヌレは土地の起伏を尊重して都市をまとめるべきであるとしているが、視覚のみによって地形を把握することは難しく「デッサンでは十分ではないし、空間において物を見ることはもはや不確かであるから (Là, où le dessin ne suffit pas, où la vue des choses dans l'espace n'est plus assurée)」[CV-466]、地形を把握する手段として模型 (une maquette) を提案している。このように、都市の諸要素から都市全体に至るまで、ジャンヌレは人の目の不確かさも認めながら空間や地形を視認することについて論じている。

5-4-2 ナショナリズムの展開

ジャンヌレは基本的に「可能な手段」の部分を中心として、ドイツやイギリスにおける、行政の手から離れた芸術的な都市デザイン手法を賞揚する¹¹⁹。ドイツでは公のコンペ (concours publics) が開催され、

¹¹⁷ クレーリー, ジョナサン: 観察者の系譜: 視覚空間の変容とモダニティ, 遠藤知巳訳, 十月社, 1997., p. 123.

¹¹⁸ シンガー, アンダーウッド: 医学の歴史, メディカルサイエンスの時代, 2, 細菌学・生理学など, 酒井シヅ, 深瀬泰旦訳, 朝倉書店, 1986, pp. 512-514. アンダーウッドによれば、比較心理学や発達心理学が生まれる前には、人類の精神発達は動物のそれと連続していることを明らかにしなければならず、肉体と精神の両面についてはダーウィンの“Origin of Species (種の起源)” (1859) に、精神面のみについてはとくに“Descent of Man (人類の由来)” (1871) および“Expression of the Emotions in Man and Animals (人と動物の表情)” (1872) において、人類の起源の進化論的見解が示されていたという。そしてその後、原始人の精神の考察によって原始的な感情と自制心との葛藤が明らかにされると、これを解決しようとして、フロイトを始祖とするさまざまな心理学派が生み出されることになったと位置付けている。

¹¹⁹ ジャンヌレは次のように述べている。「ドイツやときにはイギリスは、都市発展の問題を、無能で無責任な行政の手から、現在芸術運動をリードしている活発なモダニズム建築家の手に委ねた。(L'Allemagne et parfois l'Angleterre ont fait sortir à jamais la question du développement des villes, des mains administratives, inaptes et irresponsables pour la remettre entre des mains actives, modernistes, celle des architectes qui aujourd'hui tiennent la tête du

間隔を密に描かれた等高線によって、芸術家が地形を尊重した計画を行っていると紹介し¹²⁰、イギリスの例には田園都市協会が丘の頂部にデザインしたハムステッドを挙げている。このように草稿では、基本的にはドイツの都市政策にならうよう勧められている¹²¹。こういったジャンヌレが讚えるドイツのコンペの審査員は「新しい概念を持った偉大な芸術家 (grands artistes \aux conceptions neuves)」[CV-480]で構成されているのに対し¹²²、「その問題についてよく知らない人たち」[CV-480]や「日常的な偏見に満ちた人たち」[CV-480]といった素養のない審査員で構成されているのがスイスやフランスである¹²³。とくにジャンヌレの故郷であるスイスについては、ドイツで取り入れられている方法に従うかどうかの分かれ目にあることが記されている¹²⁴。

スイスの都市計画へのジャンヌレの問題意識は、「問題の現状」の節の中にも表れている。この中でジャンヌレは、パリのような大都市に憧れたスイスの小さな町が、直線の大通りや大規模な3、4階建ての建物といったふさわしくない手法を用いたことを、「我々の伝統の破壊はあまりにも完全であった (Le détroussement de nos traditions a été si complet)」[CV-255]と表現して嘆いている。そして、こうした失敗を受けて未来に向かって立ち上がった人物として挙げられているのが、ギヨーム・ファティオおよび先述したド・モンタックなのである¹²⁵。

こういった問題意識は、郷土保護運動や芸術教育運動といった社会運動の影響だけではなく、草稿執筆前後の若きジャンヌレの個人的な経験にもその端緒があるのかもしれない¹²⁶。本論文の序章で確認したと

mouvement d'art)」[CV-482]

¹²⁰ ジャンヌレは次のように述べている。「等高線がひじょうに密なので、平面は眺望と同じくらい表現力に富んでいる。(les courbes de niveau sont si serrées que le plan est parlant autant qu'une vue perspective)」[CV-465]

「さらに、芸術家にとっては、事実を完全に把握し、提出された土地で何が可能かを正確に知っている状態で作曲する方が、はるかに楽しいのです。土地の登記所の職員を困らせるような起伏の中にも、芸術家の想像力と土地に対する正しい敬意が合わさって、思いがけない解決策をたくさん発見することができます。(De plus il est beaucoup plus agréable à un artiste de composer en toute connaissance de cause, sachant exactement le rendement possible du terrain qu'on lui soumet. Dans les accidents qui généraient l'employé du bureaux de cadastre, l'artiste découvri-e) maintes solutions inattendues, où la mesure de son imagination s'allie au juste respect du terrain.)」[CV-465]

コンペについては雑誌“Städtebau (都市計画)”が報じていたようで、「可能な手段」の中でジャンヌレは度々この雑誌に言及している (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 184 も参照)。またジャンヌレは、地形を把握する手段として模型について触れている。「さらに、その有効性は議論の余地がないと思われるのだが、都市の地面の模型を固形で洗浄可能な物質で作るという方法もある。(Un moyen supplémentaire dont l'efficacité nous paraît incontestable, serait celui d'une maquette du sol des villes que celles-ci feraient établir en n'importe quelle substance solide et lavable.)」[CV-465]

¹²¹ ジャンヌレは「根本的な今日の間違い」の節の中で、ここ 80 年の都市建設の衰退を経て、「美しさへの欲求、より良い生活への希望、忍耐力、そして偉大な社会思想と気高さ (Un désir de beauté, un espoir de vivre mieux, la persévérance et la noblesse même des grandes idées sociales)」[CV-258]をもとに生み出された新しい組織として“bâtisseurs de la ville (都市の建設者)”について記しているが、これはシュノールが指摘するように、独語の“Städtebauer”からの直訳であったようである (Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 265, note 8.)。

¹²² ジャンヌレは「可能な手段」の中で、コンペの結果が掲載されるという雑誌“Städtebau (都市計画)”を参照している。

¹²³ ジャンヌレは次のように述べている。「スイスの規則正しい場合のように、その問題についてよく知らない人たちや、フランスのように、日常的な偏見に満ちた人たちではなく、新しい概念を持った偉大な芸術家によって審査員が構成されている場合、望まれるだけの価値があるほどに賞金が十分に高額であれば、公募展の有効性がここでも証明されている。(Ici de nouveau nous voyons l'efficacité des concours publics, \quand les prix sont assez importants pour valoir la peine d'être désirés \que le jury est formé de grands artistes \aux conceptions neuves, et non pas de gens étrangers à la question comme c'est le cas régulièrement en Suisse, ou de gens pleins de préjugés routiniers, ainsi que toujours, en France, cela se présente.)」[CV-480]

¹²⁴ ジャンヌレは次のように述べている。「スイスでは今、ドイツの自治体の進化に追いつくかしないか、その時なのである。都市の未来が問われている (C'est aujourd'hui en Suisse, le moment ou jamais de suivre les municipalités allemandes dans leur évolution. L'avenir d'une ville est un question.)」。[CV-484]

¹²⁵ ジャンヌレはギヨーム・ファティオによる著作“Ouvrons les yeux” (『目を開けよう』) とド・モンタックによる『郷土の愛すべき顔のために!』に言及している。

¹²⁶ 以下、草稿執筆および再編集前後の出来事については下記の文献を参考にした。フォン・モース, 住野訳, 前掲書, pp.

おり、草稿執筆前後のジャンヌレはパリやベルリンといった大都市を含めさまざまな都市を転々としていた。こういった背景を考慮すると、「小さな都市は荘厳な道を断念するべきだ」[CV-328]¹²⁷といった主張がさらに説得力を持ってくる。草稿で論じられている「愛郷心」は感傷的な田舎への盲目的な回帰ではなく、小規模な都市は規模相応のデザインを用いるべきだという、ジャンヌレが実際に大都市を経験した上での提案である¹²⁸。既存のラ・ショー＝ド＝フォンのデザインに対する批判は痛烈であり、ジャンヌレはこの故郷に対して愛着を持っていたわけではないかもしれない。ただ草稿の随所から改善を試みる姿勢が窺える。「わたしたちは、とても地方色の濃い環境にとどまるために、私たちの美しいスイスの都市が豊富にもたらしてくれた教訓だけを用いて、とても地域的な枠組みの中にあり続けたかったのです (Nous aurions aimé ne nous servir que des leçons que donnent abondamment nos belles villes suisses afin de rester dans un cadre très local)」[CV-498]と述べるような、小さな田舎町のデザイン改善とそれによる「愛郷心」の創出は、ラ・ショー＝ド＝フォンから大都市に飛び込んでいった若きジャンヌレの個人的な経験によってより一層確固たるものになったと推察されるのである。

こういったスイスの都市計画への問題意識や、故郷ラ・ショー＝ド＝フォンをケーススタディとして扱っていた「批判すべき適用：ラ・ショー＝ド＝フォン」などを考慮すると、ジャンヌレの論じる愛郷心とは、故郷伝語圏スイスにおける愛郷心の創出を意図したものであったと考えられる。ジャンヌレの祖先であるル・ロクルのジャンヌレ家は1400年頃にまでさかのぼる。ジャンヌレは「ル・コルビュジェは〈スイス人〉ではありません」と断りながらも¹²⁹、自らが地中海に惹かれる理由を説明するために、南フランスのラングドックからヌシャテルへと逃れてきた自らの祖先について次のように述べている¹³⁰。「1815年、プロイセンが奪還。1831年、山岳派が蜂起する。そして失敗、報復。わたしの曾祖父のひとりが牢獄で死にました（母方のペレ家のひとり）。1848年、革命が成功する。私の祖父は指導者のひとりでした。しかし、ヌシャテル山地はスイス連邦に入ることになります。（…中略…）1870年まで、ヌシャテル山地の住民はじつのところはほとんど他所と共通することのない例外的なひとつの自立した存在でした。彼らはその血のなかに、自由、知略、自由意志、根気、そして勇敢さの過去が流れていることを恥じたり隠したりする必要はないのです」¹³¹。ヌシャテル伯爵領の後背地であったラ・ショー＝ド＝フォンは、1814年から

31-52, プティ, 田路, 松本訳, 前掲書, pp. 45-71, エムリー, 2007, 前掲論文。

¹²⁷ これは例外的に直線街路を賞賛していた部分での言説である。一文全体と原文は次のとおり。「まっすぐな道に関する最後の考察から生じるものがこれだ：小さな都市は荘厳な道を断念するべきであり、遠からず様式が確立されるのを待ちながら、幾何学者は直線をもっと控えめに使うだけでいいことがわかる。(De ces dernières considérations sur la rue droite, il ressort ceci: c'est que les petites villes doivent renoncer à la rue grandiose et, qu'en attendant les temps, peut-être pas trop éloignés, où un *style* se sera affirmé, les géomètres n'emploieront la droite que d'une manière beaucoup plus modérée.)」[CV-328] 「道」の節のうち同じく「広い大通り」の項の部分では次のように述べていることにも注目される。「そして、より近代的な都市が、もちろん、わたしたちの小さなスイスの村が、発展の問題を適切な価値へと立て直したのを見よ。あなたたちはそこに、わたしたちが発展の線、私たちの時代の線と呼ぶただ1本の線を—アメリカ風の線を見出しはしない！ (et voyez que des cités plus modernistes, certes, que nos petites bourgades suisses ont relevé à sa juste valeur la question de leur développement. Vous n'y trouverez pas un seul des tracés que vous appelez tracés de progrès, tracés de notre époque, — tracés à l'américaine!)」[CV-326]

¹²⁸ シュノールも、草稿における都市と町の対立の要因を、ジャンヌレが故郷での講演のために草稿を記した一方でミュンヘンやベルリン、パリといったジャンヌレの大都市での実際の経験があったことに帰している。そしてその一方で、ジッテは町に対して都市に用いたのと同じ方法を適用していたことを指摘している。そしてジャンヌレが居住地区と商業地区でデザインを分けていることを指摘している。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 236.

¹²⁹ なお、1917年以来パリに住むル・コルビュジェは1930年にはフランス国民となる。

¹³⁰ ジャンヌレ家のルーツについては次の部分を参照。プティ, 田路, 松本訳, 前掲書, pp. 30-37.

¹³¹ プティ, 田路, 松本訳, 前掲書, p. 36. 原著における記述は次の通り。「En 1815, la Prusse le reprend. En 1831, les mon tagnes se soulèvent: échec, représailles; un de mes arrière grands-pères meurt en prison (côté de ma mère: une

スイスの州でありながら、1848年の現スイス連邦の成立までプロシア支配のもとにあった¹³²。ヌシャテルの愛国心と誇りを抱いていた家系、日曜日に近くの山や谷へと家族全員を連れだしていた父親ジョルジュ・エドゥアール・ジャンヌレ¹³³、そしてアール・ヌーヴォーに傾倒しヌシャテルの郷土様式を作り出そうとしていたレプラトニエといったジャンヌレを取り巻く環境を考慮すると、ジャンヌレの帰属意識は仏語圏スイスにあって、反ドイツ帝国であったように思われる¹³⁴。実際、草稿内でジャンヌレが地形を無視したラ・ショー＝ド＝フォンの計画を糾弾しているのと同様に、レプラトニエも、ラ・ショー＝ド＝フォンの幾何学的な都市計画の害悪の原因を土地の起伏を考慮しなかったことに帰しており¹³⁵、ヌシャテルへの誇りと愛着を抱いた周辺人物から若きジャンヌレが受けた影響は大きかったのではないだろうかと推察される。

とはいえ「都市の構築」ではおおむねドイツで進められているピクチャレスクな都市デザインを賞揚しており¹³⁶、ジャンヌレはフランスとドイツについてアンビバレントな感情を抱いていたことが窺える。シュノールが指摘するように、第一次世界大戦前に、独語圏を賞揚する内容を仏語で記した「都市の構築」を出版するのは難しかったであろうし、実際、エムリーが指摘するように、草稿の計画は1910年9月末のレプラトニエが直線街路の断罪を最終的に確認する講演まで、秘密裏に進められた¹³⁷。ジャンヌレその詳細な知識はドイツ滞在中に獲得したものであったのか、あるいはドイツを退けてフランスからおおくを学んだのか、といったジャンヌレにとってのドイツとフランスについての問題は現在でも研究者の間で議

Perret). En 1848, la Révolution réussit. Mon grand-père était l'un des chefs. Mais les Montagnes neuchâteloises entrent dans les Ligués Suisses, (...) Jusqu'en 1870, la population des montagnes neuchâteloises est une entité peu commune, exceptionnelle, à vrai dire. Il n'y a pas à rougir et à se cacher de porter dans son sang ce passé de liberté, d'ingéniosité, de libre arbitre, d'obstination et de cran." (Petit, *op. cit.*, p. 24.)

¹³² 1707年以來プロイセン王国と同君連合で結ばれていたヌシャテル公国もカントンとして認められ、1815年にスイスは22のカントンによる同盟条約で結ばれた国家になり、永世武装中立も承認された。この時期、ナポレオン支配下に生産を抑圧されていたスイス産業は飛躍的に発展する。ただしチューリヒをはじめとする改革派・自由主義急進派（プロテスタント）と農村邦の保守派（カトリック）との対立が深まり、カトリック・保守派が分離同盟を結成。1848年にヨーロッパは「諸国民の春」を迎えるが、スイスではその前年に分離同盟戦争が起きカトリック・保守派が敗北したことで、メッテルニヒの保守体制が崩壊する革命の先導となった。翌年には産業革命を推進した自由主義急進派を中心にスイス連邦が成立。1848年に連邦制国家を形成した。スイス連邦制国家は地域自治を重視し、カントンが統治し連邦が行政を行うような体制となった。（森田，前掲書，pp. v-vi）

¹³³ ジャンヌレの家族についてはプティ，田路，松本訳，前掲書，p. 37を参照。

¹³⁴ ブルックスは、ル・コルビュジエ『建築十字軍：アカデミーの黄昏』の中のジャンヌレの先祖にかんする記述、たとえば1848年の革命に参加したことなどを指しながら、スイスの愛郷心ではなく革命的な家系の精神が自己認識に寄与していると考察している（Brooks, 1997, *op. cit.*, p. 8. Le Corbusier: *Croisade, ou le crépuscule des académies*, Paris, 1933. 邦訳はル・コルビュジエ：建築十字軍：アカデミーの黄昏，井田安弘訳，鹿島出版会，2011.）。この部分については、加藤監訳，前掲書，pp. 126-127も参照。これによれば、ル・コルビュジエがフランス南部ラングドック地方の出であることを思い起こすのは、外国人嫌いであった『ル・フィガロ』紙のジャーナリスト、カミーユ・モクレールを黙らせるため、そして地中海の魅力に惹かれる理由を説明するためであったようである。ル・コルビュジエ，井田訳，前掲書，p. 53から始まる長い原注の中で、ル・コルビュジエは次のように述べている。「以上すべては、どうしようもなく地中海へと心惹かれる私の性格の所以を説明するために書いたままである。このような血統をたどってみると、空間の純粋な形態や思想の純血さが、私に一徹な性格をうえつけたことが明らかとなると同時に、どんな時代にあっても、ヌシャテルの荒々しい山岳地帯の住人の基本的性格を特徴づけていた思想の自由さとある種の理想主義的傾向をも説明できる。」（ル・コルビュジエ，井田訳，前掲書，p. 58.）

¹³⁵ エムリー，2007，前掲論文。

¹³⁶ とはいえ「問題の現状」の部分で述べているように、ジャンヌレは部分的には、ジッテによる中世的ピクチャレスクの推進はすでにすでにドイツで成し遂げられたとみなして、ジッテを批判したブリックマンについても触れながら、そういった「反動（la réaction）」[CV-254]派の動きも認識し、そうした動きによって問題の本質を知らない大衆が混乱することを危惧している。

¹³⁷ エムリー，2007，前掲論文。この講演が、1910年9月24日から25日のスイス都市連盟代表者会議（L'Assemblée générale des délégués de l'Union des villes suisses）であった。草稿はこのカンファレンスに間に合わせるようレプラトニエとの間で取り決めてられていたが、結局草稿は完成せず、レプラトニエが自分で講演を行ったようである。この経緯については本研究の序章および Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 40も参照。

論されていて¹³⁸、ジャンヌレの価値判断はここでじゅうぶん明確に説明され得るものではない。シュノー
ルは、ジャンヌレが 1915 年に準備していた“France ou Allemagne”（以下『フランスかドイツか』）と題
された小冊子でドイツに対するフランス文化の優位性を論じようとしていたが、部分的にはドイツの当時
の建築や都市デザインのジャンヌレの知識がフランスのものよりも豊富であったためにそれは難しかった
ようであることを指摘している¹³⁹。またブルックスは、ジャンヌレが、フランスを讃える内容の『フラン
スカドイツか』をパリへ行くための手段としてみなしていたことを指摘している¹⁴⁰。ジャンヌレは“Etude
sur le mouvement d'art décoratif en Allemagne”（『ドイツの装飾芸術運動に関する研究』）（1912）にお
いては¹⁴¹、フランス装飾芸術においては遅れていた、ドイツで進む生産組織体制による工業芸術を学び取
る必要性を説く一方で、芸術性が減じたドイツ装飾芸術に対する批判も述べていた¹⁴²。

いずれにせよ、「都市の構築」のパーティ論の思想的背景となる面の視認とそれによる空間把握は独語圏
から取り入れたものである。ジャンヌレへの影響源とその時系列的な前後関係を Fig. 5.4.1 に示す。とく
にジャンヌレはジッテが論じた心理的效果を与える視覚的閉鎖性に後代のヘンリチ（1904）やシュルツェ
＝ナウムブルク（1906）やブリンクマンの著作（1908）から取り入れた「雰囲気」や身体の「休息」とい
った考えを組み合わせながら理論を展開していたし、愛郷心の概念も、ドイツ郷土保護運動を背景に構想
されたものであった。自然保護や歴史研究に対する関心の高まりは、ドイツ諸邦がナポレオン戦争によっ
てフランスをはじめとする外国勢力の支配下におかれ祖国統一を望むナショナリズムが興った 19 世紀前
半にもすでにあったことから¹⁴³、ジャンヌレが参照するシュルツ＝ナウムブルクも含めて、「愛郷心」の概
念は反産業化だけでなく、ドイツ民族の統一や民族の絆を求める、とはいえまだ過激なものではない萌芽
的なプロイセンナショナリズムにも基づいていたと思われる。ただしその一方でジャンヌレ自身の帰属意
識は仏語圏スイスにあり、こういった独語圏で議論されていた概念を取り入れて自身の中で組み合わせス
イスに適用することを構想し、故郷ラ・ショー＝ド＝フォンの美化と愛郷心の創出を意図していたことが
推察されるのである。

¹³⁸ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 213. シュノーが挙げているように、次の文献も参考になる。エヒスリン、ヴェルナー：ド
イツ 影響、興隆、そして絶交、所収：リュカン、加藤監訳、前掲書、pp. 22-30.

¹³⁹ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 213.

¹⁴⁰ Brooks, 1997, *op. cit.*, p. 409 ff.

¹⁴¹ シュノーによれば、『ドイツの装飾芸術運動に関する研究』は『フランスかドイツか』の役割を果たすものであつ
た、とフランスの建築家モーリス・ストレ (Maurice Storez, 1875-1959) は自身の 1915 年の著作 “L'Architecture et l'art
décoratif en France après la guerre (戦後フランスの建築と装飾美術)” 中で見なしていたようである (Schnoor, 2020,
op. cit., pp. 213-214).

¹⁴² 千代章一郎、田所辰之助、杉山真魚：シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ (ル・コルビュジエ) のドイツ装飾芸術
運動研究における「装飾」の概念構成、「工業」「芸術」「類縁性」、日本建築学会計画系論文集、第 86 巻、第 779 号、2021,
pp. 297-307. ただし千代らによれば、ジャンヌレはドイツとフランスの装飾芸術をかならずしも対比的に捉えていたわ
けではないし、フランスの芸術が当代の装飾芸術において時代遅れになってしまったわけでもなかった。

¹⁴³ 赤坂、前掲論文。

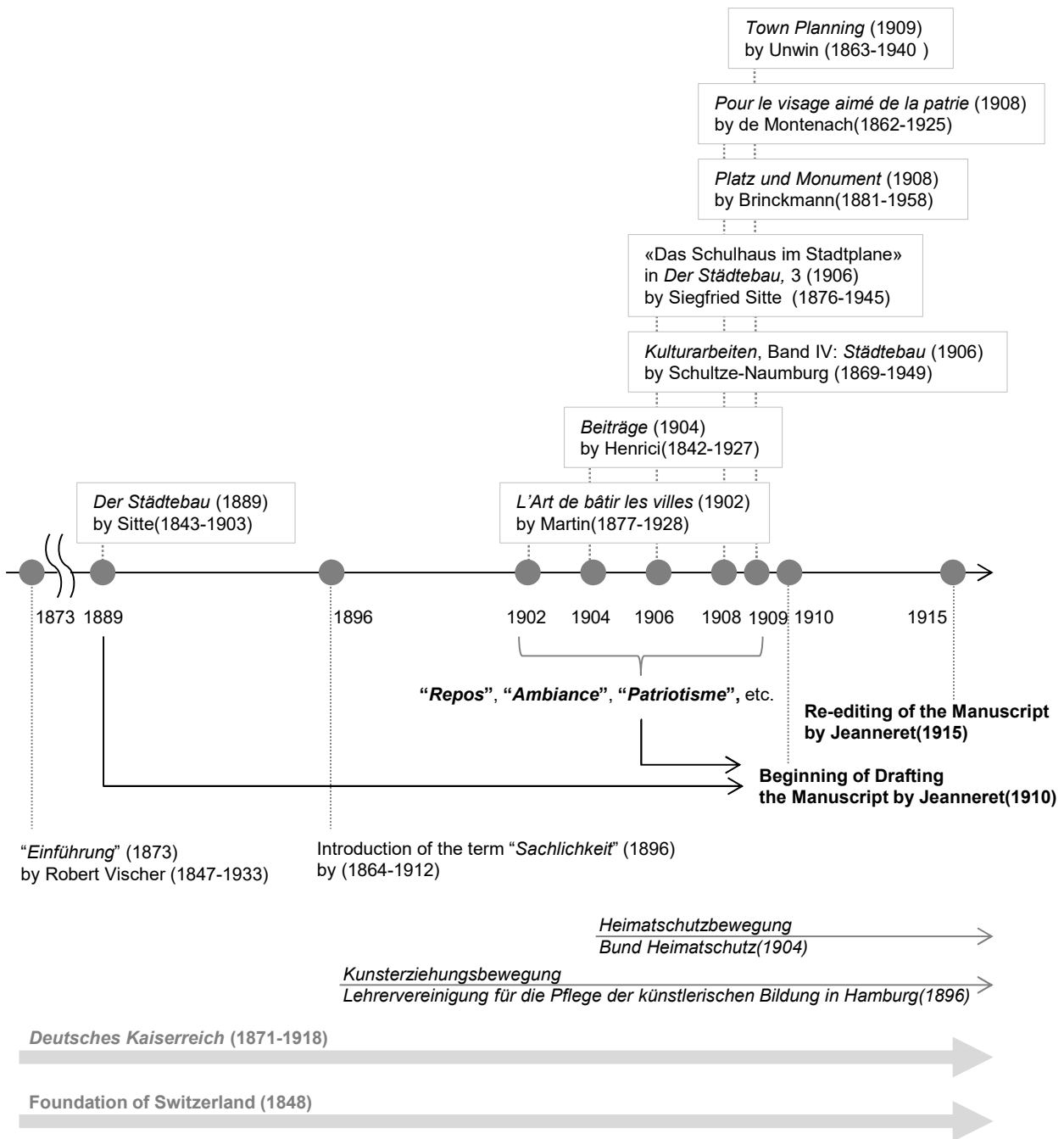


Fig. 5.4.1 Sources of influence on Jeanneret

ジャンヌレはおおむねデザイナーとしてその場所固有の性格を考慮するよう勧めているのであって、草稿の中の愛郷心の概念は政治的な祖国としてただちにナショナリズムと結びつくものとは言えない。ただし郷土をとりまく思想は、後に「血と土」を掲げるようなナチに利用されるようになる。

たとえばシュルツェ=ナウムブルクの建築作品は民族的で田園的な郷土様式に則っていた¹⁴⁴。こう配屋根を主唱したシュルツェ=ナウムブルクと陸屋根派のヴァルター・グロピウスとの屋根論争は広く知られている¹⁴⁵。第一次世界大戦後には、シュルツェ=ナウムブルクの伝統に根差した造形はモダンムーブメント左派から批判されるようになっていった¹⁴⁶。ナチスによる建築には、アルベルト・シュペアー (Berthold Konrad Hermann Albert Speer) をはじめとする新古典主義をさらに巨大化した建築様式を用いるものと、郷土様式といわれる民族的な様式による田舎風の建物が用いられていたが、シュルツェ=ナウムブルクの作品は後者に属し、農本主義的な反都市イデオロギーである「血と土」に則った建物としてつくられた¹⁴⁷。近代建築史において、とくに 1920 年代以降のシュルツェ=ナウムブルクの言論、たとえば 1928 年の著作“Kunst und Rasse (芸術と人種)”での近代建築の展開と文化・人種の墮落を結び付けようとした主張などは、過激論者のそれとして位置づけられており¹⁴⁸、その過剰なほどの田舎風の造形は後にヒトラーから

¹⁴⁴ ただし、シュルツェ=ナウムブルクは、独自の抽象ビーダーマイヤー様式、抽象化された新古典主義的造形を用いる点で、進歩的建築家としてもみなされていた (マルグレイヴ, 加藤監訳, 前掲書, p.688. フランプトンも、シュルツェ=ナウムブルクについて当初は進歩的立場で設計していたと評している。フランプトン, ケネス: 現代建築史, 中村敏男訳, 青土社, 2003, p. 636 訳注 (20)). というのも、シュルツェ=ナウムブルクは「1800 年頃」をデザインが単純で、誠実で、目的を客観的に表現する、真のゲルマン建築の最後の時代と考え (Gutschow, Kai K.: *Schultze-Naumburg's Heimatstil: A Nationalistic Conflict of Tradition and Modernity*, in Gutschow, Kai K. et al.: *Tradition, Nationalism, and the Creation of Image*, Center for Environmental Design Research, University of California, Berkeley, pp. 1-44, 1992, pp.12-13), 「1800 年頃」の二種類のスタイル、ゲルマン農家と地方古典主義を主著『文化作品』で紹介していたのである。なお、ヴァナキュラークラシズムはゲーテの家に代表されるような形式で、「1800 年頃」という表現はポール・メーベス (Paul Mebes) の著作“Um 1800 (1800 年頃)”に由来している (Paul Mebes: *Um 1800*, first published in 1908.). 1905 年の著作“Die Entstellung unseres Landes (我が国の破壊)”では、シュルツェ=ナウムブルクは、建築デザインは装飾なしに可能でなければならないとし、良い素材を適切に使用し、シンプルで正直な表現を推奨した。グーチョウによれば、シュルツェ=ナウムブルクは、18 世紀末のパロックやビーダーマイヤー時代のヴァナキュラー建築の単純でテクトニックな形態と抽出されたクラシズムを基礎として、近代デザインにつながる「リアリスト」で「ザッハリヒ」な建築を求めたという (Gutschow, Kai K.: *The Anti-Mediterranean in the Literature of Modern Architecture*, Paul Schultze-Naumburg's Kulturarbeiten, in Lejeune, Jean-François and Sabatino, Michelangelo ed.: *Modern architecture and the Mediterranean: vernacular dialogues and contested identities*, London ; New York : Routledge, pp.149-174, 2010.). このように、ジャンヌレが「都市の構築」執筆した前後のシュルツェ=ナウムブルクは、進歩的に抽象的なビーダーマイヤー様式と即物性の概念を有しており、思想はたんに懐古的で保守的なものではなかった。なお、ジャック・ギュブレールは、1912 年の『ドイツの装飾芸術運動に関する研究』を出版するにあたり、ジャンヌレが、「1800 年頃」の匿名芸術こそが芸術の真の姿であると考えたメーベスの主張を取り入れたことを指摘している (ギュブレール, ジャック: ラ・ショー=ド=フォン: シャルル=エドゥアール・ジャンヌレ, 1887-1917, あるいは建築実務への入門, 所収: リュカン監修, 加藤監訳, 前掲書, pp. 268-279.). なおマルグレイヴによれば、シンプルで簡素な 19 世紀初頭の中産階級の建築を当代の出発点として力説したこうしたメーベスの考え方は、田園ロマン主義に対する 2 つの流れのひとつとして捉えられており、ビーダーマイヤー・リヴァイヴァルと呼ばれることが多い。それに対する対抗運動として、即物性の構築的解釈を中心とした脚注 8 で先述したルクスの考え方が位置付けられている (マルグレイヴ, 加藤監訳, 前掲書, p. 512).

¹⁴⁵ 郷土様式の建物は住宅やコミュニティ施設に用いられていた。郷土様式の主導者であるリヒャルト・ヴァルター・ダレ (Richard Walther Oskar Darré) は、田園を賞賛しバウハウスを批判しているが、この批判は後に、「屋根論争」として広く知られるバウハウスの陸屋根かナチスの切妻屋根かという論争へ展開していくこととなる。パウル・シュルツェ=ナウムブルクは、「勾配屋根」派の主唱者であった (中江研, 山本一貴: W.グロピウスと P.シュルツェ=ナウムブルクとの屋根論争について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-2, pp.621-622, 2008.).

¹⁴⁶ マルグレイヴ, 加藤監訳, 前掲書, 前掲書, p. 688

¹⁴⁷ 安松みゆき: ナチス支配下における強制収容所の建築史の一試論: アウシュヴィッツ強制収容所を例に, 別府大学大学院紀要, 第 7 号, pp. 35-55, 2005. シュルツェ=ナウムブルクは 1930 年には自己意志でナチスに入党、1932 年にナチスの国会議員となり、ナチ政権初期には文化行政における実力者となってバウハウスを敵視した。

¹⁴⁸ マルグレイヴ, 加藤監訳, 前掲書, p. 688.

も批判されることとなる¹⁴⁹。

また、1920年代後半には、郷土保護運動の中から、時代錯誤、骨董趣味、自然耽美を非難し、近代の技術発展とそれに伴う社会の変化を前向きに捉える人々が現れたとされている。シュルツェ=ナウムブルクは、1927年に、郷土（ハイマート）という言葉のセンチメンタルな響きを運動の本来の意味に反すると捉え、保護すべきは狭義の郷土のみではなく、国全体をイメージできる象徴的存在であると示し、郷土保護という呼称が十分ではないと批判しりと、郷土「保護」から「育成」へと転換する傾向が現れたことが指摘されている¹⁵⁰。

このように、シュルツェ=ナウムブルクはナチスの文化政策に同調したり、国家主義的な思想を持ったりすることになったが、「都市の構築」で参照されている1910年前後にかんしては、こうした急進的な思想を持っていたという指摘は見られない¹⁵¹。

本研究が示してきたように、ジャンヌレが草稿で目指すのは都市への誇り、つまり「愛郷心」という「美しい情動」の創出であり、そのために美しい都市デザインを生み出すには大衆と当局の趣味の教育が不可欠であった。こうした愛郷心の創出や趣味の啓蒙といった関心は郷土保護運動や芸術教育運動といった、急速に進む工業化を受けてさかんになった社会運動の影響を受けていたが、郷土保護は大都市を否定して古いものや懐かしいものを留めておこうとする懐古的な動きを基調にしていたし、芸術教育も工業製品のうちにさえ芸術を導入しようとしていた。つまりこれらはともに工業化の反動として生じた地域性の尊重という初動的な動きであり、それが萌芽的なナショナリズムをも基調にしたものであったとはいえ、国粋主義を推し進めるための一体的な国民形成を意図した過激な動きにはまだ至っていないと言えよう¹⁵²。実際、19世紀初めの国民形成の動きは、自らの個別性や特殊な文化としての誇りを前面に出そうとするものであったという指摘もある¹⁵³。排他的なナショナリズムといった過激な動きには至っていないという点は、ジャンヌレの身体の捉え方についても同様である。道のパーティ論では身体運動について休息や疲労の回避を中心に論じられており、ル・コルビュジェが構想した生理学的に理解される近代的身体の鍛錬や、あ

¹⁴⁹ マルグレイヴ、加藤監訳、前掲書、pp. 688-689。シュルツェ=ナウムブルクは1930年にはドイツ文化戦闘同盟（Kampfbund für deutsche Kultur）に加盟している（フランプトン、中村訳、前掲書、pp. 379, 636.）。これはナチス文化の普及を目的とした国家的組織としての知識人集団であった。

¹⁵⁰ 赤坂、1992、前掲論文。ただし、赤坂によれば、育成を主張する人々の間にも差異があった。例えば、シュルツェ=ナウムブルクは民族における大衆（Masse）を文化の担い手としてふさわしくないと見なして否定するのに対し、ヴァーゲンフェルト（Wagenfeld, K., 1869-1939）は、文化の担い手こそ国民、民族（Volks）であるとして、大衆に同族意識を得させるための国民教育の必要性を主張した。すなわち、郷土を保護するためには郷土を支える人々の育成教育が必要であるとして、郷土保護運動と教育問題に接点が生まれていった。それに対してシュルツェ=ナウムブルクは、ドイツ民族の成員の純度を高めるためには劣ったものや少数のものを切り捨てるべきだと考えていた。

¹⁵¹ 先の脚注144も参照。

¹⁵² 急速に発展する工業化の背景には19世紀における科学技術の進歩があった。なかでもメンデルの遺伝の法則やダーウィンによる進化論の発表は大きな影響を与えた。進化論はイギリスの哲学者スペンサーに代表される社会進化論に引き込まれると、世紀末には優生学のような差別思想に援用され、反ユダヤ主義や黄禍論といった適者生存、劣性遺伝などを人間社会に適用する動きを支えることになった（森田、前掲書、pp. 63-63）。

¹⁵³ ドイツでは19世紀初めからドイツ精神の賞揚がロマン主義的な神秘性をもって唱えられた。なおフランスでは、フランス革命において「国民万歳」とか「祖国は危機にあり」といった表現を用いて祖国フランスの特殊性にこだわって民衆を動員していた一方で、ジャコバン的な革命の理念は啓蒙思想のコスモポリタンの発想を共有して府国籍にこだわらず人間の解放という目的を持っている側面もあった。1870年代以降になると民族主義や国民主義は民族や国民の純粋性を考えて排外主義的な様相を強くし始め、外国人やユダヤ人を排斥する動きにつながっていった。フランスではプロイセンとの戦争の結果アルザス・ロレーヌ割譲に至ったことを受けてそれらを奪った「野蛮なドイツ」への復讐が叫ばれ、ドイツでは「軽薄な小賢しいフランス」への軽蔑が煽られた（イギリスの大衆ではジンゴイズムと呼ばれる熱狂的な大英帝国支持の感情が見られた。）（森田、前掲書、pp. 49-51）。

るいは、ナショナリズムの勃興とともにあった筋力強化、たくましい身体と精神の獲得¹⁵⁴、といった厳格なものとしては論じられていない。

「都市の構築」で取り上げられている身体も、郷土も、教育も、建築も、後には全体主義的な国民統一の手段として、たくましい身体と精神の獲得、郷土「保護」からその担い手たるドイツ民族の啓蒙と郷土「育成」への移行¹⁵⁵、民族性を象徴するような郷土様式の建築、といったようにそれぞれ利用されていくことになるが、「都市の構築」の草稿にそういった排他的あるいは全体主義的な意図は記されていない。

このように、本章ではパルティ論のまとめと都市全体のデザイン論、そして草稿の執筆意図を確認し、その歴史的位置づけを行ってきた。草稿の究極目標である「愛郷心」の創出に至る論理構成は Fig. 5.4.2 のように整理できる。同図に示すとおり、ジャンヌレが草稿で展開する理論は、(1) 形式、その形式の中の (2) 知覚対象、その知覚によって生じる (3) 現象、そして主体に生じる (4) 心理作用という段階に分けられる (Fig. 5.4.2 中、点線四角)。それらは究極目標である「愛郷心」の創出を意図して示されたものである。

(1) 形式の段階で論じられているのはパルティ論とパルティを包み込む都市全体のデザイン論で論じられていた具体的な形式である。(2) 知覚対象の段階では、(1) の形式のうち、主体が目や身体によって知覚する対象が示されている。(3) の現象とは、(2) 知覚対象を、主体の身体がどのように捉え把握しているかということである。そして主体に (4) 心理作用が生じる。

これら (1) ~ (4) の各段階はパルティ論と都市全体のデザイン論のそれぞれにおいて見られる。このうちパルティの評価軸は Fig. 5.1.2 で見たとおり、視覚的・身体的観点のものと実用的観点のものに分けられる。前者の中では視覚的閉鎖性と眺望の多様性が支配的であった。また、モニュメントのある広場のパルティの場合は、モニュメント配置にかんして靈感を与える「場所の精神」について論じられていた。この「場所の精神」を用いてモニュメントを配置すると、「対照」が生まれ「雰囲気」が明確になるのであった (Fig. 5.4.2)。そしてこういった場所の個性を尊重することと、実用と美の両立という主張は、5-1 で見たとおり当時の「即物性」の議論に呼応していた (Fig. 5.4.2 中、最下部)。

パルティ論 (Fig. 5.4.2 中、濃いグレーの部分) においては、5-1 において確認したとおり、身体にかんする 2 つの観点が見られた。「身体性 (corporalité)」という術語を用いて論じられる閉じた場という観点と、道のパルティで論じられていた休息や疲労の回避といった身体運動的な観点である。これらはおおむね、それぞれ視覚的閉鎖性と眺望の多様性の評価軸に対応している (Fig. 5.4.2 中、破線四角)。前者については、たとえば身体周辺の三次元空間を指す「ヴォリューム」という語や、身体周辺の空間の性格と空間に滲み出す主体の情感とが混在したものを指す「雰囲気」といった言葉を用いて論じられており、ジャンヌレはそういった身体が取り囲まれる感覚から美が生じると考えていた¹⁵⁶。そして、そういった圍繞感

¹⁵⁴ 竹崎一真：戦後日本における男性身体観の形成と揺らぎ：男性美（ボディビル）文化の形成過程に着目して，体育学研究 64(2)，一般社団法人 日本体育学会，pp. 687-704，2019.

¹⁵⁵ 詳細は注 150 に示すとおり。

¹⁵⁶ ジャンヌレは身体が囲まれるような圍繞感に美を見出していた。たとえば本研究の第三章で見たとおり、ジャンヌレはベルンのマルクトガッセという曲線街路について、次のように、「ヴォリュームの感覚」から美が生まれると述べていた。「この道の美しさは、一般に、道に沿う建物によるもの、活気を与えてくれる素晴らしい噴水によるものだとみなされている。これは間違いだ。美は道の完璧なヴォリュームの感覚から生まれ、それから—こうした理由だけで—ファサ

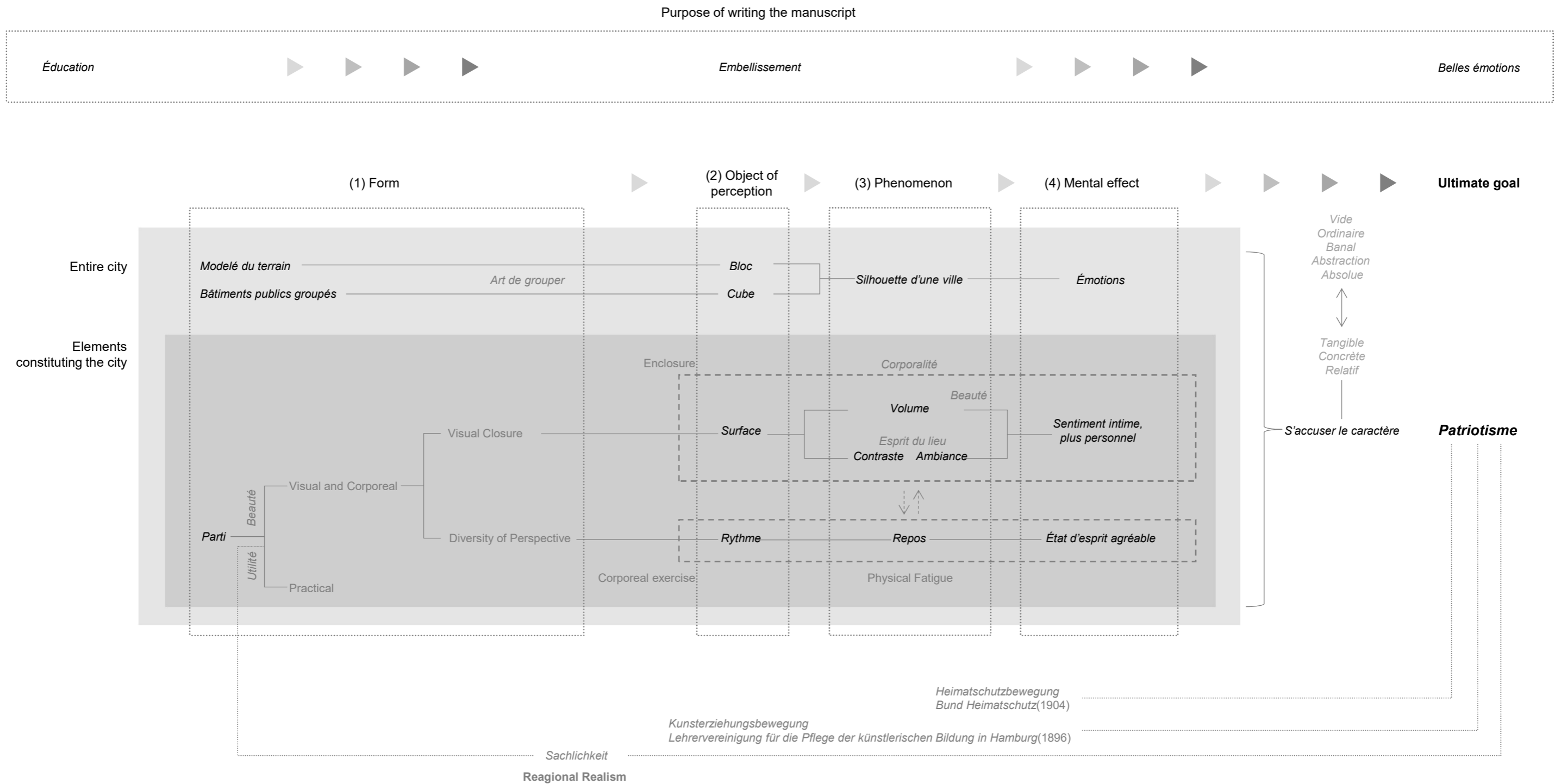


Fig. 5.4.2 Diagram of process for causing *patriotisme* in the manuscript

が「親密でより個人的な感情」と表現される親密さを創出するのであった。後者については、道のパーティ論で見られたように、ジャンヌレは道を進む際の連続的な印象の変化を「疲労に対する最良の緩和薬 (le meilleur palliatif contre la fatigue)」[CV-297]と表現したり、勾配の緩急や平坦な箇所のある道について「休息とは仕事の変化だ (le repos c'est le changement de l'occupation)」[CV-320]と述べて変化に富んだ勾配を賞賛したりと、歩行者の身体的疲労を軽減することを論拠に、眺望の多様性による単調さや退屈の回避を主張していた。このように変化する勾配や眺望といった何らかのリズムの知覚により身体的疲労を回避することで、「快い精神状態 (un état d'esprit agréable)」[CV-296-297]にいざなわれるのである。このようにパーティ論には身体を中心にした閉じた場についてのものと身体運動的観点の2つがあり、パーティが目や身体に与える効果について論じられ、さらに身体を中心にした閉じた場の親密さや身体疲労の回避による快さといった心理作用がそれぞれ構想されているのである。

ただし道のパーティ論では、一般に心身の疲労に対して用いる「休息」という用語を視覚的閉鎖性の説明時に「目」に対して用いて「目の休息」と表現することで、心理的な作用に鑑みた閉鎖性の根拠として身体運動的な理論を重ねて補強している方向性が部分的に見られた。このように、ジャンヌレは両観点の用語を横断的に用いていると言える (Fig. 5.4.2 中、中央部の破線矢印)。また、前者の観点はおおむね視覚的閉鎖性による身体周辺の空間把握というジッテをはじめとする前近代の独語圏での空間論に即したものであったのに対して、後者の身体運動的観点は、筋肉の鍛錬といったル・コルビュジエも構想した近代的な思想につながる視点であることに注目される。

また、(3) 現象から (4) 心理作用への変換は、(3) 現象が上述の身体にかんする2つの観点に基づいたものであって、それを認知する主体が主体自身の経験として空間を理解できるので生じていると言えるだろう。

こうした各パーティを包み込む都市全体のデザイン論 (Fig. 5.4.2 中、薄いグレーの部分) では、5-2 で見たとおり、地形 (*modelé du terrain*) とその上の建物群がそれぞれ「ブロック (*bloc*)」「キューブ (*cube*)」と彫刻的な言葉で表現されている。既存の地形と、地形を考慮してより親密な関係 (*leurs plus intimes rapports*) として集められた公共建物群 (*bâtiments publics groupés*) は調和的に一体となり、稜線のように高さ方向に変化のある「都市のシルエット」を形成し、それを視認した都市住民に対して「美しい情動」という心理作用を生む。

各パーティは既存の地形と調和した都市全体のデザインとともに美的な都市を創出し、都市住民の「愛郷心」の創出に至る。これがジャンヌレの究極目標である。そしてジャンヌレは、パーティや都市全体が誘起する親密さや快さや美しい情動といった心理作用について、5-3-1 で見たとおり、相対的で具体的な動

一ドが効果的に寄与することができるのだ。(La beauté de cette rue est attribuée d'une manière générale aux édifices mêmes qui la bordent, aux superbes fontaines qui l'animent. C'est une erreur. La beauté naît du sentiment de parfait volume de la rue, et ensuite -et seulement à cause de cela - les façades peuvent apporter un tribut effectif.) [CV-302-303] ほかにも、本研究の第四章で見たとおり、「身体性」という語を用いて身体周囲の三次元空間の把握について論じながら、次のように、「身体性」が美に変容すると述べていた。「その身体性は美に変わるだろう、その平面と取り囲む壁の関係が構想の統一性を強調するときに、そして、壁の表面にある数多くの深い穴を通して視線を遠くへ導く代わりに、視線を壁の表面に留めファサードの最大値を視線に示すときに (Sa corporalité se muera en beauté, lorsque le rapport de son plan et des murs qui la bordent accusera une unité de conception, lorsqu'au lieu de mener loin le regard au travers des percées nombreuses et profondes de la surface de ses murs, elle le retiendra en lui offrant le *maximum de façades*.)」[CV-338]

きであると考えていると言える¹⁵⁷。こういった相対性や具体性への好みは、パルティ論や都市全体のデザイン論において閉鎖性やまとまりのある形態を勧め茫漠とした「あいた空間」を批判する際の根拠と共通である。そしてこうした相対性や具体性への好みは、その場所における計画の「性格を明確にする (s'accuser le caractère)」[CV-341]ことにつながる¹⁵⁸。これは「あいた空間」の抽象性や匿名性、そして近代的な都市計画のユニバーサルな性格とは対照的である。このように、親密性、具体性、相対性といったものを勧める態度が草稿の理論全体を統合している。そして計画の性格を明確にするパルティ論や都市全体のデザイン論が都市の美化を推進し、「愛郷心」を創出するのである。

そして地形と建物群が調和して一体となった「都市のシルエット」や、閉鎖的なパルティの「表面」と「ヴォリューム」の視認、そしてモニュメントのある広場における「対照」といった現象に見られたように¹⁵⁹、ジャンヌレは目で見える都市の美に対して心が動かされ感情が生じると考えていると言える。このように、計画の性格を明確にする根拠がその場所の歴史性ではなく、おもに視覚的明瞭性に求められていることは、感情移入論からジッテの理論に至るまで前近代の独語圏の空間論における視覚への顕著な着目に対応していると言えるだろう。

また、当時の「即物性」の議論と呼応したものとして理解できたジャンヌレの形態論における実用と美の両立の主張だけでなく、不整形な造形と幾何学的な造形のあいだでの思想のゆらぎも、草稿に通底する地域主義的な関心とともに理解できる。つまり、ジッテの論じる中世的なピクチャレスクな性格を賞賛する一方で反ジッテ的なモニュメンタルな性格の幾何学をも好むという思想のゆらぎが見られるのは、そういった一見相反するような造形であっても、それらがともにすでにその場所にあるものとの調和し計画の性格を明確にすることで、「愛郷心」の創出に資する形態であれば肯定する態度が貫いているからだ理解できるのである。これはたとえば本論文第四章で見えてきたとおり、幾何学的な形態であっても、騎馬像を強調し王の広場としての性格を明確にする「絶対王政の広場」を肯定し、明瞭さがなく茫漠としたただ広い「19世紀の広場」を批判していた態度などに表れている。同様の幾何学の部分的な賞賛は、閉鎖的な親密さを持つ規模の小さな直線街路に対しても見られた。ただし例外的に、莫大な規模の直線街路の荘厳な性格への賛美や直角の無条件の賞賛といった、性格の明確さという観点からは説明できない逸脱した思想も部分的にみられた。

¹⁵⁷ 5-3-1 で見たとおり、ジャンヌレは「すべては相対的なものであり、情動の働きにはある次元や印象の絶対性は存在しない」[CV-250]と述べていた。

¹⁵⁸ ジャンヌレは「広場」の節の中で、「19世紀の広場」を、意図が明瞭でなく生気のない印象しか生まないと批判していた。そして、「情動の性格 (le caractère de l'émotion)」[CV-347]を考慮すべきだと主張し、「特徴や個性そのものである作品 (des œuvres, qui sont des caractères et des personnalités)」[CV-348]を讃えていた。

¹⁵⁹ 本論文第四章で見たとおり、ジャンヌレは「ヴォリューム」を視認できるものとして捉えていた。そして「身体性」という語を用いて、身体周囲の三次元空間の把握とその「視認性」を論じていた。本論文第四章で見たとおり、これはたとえば、次のような言説に表れていた。「つまり、彼らはヴォリュームも、対照も、《人間の尺度》も気かけなかったということだ；一言で言えば、彼らは身体性を無視したのである (c'est-à-dire, qu'ils ne se souciaient ni de volume, ni de contrastes, ni « d'échelle humaine » ; en un mot, ils ignorèrent la corporalité.)」[CV-376] 「そして、過度に拡大したこの空間の境界 (frontières de ces espaces) を視線に知らせるはずだった壁はその距離の分だけ卑小に見え、遠くへと逃げていくような眺望 (lointaines fuites perspectives) しか見えない目は身体性の意識 (conscience de la corporalité) をすべて失う。あいた空間は非審美的である (Le vide est antiesthétique)」[CV-384] 「直線で長く閉じていない道のような広場は、目にとってはヴォリュームが存在せず (un volume inexistant pour l'œil)、それゆえ、表現力に乏しい。」[CV-338]

以上のようにして、「愛郷心」の観念は草稿全体に通底してその論を束ねていたと言える。そしてその「愛郷心」の観念はシュルツェ＝ナウムブルクやド・モントナックを經由して、同時代の郷土保護運動や芸術教育運動から影響を受けたものであった。とくにパーティ論では、道の都市構成要素で見られた、ヘンリチ、シュルツェ＝ナウムブルクから影響を受けたと考えられる有機体論的な理論、身体運動や生理的な疲労にかんする観点や、広場の都市構成要素で見られた、シュルツェ＝ナウムブルクやブリンクマンを参照したと考えられる「雰囲気」の観念など、ヘンリチ、ブリンクマン、シュルツェ＝ナウムブルクといった人物による、ジッテ『広場の造形』(1889)よりも15年程度後代の著作からの影響が推察された。ジャンヌレが地域の土着性と結び付けて論じる、形態と感情の具体性は、このように20世紀初頭の理論を組み合わせたものであり、排他的なナショナリズムに至る前の穏健的で温かな愛郷心に基づいたものであったと言えよう。

既往研究では、たとえば「都市の構築」において保護論者としてのパウル・シュルツェ＝ナウムブルクが参照されていることや、スイスのヴァナキュラー建築について著していたジョルジュ・ド・モントナック (Georges de Montenach)、ギヨーム・ファティオ (Guillaume Fatio)、レアンドル・ヴァイヤ (Léandre Vaillat) といった人物からの影響が示唆されたり¹⁶⁰、草稿から「総合芸術の概念と郷土保護の哲学のコンセプトがジャンヌレの言説の多くから浮かび上がってくる」¹⁶¹ことやシュルツェ＝ナウムブルクが中心に展開した遺産保護についてジャンヌレが論じていることが指摘されたりと¹⁶²、地域主義者としての側面が部分的に明らかにされてきた。それに対して、本研究では網羅的な事例調査によりジャンヌレの形態論を整理し直したうえで形態の評価軸を導出したことで、形態論と地域主義的な思想的背景との結び付きが示された。既往研究で指摘されていることも含めて、ジャンヌレへの影響源がどのようにジャンヌレの中に流れ込み統合されたのかという全体像が示されたし、ジャンヌレの都市形態論とその思想的背景が歴史的な文脈の中で位置づけられた。

5-5 小結

本章では各都市構成要素のパーティ論の総括と都市全体のデザイン論の確認を行った後、草稿全体の執筆意図とその背景を示した。各パーティ論に共通して美を評価する視覚的・身体的観点の評価軸と実用的観点の評価軸は、互いに無関係な独立したものではなく両立されるべきものとして、当時ドイツの批評家リヒャルト・シュトライターが「即物性 (Sachlichkeit)」という語とともに論じていた地域主義的なリアリズム (Realismus) に則ったものとして理解できることを示した。都市全体のデザイン論において、ジャンヌレは「都市のシルエット (la *Silhouette* d'une ville)」にかんして具体的な形態を提案していたわけではないが、地面の起伏 (*modelé du terrain*) を考慮し調和的にデザインすることで「より親密な関係 (leur

¹⁶⁰ Passanti, Francesco: The Vernacular, Modernism, and Le Corbusier, in *Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 56, No. 4, 1997, pp. 438-451.

¹⁶¹ Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 64-65. “the concept of the *Gesamtkunstwerk* and the philosophy of *Heimatschutz* ring out from many of Jeanneret's statements” また、同書 pp. 60-61 も参照。

¹⁶² Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 128-129.

plus intimes rapports)』としてとして公共建築をまとめるよう主張していた。そして地形を含めて都市全体を彫塑のように捉えて、高さ方向の変化を有するそのシルエットという視覚的な明瞭性を論じていた。

また、ジャンヌレの「都市の構築」執筆の目的は、(1) 大衆と当局の教育、それによって (2) 都市の美化を知的に推進すること、そしてその結果 (3) 都市住民に美しい情動を喚起することであり、この美しい情動すなわち愛郷心の創出こそ、ジャンヌレの究極目標であるということを指摘した。

ジャンヌレは、草稿の究極目標である「愛郷心」を創出する都市全体の視覚的な捉え方や、さらにはそういう美的な都市全体の形態を看取できるような大衆の教育といった考え方についても、ド・モントナックから影響を受けていたと考えられることを指摘した。また、ジャンヌレは、その地方特有の素朴な造形に美を見出し、さらにそういった物理的な都市デザインと心理的な感情とを結び付けて、その地方への愛、つまり愛郷心を論じているシュルツェ＝ナウムブルクを引用していたことから、草稿を通して物理的な都市デザインと心理的な感情を結び付けて記述するジャンヌレの論述は、シュルツェ＝ナウムブルクの愛郷心にかんする論述と類似していることを指摘した。そしてこのようにジャンヌレが勧める趣味の啓蒙やその結果として美的な都市に対して抱く「愛郷心」は、工業化を受けて世紀転換期のドイツに興隆した芸術教育運動と郷土保護運動を背景に構想されたものであることを指摘した。このようにジャンヌレの「都市の構築」の究極目標である「愛郷心」を歴史的文脈の中で位置づけた。ジャンヌレは独語圏の影響をおおいに受けて草稿を執筆したが、その出自や草稿から窺われるスイスの都市計画への問題意識などから、ジャンヌレ自身の帰属意識は仏語圏スイスにあり、独語圏で議論されていた概念を取り入れて自身の中で組み合わせスイスに適用することを構想して故郷ラ・ショー＝ド＝フォンの美化と愛郷心の創出を意図していた可能性を示唆した。草稿全体に通底するこうした地域主義的な関心は、不整形な造形と幾何学的な造形のあいだの思想のゆらぎをも含んだ形態論や、実用と美を評価するその評価軸、そしてこういったパルティ論から都市全体のデザイン論に至るまで、草稿全体の論を束ねており、それは20世紀初頭の理論を組み合わせたものであって、排他的なナショナリズムに至る前の穏健的で温かな愛郷心に基づいたものであったということを示した。

結章

結章

6-1 各章で得られた知見

本研究は、「都市の構築」におけるジャンヌレの都市形態論とその思想的背景を明らかにすることを目的として検討を行った。草稿の論理は完全に構造化されているわけではないが、ジャンヌレは形態論を展開する際の根拠の論理化を試みており、本研究はその形態論の整理、および形態論と形態を評価する思想の絡み合い方の解明を目指した。各章で得られた知見は以下のとおりである。

第一章では、草稿に頻出する「パルティ (parti)」という語についてジャンヌレがどのような意味で用いたのかを調査し、この「パルティ」が草稿の主題であることを示した。「都市の構築」でのパルティの語義は都市構成要素の型であり、ジャンヌレは、もとは建築について語られていたパルティを都市デザインに適用していることを指摘した。そしてジャンヌレは街区、道、広場を中心にパルティを論じており、草稿の主題はこうした都市構成要素ごとに展開されるパルティ論であることを指摘した。

このように、ジャンヌレはパルティという語によって都市の要素の型を指し、とりわけ街区、道、広場について論じていた。これを受けて、第二章、第三章、および第四章ではそれぞれこの3つの都市構成要素のパルティに着目して都市形態論を整理した。まず既往研究を参照しながら草稿を精査し、ジャンヌレが示した類型だけでなく事例も含めて収集・整理することで、パルティのタイポロジーを析出した。草稿には、「パルティ」という語を用いていないものの明らかにパルティすなわち都市形態の型が論じられている箇所も散見されるので、すべての事例を調査しパルティが記述されている箇所を取り出して、それらを形態によって分類し直すことで、ジャンヌレのパルティを体系的に把握した。さらに、各タイポロジーに下された評価からジャンヌレの評価軸を導出した。

第二章では街区のパルティを扱った。草稿から計20箇所の街区のパルティの記述箇所を取り出し整理することで、計10箇所の街区のパルティを抽出し、これらを中庭型、連続型、独立型の3つに大別することで、ジャンヌレの街区のパルティを体系的に把握した。そして街区のパルティの評価軸を明らかにし、実用的観点の3つの評価軸（衛生状態、街区あたりの戸数、ファサードの経済性）と視覚的観点の4つ評価軸（庭の眺望の美しさ、眺望の多様性、ファサードが道に面すること、直角の必要性）に分けられることを示した。実用的観点の評価軸にかんしては、街区の都市構成要素は光や清浄な空気といった良好な衛生状態を提供する庭と建物の関係を中心に論じられており、衛生状態にかんする評価が支配的であった。またとくに視覚的観点の評価軸については各評価軸の関係は同列ではなく偏りがあり、とくに庭の眺望の美しさおよびファサードが道に面することの評価軸は視覚的閉鎖性の希求に基づいたものであることがわかった。また、視覚的閉鎖性を好む際には、そうでない空間に対して「あいた空間 (vide)」という語を用いて批判を展開していることを指摘した。ジャンヌレは規則的な矩形が反復される都市デザインを退け、モニュメ

ンタルな幾何学である直角とピクチャレスクな曲線を同時に満たす街区を肯定していた。また、このような直角への好みにル・コルビュジェの思想の萌芽を指摘した。

第三章では道のパルティを扱った。草稿から計 88 箇所の道のパルティの記述箇所を取り出し整理することで、計 36 個の道のパルティを抽出した。それらを単独街路、交差点、交差点の反復、道のネットワークの 4 つに大別し、とくに単独街路についてはさらに平面形状、起伏、道と建物の関係に細分することで、ジャンヌレの道のパルティを体系的に把握した。そして道のパルティの評価軸を明らかにし、実用的観点の 3 つの評価軸（衛生状態、交通問題、経済性）と 6 つの視覚的・身体的観点の評価軸（視覚的閉鎖性、眺望の多様性、直角の必要性、大きさの身体性、身体の休息、目の休息）に分けられることを示した。また、各評価軸相互の関係は同列ではなく重複や包含、そこからの逸脱といった揺らぎのある相互関係が存在し、とりわけ視覚的閉鎖性（＝目の休息）および身体の休息の評価軸が支配的であることを指摘した。そしてジャンヌレは一般に心身の疲労に対して用いる「休息（repos）」という用語を視覚的閉鎖性の説明時に「目（yeux）」に対して用いていることで、ジッテらの心理的な視覚的閉鎖性の論拠としてドイツの建築家カール・ヘンリチらの身体運動的な観点を重ね補強していく志向が部分的に見られた。道という都市構成要素は、街区や広場に比べて線形に近く、そのシーケンスは歩行者が一方向に移動することで認識される。そのため、ジャンヌレはそうした際に一定の運動を誘起するような単調なデザインではなく、視覚や歩行といった人体の諸器官の動きに静止や緩急をもたらすよう、平面・立面・断面の各フェーズで、道という線形の都市構成要素の中に疎密やリズムのあるデザインを好んでいることを指摘した。このように、具体的なパルティについては、ジャンヌレはリズムや疎密によって多様性や閉鎖性が創出され、視覚的閉鎖性（＝目の休息）や身体の休息が得られるようなデザイン、つまり曲線街路を好んでいた。ただし、例外的に直角のモニュメンタルな性格や、身体を凌駕した規模の直線の荘厳さを賞賛しており、ル・コルビュジェの思考の萌芽もみられた。

第四章では広場のパルティを扱った。草稿から計 70 箇所の広場のパルティの記述箇所を取り出し整理することで、計 19 個の広場のパルティを抽出し、それらを単一の広場と複数の広場に大別し、前者についてはモニュメントの有無によりさらに細分することで、ジャンヌレの広場のパルティを体系的に把握した。そして広場のパルティの評価軸を明らかにし、実用的観点の 2 つの評価軸（交通問題、建築構造）と視覚的・身体的観点の 5 つの評価軸（視認の正確性、視覚的閉鎖性、身体的な大きさ、建物やモニュメントの強調、眺望の多様性）に分けられることを示した。とくに後者の評価軸は視覚的閉鎖性、視認の正確性、そして眺望の多様性の評価軸が支配的であった。一般に線形に近い形態を呈す道に比べて、広場という都市構成要素は人が滞留しやすい平面形状であり、ジャンヌレはほかの都市構成要素においても繰り返し論じてきた面や閉鎖性に加えて、広場という滞留空間においてモニュメントなどの対象物とともに規定される「雰囲気」を論じていることを指摘した。広場にモニュメントのある場合については、ジャンヌレが「雰囲気」という語を用いて、「場所の精神（l'esprit du lieu）」による創造、つまりその場所の既存のものを考慮することで生じる空間の性格と、その創造を認知する主体の主観的な情感とが混在したものについて論じているということを指摘した。また、独語圏の思想の強い影響下にあったジャンヌレは、ジッテから導

入した創造の動機となる「場所の精神」とジッテよりも後代のドイツの風景画家、建築家シュルツェ＝ナウムブルクやドイツの芸術史家ブリンクマンから取り入れた限定された空間における「気分 (Stimmung)」の考え方を組み合わせ、感情移入の議論のニュアンスも含みながら情感づけられた空間の経験を表現する語として「雰囲気 (ambiance)」という仏語として導入し論じていると考えられる可能性を示唆した。具体的なパーティについては、ジャンヌレはおおむね視覚的閉鎖性や眺望の多様性や建物やモニュメントの強調をもたらす不整形な平面形状を好んでいたが、幾何学的な形状であっても道の入り方やファサードの統一性などにより閉じて見えるパーティや、モニュメントや建物を強調するような控えめな大きさや配置のパーティであれば高く評価していた。モニュメントがある場合は、その配置が広場の中心であれ端であれ、「場所の精神」による創造であれば、場所の調和的な雰囲気が明確になり対照が生まれることで、モニュメントが強調され、境界面を視認しやすくなり、面の具体的な視認によって身体を取り囲まれるような温かで親しみやすい感情、つまり「親密でより個人的な感情 (un sentiment intime, plus personnel)」が誘起されると理解できることを指摘した。そしてこの感情はモニュメントがない広場一般にも敷衍可能であると考えられることを示した。

第五章では、前章までで明らかにした街区、道、広場の各都市構成要素のパーティ論とその思想的背景のまとめを行った後、都市全体のデザイン論を確認し、草稿全体の執筆意図とその背景を示した。各パーティ論に共通して美を評価する視覚的・身体的観点の評価軸と実用的観点の評価軸は、互いに無関係な独立したものではなく両立されるべきものとして、当時ドイツの批評家リヒャルト・シュトライトナーが「即物性 (Sachlichkeit)」という語とともに論じていた地域主義的なリアリズム (Realismus) に則ったものとして理解できることを示した。都市構成要素のパーティを包み込む都市全体のデザイン論においては、ジャンヌレは、地面の起伏 (modelé du terrain) を考慮し調和的にデザインすることで「親密な関係 (leur plus intimes rapports)」としてとして公共建築をまとめるよう主張していた。そして地形を含めて都市全体を彫塑のように捉え、高さ方向の変化を有するその「都市のシルエット (la Silhouette d'un ville)」という視覚的な明瞭性を論じていた。

そして、ジャンヌレの「都市の構築」執筆の目的は、(1) 大衆と当局の教育、それによって (2) 都市の美化を知的に推進すること、そしてその結果 (3) 都市住民に「美しい情動 (belles émotions)」を喚起することであり、この「美しい情動」すなわち「愛郷心 (patriotisme)」の創出こそ、ジャンヌレの究極目標であるということを示した。そして美的な都市全体の形態を看取できるような大衆の教育や物理的な都市デザインと結び付けて論じられる「愛郷心」は、シュルツェ＝ナウムブルクやスイスの作家ジョルジュ・ド・モントナックといった人物をとおして、工業化を受けて世紀転換期のドイツに興隆した芸術教育運動と郷土保護運動を背景に構想されたと考えられることを示し、草稿の「愛郷心」の観念を歴史的な脈の中で位置づけた。ジャンヌレは独語圏の影響をおおいに受けて草稿を執筆したが、その出自や草稿から窺われるスイスの都市計画への問題意識などから、ジャンヌレ自身の帰属意識は故郷の仏語圏スイスにあり、独語圏で議論されていた概念を取り入れて自身の中で組み合わせスイスに適用することを構想して故郷ラ・ショー＝ド＝フォンの美化と「愛郷心」の創出を意図していた可能性を示唆した。

6-2 研究の結論と意義

本研究の結論と意義は以下のとおりである。

「パルティ」の語義の解明ならびに草稿の主題の指摘

日本での「都市の構築」の草稿を中心に扱った既往研究は、ラ・ショー＝ド＝フォンの都市構造との関係から、『ユルバニスム』へと結実する「都市の構築」をめぐる経緯を調査した玉置の研究のみであり¹、草稿の内容についてほとんど知られてこなかった。一方、世界的な初期ル・コルビュジェ研究の動向としては、本研究の序章で示したとおり、近年とくにジャンヌレ時代の研究がさかんになってきている。「都市の構築」については、執筆に至る経緯や執筆にかかりジャンヌレが都度参照する文献などは明らかにされてきたが、既往研究は草稿の内容やその主題をおもな論題としているわけではなく、草稿の主題が「パルティ」であることは見落とされてきたという経緯がある。それに対して本研究は、「都市の構築」の草稿における「パルティ」という語の用法を調査し、ジャンヌレがもとは建築について語られていたパルティを都市デザインに適用して、都市構成要素の型という語義で用いていることを示した。そして、草稿の主題はこうした都市構成要素ごとに展開されるパルティ論であることを指摘した。当時の都市デザインにおいて「パルティ」が用いられていたかどうかは明らかになっていなかったが、本研究は前近代の都市論において「パルティ」という語が用いられていたことを実証した。

草稿の都市形態論（パルティ論）の体系的な把握

本研究は草稿内の事例を網羅的に整理することで、草稿の内容の体系的な理解を示した。つまり、五月雨式に記述され体系立てられていない草稿の事例を、一定の分類方法（街区：建物と街区の関係、道：道の本数、広場：広場の数）によって整理・類型化可能であるという体系的な理解を示した。そしてそれらに対する評価軸を導出し、評価軸の相互関係を考察することで、パルティを評価するジャンヌレの思想を整理した。とくにパルティを評価するジャンヌレの観点には身体を中心にした閉じた場についてのものと身体運動的観点の2つがあり、パルティが目や身体に与える効果について論じられ、身体を中心にした閉じた場の親密さや身体の疲労の回避による快さといった心理作用がそれぞれ構想されていたことを示した。「都市の構築」はジャンヌレによる都市計画にかんする最初の研究であり、本研究でその理論と思想が網羅的な事例調査によって実証的に示されたことで、これまでには十分に整理されてこなかった若きジャンヌレの都市形態論の体系的な理解が可能になった。

草稿の究極目標「愛郷心」の指摘および都市形態論とのつながりの解明

既往研究では、ジャンヌレの「愛郷心」について、ジャンヌレが潜在的に持つ社会主義的な思想と結び付けられているという政治的な左右の関係を論じる際に触れられているのみであった。具体的には、「都市環境の美から愛郷心が生じるというジッテの国家保守主義的な考えを、自身が育ったラ・ショー＝ド＝フ

¹ 玉置, 前掲論文.

ォンの社会主義的な考えと結び付けていた」とシュノールが指摘しているのみであった³。それに対して本研究はジャンヌレが“patriotisme”という語を用いて「愛郷心」について論じていることを指摘し、さらにその「愛郷心」と形態論とのつながりを示した。すなわち、草稿の形態論はジャンヌレが究極目的とする都市への誇りや愛といった「愛郷心」を創出するためのものであったこと、つまり、ジャンヌレが知覚と身体を媒介として物理的な形式と心理的な「愛郷心」、すなわち形態論と地域主義的な思想を結び付けていることを指摘することで、地域主義的な思想がパルティ論から都市全体のデザイン論に至るまでを束ねているという草稿の全体像を示すことができた。そしてまたおおむね曲線や不整形を好む一方で部分的に直線を賞賛するような、一見矛盾している形態論の背景には、すでにその場所にあるものとの調和することで、その計画の性格を明確にし、「愛郷心 (patriotisme)」の創出に資する形態であれば肯定する態度が貫いていることを示した。

ジャンヌレはパルティや都市全体が誘起する親密さや快さや美しい情動といった心理的作用について、相対的で具体的な動きであると考えており、こういった相対性や具体性は、その場所における計画の性格を明らかにすることと「愛郷心」の創出に結び付けられていたのである。そしてこうした具体的で相対的なものを好む地域主義的な態度はル・コルビュジェが「現代都市」で計画したようなインターナショナルでユニバーサルな、あるいは敷地を指定しない匿名的な原理としての計画が持つモダニズムの抽象性や普遍性と対照的である。本研究のこうした指摘によって、形態論と思想のつながりから統合的に草稿を理解することが可能になり、既往研究で指摘されているジャンヌレの参照源も含めて、ジャンヌレへの影響源がジャンヌレの中に流れ込み「愛郷心」という観念のもとに統合されたという草稿の全体像が示された。以上のように、草稿の内容を精査し吟味した本研究は、ル・コルビュジェというモダニストが確立する前の、多くの都市計画家からの理論を組み合わせ自身の理論として構造化し「愛郷心」の創出へ到達しようとするジャンヌレ像を浮き彫りにした。本研究はこのようにして、ジャンヌレの形態論と形態を評価する思想の絡み合い方、つまり形態論とその根拠として論理化を試みたものの十分に構造化できていなかったジャンヌレの論理を解きほぐし、理解可能なものとして再構築した。これはジャンヌレ時代の都市論が統合的に理解可能になったという点で、ジャンヌレからモダニストル・コルビュジェへの思想の変容を辿る第一歩であり、ル・コルビュジェという人物のより多角的な評価につながる成果である。

³ 草稿から窺われる愛郷心（英語の“patriotism”）とジャンヌレの社会的、政治的関心とのつながりを指摘するシュノールの以下の指摘は、今後の展望にもつながる重要な視点を持ち合わせている。シュノールは草稿中の「《命題》のためのエスキース」の部分について、ジャンヌレの潜在的な社会ダーウィニズムが、おそらくラスキンを読んだことで強化されたのであろうキリスト教の影響下の愛他主義に対抗するものとして用いられていると分析している。シュノールは、ジャンヌレが未来の都市は政治的性格を有すると考えていたこと、そしてそれはジャンヌレにとって公共建物、パブリックスペース、都市デザインの美という3つの要素の相互作用を意味していたと指摘する。そしてそれはつまり政治的な関心を持ち合わせていたジャンヌレが政治教育をもたらすための美学を論じ、それが道徳と故国 (one's native land) の尊重につながると結論付けていたこと、さらにそれは「都市環境の美から愛郷心が生じるというジッテの国家保守主義的な考えを、自身が育ったラ・ショー＝ド＝フォンの社会主義的な考えと結び付けていた (Jeanneret links Sitte's national conservative idea that patriotism arises from the beauty of the urban environment to the socialist ideas with which he has grown up in La Chaux-de-Fonds.)」ということだと考察する (Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 60-61. 筆者邦訳)。しかしながらジャンヌレが“patriotisme (愛郷心)”という語を用いていることは指摘しておらず、上記以上に深くジャンヌレの愛郷心の内実を考察しているわけではない。

「愛郷心」の観念の歴史的な位置づけと地域主義者としてのジャンヌレのより明確な全体像の提示

近代建築史全体を見てみると、およそ 1920 年代以降に急進的な地域主義が排他的な政治思潮と結びついてきたことは知られてきた。また序章において示したとおり、ジャンヌレが郷土様式や曲線のデザインを用いていたことはこれまでに知られてきたし、「都市の構築」については執筆時に地域主義者を参照していることなどが示されてきた⁴。それらに対して本研究では、19 世紀末から急進的な地域主義が隆盛する 10 年程度前の 1910 年前後までの、世紀転換期における比較的穏健な地域主義的な議論に、「愛郷心」が通底したジャンヌレの都市デザイン論が呼応していることを示すことで、地域主義者としてのジャンヌレを相対的に位置づけることができた。このようにしてジャンヌレの「愛郷心」の観念の歴史的な位置づけを行った。なおル・コルビュジェ時代については、たとえばロンシャンの礼拝堂に見られるような人間的で情緒的な作風もみられるし、政治的にも地方主義的な思想が部分的に指摘されている⁵。つまりジャンヌレ時代の地方主義的な側面は少なからず後期に引き継がれていると言える。本研究ではその根源となるような、ジャンヌレにとっての最初の都市研究に見られる地方主義的な思想を指摘した上で「愛郷心」の観念の歴史的な位置づけを行った。これによって、既往研究では部分的にしか知られてこなかった地域主義的な都市計画家としてのジャンヌレという側面を、より明確で全一的に提示し、近代建築史上に位置づけることができた。これは先の「愛郷心」の指摘および形態論とのつながりの解明という意義と合わせて、ル・コルビュジェという人物のより多角的で相対的な再評価につながる成果である。

6-3 考察

前近代の都市論の潮流の再評価

前近代の都市論については、とくにジッテをはじめとする独語圏の議論が知られてきた。これは閉じた都市を勧め中世的なピクチャレスクな性格を賞賛する動きであり、ジッテの理論は多くの後継者によって引き継がれた。ジャンヌレが草稿執筆にかかり何度も参照するシュルツェ=ナウムブルクやヘンリチはこの系譜に位置づけられる⁶。これに対して、フランスバロックや古典的な広場を好み、ジッテの過度なピクチャレスク趣味を批判するブリックマンは、ジッテの系譜とは対照的に位置づけられてきたと言えるだろう⁷。しかしながら本研究では、ジッテ的な中世的ピクチャレスクを賞賛する一方で、反ジッテ的な幾何学をも

⁴ たとえば、フランチェスコ・パッサンティは、本研究において扱ったシュルツェ=ナウムブルクやド・モンナック、ギヨーム・ファティオ (Guillaume Fatio) だけではなくレアンドル・ヴァイヤ (Léandre Vaillat) からの影響を示唆している (Passanti, Francesco: *The Vernacular, Modernism, and Le Corbusier*, in *Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 56, No. 4, 1997, pp. 438-451.)。ル・コルビュジェは後に『今日の装飾芸術』で自らのことを「郷土芸術家」であったと顧みる部分で、ヴァイヤに対して語りかける体裁で記述している。ヴァイヤとル・コルビュジェについてはリュカン監修、加藤監訳、前掲書、pp. 428-429 を参照。これによればヴァイヤは地方様式を強硬に主張する人物であったようである。

⁵ 1933 年頃のル・コルビュジェについては、政治的にも地方主義者であったという指摘がある (リュカン監修、加藤監訳、前掲書、pp. 428-429。ル・コルビュジェの地方主義への関心については、オルモ、カルロ: 雑誌: 変化の知覚, 所収: リュカン監修、加藤監訳、前掲書、pp. 430-438 も参照。とくに pp. 436-437.) また、後期ル・コルビュジェの作品について、たとえばロンシャンの礼拝堂やオープンハンドに憲法愛郷心 (constitutional patriotism) が見られるとする指摘もある (Soltau, Karol Edward: *Constitutional patriotism and militant moderation*, in *International Journal of Constitutional Law*, Volume 6, Issue 1, January 2008, pp. 96-116。ソルタンは次の文献を引きながらこれらの作品について触れている。Brooks, H. Allen, ed.: *Le Corbusier*, Princeton University Press, 1987.)

⁶ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 29。ヘンリチについては下記の部分も参照。Collins & Collins, 1986, *op. cit.*, pp. 91-99.

⁷ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 240。Collins & Collins, 1986, *op. cit.*, pp. 68, 93, 96.

好むというパルティ論における一見矛盾した思想の背景には、すでにその場所にあるものとの調和しその場所の性格を明らかにすることで、究極目標である「愛郷心」の創出に資する形態であれば肯定しようとする態度が貫いている、ということを描した。つまり、その場所の計画の性格を明確にするという観点によって、ジャンヌレはジッテ的な不整形な形態もブリンクマン的な「絶対王政の広場」の幾何学的形態もともに肯定していることを示した。ジャンヌレはある都市への愛という「愛郷心」の創出につながる「性格の明確さ」という観点により、上述の対照的な都市論の系譜を両方とも肯定していると言えるのである。このように、ある場所における計画の性格を明らかにしようとする態度は、匿名的でユニバーサルな計画を目指す近代主義の態度と相反するものである。とはいえ、これは排他的なナショナリズムに至る前の比較的穏健的な地域主義であった。

ただしその一方で、ジャンヌレは上述のジッテの系譜にあるヘンリチの理論を参照し、身体運動的な理論を援用していた。そしてこれは、閉じた場の中心としての身体と、運動により疲労が生じる身体という、身体にかんする2つの観点のうちの後者にあたり、筋肉の鍛錬といったル・コルビュジェも構想した近代的な身体の捉え方につながる視点であった。

つまり、都市論における前近代から近代への移行は、機能主義や合理主義に根差した幾何学的な形態への変化という見方だけでなく、計画の性格の匿名化や抽象化、そして空間を認識する身体より生理学的な理解という捉え方もできる。このようにジャンヌレの目を通してすることで、たんに形態がジッテ的な不整形にあてはまるか否かによって前近代の都市論の各潮流を分けるのではなく、その場所の計画の性格や身体運動といった複眼的な視点により、その後の近代主義への移行も含めて理解することができるだろう。

草稿における複数の対立軸とル・コルビュジェ時代への展開

本研究で示してきたジャンヌレの都市形態論とその思想には複数の対立軸が見られた。たとえば、都市形態論における幾何学と反幾何学、その評価を論じる際の根拠として展開される（身体と目の双方の）静止と運動、それらを認知する主体とその周辺（形式あるいは共同体）、「都市のシルエット」につながる建物群としての「キューブ」と囲む建物群の表面（surface）により規定される空間としての「ヴォリューム」、都市形態論の背景にあった地域主義とユニバーサルな匿名性、ピクチャレスクとモニュメンタル、そして文化的背景としての、またジャンヌレの故郷スイスをおよそ地理的中央に抱えて位置するフランスとドイツ、といったいくつもの軸である。本研究ではこういった複数の対立軸によってジャンヌレの思想が構造化された。

なお、後に『レスプリ・ヌーヴォー』誌での記事がレスプリ・ヌーヴォー叢書としてまとめられた『建築をめざして』においても「キューブ (cube)」、「ヴォリューム (volume)」、「表面 (surface)」、「リズム (rythme)」の言葉が見られる⁸。とくに「ヴォリューム」は内部においても外部においても空間を規定する重要な要素であり、「表面」は内部空間における重要な知覚の要素であることが指摘されている⁹。「建築とは光の下に集められたヴォリュームの、巧みで規則にかなった壮麗な遊動である。(L'architecture est le

⁸ ル・コルビュジェ：建築をめざして，吉阪隆正訳．鹿島出版会，1967. Le Corbusier: *Vers une architecture*, Nouv. éd. rev. et augm., G. Crès, 1924. ジャンヌレの記述と『建築をめざして』の類似を指摘する、シュノーールによる指摘も参照。Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 132.

⁹ 村田一也: Ch.-Ed. ジャンヌレにおける近代的思考の構築とその萌芽：「le volume」と「la surface」に関する考察，日本建築学会計画系論文集，第65巻，第536号，pp. 261-266, 2000.

jeu savant, correct et magnifique des volumes assemblés sous la lumière.)」という『建築をめざして』の一節は広く知られる¹⁰。本論文第五章で示した Fig. 5.4.2 では、行や列を超えてこれら「キューブ」、「ヴォリューム」、「表面」、「リズム」の言葉が散見される。このように、後のル・コルビュジェが用いる術語のルーツが、ル・コルビュジェの形成期である「都市の構築」の時点で見られることは興味深く、ル・コルビュジェの思想のより詳細な分析に寄与する発見であると言えるだろう。

草稿とラ・ショー＝ド＝フォンをめぐる経緯と「愛郷心」の観念

「都市の構築」の草稿は、本論文の序章においても触れたとおり、ラ・ショー＝ド＝フォン美術学校の教師であるレプラトニエが持ち込んだ仕事であり、レプラトニエと共著で発表予定だった。ジャンヌレは両親に宛てた 1910 年 6 月 29 日の手紙の中で「都市の構築」について次のように述べている。

この研究はラ・ショー＝ド＝フォンの現状に対する厳しい批評で締めくり、あらゆる人たちに伝えたいと思っています。小冊子として出版することになります。その重要性は僕の予想を超えるものになると思います。情熱をかけて取り組んだ問題ですし、真正面から問題に答えるものであることを願っています。レプラトニエ先生ユとの共著になります。単なる事例研究ではありません。¹¹

そして『ドイツにおける装飾芸術運動に関する研究』のためのドイツ旅行では、実質、「都市の構築」のための調査が行われていた。ジャンヌレは 1910 年 6 月、ジャンヌレはラ・ショー＝ド＝フォン美術学校から派遣員として任命され、政府の支援を受けドイツ中を回り、ドイツにおける装飾芸術運動に関する研究をまとめることとなった。「その研究のおかげで、ジャンヌレは都市の構築についての調査を非公式に継続できたようなのであ」ったのである¹²。ドイツ旅行の間中、「都市の構築」の仕事は「絶えずジャンヌレに付いて回った」¹³。また、ジャンヌレは上と同じ両親に宛てた手紙の中で、ベルリンでのドイツ都市計画博覧会にひじょうに感動したことを記している。

このように、草稿はレプラトニエを介しラ・ショー＝ド＝フォンが資金源となっていた可能性がある。シュノールが示しているとおり、草稿は、1910 年 9 月 24 日から 25 日にラ・ショー＝ド＝フォンで行われるスイスの自治体のカンファレンス、スイス都市連盟代表者会議 (L'Assemblée Générale des délégués de l'Union des villes suisses) に間に合わせるようレプラトニエとの間で取り決められていたようである¹⁴。結局、草稿は間に合わず、レプラトニエが自分で講演を行ったようであるが¹⁵、こうした自治体が資金源となっていた場合、草稿の趣旨として「愛郷心」に基づいた内容であることが理解できる。つまり、本研究

¹⁰ 邦訳は村田、前掲論文に則った。Le Corbusier, 1924, *op. cit.*, p. 16. ル・コルビュジェ, 吉阪訳, 前掲書, p. 37.

¹¹ ル・コルビュジェ: ル・コルビュジェ書簡撰集, ジャンジェ, ジャン編・序, 千代章一郎訳・註解, 中央公論美術出版, 2016, p.80. 原文は次のとおり。 “Cette étude se termine par une critique vigoureuse des moyens employés à La Chaux de Fonds et a pour but de les faire transformer du tout au tout. Cette étude sera publiée en une brochure, dont l'importance dépasse mes prévisions. Ce fut pour moi une passionnante question et j'espère beaucoup en [ces] ses résultats directs. Elle sera signée de L'Ep. et de moi et aura un intérêt pas exclusivement local.” (Le Corbusier, sélection, introduction et notes par Jenger, Jean : *choix de lettres*, Birkhäuser, 2002, p. 75.)

¹² エムリー, 2007, 前掲論文.

¹³ エスヒリン, 2007, 前掲論文.

¹⁴ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 40.

¹⁵ Schnoor, 2020, *op. cit.*, p. 40.

で指摘した、ジャンヌレは独語圏で議論されていた概念を取り入れて自身の中で組み合わせスイスに適用することを構想し、故郷ラ・ショー＝ド＝フォンの美化と「愛郷心」の創出を意図していた可能性がより強くなるのである。そしてジャンヌレはラ・ショー＝ド＝フォンへの痛烈な断罪に対する非難を避けるために、草稿の計画を内密に進める。「レプラトニエ先生と相談して、すべてがきちんと整うまではこの件について誰にも話さないことにしました。乱暴な暴力と同じことですから噂話にならず、そして反撃されないようにしなくてはなりません」¹⁶。こうした故郷に対する批判を明らかにすることに慎重な側面も、同様に、自治体が資金源である可能性とともに理解できるのである。

6-4 今後の展望

本論文で検討対象外とした関連資料の分析

本研究では草稿のうち、シュノールが資料やエスキースとして収録するような、ジャンヌレが本文として含まなかった部分は検討対象から除外した。これらはジャンヌレ自身の文章というよりもというよりも参照源からの引用等が多く見られるので、これらの分析はかならずしもジャンヌレ自身の思想の解明には直結しないと思われるが、「愛郷心」の観念の背景やジャンヌレのパーティ論への影響は考察する余地がある。

モダニズム草創期における建築と社会・自然思想の調査

こうした検討対象から除外した部分も含めて、ジャンヌレの自然観はさらに考察する余地がある。検討対象から除外した「木」の資料や「庭と公園」の資料や「田園都市」の資料、そして都市公園について論じられている「墓地」の資料の部分といったように、そのテーマ設定からはジャンヌレの都市における自然への関心の高さが窺える。本研究が指摘した「愛郷心」という観念や、郷土保護運動といったその影響源からは、その場所における自然保護の思想への広がりも感じられる。また、郷土保護運動と同時代に興隆し近代に対する中世を志向し産業社会の対極としての農民の生き方を讃えたドイツ青年運動や¹⁷、芸術教育運動も含まれた生活改革運動全体における自然に帰るといった共通理念、そしてこれらの運動とも関連する田園都市運動といったように、工業化を経たドイツにおける社会の動きからジャンヌレの自然観が影響を受けていた可能性もおおいにある。生活改革運動のひとつに挙げられる裸体運動やそれと関連するヘレラウのリトミックのように¹⁸、当時の自然観と身体は密接に関係しており、本研究で示されたジャンヌレの身体への関心は自然観とも関係してくるであろう。そして身体と自然についてはル・コルビュジェ時代にもおおいなる関心事であった¹⁹。ジャンヌレの身体への関心と自然観の醸成についてはル・コルビュジェ時代への広がりも含めて興味深い課題である。

¹⁶ ル・コルビュジェ, ジャンジェ編・序, 千代訳・註解, 前掲書, p. 80.

¹⁷ 赤坂, 前掲論文.

¹⁸ 副島, 前掲論文.

¹⁹ 身体についてはたとえば本研究第三章で触れた次の論文を参照。森山, 2005, 前掲論文. なお「ル・コルビュジェ」というペンネームについても、身体 (corps) との関連が示唆されている。具体的には、「コルビュ (Corbu)」については聖体を連想させるような「飲まれた身体」を意味する“corps bu”との音の類似、あるいは「コルビュジェ (Corbusier)」については「胸像の身体」を意味する“corps bustier”や「消耗した身体」の意の“corps usé”、そして「コルベズィエ (Corbézier)」については「性交した身体」を意味する“corps baisé”との類似である (加藤監訳, 前掲書, p. 396. Lucan

「愛郷心」の観念のさらなる相対化

本研究で指摘したとおり、ジャンヌレは「愛郷心」のことを「愛他主義」的であると考えていた。そして、ジャンヌレは都市形態と人間の心理的な感情を結び付けて考えていた。草稿からは共同体や社会的なコミュニティへの関心も窺われる²¹。ジャンヌレの社会主義的な側面については、たとえばシュノールらが部分的に指摘してきたが²²、草稿全体を束ねる「愛郷心」の観念は上述した自然観だけでなく、社会的な思想にも広がりを持っているという点で興味深く、さらなる考察により相対化を行う余地がある。またこれらは、建築や都市とのつながりとともに位置づけを行う現代的意義もあると考えられる²³。ジャンヌレが示した人間的な空間とそれによって誘起される親密な感情は、人間の協調行動や利他性、関係性といった観点の研究や著作が急激に増加している昨今²⁴、より示唆に富む内容として捉えられるのである。

ed., *op. cit.*, p. 317)。なおこの際、ル・コルビュジエにとっての身体 (*corps*) の重要性を指摘する M. ペレルマンの著作 (Perelman, Marc: *Urbs ex machina*, Paris, Éd. de la Passion, 1986.) も引き合いに出されている (加藤監訳, 前掲書, p. 397. 注 16. Lucan ed., *op. cit.*, p. 317, note 16)。

²¹ たとえば草稿のうち「都市!《命題》の一部または初期バージョン」の部分や「命題」の部分など。

²² Schnoor, 2020, *op. cit.*, pp. 60-61. モースはル・コルビュジエの叔母ポーリーヌ・ジャンヌレ (Pauline Jeanneret) からル・コルビュジエへの社会主義的な影響を示唆している (フォン・モース, 住野訳, 前掲書, p. 222)。

²³ ジャンヌレの共同体や社会への関心についてさらに言えば、ジャンヌレが糾弾する美的な素養を持たない無責任な行政とそのお役所仕事は、現代のブルシット・ジョブへの批判に通じるものがある。社会学的な側面から見ても、草稿におけるジャンヌレの主張は現代の都市政策を決定する行政機関にとって示唆的であると言えるだろう。

²⁴ 広井, 前掲書, p. 166. 広井はこうした研究テーマの潮流が、地球資源の有限性という物質面においても人間の主観的な「幸福」という精神面においても飽和点に達しつつある現代の状況に呼応するかのようであると捉えている。また、パンデミックが人とのつながりを急激に減らしたことで、現代は利他への関心が高まっている。これについてはたとえば下記文献など。Grimalda, G., Buchan, N.R., Ozturk, O.D. *et al.*: Exposure to COVID-19 is associated with increased altruism, particularly at the local level, *Sci Rep* 11, 18950 (2021), DOI: <https://doi.org/10.1038/s41598-021-97234-2>

あとがき

本研究で見えてきたとおり、ジャンヌレの論じるパーティはおおむね、文字通りの「都市『構成』要素」、つまり都市全体の中の一部についての型という、比較的小さなスケールであった。これは「300万人のための現代都市」をはじめとする、ル・コルビュジエによる壮大なユートピア的マスタープランの規模とは大きく異なる。そして草稿の究極目標である「愛郷心」も、「気持ちの良い都市で生きることの喜び」[CV-251]という言葉に表れているように、住民ひとりひとりが日々の生活の中で実感を伴って抱くものであり、大規模な都市計画によって意図するような大それたものではなかった。本論文の序章で確認したとおり、草稿が執筆された頃は仏語“urbanisme”や独語“Städtebau”といった言葉が定式化されていく時期であった。「都市の構築」という表題は「都市計画」のようなニュアンスを含みながらも、ジャンヌレは「わたしたちの小さなスイスの村 (nos petites bourgades suisses)」[CV-326]であるラ・ショー＝ド＝フォンに適用できるスケールの解決策として、「都市計画」的なマスタープランよりも小さな規模の、「人間的尺度 (l'échelle humaine)」[CV-382]に則ったような、人間的な数々の「パーティ」を示した。このように、「パーティ」という「都市『構成』要素」の型はおおむねラ・ショー＝ド＝フォンに即した規模であり、本論文第五章や結章の6-3 考察で見たとおり、草稿の都市形態論がラ・ショー＝ド＝フォンを想定したものであることと対応している。

その一方で、ラ・ショー＝ド＝フォンの直線と直角で構成されたグリッド都市は、ともするとジャンヌレの都市形態論に潜在的に影響している可能性があるようにも思われる。ジャンヌレの都市形態論には、莫大な規模の直線街路の荘厳な性格への賛美や直角の無条件の賞賛といった、本研究で指摘した「性格の明確さ」という観点からは説明できない、ル・コルビュジエの萌芽的思想が見られた²⁵。こういった逸脱した思想の一因には、ジャンヌレが無意識的に故郷の造形に惹かれた可能性もあるのかもしれない。

ところで、序章で見たとおり、草稿を記したときのジャンヌレは都市論を論じる明確なスタンスを持っているわけではなかった。この頃に記された「都市の構築」の内容を明らかにすることは、都市像が模索されていた前近代、都市論隆盛期の議論をジャンヌレ越しに捉えることでもある。本研究では、ジャンヌレが独語圏で議論されていた概念を取り入れて自身の中で組み合わせスイスに適用することを構想して故郷ラ・ショー＝ド＝フォンの美化と「愛郷心」の創出を意図していた可能性を示唆した。そしてそれはただちに過激なナショナリズムに結びつくものではなかった。このように、ジャンヌレが他者から取り入れた理論を自身のものとして消化し組み合わせ適用する過程は、現代のわたしたちと都市の関係にも同様に当てはめることができると考えられる。ジャンヌレが草稿で主張するある場所固有のものを尊重する態度やある都市への愛は、都市機能の地方分散が叫ばれる昨今においても有効な観念と言えるからである。文字通り持続可能な都市とは、「この美しい場所を守るためには自分の利益のみ考えるのはやめよう」とか「多少の不便は我慢しよう」といった前向きな脱成長、犠牲を払ってでもその機能を維持していきたいと願う、とはいえ決して後ろ向きではない、無償の愛にも似たような感情を持った都市住民によって保持されてい

²⁵ なお、ラバサは直線の道と曲線の道の両方を論じるジャンヌレについて、そうした考えがジュラの山々での経験に結び付けられるピクチャレスクと「崇高」の弁証法に由来することを推察している。Rabaça, *op. cit.*, pp. 196-197.

くものである。これまでのように都市に一極集中して成長と拡大を求め続ける資本主義が持続不可能であることは、これまでの気候変動や生態系の変化から明らかである。持続可能な社会、定常型社会の実現には人間の地方分散が選択肢のひとつであって、ジャンヌレが主張するその場所固有のものの尊重はそういったあたらしい社会のかたちにかわめて親和性が高い。1世紀以上前に急速に拡大する工業化の中で論じられていた、ある場所に根差した人間的空間という提案は、モダニズム以降に推し進められた抽象的で普遍的な都市コンセプトの絶えざる適用を経て再度、ジャンヌレの言葉を借りれば、「古い戯言ではなく、現実に根差した真の愛郷心」を創出するために、現代のわたしたちが取り組む価値のあるものであるというひとつの視座を本研究は与えた。

付録

参考文献リスト

本研究に関する参考文献のうち主要なもののみを示す。

本研究が分析対象とする「都市の構築」の草稿を収録した著作

Schnoor, Christopher: *La Construction des villes. Le Corbusier's earliest Städtebauliches Traktat von 1910/11*, Zurich, gta Verlag, 2008.

「都市の構築」関連

Brooks, H. Allen: Jeanneret and Sitte. Le Corbusier's Earliest Ideas on Urban Design, in Searng, Helen ed.: *In Search of Modern Architecture: A tribute to Henri-Russel Hitchcock*, MIT Press, pp. 278-297, 1982.

Brooks, H. Allen: *Le Corbusier's Formative Years: Charles-Edouard Jeanneret at La Chaux-de-Fonds*, University of Chicago Press, 1997.

Émery, Marc-Albert: Urbanism : Premières réflexions : le manuscrit inédit de «La Construction des villes», in Lucan, Jacques ed.: *Le Corbusier, une encyclopédie*, Editions du Centre Pompidou, 1987.

Émery, Marc-Albert ed.: *La construction des villes: genèse et devenir d'un ouvrage écrit de 1910 à 1915 et laissé inachevé par Charles Edouard Jeanneret-Gris dit Le Corbusier*, l'Age d'homme, Lausanne, 1992.

Rabaça, Armando: Ordering Code and Mediating Machine: Le Corbusier and the Roots of the Architectural Promenade, University of Coimbra, Ph. D. thesis, 2014. 7.

Schnoor, Christoph: Le *Raum* dans *La construction des villes* de Le Corbusier. Une traduction aux multiples strates linguistiques et culturelles, in Carvais, Robert *et al.*, ed.: *Traduire l'architecture*, Paris, Picard, pp. 133-144, 2015.

Schnoor, Christopher: *Le Corbusier's Practical Aesthetic of the City The treatise 'La Construction des villes' of 1910/11*, Abingdon, Oxon; New York, Routledge, 2020.

Schubert, Leo: Jeanneret, the city, and photography, in: Moos, Stanislaus von, et al., ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier : applied arts, architecture, painting, photography, 1907-1922*, New Haven: Yale University Press, pp. 55-67, 2002.

エムリー, マルク＝アルベール: 初期の考察: 『都市の構築』の未発表の草稿, 所収: リュカン, ジャック監修: ル・コルビュジエ事典, 加藤邦男監訳, 中央公論美術出版, pp.544-549, 2007.

玉置啓二: ル・コルビュジエの『都市の建設』とラ・シヨール＝ドゥ＝フォン＝の都市構造, 都市計画論文集, 第38巻, 第3号, pp. 901-906, 2003. 10.

ポリー, ダニエル: 国立図書館: パリ, 所収: リュカン, ジャック監修: ル・コルビュジエ事典, 加藤邦男監訳, 中央公論美術出版, pp.76-80, 2007.

「都市の構築」でのジャンヌレの参照源

- Brinckmann, Albert Erich: *Platz und Monument. Untersuchungen zur Geschichte und Ästhetik der Stadtbaukunst in neuerer Zeit*, Berlin: Wasmuth, 1908, reprint with an afterword by Meyer, Jochen, Berlin: Gebr. Mann, 2000.
- Henrici, Karl: *Beiträge zur praktischen Ästhetik im Städtebau, Eine Sammlung von Vorträgen und Aufsätzen*, Munich: Callwey, 1904.
- Shultze-Naumburg, Paul: *Kulturarbeiten*, Band IV: *Städtebau*, Munich: Callwey, 1906.
- Sitte, Camillo: *Der Städtebau nach seinen Künstlerischen Grundsätzen*, Wien, 1889. [Reprint der 4. Auflage von 1909] [First edition, Wien, 1889]
- Sitte, Camillo. Martin, Camille, tr.: *L'art de bâtir les villes*, Paris, 1918 [First edition, Paris, 1902]
- Unwin, Raymond: *Town Planning in Practice*, T. F. Unwin in London, 1909.

パルティ関連

- Çalışkan, Olgu: Pattern Formation in Planned Urban Peripheries: A Typo-Morphological Approach for Design, pp.40-63, in Brand, N., Van den Burg, L., Çalışkan, O., Tan, E. R., Wang, C. Y., and Zhou, J.: *Urbanism: Phd Research 2008-2012*, Ios Press, 2009.
- 片木薫ほか3名: アメリカン・ボザール理論書における平面構成態体系: アメリカン・ボザール研究 2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 計画系, 第59巻, pp.2811-2812, 1984. 7.
- 三宅理一編: エコール・デ・ボザールーその歴史と思想, 所収: SD 編集部編: ボザール: その栄光と歴史, 鹿島出版会, pp.49-105, 1982.
- 吉田綱市: “parti”の意味について: クロケ, ガデ, グロモールの使用例による一考察, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1989.

ジャンヌレおよびル・コルビュジエ関連

- Kries M., ed.: *Le Corbusier, A Study of the Decorative Art Movement in Germany*, Vitra Design Museum, Weil am Rhein, 2008.
- Le Corbusier: *Vers une architecture*, Nouv. éd. rev. et augm., G. Crès, 1924.
- Le Corbusier. Giuliano Gresleri ed.: *Les Voyages d'Allemagne. Carnet*, Paris/Milan: Fondation Le Corbusier/Electa, 1994 [English edition 2002].
- Le Corbusier. Giuliano Gresleri ed.: *Voyages d'Orient. Carnets*, Paris/Milan: Fondation Le Corbusier/Electa, 1987 [English edition 2002]
- Le Corbusier, sélection, introduction et notes par Jenger, Jean : *choix de lettres*, Birkhäuser, 2002.
- Lucan, Jacques ed.: *Le Corbusier, une encyclopédie*, Editions du Centre Pompidou, 1987.
- Passanti, Francesco: Architecture: Proportion, Classicism, and Other Issues, in Moos, Stanislaus von and Rüegg, Arthur ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier*, Yale University Press, pp. 69-98, 2002.

- Passanti, Francesco: The Vernacular, Modernism, and Le Corbusier, in *Journal of the Society of Architectural Historians*, Vol. 56, No. 4, 1997, pp. 438-451.
- Perelman, Marc: *Urbs ex machina*, Paris, Éd. de la Passion, 1986
- Petit, Jean: *Le Corbusier lui-même*, Genève: Edition Rousseau, 1970.
- Von Moos, Stanislaus: *Le Corbusier, elements of a synthesis*, MIT Press, 1979.
- Von Moos, Stanislaus et al., ed.: *Le Corbusier before Le Corbusier: applied arts, architecture, painting, photography, 1907-1922*, Yale University Press, 2002.
- エヴァンソン, ノーマ: ル・コルビュジエの構想: 都市デザインと機械の表徴, 酒井孝博訳, 井上書院, 1984.
- エヒスリン, ヴェルナー: ドイツ: 影響、交流、そして絶交, 所収: 所収: リュカン, ジャック監修: ル・コルビュジエ事典, 加藤邦男監訳, 中央公論美術出版, pp. 22-30, 2007.
- 千代章一郎, 田所辰之助, 杉山真魚: シャルル=エドゥアール・ジャンヌレ (ル・コルビュジエ) のドイツ装飾芸術運動研究における「装飾」の概念構成, 「工業」「芸術」「類縁性」, 日本建築学会計画系論文集, 第 86 巻, 第 779 号, 2021, pp. 297-307.
- フォン・モース, スタニスラウス: ル・コルビュジエの生涯: 建築とその神話, 住野天平訳, 彰国社, 1981
- プティ, ジャン: ル・コルビュジエ: みずから語る生涯, 田路貴浩, 松本裕訳, 中央公論美術出版, 2021
- 村田一也: Ch.-Ed.ジャンヌレにおける近代的思考の構築とその萌芽: 「le volume」と「la surface」に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 第 65 巻, 第 536 号, pp. 261-266, 2000.
- 森山学: 「レスプリ・ヌーヴォー」期におけるピエール・ウィンターの身体文化理論: ル・コルビュジエとその協働者ピエール・ウィンターの身体文化理論に関する研究 その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 69 巻 585 号, pp. 213-218, 2004.
- 森山学: ル・コルビュジエの 1920 年代の住宅作品における身体文化: ル・コルビュジエとその協働者ピエール・ウィンターの身体文化理論に関する研究 その 2, 日本建築学会計画系論文集, 第 70 巻, 第 593 号, pp. 225-229, 2005.
- リュカン, ジャック監修: ル・コルビュジエ事典, 加藤邦男監訳, 中央公論美術出版, 2007.
- ル・コルビュジエ: 輝ける都市, 白石哲雄監訳, 河出書房新社, 2016.
- ル・コルビュジエ: 今日の装飾芸術, 前川国男訳, 鹿島出版会, 1966.
- ル・コルビュジエ: ル・コルビュジエ書簡撰集, ジャンジェ, ジャン編・序, 千代章一郎訳・註解, 中央公論美術出版, 2016.
- ル・コルビュジエ: 建築をめざして, 吉阪隆正訳. 鹿島出版会, 1967.
- ル・コルビュジエ: ユルバニスム, 樋口清訳, 鹿島出版会, 1967.
- ル・コルビュジエ: プレシジョン, 井田安弘, 芝優子共訳, 鹿島出版会, 1984.

近代建築史関連

- Rowe, Colin: Character and Composition, in Rowe, Colin: *The mathematics of the ideal villa, and other essays*, Cambridge, Mass.: MIT Press, 1976.

- 豊島亮, 羽深久夫: スイス連邦ヌーシャテル州ラ・ショー＝ド＝フォンにおける 20 世紀初頭のアール・ヌーヴォーの作品―「ART NOUVEAU 2005～2006」における写真資料を中心に―, 札幌市立大学研究論文集, 札幌市立大学, pp. 31-42, 2015.
- 中江研, 山本一貴: W.グロピウスと P.シュルツェ＝ナウムグルクとの屋根論争について, 日本建築学会大会学術講演梗概集. F-2, pp.621-622, 2008.
- バンハム, レイナー: 第一機械時代の理論とデザイン, 石原達二, 増成隆士訳, 鹿島出版会, 1976.
- ファン・デ・フェン, コルネリス: 建築の空間, 佐々木宏訳, 丸善, 1981.
- フォーティエ, エイドリアン: 言葉と建築 語彙体系としてのモダニズム, 坂牛卓, 邊見浩久監訳: 鹿島出版会, 2006.
- フランプトン, ケネス: 現代建築史, 中村敏男訳, 青土社, 2003.
- マシュイカ, ジョン・V.: ビフォーザ バウハウス, 田所辰之助, 池田祐子訳, 三元社, 2015.
- マルグレーヴ, ハリー・フランシス: 近代建築理論全史 1673-1968, 加藤耕一監訳, 丸善, 2016.

都市史関連

- Ben-Joseph, Eran et al.: Hexagonal Planning in Theory and Practice, *Journal of Urban Design*, Vol. 5, No. 3, pp.237-265, 2000.
- Choay, Françoise, tr. by Hugo, Marguerite and Collins, George R.: *The modern city: planning in the 19th century*, G. Braziller, 1969.
- Collins, R. George & Collins, C. Christiane: *Camillo Sitte and the Birth of Modern City Planning*, London, Phaidon Press, 1965.
- Collins, R. George & Collins, C. Christiane: *Camillo Sitte: the Birth of Modern City Planning*, New York, Rizzoli, 1986.
- Sutcliffe, Anthony: *Towards the Planned City: Germany, Britain, the United States and France 1780-1914*, St Martin's Press, 1981
- 芦原義信: 街並みの美学, 岩波書店, 2001.
- 阿部大輔: イルデフォンソ・セルダの著書「都市計画の一般理論」に至る計画概念についての試論, 日本都市計画学会, 都市計画論文集, No. 45-3, 2010.
- アルガン, ジュウリオ・C.: ルネサンス都市, 堀池秀人, 中村研一訳, 井上書院, 1983.
- ジェイコブズ, ジェイン: アメリカ大都市の生と死, 山形浩生訳, 鹿島出版会, 2010.
- ジッテ, カミロ: 広場の造形, 大石敏雄訳, 鹿島出版会, 1972.
- ショエ, フランソワーズ: 近代都市: 19 世紀のプランニング, 彦坂裕訳, 井上書院, 1983.
- 橋詰直道: イングランドにおけるガーデン・ヴィレッジとガーデン・サバーブ, 駒沢地理, No.36, pp.55-78, 2000. 3.
- 長谷川洋, 玉置伸吾: 都市美運動の起源と意義 アメリカ都市美運動に関する研究(1), 福井大学工学部研究報告, 第 39 巻, 第 2 号, pp. 171-187, 1991. 9.

哲学関連

Thonhauser, Gerhard: Beyond Mood and Atmosphere: a Conceptual History of the Term *Stimmung*, in *Philosophia*, 49, pp. 1247-1265, 2021. DOI: <https://doi.org/10.1007/s11406-020-00290-7>

池部寧: 気分について—ハイデガーを手がかりにして—, 奈医看短紀要, Vol. 6., 2002, pp. 22-33.

ヴォリンゲル: 抽象と感情移入—東洋芸術と西洋芸術, 草薙正夫訳, 岩波書店, 1953.

小川侃: 雰囲気と集合心性, 京都大学学術出版会, 2001.

ベーメ, ゲルノート: 雰囲気美学: 新しい現象学の挑戦, 梶谷真司, 斉藤渉, 野村文宏編訳, 晃洋書房, 2006.

ボルノウ, オットー・フリードリッヒ: 人間と空間, 大塚恵一, 池川健司, 中村浩平訳, せりか書房, 1978.

ボルノウ, オットー・フリードリッヒ: 気分の本質, 藤縄千艸訳, 筑摩叢書, 1973.

レーマン, アルブレヒト: 雰囲気を語る, 金城ハウプトマン朱美訳, 所収: 日常と文化, 日常と文化研究会, pp. 73-99, 2019.

前近代の社会運動関連

赤坂信: ドイツ郷土保護連盟の設立から1920年代までの郷土保護運動の変遷, 造園雑誌 55(3), pp.232-247, 1992.

岡本定男: ワイマール期芸術教育とその方法—改革教育学における位置づけへの試み—, 東京大学教育学部紀要第21巻, pp. 143-154, 1981.

桂修治: 創始期の郷土保護論: エルンスト・ルードルフにおける「郷土保護」の立場言語, 文化研究, 第20巻, pp.55-74, 2012.

鈴木幹雄: ドイツにおける芸術教育学成立過程の研究: 芸術教育運動から初期 G・オットーの芸術教育学へ, 風間書房, 2001.

副島美由紀: モダニズムが夢見たユトピア: ドイツ田園都市建設の歴史(1)世紀転換期の生活改革運動, 小樽商科大学人文研究, 96, 小樽商科大学, pp. 189-214, 1998.

畠山武道, 土屋俊幸, 八巻一成編著: イギリス国立公園の現状と未来: 進化する自然公園制度の確立に向けて, 北海道大学出版会, 2012.

安松みゆき: ナチス支配下における強制収容所の建築史的一試論: アウシュヴィッツ強制収容所を例に, 別府大学大学院紀要, 第7号, pp. 35-55, 2005.

森田安一編: スイスの歴史と文化, 刀水書房, 1999.

生理学関連

門林岳史: 美はどこへいったのか?—神経美学の批判的系譜学, 美学芸術学論集, 8, pp. 52-61, 2012.

クレーリー, ジョナサン: 観察者の系譜: 視覚空間の変容とモダニティ, 遠藤知巳訳, 十月社, 1997.

シンガー, アンダーウッド: 医学の歴史, メディカルサイエンスの時代, 2, 細菌学・生理学など, 酒井シヅ, 深瀬泰旦訳, 朝倉書店, 1986.

その他

sous la direction de Guilbert, Louis, Lagane, René, et Niobey, Georges: *Grand Larousse de la langue française*, Larousse, 1971.

La Chaux-de-Fonds: *Plan de La Chaux-de-Fonds / plan dressé par la Direction des Travaux publics.*, Winterthur : Kartographia S.A., 1908.

宇沢弘文: 近代経済学の転換, 岩波書店, 1994.

竹崎一真: 戦後日本における男性身体観の形成と揺らぎ: 男性美 (ボディビル) 文化の形成過程に着目して, 体育学研究 64(2), 一般社団法人 日本体育学会, pp. 687-704, 2019.

広井良典: 人口減少社会のデザイン, 東洋経済新報社, 2019.

既発表論文リスト

本論文に関する論文

(学術論文) (査読付き)

1. 早川 小百合, 田路 貴浩: シャルル=エドゥアール・ジャンヌレの「都市の構築」における都市形態論 (その1): 街区のパーティ, 日本建築学会計画系論文集, 第86巻, 第781号, pp. 1123-1133, 2021, 3.
DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.86.1123>
2. Hayakawa Sayuri, Taji Takahiro: Charles-Édouard Jeanneret's Local Patriotism in La Construction des villes and Erneuerungsbewegung in Germany, in *Les Cahiers de la recherche architecturale, urbaine et paysagère*, 11, Penser l'architecture par la ressource, 2021. 5.
DOI: <https://doi.org/10.4000/craup.6988>
3. 早川 小百合, 田路 貴浩: シャルル=エドゥアール・ジャンヌレの「都市の構築」における都市形態論 (その2): 道のパーティ, 日本建築学会計画系論文集, 第86巻, 第790号, pp. 2779-2790, 2021, 12.
DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.86.2779>

その他の論文

(学術論文) (査読付き)

1. 遠山 光輝, 早川 小百合, 南部 恭広, 杉野 未奈, 渡辺 千明, 林 康裕: 重要伝統的建造物群保存地区・美馬市脇町南町の木造住宅構造調査, 日本建築学会技術報告集, 第24巻, 第56号, pp. 153-158, 2018.

(学会発表)

1. 早川 小百合, 杉野 未奈, 林 康裕: 五重塔は地震で何故倒れなかったのか?, 日本建築学会近畿支部研究報告集. 構造系, pp. 337-340, 2015.
2. 早川 小百合, 杉野 未奈, 林 康裕: 何故五重塔は地震で倒れなかったのか?, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 215-216, 2015.
3. 早川 小百合, 田路 貴浩: ジャンヌレの“La Construction des Villes”における自然の思想 テキスト「墓地」を通して, 日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系, pp. 721-724, 2016.
4. 早川 小百合, 田路 貴浩: ジャンヌレの“La Construction des Villes”のテキスト「墓地」における自然の思想, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 269-270, 2016. (注1)
5. 遠山 光輝, 早川 小百合, 南部 恭広, 杉野 未奈, 渡辺 千明, 林 康裕: 重要伝統的建造物群保存地区・美馬市脇町南町の木造住宅構造調査, 日本建築学会近畿支部研究報告集. 構造系, pp. 353-356, 2017.
6. 林 康裕, 遠山 光輝, 早川 小百合, 南部 恭広, 杉野 未奈, 渡辺 千明: 徳島県の伝統木造住宅構造調査 その1 美馬市脇町南町における住宅の構造的特徴, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 441-442, 2017.

7. 遠山 光輝, 早川 小百合, 南部 恭広, 杉野 未奈, 渡辺 千明, 林 康裕: 徳島県の伝統木造住宅構造調査 その2 美馬市脇町南町における住宅の耐震性, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 443-444, 2017.
8. 早川 小百合, 遠山 光輝, 南部 恭広, 杉野 未奈, 林 康裕: 徳島県の伝統木造住宅構造調査 その3 美馬郡つるぎ町における住宅の耐震性, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 445-446, 2017.
9. 南部 恭広, 遠山 光輝, 早川 小百合, 杉野 未奈, 渡辺 千明, 林 康裕: 徳島県の伝統木造住宅構造調査 その4 他地域との比較, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 447-448, 2017.
10. 早川 小百合, 橋詰 隼弥, 杉野 未奈, 林 康裕: 兵庫県神戸市北区における茅葺民家の構造調査 その1 調査概要と内田家の分析, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 161-162, 2018.
11. 橋詰 隼弥, 早川 小百合, 杉野 未奈, 林 康裕: 兵庫県神戸市北区における茅葺民家の構造調査 その2 茅葺民家の構造特性と居住状況, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 163-164, 2018.
12. 角間直樹, 早川小百合, 田路貴浩: シヤルル＝エドゥアール・ジャンヌレの『ドイツ装飾芸術運動に関する研究』について, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系, pp. 569-572, 2020.
13. 角間直樹, 早川小百合, 田路貴浩: シヤルル＝エドゥアール・ジャンヌレ『ドイツ装飾芸術運動に関する研究』について その3, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系, pp. 497-500, 2021.

注釈（賞罰）

※注 1) 2016 年度日本建築学会大会学術講演会 建築歴史・意匠部門 若手優秀発表賞

付表

ここでは本論文の第二章から第四章において取り出した、草稿内のパルティの記述箇所を一覧にして示す。

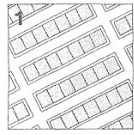
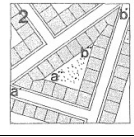
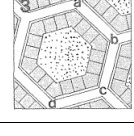

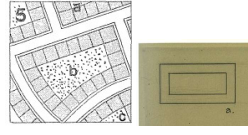

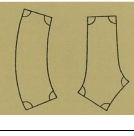

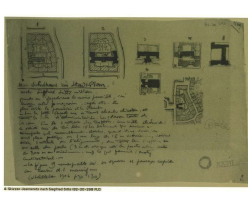
図版出典は以下の略号とともに掲載頁を示す (Appendix Table 1)。なお Schnoor, 2008, *op. cit.* から引用する図版については、本論文本文における図版キャプションの表記と同様、同書における掲載頁を略記号 CV とともに示した後、括弧内に元出典を記す。

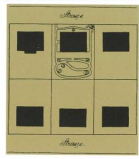
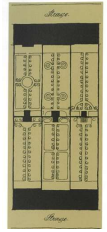







Appendix table 2, Appendix table 3, および Appendix table 4 にそれぞれ街区、道、および広場のパルティの事例一覧を示す。同表には「パルティ」という語を含む文あるいは型を説明する記述の引用とその和訳ならびに図版を示す。ただし引用文中の中略 (...) は筆者による。また、引用した記述に該当するパルティ、記述頁、および図版の出典を併記した。また、道のパルティの一部の事例の図については別途 Appendix Fig. 1 に示した。

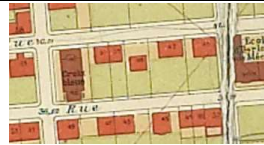
Appendix Table 1 Correspondence table of sources

Source 文献	Sigle 略号
La Chaux-de-Fonds: <i>Plan de La Chaux-de-Fonds / plan dressé par la Direction des Travaux publics.</i> , Winterthur : Kartographia S.A., 1908.	PCF
Émery, Marc-Albert ed.: <i>La construction des ville: genèse et devenir d'un ouvrage écrit de 1910 à 1915 et laissé inachevé par Charles Edouard Jeanneret-Gris dit Le Corbusier</i> , l'Age d'homme, Lausanne, 1992	ÉCV
Schnoor, Cristopher: <i>La Construction des villes. Le Corbusiers ertes städtebauliches Traktat von 1910/11</i> , Zurich, gta Verlag, 2008.	CV
Shultze-Naumburg, Paul: <i>Kulturarbeiten</i> , Band IV: Städtebau, Munich: Callwey, 1906.	KS
<i>Der Städtebau</i> , 5, 1908.	ST5
<i>Der Städtebau</i> , 6, 1909.	ST6
Henrici, Karl: <i>Beiträge zur praktischen Ästhetik im Städtebau. Eine Sammlung von Vorträgen und Aufsätzen</i> , Munich: Callwey, 1904.	BÄ
Sitte, Camillo: <i>Der Städtebau nach seinen Künstlerischen Grundsätzen</i> , Wien, 1909 [Reprint der 4. Auflage von 1909] [First edition, Wien, 1889].	SK
Sitte, Camillo. Martin, Camille, tr.: <i>L'art de bâtir les villes</i> , Paris, 1918 [First edition, Paris, 1902].	AB
Brinckmann, Albert Erich: <i>Platz und Monument. Untersuchungen zur Geschichte und Ästhetik der Stadtbaukunst in neuerer Zeit</i> , Berlin: Wasmuth, 1908, reprint with an afterword by Meyer, Jochen, Berlin: Gebr. Mann, 2000.	PM


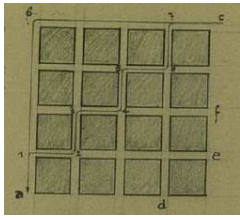
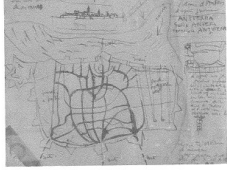
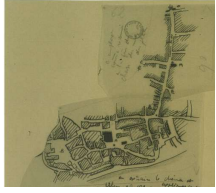

Appendix table 2 Cases of city blocks

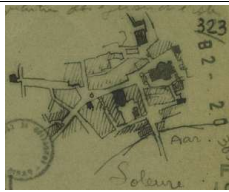


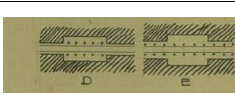

N° 番号	Citation 引用	Fig. 図	Parti correspondant 該当パルティ	Page 頁	Source 図版出典
1	La forme reproduite par la fig. , c'est-à-dire celle d'un massif rectangulaire de l'épaisseur d'une maison 図 が表す形態、つまり家 1 軒分の厚さ を持つ長方形の塊		II①Rectangle with a single row of buildings	CV-27 1	ÉCV-202
2	Le parti d'un massif triangulaire 三角形のmassというパルティ		I①Triangle	CV-27 1	ÉCV-202
3	hexagones 六角形		I④Hexagon	CV-27 1-272	ÉCV-202
4	retrancher le massif des maisons derrière une cour ou un jardin, éloignant ainsi une des façades de la rue. 中庭や庭の後ろにある家のmassを削除 し、道からファサードを遠ざける		II②Rectangle with a single row of buildings with front yard	CV-27 2	ÉCV-202
5	la forme du rectangle allongé, de bonne proportion, ménageant à l'intérieur de ses parois une vaste cour qu'on transformera en jardins ombrés 壁の内側に陰になった庭へと変わる広い 中庭を作っている良い比率の細長い長 方形の形		I② Rectangle	CV-27 2-274	ÉCV-202 CV-273 (B2-20-2 99FLC)
6	deux dérivés qui, tout en conservant les avantages reconnus à la forme a, se prêtent en plus au dessin des rues que nous apprendrons à reconnaître les plus utiles et les plus belles 形態 a で認められる利点を保ちながら、 さらに最も有用で最も美しい道のデザ ンに適した、2つの派生形	 	I③Derivative of Rectangle	CV-27 3-274	ÉCV-202 CV-273 (BÁ. 70, Abb. 10-12)
7	l'extension de la ville de Berne ベルンの都市拡張		I③Derivative of Rectangle	CV-27 4-275	CV-274 (B2-20-3 10 FLC)
8	L'architecte Viennois, M: Siegfried Sitte a proposé dans le journal «Städtebau» toute une série d'emplacements pour bâtiments d'école, où il tire parti du chésal en rectangle allongé ウィーンの建築家 M.ジークフリート・ジ ツテは雑誌《Städtebau》に一連の学校建 築用地を提案し、細長い長方形の街区と いうパルティをうまく使っている		I② Rectangle I③Derivative of Rectangle	CV-27 5	CV-276 (B2-20-2 98 FLC)

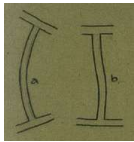
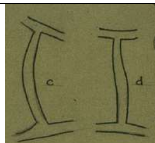

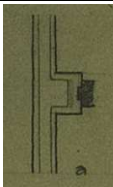
9	six parcelles chacun d'une surface équivalente. (...) placer les maisons isolées au milieu de chaque parcelle それぞれが同等の表面積を持つ6つの小区画。(…中略…)それぞれの小区画の真ん中に家を独立して配置する		III①Rectangle with multiple buildings	CV-27 6	CV-278 (KS-316, Abb. 201)
10	Les maisons sont mitoyennes, par conséquent plus économiques; à surface égale elles s'étendent davantage en longueur que le type précédent, permettant un groupement de pièces tout aussi - favorable. 家々は共有なので経済的である；同じ面積であれば従来のタイプより長さが長くなり、部屋の集まりも同様に好ましくなる。		II③With yard between the houses	CV-27 6-277	CV-278 (KS-317, Abb. 200)
11	Si l'édifice est de grande importance, au milieu géométrique d'un chésal: tel que fut le cas dans tous les grands collèges, Ouest, (...). その建物が街区の幾何学的中心においてとても重要なら：あらゆる大きなコレージュのような場合であつただろう。コレージュ・ド・ルエストのような(…)		III②Rectangle with a building in the center	CV-50 8-510	PCF
12	Charrière, (...). (引用者注：直上の事例とともに列記) コレージュ・ド・ラ・シャリエール(…)		III②Rectangle with a building in the center	CV-50 8-510	PCF
13	Primaire(...). (引用者注：直上の事例とともに列記) (引用者注：コレージュ) プリメール(…)		III②Rectangle with a building in the center	CV-50 8-510	PCF
14	Gymnase(...). (引用者注：直上の事例とともに列記) ギムナジウム(…)		III②Rectangle with a building in the center	CV-50 8-510	PCF
15	la Synagoge[sic], le Contrôle. (引用者注：直上の事例とともに列記) シナゴグや監査事務所。		III②Rectangle with a building in the center	CV-50 8-510	PCF
16	L'édifice pourra occuper l'extrémité du chésal, tel l'école d'Horlogerie mécanique 時計学校のように建物が街区の端を占めることもあるだろう		III③Rectangle with a building on the end	CV-51 0	PCF
17	L'édifice pourra occuper l'extrémité du chésal (...) C'est ainsi que sont placées toutes les églises actuelles, Indépendante(...). 建物が街区の端を占めることもあるだろう(…)現在の教会はすべてこういった配置である。アンデバンダン教会堂のように(…)		III③Rectangle with a building on the end	CV-51 0	PCF

18	Catholique (...). (引用者注：直上の事例とともに列記) カトリック教会堂 (...).	—	III③Rectangle with a building on the end	CV-51 0	—
19	Croix-bleue, (...). (引用者注：直上の事例とともに列記) 青十字 (...).		III③Rectangle with a building on the end	CV-51 0	PCF
20	de l'Ouest. (引用者注：直上の事例とともに列記) ルウエスト教会堂。	—	III③Rectangle with a building on the end	CV-51 0	—

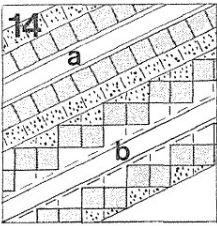


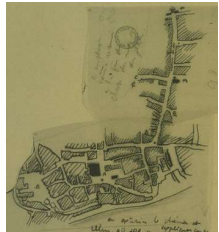

Appendix table 3 Cases of streets

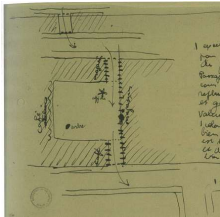
N° 番号	Citation 引用	Fig. 図	Parti correspondant 該当パルティ	Page 頁	Source 図版出典
1	<p>Ces jardins pourront parfois faire partie du domaine public, deux passages percés dans les parois du rectangle, permettant de les [sic] à la jouissance de tous. Ils recouperont ainsi d'oasis [sic] de fraîcheur — tout en facilitant la circulation — les trajets au travers des rues arides</p> <p>時にはこの庭は、公共領域の部分、すなわち長方形の壁を貫く2本の通路を作り、誰もがそれを楽しめるようにすることもあろう。このように、爽やかさというオアシスによって、一交通を容易にしながら—無味乾燥な道を貫く道のりに何度も切れ目を入れるだろう</p>		I② Passageway	CV-275	ÉCV-202
2	<p>Pour le commerce, des artères spacieuses</p> <p>商業のための広い幹線道路</p>	—	I①Straight	CV-291	—
3	<p>le schema du morcellement dit en damier</p> <p>市松模様状の分割の図式</p>		IV③ Chequerboard grid	CV-291 -293	CV-292 (B2-20-3 07 FLC)
4	<p>la ville d'Anvers au XVII siècle</p> <p>17世紀のアントワープの都市</p>		IV①Network of curves	CV-293 -295	ÉCV-209
5	<p>les points principaux étant réunis par des rues principales, d'innombrables petits canaux commerciaux, sentiers, ponts et passages couverts établissaient, au plus court et au plus naturel, les communications entre tous les points.</p> <p>(Voyez la confirmation de ce principe aux fig. VIII, XXI, XXXI, qui donnent le plan des villes de Berne, (...))</p> <p>主要な道によって主要な点が結ばれ、無数の小さな商業用運河や小道や屋根のあるパサージュが、最も短い距離で最も自然になるように、全ての点の間の連絡を定めていた。(図VIII, XXI, XXXIにこの原理を確認せよ。これらの図はベルン (...) の都市の図面を示している。)</p>		IV ① Network of curves	CV-295	CV-294 B2-20-29 6 FLC
6	<p>Ulm</p> <p>(引用者注：直上の事例とともに列記) ウルム</p>		IV ① Network of curves	CV-295	CV-295 (ST6-33 5, Tafel 79)

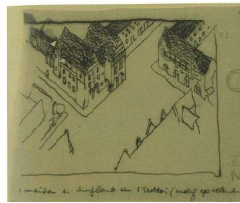
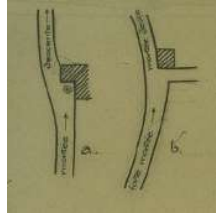
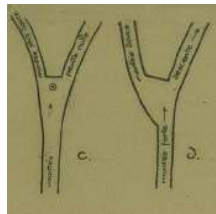
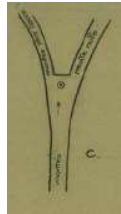
7	Soleure (引用者注:直上の事例とともに列記)ゾロトゥルン		IV① Network of curves	CV-295	CV-296 (B2-20-305 FLC)
8	Les rues droites et assez longues à parois parallèles continues, ne perdront leur caractère d'ennui que lorsqu'elles paraîtront plus courtes qu'elles ne sont. 平行に続く壁に沿った、真っ直ぐで十分に長い道は道が実際よりも短く見えるときにだけその退屈な性格を失う。	—	I② Long with points	CV-297	—
9	Un cas particulier de la longue rue droite, à parois parallèles est celui où deux rampes opposées, d'inclinaison faible et continue forment un «dos d'âne» en leur rencontre. 平行な壁に沿った、長く真っ直ぐな道の特殊な事例として、僅かに傾斜し続けている2つの対向する斜面が出会うところで《アーチ型》を作る場合がある。	—	I⑨ Convex slope	CV-297	—
10	La méprise défavorable sur la véritable longueur d'une rue 道の本当の長さを好ましくない風に勘違いする場合		III① Crossroads	CV-298	CV-298 (B2-20-314 FLC)
11	La méprise défavorable sur la véritable longueur d'une rue 道の本当の長さを好ましくない風に勘違いする場合		III② Enlargements	CV-298	CV-298 (B2-20-314 FLC)
12	la dissimulation partielle de la fuite des maisons par des plantations d'arbres. 植樹によって家の切れ目を部分的に隠すこと		III③ Tree-planted enlargements	CV-299 , 300	CV-298 (B2-20-314 FLC)
13	une courbure concave (creuse) à la surface de la rue 道の表面を凹面に湾曲させること	—	I⑩ Concave slope	CV-299	—
14	d'éviter intersections répétées «en croix» 繰り返される《十字の》交差点を避けること		III④ T-jnc.	CV-299	CV-298 (B2-20-314 FLC)
15	la courbure des parois latérales 側面の壁の湾曲	—	I④ Not parallel frontages beside a street	CV-300	—
16	la paroi concave de la rue 道の凹面の壁	—	I③ Parallel frontages beside a street I④ Not parallel frontages beside a	CV-300	—

			street		
17	la paroi convexe 凸状の壁	—	I③Parallel frontages beside a street I④Not parallel frontages beside a street	CV-300	—
18	les parois latérales d'une rue sinueuse sont tracées parallèlement l'une l'autre 曲がりくねった道の側面の壁が互いに並行に線を引かれる		I③Parallel frontages beside a street	CV-300	CV-301] (B2-20-3 08 FLC)
19	un trace dont le non parallélisme aura été bien proportionné 平衡でないものが均整のとれている線		I④Not parallel frontages beside a street	CV-300	CV-301] (B2-20-3 08 FLC)
20	la [Marktgasse] à Berne ベルンのマルクトガッセ		I④Not parallel frontages beside a street	CV-302	CV-302 (B2-20-3 15 FLC)
21	le tracé des lignes sinueuses (...) chemins qui tracent les paysans en pays mouvementé pour accéder à la ville 曲がりくねった線 (...) 都市へと至るために起伏のある国土の農民が引いた道	—	IV①Network of curves	CV-303	—
23	les chemins ruraux, ceux qui furent tracés par les paysans et non par les géomètres officiels (...) ces lignes étant en rapport intime avec les collines et les vallons qui ont réglé leur tracé, apportent souvent au paysage l'élément de beauté de leur filet blanc accusant les modelés des monts tout comme le fait un fin collier d'or sur la rondeur d'une gorge. 田舎の道、すなわち役人の幾何学者ではなく農民によって引かれた道 (...) この線はその道筋を規制する丘や小さな谷と密接な関係があるので、まるで胸元の丸みの上にある繊細な金の首飾りを作り出すかのように丘の起伏を際立たせる白い網目の美の要素を、しばしばその風景にもたらしてくれる。	—	IV①Network of curves	CV-303	—
24	un angle au dessous de 90 degrés 90度より小さい角度	—	II④Smaller than right angle	CV-304	—
25	l'angle supérieur à 90 degrés 90度より大きい角度	—	II①Greater than right angle	CV-304	—
26	L'angle droit 直角	—	II③Right angle	CV-304	—
27	l'angle un peu supérieur (引用者注：直角より) 少し大きい角度	—	II②Slightly greater than right angle	CV-304	—
28	Si, (...) il est nécessaire de créer un élargissement de la rue, on sera tenté d'adopter le moyen qu'indique l'image a <i>fig LIX</i> もし (...中略...) 道を拡大することが必要だとしたら、 <i>図 LIX</i> の a の図が示す方法を取り入れようと試みるだろう		I①Enlargement of one side with straight line	CV-305	CV-304 (B2-20-3 17 FLC)

29	<p>l'image <i>b</i> offre aux regards toute l'ample surface de ses maisons et c'est la rue qui paraîtra élargie ici</p> <p><i>b</i> の図の場合は家の表面がたくさん見え、ここで広がっているように見えるのは道である。</p>		I⑫ Enlargement of one side with curved line	CV-305	CV-304 (B2-20-3 17 FLC)
30	<p>S'agit-il d'un double élargissement? Inévitablement, on le fera à la façon de l'image <i>c</i></p> <p>2倍に拡幅することが重要なのだろうか? 必然的に <i>c</i> の図の方法で行われるだろう。</p>		I⑥ Enlargement with straight lines	CV-305	CV-304 (B2-20-3 17 FLC)
31	<p>le tracé peu correct de l'image <i>d</i>, tracé qui permet les nobles perspectives des grands bâtiments et leur beau groupement</p> <p><i>d</i> の図のほとんど正しくない線、つまり大きな建物の崇高な眺めやそれらの美しい集まりを可能にする線</p>		I⑦ Enlargement with curved lines	CV-305	CV-304 (B2-20-3 17 FLC)
32	<p>La Promenade-Platz à Munich est tracée dans ce sens</p> <p>ミュンヘンのプロムナーデープラッツはこの感覚で線を引かれている</p>		I⑦ Enlargement with curved lines	CV-305	CV-306 (B2-20-3 42 FLC)
33	<p>Au point de vue de la continuité des parois d'une rue, l'image <i>a</i> de la fig. LVII est satisfaisante, parce que la ligne des maisons se poursuit sans interruption d'un côté de la rue.</p> <p>道の壁の優れた連続という観点からすると、図LVIIの <i>a</i> の図は申し分ない。なぜなら、道の側面で中断することなく家の線が続くからだ</p>		III④T-jnc.	CV-305	CV-298 (B2-20-3 14 FLC)
34	<p>Au cas d'une rue courbe, l'élargissement sur le côté concave est à craindre</p> <p>曲がった道の場合は、凹面の側面での拡幅が心配される</p>		I⑭ Enlargement at concave side	CV-305 -306	CV-308 (B2-20-3 09)
35	<p>disposer à la manière des images <i>b</i> et <i>c</i> fig. LX(...) les monuments ou les arbres.</p> <p>図LXの <i>b</i> と <i>c</i> の図の方法によって記念碑や木を設置すること</p>		I⑮ Disposition at enlargement at concave side	CV-306	CV-308] (B2-20-3 09)
36	<p>Le bon moyen qui fut employé de tout temps avec succès est celui de l'image <i>d</i>, c. à. d. de l'élargissement fait sur le côté convexe de la rue.</p> <p>用いられていつも成功する優れた方法は、<i>d</i> の絵の方法、つまり、道の凸状の側面での拡幅をする方法である。</p>		I⑯ Enlargement at convex side	CV-306	CV-308] (B2-20-3 09)
37	<p>Le cas se présente à Munich à la [Neuhauser Straße]; l'élargissement et le brusque retrait recoupant la trop grande longueur de la rue</p> <p>この場合はミュンヘンの[ノイハウザー通り]が示している; 拡幅と突然の後退が、道のとても長い長さを区切っている</p>		I⑱Bent enlargement	CV-307	CV-308 (B2-20-3 00 FLC)

38	<p>Le principe de ces élargissements à décrochement devient à certains moments favorables plein de charme imprévu, s'il est répété. Les vieilles villes ne manquent pas de ces tracés qui permettaient de placer deux façades sur la même rue</p> <p>セットバック部分の拡張のこの原則は、繰り返されると、ある好ましい瞬間に思いがけない魅力でいっぱいになる。古い都市には同じ道に2つのファサードを配置することを可能にするこうした線が必ずある。</p>		I⑰Sawtooth shaped enlargement	CV-309	ÉCV-202
39	<p>que le fleuve offert à leur circulation ait des rives en dents de scie.</p> <p>交通の多量の流れに鋸の歯の縁があるということ</p>	—	⑤ Saw-toothed roadway boundary	CV-309-310	—
40	<p>le tracé des trottoirs parallèles</p> <p>平行な歩道の線</p>	—	①Straight	CV-310	—
41	<p>par ex, les trottoirs vis-à-vis la Madeleine Paris</p> <p>たとえば、パリにあるマドレーヌ寺院に向かい合った歩道</p>	—	⑤ Saw-toothed roadway boundary	CV-310	—
42	<p>La fig LVIII montrait le moyen ingénieux de tronçonner un long parcours de la Neuhauserstrasse à Munich par l'opposition franche d'une grande façade au travers de la ligne de fuite de la rue.</p> <p>図 LVIII は、ミュンヘンのノイハウザー通りの長い道のを、道の逃げていく線を横切る大きなファサードというあからさまな妨害によって輪切りにするという巧みな方法を示していた。</p>		I⑬Gate on the axis	CV-311	CV-308 (B2-20-300 FLC)
43	<p>La Sendlingerthor à Munich aussi répète ce même procédé en une architecture moins prétentieuse et plus heureuse, fig Lil</p> <p>ミュンヘンのゼンドリンガー門は、より気取ってなくてより適切な建築に、これと同じ方法を繰り返し用いている</p>		I⑬Gate on the axis	CV-311	CV-311
44	<p>les rues d'Ulm accusent maintes solutions intéressantes: en G, celle d'une porte de ville analogue au cas précédent.</p> <p>ウルムの道がたくさん興味深い解決策を強調している: Gにあるように、それは前の例と類似した都市の門である。</p>		I⑬Gate on the axis	CV-311	CV-294 (B2-20-296 FLC)
45	<p>Remarquons dans la fig. XII que l'Hôtel de ville n'a pas été placé dans l'axe de la rue;</p> <p>図 XII では、市役所が道の軸上に配置されなかったことに注目しよう;</p>		I⑳One building on-axis and the other off-axis	CV-312	CV-312 (B2-20-304 FLC)
46	<p>car deux édifices importants se dressant aux extrémités d'une rue droite créent une impression de banalité que les époques d'art ont évité soigneusement.</p> <p>というのも、2つの重要な建物がまっすぐな道の2つの先端にそびえ立つと、芸術の時代が注意深く避けていた平凡さという印象を作り出すからだ。</p>	—	I⑱Buildings at the both ends of the street	CV-312	—
47	<p>Dans le cas d'un chésal analogue à celui que donnait la fig. Sieg. Sitte le passage sera fait à travers une maison, interdit aux voitures; [Am Rand:] il sera parfois</p>	—	I㉑Passageway	CV-313	—

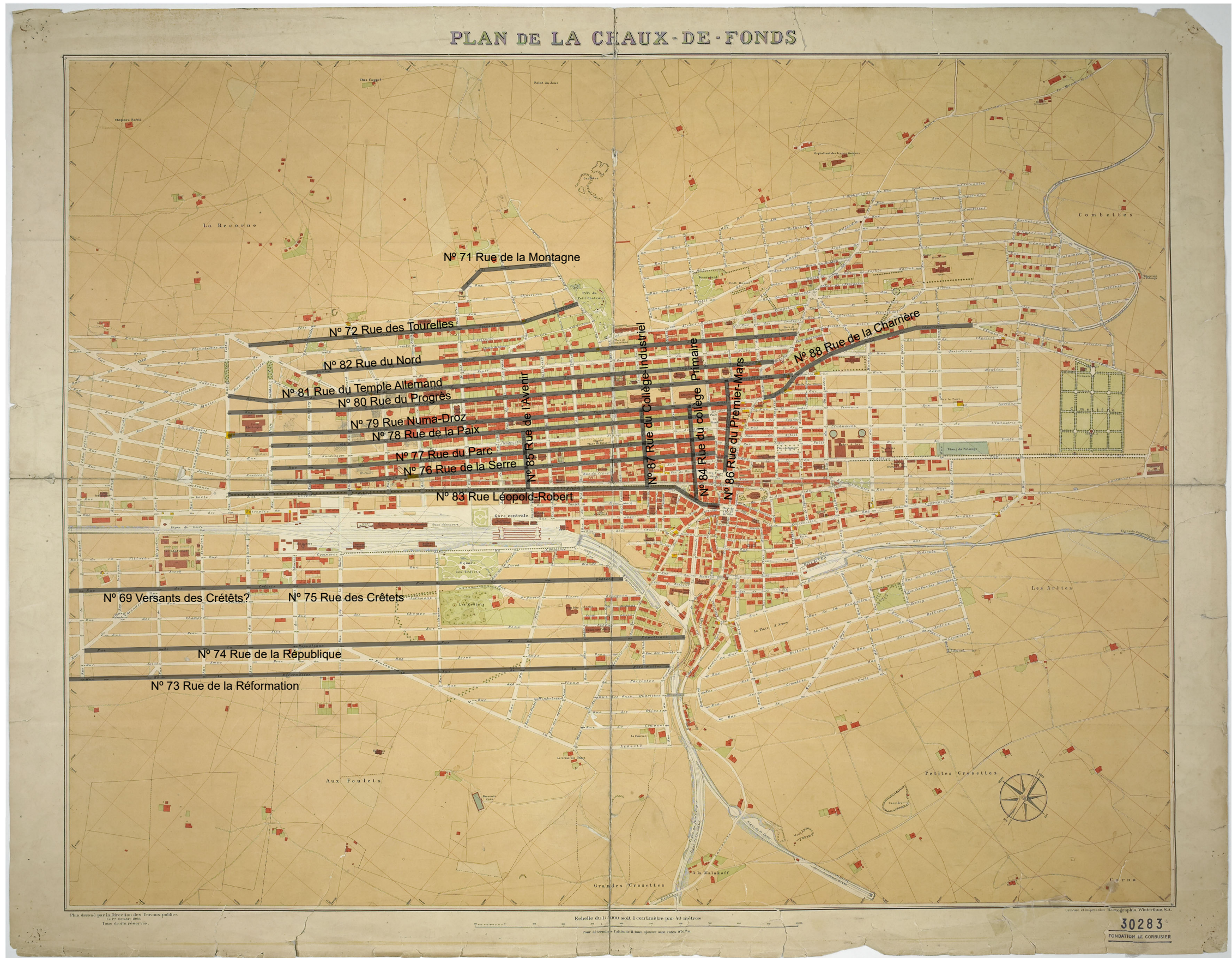
	<p>fermé la nuit. L'amélioration dans la circulation que procurent ces passages sera plus complète par la répétition de ce procédé dans plusieurs massifs consécutifs.</p> <p>ジークフリート・ジッテの図₂が示すのと似たシェザルの場合は、パサージュは車の通行を禁止しながら1つの家を通り抜けて作られるだろう；これは時々夜に閉じられるだろう。パサージュがもたらす交通の改良は、いくつも続いているマッスにこの方法を繰り返して用いることで、より完全なものとなるだろう。</p>				
48	<p>La <i>fig XVIII</i> [Abb. 26] en montre à Munich une application; la circulation très intense a donné aux immeubles une valeur considérable; à la place des tristes cours le parti très architectonique de quatre murs se refermant, permet de très jolis aspects, <i>fig XIII</i> はミュンヘンでの適用を示している；激しい交通は建物に重要な価値を与えた；寂しい中庭の広場では、4つの壁という非常に建築術的なパーティが再び閉じているので、とてもきれいな眺めが可能になっている</p>		I② Passageway	CV-314	CV-313 (B2-20-3 55 FLC)
49	<p>D'une autre manière, la <i>fig. __</i> qui montre en <i>A</i> le type précédant de passage, donne en <i>B</i> une solution d'un beau caractère. La rue est tout simplement fermée par un grand bâtiment dans lequel une vaste voûte est ouverte, permettant le passage aux voitures et aux piétons.</p> <p>また別の方法において、<i>fig. __</i> は、<i>A</i> で先行するタイプのパサージュを示しているが、<i>B</i> では美しい性格の解決策を与えている。道は、大きなアーチ型天井が開いている大きな建物によってとても単純に閉じられており、車と歩行者が通行できるようになっている。</p>	—	I② Passageway	CV-314	—
50	<p>D'autres passages de toutes formes ont été faits, dans les grandes villes; le type est comme de celui, <i>fig. __</i> qui traverse une cour couverte d'un plafond vitré:</p> <p>全ての形の他のパサージュは、大きな都市で作られた；そのタイプとは、<i>fig. __</i> のタイプのような、ガラスのはまった天井で覆われている庭を横切るものだ</p>	—	I② Passageway	CV-314	—
51	<p>Une solution charmante qui a pour but aussi de recouper la trop grande longueur d'une rue consiste à planter carrément une maison en saillie de 4,5, ou 6 mètres sur le trottoir, en ouvrant à sa base une large voûte.</p> <p>非常に長い道の長さを区切ることをも目的にしているすてきな解決策とは、歩道に4, 5, 6メートル突き出た場所に家を四角く建て、その下部に大きなアーチ型天井を開くことである。</p>	—	I② Arcade	CV-314	—
52	<p>Le Limmat-Quai à Zurich accuse plusieurs fois ce procédé.</p> <p>チューリッヒのリンマートクヴァイはこの方法を何度も使っている。</p>	—	I② Arcade	CV-314	—
53	<p>Tel est aussi le cas à Munich, à la Prinzregentstrasse devant le Musée National.</p> <p>こうした事例はミュンヘンの国立美術館の</p>	—	I② Arcade	CV-314	—

	前にあるプリンツレゲンテン通りにも見られる				
54	une variante qui associe d'un coup la beauté de la place à celle de la rue: (...) les chambres ayant leurs fenêtres dans ces massifs en saillie jouiront d'une situation exceptionnelle. 広場の美を道の美に一举に結びつける変形; (...) 部屋はこのマスの突出部に窓を有していることで例外的な状態が楽しめる。		I②Arcade	CV-314	CV-315 (B2-20-3 13 FLC)
55	Nous aimerions mieux une pente un peu raide, puis adoucie, voire même un petit bout de plat: après, nous reprendrions une pente normale, わたしたちは少しだけ急で、そのうえ緩やかで、さらにわずかばかり平坦になった斜面を最も好むでしょう; そうして普通の斜面を取り戻すでしょう	—	I⑧Varied slope	CV-320	—
56	Le geometre peut tirer le parti le plus brillant de cet état de choses en tordant ses rues à la manière de la fig. XXVIII. Sur les schémas a et b, grâce à un faible élargissement de la rue au point culminant de la pente, les images seront closes par un bâtiment barrant la rue au point terminus; 幾何学者はこの道を図 XXVIII の方法でねじ曲げることで、この状態からもっとも素晴らしいパルティを引くことができる。図式 a と b では、斜面の最高点で道をわずかに拡幅しているおかげで、その眺めは建物が道を終点で妨げることによって閉じられるだろう;		I⑩Bent enlargement	CV-320	CV-322 (B2-20-3 16 FLC)
57	Les fig. c et d montrent un autre parti: celui de deux rues en fourche. Mais toujours la volonté s'affirme de clore l'image au point de rencontre des deux pentes. 図 c と d はほかのパルティを示している: ここで 2 本の道に分岐するというものである。しかし、2 つの斜面が出会う点で眺めを閉じていたいという意思がいつも際立っている。		II⑤ Symmetry II⑥ Asymmetry	CV-321	CV-322 (B2-20-3 16 FLC)
58	Le tracé froidement symétrique sera heureusement remplacé par celui de la fig. d, p. ex., où l'on sent le souci d'embellir aussi des perspectives prises des points opposés let2 冷淡に左右対称な線は、たとえば図 d の線によって適切に取って替わられるだろう。		II⑤ Symmetry	CV-321	CV-322 (B2-20-3 16 FLC)
59	Dans le réseau des rues menant à une hauteur, le chemin des voitures sera toujours le plus long: celui des piétons le plus court. C'est alors qu'interviendront les réseaux capillaires dont nous parlions dans notre comparaison des rues d'une ville au système artériel. 高さ方向につながる道のネットワークにおいては、自動車の道はいつも最も長くなるだろう; そして歩行者の道が最も短い。街路と動脈系の比較で紹介した、毛のように細かい網が発生するのは、こうしたときである。	—	IV①Network of curves	CV-321	—
60	Un type de rue dont l'origine remonte au moyen-âge est celui de la rue annulaire.	—	IV②Ring boulevard	CV-324	—

	中世にまで起源を遡る道のタイプは、輪の形をした道のタイプだ。		encircling the network		
61	Deux mots encore sur la rue officielle, de parade (...) On tirera une rue bien droite; en ses deux bouts, on plantera de grands édifices, 公的な誇示の道について、もう二言(…)人々はとてもまっすぐな道を引くだろう;その2つの端に大きな建物を建てるだろう。	—	I⑨Buildings at the both ends of the street	CV-324	—
62	Deux impressions s'attachent à la rue droite: l'impression de grandiose: l'impression de beauté. — Le grandiose lorsque, par son emploi exceptionnel, elle devient frappante et que ses dimensions sont si démesurées qu'elle stupéfie. 2つの印象が真っ直ぐな道に結びついている: 荘厳な印象、美の印象。荘厳な印象は、例外的に用いられることで、道が目立つようになるときと、その大きさが並外れて大きいために道が唾然とさせるときに与えられる。	—	I①Straight	CV-327	—
63	Telle est l'avenue des Champs-Élisées [sic] à Paris couronnée par l'immense arc de triomphe derrière lequel se couche en gloire le soleil. そうだったものは、巨大な凱旋門によって囲まれていて、凱旋門の後ろに太陽が沈むパリのシャンゼリゼ通りである。	—	I①Straight	CV-327	—
64	Tel à Berlin, le soir, «l'effet» de la Siegesallee à l'extrémité de laquelle se dresse la Siegesäule toute noyée dans le pourpre du couchant et se mirant presque dans le macadam poli par les automobiles. こうだったものは、夕暮れ時のベルリンのジューゲスアレーの《効果》だ。この通りの先端では戦勝記念塔が日暮れの緋色の中にどっぷりと浸っていて、自動車によって磨かれたマカダム式石舗道に自らの姿をほとんど映し出している。	—	I①Straight	CV-327	—
65	La Bismarckstrasse à Charlottenburg aux dimensions énormes qui suit une direction inflexible pendant d'interminables kilomètres, seule droite, à peu près, au travers de quartiers qui sont et seront tous tracés suivant les procédés nouveaux. シャルロテンブルクにある巨大な大きさのビスマルク通りは、果てしない距離の間、融通の利かない方向へ、多かれ少なかれ唯一の直線であり、現在そして将来、すべて新しい方法に従って線を引かれる地区を貫く。	—	I①Straight	CV-327	—
66	Paris a montré sous Napoléon III le type d'une rue droite passablement longue fermée aux deux extrémités et bordées d'immeubles locatifs, dont le caractère est puissant. (...) Les larges rues de Paris, telle l'Avenue de l'Opéra, ne sont imposantes et par l'unité de leur architecture qu'à cause de l'énorme circulation ナポレオン3世の治世下に、パリは、相当にまっすぐで、2つの先端が閉じられており、性格の強い大きな賃貸の建物が沿っている道のタイプを示した。(…)パリの大きな道、オペラ通りのような道はその建築の統一性によってしか、そして巨大な交通のせいでは、堂々とはしない。	—	I①Straight	CV-327	—


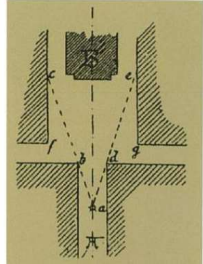
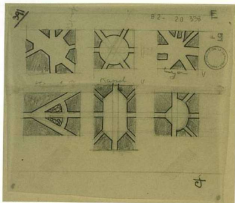
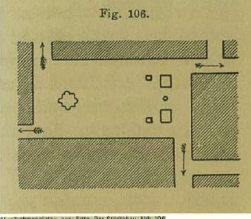
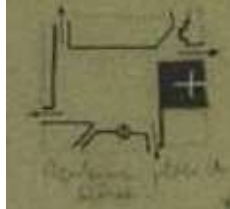
67	Sur ce sol si accidenté, les paysans avaient fait des chemins d'une courbe parfaitement en rapport avec la nature du sol. そんな起伏のある土地に、農民たちは地面の性質に合わせた絶妙な曲線を描く道を作っていた。	—	I③Parallel frontages beside a street I④Not parallel frontages beside a street I⑧Varied slope	CV-496	—
68	La volonté absolue de n'avoir que des lignes droites est bien caractéristique par les rues qui escaladent les collines (versants de Pouillerel (...)), qui sont tracées <i>toutes</i> suivant la pente <i>la plus rapide</i> . 直線しか持たないという断固たる意志は、丘に登る道（プイレル坂（…））によく表れており、いずれも最も急な斜面に沿って線を引かれている。	—	I①Straight	CV-496	—
69	comme versant des Crêtêts (引用者注：直上の事例とともに列記) クレテ坂	See Appendix Fig. 1	I①Straight	CV-496	PCF
70	ou des Arêtes (引用者注：直上の事例とともに列記) アレト坂	—	I①Straight	CV-496	—
71	Les architectes qui ont eu à construire des immeubles dans les quartiers de la rue de la Montagne, (...) savent ce que les attelages ont eu à souffrir dans ces rues aux pentes maximales. モンターニュ通り（…）の街区に大きな建物を建てなければならなかった建築家たちは、組になった馬たちが最も急な斜面にあるこの道で苦しまなければならないことを知っている。	See Appendix Fig. 1	I①Straight	CV-497	PCF
72	des Tourelles (引用者注：直上の事例とともに列記) トゥレル通り	See Appendix Fig. 1	I①Straight	CV-497	PCF
73	Nouvelle <i>rue de la réformation</i> レフォルマシヨンの新しい道	See Appendix Fig. 1	I①Straight	CV-500	PCF
74	Nouvelle rue de la République レピュブリクの新しい道	See Appendix Fig. 1	I①Straight	CV-500	PCF
75	Nouvelle rue de Rue des Crêtêts クレテの新しい道	See Appendix Fig. 1	I①Straight	CV-500	PCF
76	rue de la Serre セール通り	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III② Enlargements	CV-500	PCF
77	La Rue du Parc バルク通り	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III② Enlargements	CV-501	PCF
78	La rue de la Paix べ通り	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III② Enlargements	CV-501	PCF
79	La Rue Numa [-Droz] ニユマ＝ドゥロ通り	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III② Enlargements	CV-501	PCF
80	[Rue] du Progrès プログレ通り	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III②	CV-501	PCF

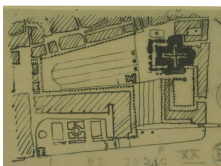
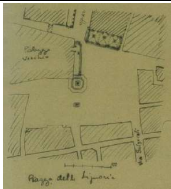
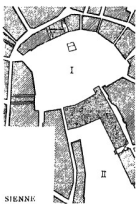
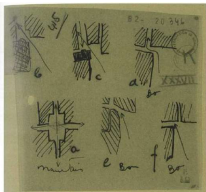

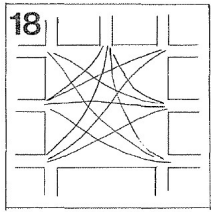
			Enlargements		
81	La rue du Temple Allemand タンブル=アルマン通り	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III② Enlargements	CV-501	PCF
82	la rue du Nord ノール通り	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III② Enlargements	CV-503	PCF
83	La fig. F montre en effet l'éternelle fuite perspective sans fin de deux parois parallèles et infiniment longues. 実際、図 F (引用者注：レオポルド=ロベール 通り) は、無限に伸び続ける平行な 2 枚の 仕切り壁が永遠に続く、遠近法に則った果て しない切れ目を示す	See Appendix Fig. 1	III① Crossroads III② Enlargements II⑤ Symmetry	CV-503 -504	PCF
84	rue du collège Primaire コレージュプリメール通り	See Appendix Fig. 1	III⑤ Crossroads with building at the end	CV-504 -505	PCF
85	La rue fig I est fermée à son extrémité, ce qui est bien, mais elle subit (xxx) de nouveau les inconvénients du damier et apparaît laidement recoupée. 図 I の道 (引用者注：アヴニール通り) は先 端が閉じておりこの先端は良い。しかしなが ら市松模様の新たな欠点に苦しんでおり (xxx)、再び醜く切られたように見える。	See Appendix Fig. 1	III⑤ Crossroads with building at the end	CV-506	PCF
86	Enfin nous signalons la terminaison heureuse d'une rue affreusement laide, celle du 1 ^{er} , Mars わたしたちはついに、ものすごく醜い道にあ る適切な末端を指摘する。これはブルミエール =マルス通りである。	See Appendix Fig. 1	III⑤ Crossroads with building at the end	CV-506	PCF
87	Le même laisser aller et la même infraction aux lois de beauté éclate dans la fig. L où cet escalier monumental flanqué de ses grands murs de soutènement et dominé par un édifice venant clore la perspective eût permis à un architecte de la renaissance de faire le plus pur chef-d'oeuvre Fig. L 同じように放っておいて美の法に同様に背 くのが図 L (引用者注：コレージュ=アンデ ュストリエル通り) ではつきり見て取れる。 そこでは側面に擁壁に囲まれていて、眺望を 閉じに来た大建築物に支配されているモニ ュメンタルな階段が、ルネサンスの建築家が 最も純粋な傑作を作ることの可能性を可能にした。	See Appendix Fig. 1	III⑤ Crossroads with building at the end	CV-506	PCF
88	La fig. M est celle d'une rue très bien tracée; c'était une ancienne route cantonale existant avant l'incendie déjà et que des considérations spéciales ont obligé les géomètres communaux à conserver. 図 M (引用者注：シャリエール通り) はす ばらしく線を引かれた道である；これは火事 の前に存在したカントンの古い道筋だった。 また、特殊な考えが市町村の幾何学者にその 道筋を保存させ続けた。	See Appendix Fig. 1	I⑧ Varied slope	CV-507	PCF


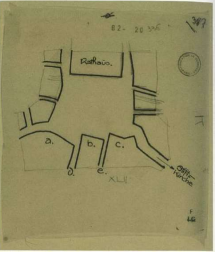


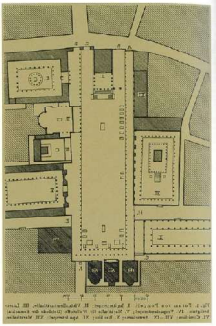


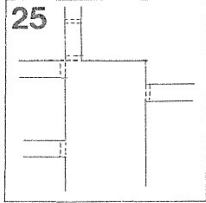
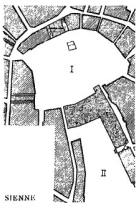

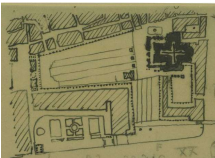
Appendix Fig. 1 Streets in La Chaux-de-Fonds
 (La Chaux-de-Fonds, *Plan de La Chaux-de-Fonds*, supplemented by author)

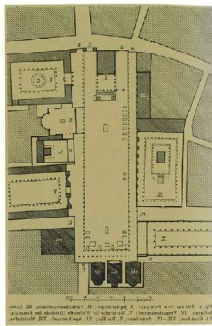

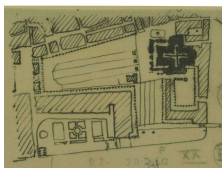

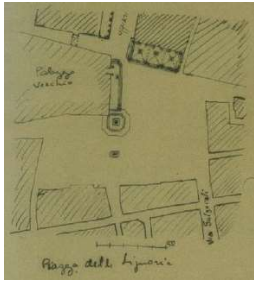
Appendix table 4 Cases of squares




N° 番号	Citation 引用	Fig. 図	Parti corresponda nt 該当パルティ	Page 頁	Source 図版出典
1	<p>C'est le tracé <i>de figure__</i> qui sera adopté. La surface de la place décidée énorme, le géomètre zélé fera voter une loi de bâtisse obligeant les façades de tous les immeubles avoisinants à monter à 18 ou 20 mètres, afin assurera-t-il de d'amplifier le caractère de grandeur de l'église ou du palais projeté!</p> <p>取り入れられるのは図__の図面だ。広場のファサードは巨大な大きさに決定されるだろうし、熱心な幾何学者は、建物の法律に投票させて、隣接するすべての建物のファサードを 18 あるいは 20 メートル高くするように強制し、ついには、教会や計画された宮殿の大きさの性格を拡大することを断言するだろう！</p>		I② Building surrounded by splendid facades	CV-333-334	CV-332 (B2-20-3 30 FLC)
2	<p>Il ouvrira l'extrémité de sa rue en une vaste place, et dans l'axe même de la grande artère, au fond de la place, s'élèvera l'édifice rêvé, <i>Fig.__</i></p> <p>彼は、広い広場で道の先端を開くだろう。そして図__に示すように、大きな幹線道路のちょうどその軸や、広場の奥で、理想的な建築物が建つだろう。</p>		I⑨ Building on axis at the end of square	CV-334	CV-334 (BA-70, Abb. 7)
3	<p>à la troisième place modern, le carrefour ou le rond-point</p> <p>3 番目の近代の広場、十字路や円形交差路</p>		I③ Streets along the four main geometric axes	CV-335	CV-336 (B2-20-3 38 FLC)
4	<p><i>Fig.__</i> est bien le plus simple et le plus parfait. Le passant qui débouche de l'une quelconque des rues dans la place ne verra que surfaces se repliant sur elles-mêmes.</p> <p>図__はまさに最も簡単で最も完璧だ。任意の道から広場へと行き着く通行人には、表面が身を丸め自分の中に閉じこもるのしか見えないだろう。</p>		I② Turbine square	CV-339	CV-339 (SK-155, Abb. 106)
5	<p>Telle est la place du Dôme à Ravenne</p> <p>このような広場にはラヴェンナのドゥオモ広場がある</p>		I② Turbine square	CV-340	CV-340 (B2-20-3 40 FLC)



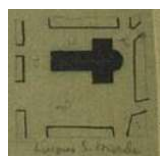
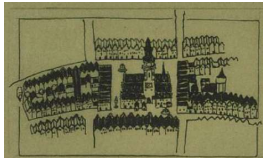
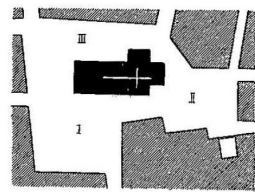
6	<p>C'est ce phénomène d'optique qui permet à nos yeux de ne point être affectés par les places de St Marc à Venise (...).</p> <p>ヴェネツィアのサンマルコ広場(...)から、わたしたちの目がまったく影響を受けないことを可能にするのは、この視覚の現象である</p>		I① Irregular form	CV-340-341	CV-347 (B2-20-341)
7	<p>celle de la Signoria à Florence (引用者注: 直上の事例とともに列記) フイレンツェのシニョーリア広場</p>		I① Irregular form	CV-341	CV-369 (B2-20-344 FLC)
8	<p>Pallio à Sienne (引用者注: 直上の事例とともに列記) シエナのパーリオ広場 (引用者注: カンポ広場)</p>		I① Irregular form	CV-341	AB-24
9	<p>Souvent deux de celles-ci débouchent en un même angle. Le tracé adopté ce cas, à notre époque, est celui de la Fig. ____, ouvrant la place, là précisément où doit accuser le caractère de clôture, elle infirme la plus importante des conditions esthétiques de la place.</p> <p>このうち2つがしばしば同じ角に通じている。この場合に取入れられる線はいつも、わたしたちの時代では図__の線であって、囲いの性格が目立つに違いないそこにある広場をまさしく開き、広場の審美的状態の最も重要なものを弱める。</p>		I⑧ Intersection out of the corner	CV-341	CV-341 (B2-20-346 FLC)
10	<p>L'image fig. d qui montre à l'angle de pénétration un élargissement de trottoir, indique aussi la nécessité d'un édicule suffisamment intéressant pour pailler, par l'attrait de ses silhouettes, à la mauvaise impression de vide créé par ce mode d'embouchure.</p> <p>道が入り込む角に歩道の拡幅を示している図dは、そのシルエットの魅力によってこの道の入り口の様式によって生まれるあいた空間の悪い印象を打ち消すのにじゅうぶんな、興味深い小建築物の必要性をも示している。</p>		I⑧ Intersection out of the corner	CV-342	CV-341 (B2-20-346 FLC)
11	<p>La fig. __ montrait la place ouverte de tous côtés par les perspectives rectilignes des rues.</p> <p>図__は、道のまっすぐな眺望によって、全ての側面が開いている広場を示していた。</p>		I④ Streets reaching side walls at right angle	CV-343	ÉCV-203

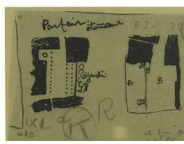

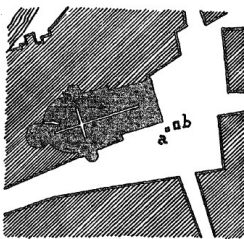

12	<p>Le Marktplatz de Dresde, <i>Fig. __</i> est un cas analogue, mais dont les aspects sont très suffisamment clos grâce à l'incurvation des rues</p> <p><i>図__</i>のドレスデンのマルクト広場は類似した事例であるが、その眺めは、道が湾曲しているおかげでとてもじゅうぶんに閉じている</p>		I⑤ Streets reaching side walls at not right angle	CV-343	CV-343 (KS-78, Abb. 33)
13	<p>et le plan de la remarquable place du marché de Stuttgart, <i>Fig. __</i> accuse d'une façon beaucoup plus caractéristique la volonté de n'offrir à l'œil qu'une surface non interrompue de façades. Tracée avec une étonnante conscience du volume, cette place est parfaitement close</p> <p>そしてシュトゥットガルトのすばらしいマルシェ広場の図面、<i>図__</i>は、遮られることのないファサードの表面だけを目に示そうとする意思を、非常に特有の方法で強調している。ボリュームの驚くべき意識を持って線が引かれているこの広場は、完璧に閉じている</p>		I① Irregular form	CV-343	CV-344 (B2-20-3 36 FLC)
14	<p>Lorsque la place offrait la forme d'une figure géométrique parfaite, —carré [sic], cercle, ovale —, il arrivait souvent aux rues de s'ouvrir au milieu des façades suivant les quatre axes principaux. On ne manque jamais de faire ainsi aujourd'hui,</p> <p>正方形や、円、楕円といった完璧な幾何学的図形を広場が示しているとき、道はしばしば主要な4本の軸に続くファサードの真ん中で開くことがあった。今日では人々は必ずこのようにする</p>		I③ Streets along the four main geometric axes	CV-344	—
15	<p>mais en oubliant toutefois, que les anciens bâtisseurs fermaient toujours brutalement ces rues, à quelque cent mètres de leur embouchure dans la place, au moyen d'un palais, d'une église, d'un édifice noble quelconque.</p> <p>しかしながら、昔の建造者が、広場の入り口から数百メートル離れたところに宮殿や教会などの高貴な建物を用いることで、こうした道をいつも荒々しく閉じていたことを忘れてはならない。</p>		I④ Building asymmetrically	CV-344	—
16	<p>Le Forum de Pompéi, <i>Fig. __</i>, nous signale en A un moyen, employé de tous temps avec grand succès pour clore la trouée défavorable faite par une rue dans les parois d'une place. C'est celui d'un simple arc jeté au travers de la rue, à son embouchure dans la place. Ainsi fut fait autrefois à Vérone, Sienna et quantité de villes de tous pays.</p> <p>ポンペイのフォルム、<i>図__</i>は、Aにおいてわたしたちに方法を注目させる。この方法は用いられるといつても偉大な成功を収めていて、広場の壁にある道によってつくられた、好ましくない切れ目を閉じるためのものだ。広場にある道の入り口に、道を</p>		I⑥ Arch at the end of streets	CV-344	CV-345 (SK-3, Abb. 1)

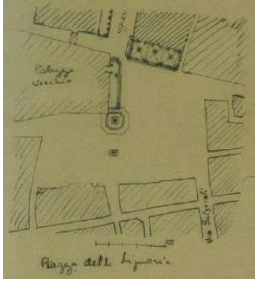
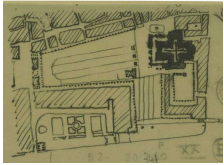
	横切って建てられた単純なアーチによる方法である。ヴェローナやシエナなどすべての国のたくさんの都市で、かつては、このようにしてつくられた。				
17	<p>Si un arc seul ne fermait pas suffisamment la trouée malencontreuse, un second arc, à quelque cent mètres en avant du premier dans la rue, servait de renfort, <i>Fig. ___</i>.</p> <p>あるたった1つのアーチで不適切な切れ目をじゅうぶんに閉じることができないなら、道の始まり部分の前およそ100メートルのところにある2番目のアーチが <i>図__</i> のように補助していた。</p>		I⑥ Arch at the end of streets	CV-344	ÉCV-203
18	<p>En se réduisant à un large passage voûté, pratiqué à même le massif des maisons, les embouchures de rues, comme c'est le cas en plusieurs endroits de la place du Palio à Sienne, pourront être dissimulées et rendre le coup d'œil majestueux à cause du sentiment de grandeur subite qu'aura le passant transporté d'un instant à l'autre d'une rue quelconque, dans une place vaste et bellement ordonnée.</p> <p>アーチ型天上を持つ、家のマッサに直接作られた大きなパッサージュに帰着して、シエナにあるパリオ広場（引用者注：カンポ広場）のいくつもの場所での事例のように、道の河口は隠されおごそかな眺めをもたらすかもしれない。</p>		I⑥ Arch at the end of streets	CV-346	AB-24
19	<p>La Cour du Louvre à Paris, l'œuvre sereine de Pierre Lescaut, de Mercier et de Perrault, doit son caractère de calme imposant à l'application quatre fois répétée de ce parti. <i>Fig. ___</i>.</p> <p>パリにあるルーブル宮は、ビエール・レスコ、メルシエ、ペローによる平穏な作品であり、大きな穏やかさという性格は、4度繰り返されたこのパルティを適用したおかげである。 <i>図__</i> に示すように。</p>		I⑥ Arch at the end of streets	CV-346	CV-346 (B2-20-3 25 FLC)
20	<p>Anvers, <i>Fig. ___</i>, avait montré en D la situation exceptionnelle d'un édifice public qui chevauchait d'un coup quatre rues en fermant leurs perspectives. Les quatre passages s'ouvraient derrière une colonnade,</p> <p><i>図__</i> のアントワープは、眺望を閉じて、4本の道と一挙に重なっていた公共建築の例外的な状況を D で示していた。4本のパッサージュは列柱の後ろに開いている。</p>	—	I⑦ Colonnade	CV-346	—
21	<p>Ainsi furent construites les Procuraties de la place St Marc à Venise <i>Fig. ___</i>, このようにして、 <i>図__</i> に示すようにヴェネツィアのサンマルコ広場の執政官官邸は建てられた。</p>		I⑦ Colonnade	CV-346	CV-347 (B2-20-3 41)

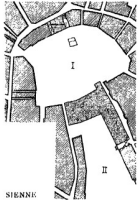

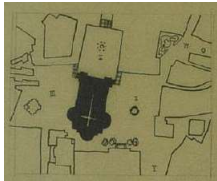
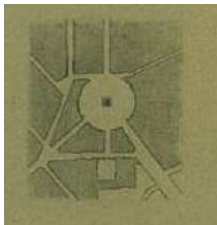
22	<p>ainsi pensèrent les architectes du Forum de Pompéi , <i>Fig.</i> qui partout où l'enceinte n'était pas close d'arcs simples, A, B, D ou d'un arc de triomphe, C, firent aboutir toutes les rues derrière un portique majestueux.</p> <p>このようにして <i>Fig.</i> に示すポンペイのフォルムの建築家は考えていた。彼らは、囲いが単純なアーチ A、B、D、または凱旋門 C で囲まれていない場所では、すべての通りを壮大なポーチの後ろに終わらせた。</p>		I⑦ Colonnade	CV-346	CV-345 (SK-3, Abb. 1)
23	<p>Munich élèvera la Frauenkirche (...) Munich fera du parvis de sa cathédrale un petit triangle curviligne,</p> <p>ミュンヘンはフラウエン教会を建設するだろう。(…) ミュンヘンはその大聖堂の教会前広場を、曲線から成る小さな三角形にするだろう。</p>		I⑮ Smaller church square than the facade	CV-349-350	CV-340 (B2-20-3 40 FLC)
24	<p>Venise achèvera la place St. Marc. (...) Venise laissera s'étendre au pied de St Marc le vaste trapèze [sic] des procuraties.</p> <p>ヴェネツィアはサンマルコ広場を完成するだろう。(…) ヴェネツィアはサンマルコのもとに、執政官官邸の広い台形を広げさせるだろう。</p>		I⑰ Square in depth I⑱ Square in breadth	CV-349-350	CV-347 (B2-20-3 41)
25	<p>c'est-à-dire que, la volonté étant d'affirmer la grandeur, la dominance, la place s'étendait au pied des cathédrales était toujours plus petite que la façade même. La cathédrale de Rouen subjugante [sic] et écrasante, se présente trois fois de cette manière sur sa façade, et sur chacun de ses transepts.</p> <p>いわば、その意志とは、偉大さや支配を主張しようというものであり、大聖堂のあしもとに広がる広場はいつもファサード自体よりも小さかった。ルーアンの大聖堂は魅了し圧倒していて、ファサードや翼廊のそれぞれで、この方法を3度示している</p>		I⑮ Smaller church square than the facade	CV-351	AB-90
26	<p>Le Palais Vieux, à Florence, lui aussi, n'a pas l'urbanité de s'annoncer longtemps à l'avance: d'un coup il surgit et effraie avec son brutal beffroi en surplomb, prêt, semble-t-il, à s'abîmer dans la place.</p> <p>フィレンツェの古い宮殿(引用者注: シニョーリア広場のヴェッキオ宮殿か)にも、長い間事前に現れるという都市性はない: それは突然現れて、張り出した、広場に沈もうとしているような状態の、暴力的な鐘楼でたじろがせる。</p>		I⑮ Smaller church square than the facade	CV-351	CV-369 (B2-20-3 44 FLC)
27	<p>Dans les pays du Nord où l'architecture des cathédrales exigeait l'emploi de tout un système de stati-mécanique — arcs boutants et dérivés, — les constructeurs s'étaient arrangés à dissimuler la perspective réduite désagréable de ces longs bras souvent maigres, en faisant le dégagement latéral des cathédrales si réduit, que seule était visible la belle surface des chapelles où couraient les</p>	—	I⑮ Smaller church square than the facade	CV-351-352	—

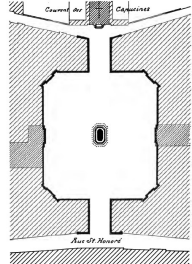

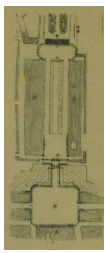
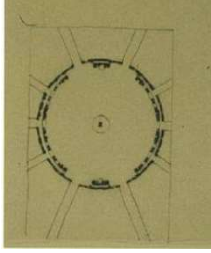
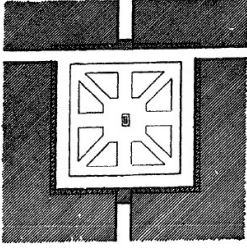
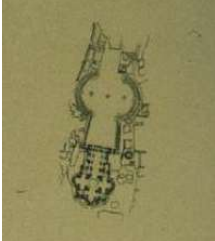
	<p>bas-reliefs et que couronnaient les gâbles, ou les balustrades ajourées;</p> <p>大聖堂建築が、静力学-控え壁やその派生物-のシステムを丸々そっくり使うことを要求していた北の国では、この長くてしばしばやせている腕の小さくすばまっていく不愉快な眺望を隠すよう建設者は眺望を隠すよううまくやっていた。礼拝堂の側面にある空き地を、非常にたくさん減らすことで、浅浮彫刻が広がっていて切り妻壁や透かし模様を施した手すりによって囲まれている礼拝堂の美しい表面だけを見えるようにして;</p>				
28	<p>Notre-Dame de Paris, la Reine de cette Ile-de-France, berceau du gothique le plus pur, fut profanée. On démolit autour d'elle les <i>petites</i> maisons qui lui conféraient sa <i>grandeur</i>. Le parvis fut fait exactement <i>sept fois</i> plus grand que celui pour lequel sa façade — inachevée même — avait été composée — sept fois plus grand!</p> <p>イル・ド・フランスの女王、最も純粋なゴシックの発祥地であるパリのノートルダムは、冒涇された。偉大さを与える小さな家々はその周囲で壊されている。教会前の広場は、一未完成の一ファサードのために構成された広場と比べて、ちょうど7倍の大きさで作られた—7倍の大きさで!</p>		I⑩ Large church square	CV-352	CV-354 (B2-20-3 23)
29	<p>Le dôme de Vérone, <i>Fig.</i>__, possédant une façade en hauteur motive un parvis en profondeur <i>a</i>, tandis qu'au long de sa nef s'étendent des places en largeur, <i>b, c</i></p> <p>ヴェローナのドーム、<i>図</i>__は、高さの高いファサードを持っており、奥行きの高い教会前広場、<i>a</i>のきっかけである。その身廊に沿って、幅の広い広場、<i>b, c</i>が広がっているのに対して。</p>		I⑩ Square in depth I⑪ Square in breadth	CV-353	CV-340 (B2-20-3 40 FLC)
30	<p>S^t Siro de Gènes, <i>Fig.</i>__, a sa place en profondeur, pratiquée à même le massif des maisons qui lui font face</p> <p>ジェノヴァのサンシーロ、<i>図</i>__は、奥行き深い広場があり、広場に面する家々のマッスに作られている。</p>		I⑩ Square in depth	CV-353	CV-340 (B2-20-3 40 FLC)
31	<p>Même cas à Brescia, <i>Fig.</i>__.</p> <p>ブレシアの同じ場合は、<i>図</i>__である。</p>		I⑩ Square in depth	CV-353	CV-340 (B2-20-3 40 FLC)
32	<p>De même à S^t André <i>Fig.</i>__ de Mantoue, place profonde en façade principale, place longue en façade latérale.</p> <p>同様に、<i>図</i>__のマントヴァにあるサンタンダレア聖堂では、主要なファサードには奥行のある広場、側面のファサードには長い広場がある。</p>		I⑩ Square in depth I⑪ Square in breadth	CV-354	CV-340 (B2-20-3 40 FLC)

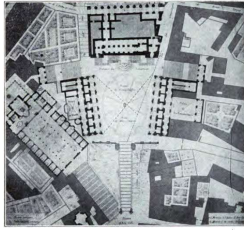

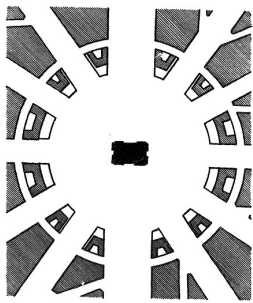

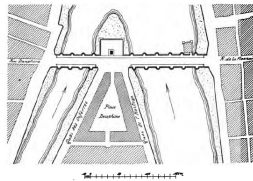

33	<p>La cathédrale d'Ulm, fig. __., avait avant 18xx [sic], sa place en profondeur devant sa façade et des espaces allongés donnaient le long de sa nef et de son abside les coups d'œil les plus favorables.</p> <p>図__のウルムの大聖堂には、18xx 年手前、ファサードの前に奥行き深い広場があって、細長い空間が、身廊と後陣に沿って最も好ましい眺望を与えていた。</p>		I⑮ Smaller church square than the facade I⑰ Square in depth	CV-354	[CV-355] (ST5-20 6, Tafel 22-23)
34	<p>Or, un beau jour, voici quelque trente ans, tout fut saccagé : clôtures, et entrepôts; les arbres furent replantés en rang d'oignons, et la surface du parvis se <i>quadrupla</i> par la démolition de tout un pâté d'immeubles, Fig. __b.</p> <p>さて、30 数年前の美しい日、すべてが奪われた：囲いと倉庫；木々は一列に再び植えられたし、大聖堂前広場は、1 ブロックをなす建物がまるまるなくなることによって、4 倍になった。図__b が示すように。</p>	 <p><small>S3: Münsterplatz zu dem vor und nach der Freigang des Münsters; von der Stadtbau: 5 1892/3; Tafeln 22-23</small></p>	I⑯ Large church square	CV-354	[CV-355] (ST5-20 8, Tafel 22-23)
35	<p>Le XIX siècle a recherché les places de forme géométrique simple et placé généralement les édifices en leur milieu. 19 世紀は幾何学的に単純な形の広場を追求し、一般的に広場の真ん中に建築物を配置した。</p>	—	I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-359	—
36	<p>Autrefois, en pareil cas, l'édifice se plaçait d'une manière asymétrique; quatre places de caractères foncièrement différents étaient créées, qui présentaient l'édifice sous des angles multiples.</p> <p>Voyez Lucques, Fig. __</p> <p>かつては、よく似た場合では、建物を左右非対称の方法で配置していた；本質的に異なる特徴を持った4つの広場が作られていて、多様な角度で建築物を見せるようにしていた。図__のルッカを見よ。</p>		I⑭ Building asymmetrically	CV-360	CV-340 (B2-20-3 40 FLC)
37	<p>Le délicieux Hôtel de ville de Schweidnitz donné par la vignette Fig. __ empruntée à une gravure de Mérian, dressait son beffroi dans un cadre particulièrement équilibré.</p> <p>すばらしく魅力的なシュフィドニツアの市役所は、メリアンの版画から取り入れた図__の装飾模様によって示されている。これは、とくに安定した枠組みの中に鐘楼を建てていた。</p>		I⑭ Building asymmetrically	CV-360	CV-361 (B2-20-3 43FLC)
38	<p>Plus riche encore fut le moyen de placer un édifice au milieu d'un espace libre — ou de grouper les maisons autour de cet édifice — de façon à ce que trois places bien distinctes en résultassent. Vicence, Fig. __ n'a pas qu'une place du dôme: elle en a trois et toutes trois s'entraident à charmer le voyageur.</p> <p>さらに豊かなのは、自由な空間のただ中に建築物を配置する—あるいは、この建築物の周りに家を集める—ことで、3つのはっきり異なる広場を作り出すことであった。図__のヴィチエンツァは、ドーム広場が1</p>		I⑭ Building asymmetrically	CV-360	SK-3

	つだけでない；そこには広場は3つあり、訪れた人を魅了するために3つすべてが助け合っている。				
39	deux places ayant un côté adjacent, et séparées l'une de l'autre par une très forte différence de niveau 隣接した側面を持っているが、高さのとても大きな違いによって互いに分離している2つの広場		II② Two squares at different level	CV-362	CV-362 (B2-20-3 54 FLC)
40	La fontaine de la place de l'Arsenal à Soleure a motivé l'architecture de la maison contre laquelle elle s'appuie —ou peut-être est-ce cette façade de proportions si exquises qui engagea le sculpteur à y adosser sa fontaine. ゾロトゥルンのアーセナル広場の噴水は、それがもたれかかっている家の建築のきっかけとなった—あるいは、おそらく、彫刻家にそこに噴水をもたれかけさせるように誘う、このとても絶妙につりあいのとれたファサードのきっかけとなったのかもかもしれない。		I⑬ Monument at the edge	CV-367	CV-369 (LC 108-388 Bibliothèque de la Ville in La Chaux-de-Fonds)
41	La Fig. __ nous montre à Berne au XVII siècle une fontaine située à l'angle du parvis de la cathédrale. 図__は17世紀のベルンにあった、大聖堂前広場の角に位置する噴水を示している	—	I⑬ Monument at the edge	CV-368	—
42	au milieu de la petite place se dresse aujourd'hui le banal et international monument commémoratif à la gloire d'un héros de la cité. (...) La place du Dôme, à Berne, est gâchée, 小さな広場の真ん中には、今日では、都市の英雄の栄光を記念した平凡で国際的な記念建造物が立ち上がっている。(…) ベルンのドーム広場は台無しになっている。	—	I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-368	—
43	Donatello à Padoue avec son Gattamelata, (...) Les aspects toujours laids d'une statue équestre, la face et le dos, il les atténua, celle-ci en la noyant contre un fond d'architecture, celui-là en en [sic] interdisant la vue par l'ingéniosité de la situation du monument à l'angle d'un haut mur de cimetière [sic] — mur, disparu aujourd'hui. ガットメラータを作ったパドヴァでのドナテッロ (...) 騎馬像のいつも醜い角度、つまり、正面や背面、これらを彼は和らげた。後者では建築の奥に対して像を目立たないようにすることで、前者では、墓地の高い壁—今日では失われた壁の角にある記念建造物の状態のうまさによって、像が見られるのを禁止することで	 	I⑬ Monument at the edge	CV-369 -370	AB-33 [CV-128] (B2-20-3 26 FLC)

44	<p>Michel-Ange vient de terminer son David colossal (...) Et c'est un emplacement déconcertant qu'il propose et fait accepter: au coin extrême de la place, là où s'ouvre l'étroit passage des Uffizi, tout à côté du Palais Vieux, il dresse son David, de plain-pied avec la place, (...) Mais revenons sur la Place de la Seigneurerie. Nous verrons s'y dresser jusqu'en 1594 une seconde statue de géant, du rival de M-A, Bandinelli, placée tout à côté du David, dans les mêmes conditions;</p> <p>ミケランジェロは巨大なダヴィデ像を完成したところだ。(…)そして、彼が提案し受け入れさせたのは、驚くべき敷地だった: 広場の最も端の片隅、ウフィッツィの狭いパッサージュが開くところ、古い宮殿の門のちょうど側面に、彼はダヴィデを広場と同一平面上に建てる(…)しかし、シニョーリア広場に話を戻そう。わたしたちはそこで 1594 年までに 2 人の巨人の像が建つものを見るだろう。これはミケランジェロの競争相手であるバンディネッリによるもので、ダヴィデ像のちょうど横に同じ状態で配置される</p>		I⑬ Monument at the edge	CV-370 -372	CV-369 (B2-20-3 44 FLC)
45	<p>comme dit C. Sitte, M.A se rirait s'il le pouvait voir, du monument piteux autant que luxueux qu'on lui éleva, voici quelques années, au milieu géométrique d'une énorme place, sur une colline dont la plaine de Toscane s'effondrant dans les bleus de l'horizon, sert de mur; là, son David, perché à quelque six ou huit mètres de haut,</p> <p>C.ジッテが言うように、ミケランジェロは嘲笑したであろうに、数年前、広い広場、つまりトスカーナの平原が水平線の青さに溶け込んで壁として機能している丘の上の幾何学的中心に、人々が彼のために建てた贅沢なものと同じくらい惨めなモニュメントを見ることができたのなら;そこでは、ダヴィデ像は6~8メートル高いところにある。</p>	<p style="text-align: center;">—</p>	I⑭ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-372	—
46	<p>L'examen de toutes les grandes places célèbres, celle (...) de St-Marc à Venise (...) etc. nous prouvent que jamais, ni les fontaines, ni les statues, ni les obélisques ne tenaient le milieu géométrique de la place. <i>Le centre de la place était toujours libre</i>, et tous les monuments se groupaient,</p> <p>有名で大きな広場すべての調査、つまり、(...) ヴェネツィアのサンマルコ広場(...) など、これらすべての調査は、わたしたちに、以下のことを示している。噴水も、像も、凱旋門も、オベリスクも、広場の幾何学的中心にはなかった。広場の中心はいつも自由であったし、すべてのモニュメントは広場の端に沿って集まっていた。</p>		I⑮ Monument at the edge	CV-373	CV-347 (B2-20-3 41)



47	du Palio à Sienne, (引用者注:直上の事例とともに列記) シエナのパーリオ広場 (引用者注:カンポ広場)		I⑬ Monument at the edge	CV-373	AB-24
48	du marché à Nuremberg, (引用者注:直上の事例とともに列記) ニュルンベルクのマルシェ広場		I⑬ Monument at the edge	CV-373	CV-372 (B2-20-3 29 FLC)
49	les trois places du dôme de Salzburg, (引用者注:直上の事例とともに列記) ザルツブルクの3つのドーム広場		I⑬ Monument at the edge	CV-373	CV-374 (B2-20-3 39 FLC)
50	la Grand'Place de Bruxelles (引用者注:直上の事例とともに列記) ブリュッセルのグラン＝プラス	—	I⑬ Monument at the edge	CV-373	—
51	le forum de Pompéi (引用者注:直上の事例とともに列記) ポンペイのフォルム	—	I⑬ Monument at the edge	CV-373	—
52	les forums romains, (引用者注:直上の事例とともに列記) ローマのフォルム	—	I⑬ Monument at the edge	CV-373	—
53	les vastes cours des temples égyptiens, (引用者注:直上の事例とともに列記) エジプトの神殿の広い中庭	—	I⑬ Monument at the edge	CV-373	—
54	places en étoile ou en carré avec monument au milieu géométrique 幾何学的中心に記念建造物を持った、星形 や正方形の広場	—	I⑪ Not too large geometric square with a monument in the centre I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-376	—
55	Victoires, ヴィクトワール広場		I⑪ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-376 CV-378 CV-381	CV-372 (B2-20-3 29 FLC)

56	celle Vendôme, ヴァンドーム広場		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-376 CV-378	PM-109
57	la cour du Louvre ルーヴル宮		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-376	CV-346 (B2-20-3 25 FLC)
58	ou ses dérivés, à Nancy et ailleurs, あるいはナンシー (引用者注: スタニスラス広場) や他の場所で派生したもの		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-377	CV-378 (B2-20-3 35)
59	ルイ 15 世の広場 Place Louis XV		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-379	CV-378 (B2-20-3 28 FLC)
60	Véritablement alors, la place les palais et le monument ne formaient plus qu'un bloc homogène, comme une fonte coulée d'un coup [alternativ:] jet. (Place des Vosges à Paris (...)) そのとき本当に、宮殿と記念建造物は均質の塊しか形作っていなかった。一気に流し込まれた鑄鉄のように (パリにあるヴォージュ広場 (...))		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-379	AB-110
61	Place St-Pierre de Rome (引用者注: 直上の事例とともに列記) ローマのサン・ピエトロ広場		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-379	CV-378 (B2-20-3 28 FLC)

62	<p>Capitole Rome (引用者注: 直上の事例とともに列記) ローマのカンピドリオ</p>		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-379	PM-43
63	<p>comme on crut bien de le faire, à Berlin, en érigeant devant le trop immense palais du Reichstag, sur une place trop vaste, le colossal monument à Bismark [sic] ベルリンでビスマルクのための巨大なモニュメントが非常に巨大な国会議事堂の前、とても広い広場に建てられたときに適切と考えられたように</p>		I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-382 CV-384	See the footnote ¹
64	<p>en ouvrant autour d'un immense arc de triomphe, la vaste place de l'Etoile. 巨大な凱旋門のまわりに広いエトワール広場を開く</p>		I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-383	AB-129
65	<p>Le vide est antiesthétique; les immenses mises en scène — (...) projets de Jackson et de Webbs pour le monument de la place Buckingham à Londres, etc. — n'aboutissent qu'à de médiocres effets. あいた空間は、非審美的である; 莫大な演出 — (...) ロンドンにあるバッキンガム広場のモニュメントのためのジャクソンとウェブの計画などは、平凡な結果に終わる。</p>		I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-384	See the footnote ²
66	<p>Place Dauphine à Paris パリのドフィーヌ広場</p>		I⑩ Not too large geometric square with a monument in the centre	CV-387	PM-96
67	<p>celle de l'Hôtel de Ville qui est la plus belle quoique beaucoup trop recoupée déjà. (引用者注: ラ・ショー＝ド＝フォンの) すでに何度も区切られたものだけでも、最も美しい市役所広場</p>		I⑤ Streets reaching side walls at not right angle	CV-507	PCF

¹ Stephan Speicher: *Ort der deutschen Geschichte: der Reichstag in Berlin*, Siedler, 1995, p. 105. ジャンヌレの参照源が不明であるため、ここでは参考に同書の図版を掲載した。おおむね、対称性のある建物に正対する幾何学的広場の中心にモニュメントが設置されていると思われる。

² Robinson, John Martin: *Buckingham Palace: the official illustrated history*, Royal Collection, 2000, p. 129. ジャンヌレの参照源が不明であるため、ここでは参考に同書の図版を掲載した。おおむね、対称性のある建物に正対する幾何学的広場の中心にモニュメントが設置されていると思われる。ジャンヌレが指す「ウェブ」とは、多くのイギリスの公共建築を残した建築家アストン・ウェブ (Aston Webb) を指すと思われる。同書によれば、ウェブは1901年にクイーン・ヴィクトリア記念碑のコンペに勝っている。ジャンヌレが指す広場とモニュメントはこの計画を指すと思われる。

68	<p>Celle dite du Marché dont le tracé n'était pas mauvais, mais dont la construction a permis (permis) de s'élever a toutes sortes d'édifices peu en harmonie.</p> <p>(引用者注：ラ・ショー＝ド＝フォンの) マルシェ広場はその線は悪くないが、その建設によっていろいろな建物が建ち並び、調和がとれていない。</p>		I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre	CV-507	PCF
69	<p>Il y a les récentes dont le type est celui de la place de l'Ouest (...) La place de l'Ouest offre le plan le plus défavorable qui ait été reconnu, comme place de petite ville, et sa fontaine placée au milieu géométrique, est comme la signature de l'œuvre administrative.</p> <p>ルエスト広場のタイプのような最近のものがある (...) ルエスト広場は小さな都市の広場として認識されてきた最も好ましくないプランを呈する。幾何学的中心に置かれた噴水は、行政の作品に書かれた署名のようなものである。</p>		I④ Streets reaching side walls at right angle	CV-507-508	PCF
70	<p>Une place du même type, celle Jacquet Droz fig P montre que l'embellissement que semblait devoir lui apporte sur le papier l'édifice des votes lui a tout simplement ravi son caractère de place.</p> <p>ジャケ＝ドゥロ広場 同じタイプの広場、図 P のジャケ＝ドゥロ広場を見ると、投票所の建物が紙の上にもたらすと思われる美化は、単に広場としての性格を奪っていることがわかる。</p>		I⑫ Enormous and Geometric square with a monument in the centre ³	CV-508	PCF

³ やや例外的ではあるが、I⑫として分類する。

謝辞

本研究の遂行にあたり終始熱心なご指導をいただきました指導教員であり主査である田路貴浩先生、ご多忙のなか論文審査をお願いしました富島義幸先生と神吉紀世子先生に心からお礼を申し上げます。田路先生には修士の頃からご指導いただき、研究の進め方といった基礎的なことから研究者の心構えまで、多くのことを学ばせていただきました。富島先生には、理解に時間がかかる筆者に対して根気強くご指導いただき、その際にはこれからも続く研究人生につながっていく視点をご指摘いただきました。神吉先生からは本論文に欠けている視点を指摘いただいた上でどうしたら全体としてより良い論文になるか多くのご示唆をいただき、毎回の面談では研究に対する意欲がかきたてられました。

東京大学名誉教授の加藤道夫先生と島根大学教授の千代章一郎先生には、ジャンヌレ時代だけでなくその後の設計活動や晩年を含めた理解につながる重要なお指摘をたくさんいただきました。法政大学名誉教授の富永譲先生には設計者として建築と結び付けたジャンヌレの理解についてご指摘をいただきました。先生方の鋭いご指摘とあたたかいご指導により、研究の奥深さと楽しさを心から実感しながら論文を仕上げることができました。厚く御礼申し上げます。そして公聴会には、お忙しい中多くの研究者の方々にご参加いただきコメントをいただきました。心より感謝申し上げます。

また、日ごろより鋭い指摘を頂きました田路研究室のみなさん、細かいニュアンスの違いまで議論し合った言語交換パートナーたち、そしてどんなときも研究生活を支えてくれた家族に厚く感謝いたします。

2022年6月

早川小百合